大阪市平野区

長原·瓜破遺跡発掘調查報告

I

1982年度大阪市長吉瓜破地区 土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1990.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

長原·瓜破遺跡発掘調査報告 Ⅱ

1982年度大阪市長吉瓜破地区 土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1990.3

財団法人 大阪市文化財協会

図表 正誤表

頁	図表	個 所	誤	Œ
17	表 2	第128層	· 有径尖頭器	有茎尖頭器
33	図15	スケール	i : 2	2:3
		:		
81	図51	スケール	脱落	1:4
143	図98	平面図	遺構番号欠落	(左から) SD01 SD02 SD03 SD04 SD05
144	図99	平面図	遺構番号欠落	(左から) SD15 SD14
163	表 5	七ノ坪古墳	武具玉	武具 玉
167	図115、	. スケール	脱落	1:400
175	図119	座標	Y-39, 470. 0	Y-39, 478. 0
197	図138	第4 C層上面	X-155.890.0	X-155, 890. 0
249	表11 下端	明治 19 大正 - 土取り 昭和 20	X\$K101~108 SD103 S SD101 - 108 S	P101~108、SD102 - 現り大SK113~115 K109~112、光利101 SSX101~102
273	表15	79 備考	縄代	網代
273	表15	169 他の伴出遺物	· 船端O – Ⅱ	船橋○一Ⅱ
278	図176	キャプション	2. 美園 l 号墳	2. 美園古墳
281	図177	キャプション	1. 一ケ塚2	· 1.一ケ塚3
			2.・美園1号	2.・美園古墳
			4. 一ケ塚3	4. 一ケ塚4
			5. 一ケ塚1・4	5. 一ケ塚2・5
295	表16	070 出土遺物	「上絵」	「上総」

本文正誤表

ह	行	誤	正
頁	11	民	<u> </u>
例言	2	大阪市平野に	大阪市平野区に
Viii	右1~6	289 - 290 - 298 - 300 - 301 - 302	288 - 289 - 297 - 299 - 300 - 301
2	27	80%	88%
39	1	59	61
116	4	(後述)	(先述)
126	27	山形文	鋸歯文
139	7	東隅から	68号墳北東隅から
193	29	輸入白椀椀	輸入白磁椀
203	8	調査地 と	調査地 [大阪市文化財協会1983 I] と
220	25	下層が褐橙色	下層が黄橙色
239	22	灌概用水路	灌漑用水路
244	12	深さ50~60m	深さ0.5~0.6m
250	註7	· [····協会1990]	[協会1989]
280	28	[後藤守一1932]	[後藤守一1933]
284	註11、4	・青甲・	・甲冑・
	表15	9. [・・・・センター1986]	9. [・・・・センター1986IV]
292	10	[関川1976]	[橿原考古学研究所1976]
310	4	「蓋型埴輪・・・・」	「蓋形埴輪・・・・」

大阪市平野区

長原·瓜破遺跡発掘調査報告 Ⅱ

1982年度大阪市長吉瓜破地区 土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1990.3

財団法人 大阪市文化財協会





家形埴輪



円筒埴輪・壺形埴輪など

序 文

前書『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 I に引続き、「長吉瓜破地区土地区画整理事業」に伴う発掘調査の成果を収めた第二冊目の報告書を刊行するはこびとなりました。

長吉や瓜破の地域は、数年前まで大阪市では数少ない田園地帯であり、静かなそして素朴な風景を残しておりました。こうした環境がこの地下の埋蔵文化財を破壊から守り、多くの貴重な考古資料を残してくれたといえるかもしれません。

この地域で区画整理事業が施行されて10年になりますが、その間の景観の変化には目を見張るものがあります。

区画整理事業によってこの地域が新しく生まれ変わっていくいっぽう、それ とひきかえに埋蔵文化財は失われていきつつありますが、過去にこの地で生活 した人々の歴史は想起される必要があるでしょう。

本書では前書と同様に、多くの古墳に関して報告しています。長吉瓜破地区 に広く分布する古墳群は、その数において他地域では類を見ないものであり、 出土した埴輪も豊富で、この遺跡を代表する資料といってよいでしょう。

とくに本書で報告した一ケ塚古墳は、180余基からなる長原古墳群の中では 6基しかみつかっていない古い時期の埴輪をもつ古墳であり、家形埴輪などの 多くの形象埴輪が出土しています。そのほか、飛鳥・奈良時代以降についても 報告しています。本書では、これらの資料の報告に加えて5篇の考察を収録し、 研究成果の一端をも披瀝いたしました。忌憚ないご批判をいただければ幸いで す。

なお、ここに報告しました発掘成果は地元の方々をはじめとする関係諸機関のご理解とご協力の賜であり、深く謝意を表します。

財団法人 大阪市文化財協会 理事長 佐治敬三

- 一、本書は1982年度 大阪市都市整備局(現、大阪市建設局)長吉瓜破地区区画整理事務 所施行の大阪市平野における土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査の作業は財団法人 大阪市文化財協会調査課長代理(当時)永島暉臣愼の指導のもとに、それぞれの次数の調査地を下記の期間と担当者で行った。

82-19次 平野区長吉長原 4 丁目 京嶋 覚 1982年8月7日~1983年3月31日 82-23次 同区 瓜破東8丁目 鈴木秀典 1982年9月24日~1983年3月31日 82-27次 同区 長吉川辺 1 丁目 積山 洋 1983年1月12日~1983年3月31日 82-28次 同区 長吉長原西1丁目 松尾信裕 1982年12月23日~1983年3月24日 82-31次 同区 長吉川辺3丁目 黒田慶一 1983年2月3日~1983年3月9日 82-34次 同区 長吉川辺1丁目 鈴木秀典 1983年1月28日~1983年2月1日 82-46次 同区 同ト 積山 洋 1983年3月4日~1983年3月11日

- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局(1988年度から建設局に編入)および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話公社(現、日本電信電話株式会社)・ 関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、本書は、当協会調査課長永島の指導のもと、松尾(現企画課主任)・京嶋・鈴木・積山・黒田・高井健司・松本啓子・清水 和・櫻井久之・岡村勝行が分担・執筆し、編集は京嶋・積山が行った。執筆者名は担当個所の最後に記し、文責を明らかにした。なお、資料の整理・図表の作成にあたり多くの補助員諸氏の援助を得たことを記して、ここに謝意を表する。

また、発掘調査および報告書作成にあたって、以下の方々から、種々ご教示いただいた。記して謝意を表する次第である。(順不同)

近藤義郎・日下雅義・広瀬和雄・関川尚功・石井清司・伊賀高弘・高橋美久二橋本清一・近藤義行・杉本宏・石神幸子・宮原晋一・千賀久

一、遺構名の表記は、溝(SD)・土壙(SK)・掘立柱建物(SB)・井戸(SE)・ ピット(SP)・畦畔(SR)・その他(SX)の記号の後に、本書独自に各調査地 ごとの通し番号を順に付した。ただし、古墳に関しては、当協会刊行の『長原遺跡発 掘調査報告』IIで決定し、その後改訂した番号を用いた。なお、改訂後の長原古墳群 の一覧表は、あらためて公表する予定である。

- 一、地層名は本書第II章に示した長原遺跡南部基本層序に対比したものである。また、遺構検出面の認定は、趙哲済「遺構検出面の便宜的な呼称」 [大阪市文化財協会1983] によっている。
- 一、註は各節の末尾につけ、参考文献は巻末に一括掲載した。索引は伊藤幸司・高井が作 製した。
- 一、調査時の測量は都市整備局(当時)の基準点・水準点を用い、その後、国土座標第VI 系の値に換算した。水準値はT.P.値(東京湾平均海水面を基準とする)を用いた (本文中ではTPと略称する)。
- 一、本書に使用した写真は、遺物については徳永圀治氏が、遺構は財団法人 大阪都市協会および当協会調査員が撮影したものである。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物その他の資料はすべて当協会が保管している。

本 文 目 次

序	文
例	言

第1章 長	長原・瓜破遺跡の調査	1
第1節	調査の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2節	調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
1)	長原遺跡南地区	8
2)	長原遺跡西地区	13
3)	長原遺跡東南地区	15
4)	瓜破遺跡東南地区	15
第II章 調	§査地域の概要	19
第1節	基本層序·····	19
第2節	立地と概要	20
1)	長原遺跡南地区	20
2)	長原遺跡西地区	23
3)	長原遺跡東南地区	23
4)	瓜破遺跡東南地区	24
第Ⅲ章 課	骨査の結果	25
第1節	長原遺跡南地区の調査(82-19・27・34・46次調査)	25
1)	調査地の層序と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 5
2)	古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	45
3)	飛鳥~奈良時代の遺構と遺物	136
4)	中近世の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	158
5)	小結	162
第2節	長原遺跡西地区の調査(82-28次調査)	166
1)	調査地の層序と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	166

2)	古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	172
3)	飛鳥~奈良時代の遺構と遺物	178
4)	平安時代以降の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	181
5)	小結	181
第3節	長原遺跡東南地区の調査(82-31次調査)	183
1)	I 区の層序と遺物	183
2)	飛鳥時代の遺構と遺物	195
3)	平安時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	195
4)	その他の遺構と遺物	198
5)	II区の層序	201
6)	小結	202
第4節	瓜破遺跡東南地区の調査(82-23次調査)	204
1)	調査地の層序と遺物	204
2)	旧石器~弥生時代の遺物	213
3)	古墳〜飛鳥時代の遺構と遺物	219
4)	古墳〜平安時代の遺構と遺物	229
5)	奈良~平安時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	232
6)	鎌倉〜室町時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	235
7)	江戸時代の遺構と遺物	237
8)	明治時代以降の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	243
9)	小結	248
	貴構と遺物の検討	
第1節	ーケ塚古墳(長原85号墳)の埴輪編年	251
第2節	一ケ塚古墳(長原85号墳)の形象埴輪	264
第3節	長原古墳群の家形埴輪	273
第4節	黒斑をもつ円筒埴輪の一例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第5節	水田遺構と古代の長原	29 4
参考文献	• あとがき	307
a±a ==1		216

巻 頭 写 真

上:一ケ塚古墳(85号墳)出土家形埴輪

下:同、円筒埴輪・壺形埴輪など

図 版 目 次

1 遺跡航空写真(1941年頃撮影)

2 82-19次 I · II区全景

上: [区全景(南から) 下: II区全景(南から)

3 82-19次 層序と60号墳

上: I´区の層序

下:60号墳全景(西から)

4 61号墳

上:61号墳全景(東から)

下:61号墳墳丘上面の遺物出土状況(南から)

5 62号墳

上:62号墳全景(東から)

下:62号墳南周溝木製品出土状況

6 63号墳

上:63号墳全景(東から)

下:63号墳墳丘上面遺物出土状況(北から)

7 64号增

上:64号墳全景(東から)

下:64号墳と円形周溝遺構(北から)

8 65号墳

上:65号墳全景 (東から)

下:65号墳全景(南から)

9 65号墳と66号墳

上:65号墳墳丘南辺部の遺物出土状況(東か

下:66号墳全景 (東から)

10 67号墳と68号墳

上:67号墳周溝(北から)

下:68号墳全景(南から)

11 69号墳と70号墳

上:69号墳周溝(南から)

下:70号墳全景 (西から)

12 82-27次 層序

上: II区北壁の層序

下: IV区北壁の層序

13 83号墳

上:83号墳全景(西から)

下:鉄剣出土状況(南から)

14 83号墳

上:木棺痕跡(西から)

下:墳丘断面(北から)

15 84号墳

上:南東周溝遺物出土状況(南東から)

下:南西周溝遺物出土状況(北東から)

16 84号墳

上:南コーナー(南から、86-105次)

下:南コーナーとSX01(東から、86-105

次)

17 84号墳

上:遺物出土状況(南から)

下:84号墳全景(北から)

18 一ケ塚古墳と周囲の遺構

上:一ケ塚古墳とSB01・SD04・05など (東から)

下:同上(西から)

19 一ケ塚古墳

上:周濠内埴輪出土状況

下:同上

20 一ケ塚古墳

上:墳丘と周濠(北西から)

下:墳丘(東から、後方のビルが後円部)

21 一ケ塚古墳

上:墳丘全景(西から)

下:周濠断面(東から)

22 86号墳

上:全景(東から)

下:南周溝(東から)

23 86号墳

上:墳丘断面(西から)

下:墳丘西辺のSD01と馬形埴輪出土状況 (南から)

24 82-19次 I · II区第6A層上面水田

上: I 区第 6 A 層上面畦畔の断面

下: II区61~63号墳と畦畔(南から)

25 82-19次 V区第6A層上面水田

上:68号墳と畦畔(南から)

下:66号墳と畦畔(北から)

26 82-19次 I・VI区の遺構

上: I区SD01~05 (南から)

下: VI区S D14 (北から)

27 82-19次 Ⅳ区の遺構

上:円形周溝遺構(南から)

下:畝状遺構(西から)

28 82-27次 WI区の遺構

上: S B01全景 (東から)

下:一ケ塚古墳周濠内第6B層上面の畦畔 (南東から)

29 82-27次 第6AI層上面の遺構

上: VI・VII区80・81号墳と水田畦畔(西から)

下: IV区SR10・11 (東から、86-105次)

30 82-27次 第6 B層上面の遺構

上: W区S D01・S R01・02 (東から、86-

下: III区S D02・S R05・06 (南から)

31 82-34次 調査地の遺構

上:落込み1(南から)

下: S D03断面 (北から)

32 82-27次 中近世の遺構

上: I区S X06・S K01~03など(東から)

下: WI区S D07 (南から)

33 82-27次 中近世の遺構

上: WI区SD07・10 (東から)

下: W区SD11 (西から)

34 82-28次 古墳時代の遺構

右: SD01・02・SK01・02 (東から)

左: S D02 · S K01 · 02 (西から)

35 82-28次 古墳時代の遺構

上: S K01・S D02 (東から)

下:SD02須恵器出土状況(南から)

36 82-31次 遺構検出状況

上: I 区南端第6 B 層上面検出 S D 01

下: I 区北端第9 C 層調査状況

37 82-23次 第 1 調査区

右:北部SK401・106~108など(南から)

左:北部SD401・402・SP401~407など (北から)

38 82-23次 第 1 調査区

右:南部SD406・407・SK402~405など (南から)

左:南部SD405・SK402~405など(北から)

39 82-23次 第 II 調査区

右:東部SD202など(東から)

左:全景(東から)

40 82-23次 第11調査区

右:西部S P413~443・S D411~421など (東から)

左:中部S X201・301・小溝群203など(西から)

41 82-23次 第[[調査区

右:11区SD209~212・423など(南西から)

左:6・7区SK302・411・412など(北東から)

42 82-23次 調査地の地層

1:第I調查区6区SD407付近

2:第II調査区3区SD412付近

3:第II調査区4区SP426·427付近

4:第Ⅲ調査区4区鋤跡群402付近

43 82-19次 各層出土遺物(土師器・黒色土器・ 互器)

44 82-19次 各層出土遺物 (須恵器・円筒埴輪・ 衣蓋形埴輪・軒平瓦・石器)

45 82-27次 各層出土遺物(須恵器・土師器・円 簡埴輪)

46 60号墳・61号墳出土遺物 (須恵器・円筒埴輪)

47 61号墳出土遺物(須恵器)

48 61号墳出土遺物 (円筒埴輪)

49 61号墳出土遺物(円筒埴輪)

50 61号墳出土遺物 (円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形 埴輪・鉄製品)

51 62号墳·63号墳出土遺物(須恵器)

52 63号墳出土遺物 (円筒埴輪・朝顔形埴輪)

53 64号墳出土遺物(須恵器・円筒埴輪・朝顔形埴 輪)

54	65号墳出土遺物(須恵器・円筒埴輪・朝顔形埴	77	一ケ塚古墳出土遺物(盾形埴輪)
	輪)	78	一ケ塚古墳出土遺物(衣蓋形埴輪)
55	65号墳・67号墳・68号墳出土遺物(須恵器・円	79	一ケ塚古墳出土遺物(鞆形埴輪・その他の形象
	简埴輪·朝顏形埴輪)		埴輪)
56	68号墳・69号墳出土遺物(円筒埴輪・衣蓋形埴	80	ーケ塚古墳・86号墳出土遺物(朝顔形埴輪・タ
	輪)		恵器)
57	83号墳・84号墳出土遺物(須恵器・朝顔形埴輪)	81	86号墳出土遺物(馬形埴輪)
58	84号墳出土遺物(円筒埴輪)	82	86号墳・82-27次 その他の遺物(円筒埴輪
59	84号墳出土遺物(円筒埴輪)		朝顔形埴輪・陶磁器)
60	84号墳出土遺物(円筒埴輪)	83	82-19次 その他の遺構出土遺物(須恵器・二
61	84号墳出土遺物(家形埴輪)		師器・鳥形埴輪)
62	84号墳出土遺物(家形埴輪)	84	82-28次 各層出土遺物(須恵器・土師器・石
63	84号墳出土遺物(盾形埴輪)		器・瓦器・瓦・白磁・灰釉陶器)
64	84号墳出土遺物(衣蓋形埴輪)	85	82-28次 遺構出土遺物(須恵器・土師器・た
65	84号墳出土遺物(衣蓋形埴輪)		形土製品・双孔円板)
66	84号墳出土遺物(衣蓋形埴輪・靱形埴輪・草摺	86	82-31次 各層出土遺物(縄文土器・須恵器
	形埴輪)		土師器・円筒埴輪・黒色土器)
67	一ケ塚古墳出土遺物(形象埴輪・土師器・円筒	87	82-31次 各層および遺構出土遺物(須恵器
	埴輪)		土師器・黒色土器・瓦器)
68	一ケ塚古墳出土遺物(円筒埴輪)	88	82-31次 調査地出土遺物 (石器)
69	一ケ塚古墳出土遺物(円筒埴輪)	89	82-23次 各層および遺構出土遺物(須恵器
70	一ケ塚古墳出土遺物(円筒埴輪)		土師器・瓦・陶磁器・銃弾)
71	一ケ塚古墳出土遺物(壺形埴輪)	90	82-23次 各層および遺構出土遺物(須恵器
72	一ケ塚古墳出土遺物(囲形埴輪)		瓦)
73	一ケ塚古墳出土遺物(家形埴輪)	91	82-23次 遺構出土遺物 (須恵器・土師器・瓦
74	一ケ塚古墳出土遺物(家形埴輪)		陶磁器・鋳型)

挿 図 目 次

75 一ケ塚古墳出土遺物(家形埴輪) 76 一ケ塚古墳出土遺物(家形埴輪) 92 82-23次 調査地出土遺物(石器)

1	発掘調査の面積と件数の推移	1	11	長原遺跡南・中央地区の	
2	発掘原因の比率	2		沖積層パネルダイアグラム	2
3	長原遺跡の発掘状況	4	12	82-19次 地層断面実測図	2
4	各地区の発掘面積	6	13	82-27次 地層断面実測図	29
5	区画整理事業の施行範囲と地区区分	8	14	82-34次 地層断面実測図	3
6	82-19次 調査地位置図	9	15	82-19次 各層出土遺物実測図 (1)	3
7	82-27次·34次·46次 調査地位置図	11	16	82-19次 各層出土遺物実測図 (2)	34
8	82-28次 調査地位置図		17	82-27次 各層出土遺物実測図 (1)	3
	および周辺調査地	14	18	82-27次 各層出土遺物実測図 (2)	38
9	82-31次 調査地位置図	15	19	82-27次 各層出土遺物実測図 (3)	39
10	82-23次 調査地位置図	16	20	長原遺跡南部の古墳分布と調査地	40

21	82-19次 I • II区古墳配置図	41	63	84号墳出土円筒埴輪実測図 (2) 94
22	82-19次 Ⅳ·V区古墳配置図 ············	43	64	84号墳出土円筒埴輪・
23	60号墳実測図	45		朝顔形埴輪実測図 95
24	60号墳出土遺物実測図	46	65	84号墳出土形象埴輪実測図(1) 97
25	61号墳実測図	47	66	84号墳出土形象埴輪実測図(2)100
26	61号墳出土鉄製品実測図	48	67	84号墳出土形象埴輪実測図 (3) 101
27	61号墳出土土器実測図	50	68	84号墳出土形象埴輪実測図(4) 103
28	61号墳出土円筒埴輪実測図(1)	52	69	84号墳出土形象埴輪実測図 (5) 104
29	61号墳出土円筒埴輪実測図(2)	53	70	84号墳出土形象埴輪実測図 (6) 105
30	61号墳出土円筒埴輪実測図 (3)	54	71	ーケ塚古墳実測図 107
31	61号墳出土円筒埴輪実測図(4)	55	72	ーケ塚古墳断面実測図 108
32	61号墳出土円筒埴輪実測図(5)	56	73	ーケ塚古墳遺物出土位置 109
33	61号墳出土朝顔形埴輪・		74	ーケ塚古墳出土土器実測図 109
	形象埴輪実測図	57	75	ーケ塚古墳出土円筒埴輪実測図(1) 111
34	62号墳実測図	58	76	一ケ塚古墳出土円筒埴輪実測図(2) 112
35	62号墳南周溝内木製品出土状況	59	77	一ケ塚古墳出土円筒埴輪実測図(3) 113
36	62号墳出土土器実測図	61	78	一ケ塚古墳出土円筒埴輪実測図(4) 114
37	63号墳実測図	63	79	一ケ塚古墳出土朝顔形埴輪実測図 115
38	63号墳出土土器実測図	64	80	ーケ塚古墳出土壺形埴輪実測図(1) 117
39	63号墳出土円简埴輪実測図	65	81	一ケ塚古墳出土壺形埴輪実測図(2) 118
40	63号墳出土朝顔形埴輪実測図	66	82	一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(1) 119
41	64号墳実測図	68	83	ーケ塚古墳出土形象埴輪実測図(2) 121
42	64号墳出土遺物実測図	69	84	一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図 (3) 122
43	65号墳実測図	71	85	一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(4) 123
44	65号墳出土遺物実測図	73	86	一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(5) 125
45	65号墳出土朝顏形埴輪実測図	74	87	一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(6) 127
46	66号墳実測図	75	88	一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(7) 129
47	67号墳実測図	76	89	一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(8) 130
48	67号墳出土遺物実測図	77	90	86号墳実測図 132
49	68号墳実測図	79	91	86号墳馬形埴輪出土状況実測図 133
50	68号墳出土円筒埴輪実測図	80	92	86号墳出土遺物実測図 134
51	68号墳出土朝顏形埴輪·形象埴輪実測図···	81	93	86号墳出土馬形埴輪実測図 135
52	69号墳実測図	82	94	82-19次 第 6 A 層上面水田畦畔配置図… 137
53	69号墳出土円筒埴輪実測図	82	95	82-19次 63号墳北西隅の導水施設 139
54	70号墳実測図	83	96	82-19次 水田および溝出土遺物実測図… 140
55	83号墳実測図	84	97	82-19次 Ⅲ • Ⅳ区溝配置図······ 142
56	82-27次 古墳配置図	85	98	82-19次 I区S D01~05実測図 143
57	83号墳主体部実測図	87	99	82-19次 VI区S D14・15実測図 144
58	83号墳出土遺物実測図	88	100	82-19次 IV区円形周溝遺構実測図 144
59	84号墳実測図	89	101	82-19次 N区畝状遺構実測図······ 145
60	84号墳遺物出土状況実測図	90	102	82-27次 VIII S B 01実測図 ······ 146
61	84号墳出土土器実測図	91	103	82-27次 第 6 B 層上面遺構実測図 147
62	84号墳出土円筒埴輪実測図(1)	92	104	82-27次 第6 A層上面遺構等実測図 149

105	82-27次 N区S D01·		138	82-31次 I区南端平面図·断面図	196
	S R01・02実測図	152	139	82-31次 【区南端遺構出土遺物実測図…	198
106	82-27次 Ⅳ区SR01出土遺物実測図	152	140	82-31次 II区平面図·断面図	199
107	82-27次 III·V区S D02·		141	82-23次 主要遺構配置図	205
	S R05~07実測図	153	142	82-23次 地層断面実測図	207
108	82-27次 III·V区S D02		143	82-23次 第 1 調査区各層	
	出土遺物実測図	154		出土遺物実測図	209
109	82-27次 VII区S D03実測図	155	144	82-23次 第 II 調査区各層	
110	82-27次 VII区S D04·05·			出土遺物実測図	212
	S X 02実測図	155	145	82-23次 第Ⅲ調査区各層	
111	82-34次 主要遺構実測図	156		出土遺物実測図	213
112	82-34次 S D01断面実測図	157	146	82-23次 旧石器~弥生時代の	
113	82-34次 S D03断面実測図	158		遺物実測図 (1)	214
114	82-27次 中近世遺構実測図	159	147	82-23次 旧石器~弥生時代の	
115	82-28次 地層断面実測図	167		遺物実測図 (2)	216
116	82-28次 各層出土遺物実測図 (1)	169	148	82-23次 第 1 調査区遺構実測図	217
117	82-28次 各層出土遺物実測図 (2)	170	149	82-23次 S K 404出土遺物実測図	220
118	82-28次 遺構配置図	173	150	82-23次 S K 407断面実測図	220
119	82-28次 S D01実測図	175	151	82-23次 第 II 調査区遺構実測図	221
120	82-28次 S D01出土遺物実測図	175	152	82-23次 第Ⅲ調査区遺構実測図	223
121	82-28次 S D02実測図	176	153	82-23次 S K 407出土遺物実測図	225
122	82-28次 S D02出土遺物実測図	176	154	82-23次 S K409~412	
123	82-28次 S D03 • 04実測図	177		出土遺物実測図	226
124	82-28次 S K01実測図	177	155	82-23次 S D404~406	
125	82-28次 S K01出土遺物実測図	177		出土遺物実測図	227
126	82-28次 第6層上面水田畦畔実測図	178	156	82-23次 S D406断面実測図	228
127	82-28次 調査地西部検出遺構		157	82-23次 S D423出土遺物実測図	228
	および周辺調査検出遺構	179	158	82-23次 S B 401断面実測図	229
128	82-31次 【区平面図・断面図	184	159	82-23次 奈良~平安時代の建物・	
129	82-31次 I区北端第9C層堆積状況	184		ピット出土遺物実測図	233
130	82-31次 I 区北端石器·		160	82-23次 S D 407断面実測図	234
	土器出土状况	186	161	82-23次 S D407·414	
131	82-31次 調査地の旧地形	188		出土遺物実測図	234
132	82-31次 【区南端出土石鏃実測図	189	162	82-23次 S K 206出土遺物実測図	238
133	82-31次 【区北端出土石器実測図	190	163	82-23次 S D 202出土遺物実測図	239
134	82-31次 【区南端第6 B層		164	82-23次 S X 201·301断面実測図	242
	出土遺物実測図	191	165	82-23次 S X 201出土遺物実測図	242
135	82-31次 I 区南端第4 B 層		166	円筒埴輪口縁部集成図	252
	出土遺物実測図	191	167	円筒埴輪タガ集成図	253
136	82-31次 I区南端第4A層		168	朝顔形埴輪実測図	257
	出土遺物実測図	192	169	壺形埴輪B類(畿内)の編年案	259
137	82-31次 I区南端第3層		170	小型丸底土器など	260
	出土遺物実測図	194	171	小型丸底土器法量比較図	261

172	囲形埴輪・家形埴輪の規格性	266	178	長原40号	持墳の円筒埴輪(1)	289
173	囲形埴輪の諸例	269	179	長原40号	号墳の円筒埴輪(2)	290
174	一ケ塚古墳と美園古墳の家形埴輪	275	180	第6層の	○分布と流路 I ・ II ・ III	298
175	長原古墳群の家形埴輪	276	181	第5層の)分布と流路	300
176	おもな鰭飾り	278	182	中央地区	至第6AII層上の建物群と水田・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	301
177	妻の転びの比較	281	183	東南地区	区第6層上の建物群と水田	302
	表		目	次		
1	区画整理事業関係の発掘調査一覧	6	9	82-23次	S P 401~407計測表	232
2	長原遺跡南部の総合層序1990	17	10	82-23次	S P101~108計測表	243
3	82-19次 第6A層以下で		11	82-23次	遺構の時期一覧	249
	検出された溝一覧	143	12		スカシ孔集成表	
4	1982年度 区画整理事業に伴う調査で		13	円筒埴輪:	外面調整集成表	255
	検出した古墳一覧	163	14	畿内の壺	形埴輪 B 類出土例	258
5	長原古墳群 主体部検出古墳一覧	163	15	長原古墳	群の家形埴輪一覧	273
6	82-31次 石器群の組成および計測表	187	16	古代の溝	• 流路一覧	296
7	82-23次 旧石器~弥生時代の遺物一覧 …	219	17		紀の河内平野に	
8	82-23次 S P413~443計測表	230		おける洪	水記事	305
	写	真	目	次		
1	南地区の風景	3	18	82-19次	I 区第6 B 層上面の大畦畔	141
2	63号墳 保護砂による埋め戻し	9	19	82-27次	WII区S B01の柱穴 ·······	146
3	82-27次 調査地近景	10	20	82-27次	Ⅳ区大畦畔 S R11 ·································	151
4	一ケ塚古墳 保護砂による埋め戻し	10	21	82-27次	III区S D02断面 ······	153
5	82-27次 第3層・第4層出土遺物	39	22	82-31次	I 区中央旧大正川	189
6	61号墳小型円筒埴輪のヘラ記号	51	23	82-31次	I 区南端 S P 01 ··································	194
7 .	62号墳墳丘南辺部の盛土	57	24	82-31次	I 区南端 S D01断面	195
8	65号墳朝顔形埴輪出土状況	72	25	82-31次	Ⅱ区調査風景	202
9	80号墳検出状況	83	26	82-31次	II区№12ピット東壁断面	202
10	81号墳検出状況	83	27	82-23次	第Ⅱ調査区出土の土人形513	211
11	84号墳衣蓋形埴輪234出土状況	90	28	82-23次	S K 407遺物出土状況	225
12	ーケ塚古墳円筒埴輪254内面のヘラ記号 …	114	29	82-23次	S K407出土須恵器540の	
13	ーケ塚古墳家形埴輪292屋根	120		ヘラ記号		225
14	ーケ塚古墳家形埴輪293屋根	120	30	82-23次	S D405遺物出土状況	227
15	86号墳出土馬形埴輪345の内面	135	31	82-23次	S D 209出土馬歯588	241
16	82-19次 II区63号墳北西隅の		32	82-23次	土取り穴SK101~105	244
	水口と畦畔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	139	33	82-23次	瓦組遺構101	247
17	82-19次 II区第6A層上面の					
	土師器鉢出土状況	140				

第 I 章 長原・瓜破遺跡の調査

第1節 発掘調査の現状

1) はじめに

長原遺跡は1973年に地下鉄谷町線延長工事に伴う試掘調査で発見されて以来、今日に至るまで約250件の発掘調査が実施され、発掘総面積は約14haに達している(註1)。ここではこの地域の遺跡発掘の推移と現状を概述し、遺跡の発見以来、考古学的な知見がどのような条件のもとでえられてきたかを説明しておきたい。

発掘頻度のかたよりに由来する資料の地域的な偏在性をはじめとして、遺跡に対する研究は、考古学とは無縁の諸条件によって進展し、また制約を受けている。本書は1982年度に実施された区画整理に伴う発掘調査の報告書であるが、前書[大阪市文化財協会1989]

と同様に、その記述は現在までに 判明している知見に基づいたもの である。それだけに現在における 発掘調査の実施状況などを検討す ることも必要な作業であるといえ よう。

2) 開発と発掘調査

図1に示したグラフは年度別の 発掘面積と件数である。発掘調査 が開始された1974年は地下鉄谷町 線延長工事に伴う31・32工区の発 掘調査が実施され(註2)、発掘 面積は10000㎡近い数値を示して

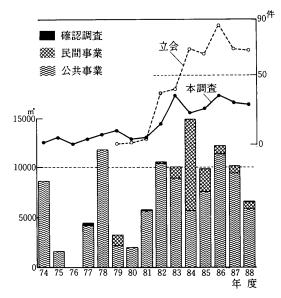
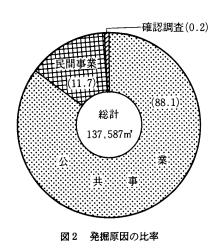


図1 発掘調査の面積と件数の推移



いる。また1977・1978年は地下鉄 45工区・46工区の発掘調査(註3) があって同様に数値を延ばしてい る。1976年の発掘面積が大きな数 値になっているのは、大阪文化財 センターによる近畿自動車道建設 に伴う長原遺跡の発掘調査(註4) が行われたからである。

しかし、地下鉄工事や高速道路 建設に伴う大規模な調査が終了し た1979・1980年には、これらの調

査がなかった1975年と同様に急激に発掘面積が減少している。また、1981年までの発掘件数は10件以内であるから、遺跡発見以来、大規模調査を中心に発掘調査が実施されていたことがわかる。

一方、1981年からは長吉・瓜破地区区画整理事業が大阪市都市再開発局の手によって開始され、それに伴う長原・瓜破遺跡の発掘調査も開始した。1982年度には川辺町の市営住宅建設に伴う発掘調査も行われ、これ以後、市営住宅建設・住宅供給公社による住宅建設などが行われる。1984年の発掘面積は著しく大きいが、これは大阪文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う城山遺跡の調査(註5)が開始されたことによるものである。

調査開始当初から下水道工事に伴う小規模な発掘調査もしばしば行われており、とくに 遺跡北東部の低地部での発掘では、良好な資料が得られているため、無視できない。交通 機関の整備に伴い民間によるマンション・工場・倉庫・店舗などの建設が相次ぎ、1983年 ごろから発掘件数も増加している。とくに1984年には大規模スーパーの進出による大面積 の発掘調査が実施された[大阪市文化財協会1985]。

長原遺跡の発掘調査は他の大部分の遺跡がそうであるように、公共・民間の開発によって進められてきたといってよい。とくに図2で示したように公共事業による発掘面積は全体の80%を占めている。遺跡発見以来の長吉地域の開発は1980年までは、この地域と都心部とをつなぐ幹線交通機関の整備に関連するものといえ、1981年からは生活に密接にかかわる区画道路の建設や交通機関の整備を前提にした公営住宅建設に伴うものとなっている。開発における前者を第1期、後者を第2期とここでは呼ぶことにしたい。

ここで両期の発掘の特徴を記しておくと、 第1期の調査は大規模ではあったが、調査 地区が府道中央環状線に沿った限られた地 区を対象としたもので、長原遺跡のほぼ中 央を南北に縦断するものであった。それ以 外の地区では下水道工事に伴う小規模な調 査が散発的に実施されているのみである。

また、第1期の調査では旧石器時代の石器・フレークや縄文草創期の有茎尖頭器が



写真1 南地区の風景 (1989年3月撮影、 南から、右は近畿自動車道)

出土し、後・晩期の住居跡、弥生時代後期の竪穴住居、当時、前方後円墳と推定された塚 ノ本古墳(註6)をはじめとする小型方墳群、古代・中世の水田、中世の集落など長原遺 跡の代表的な遺構・遺物の多くがすでに出そろっていたといえる。これらの資料が長原遺 跡を広く世に知らしめるために果たした役割は大きいといえよう。反面、これらを歴史的 にいかに評価するべきかを判断するには、遺跡全体の状況を知る手がかりがきわめて少な く、その意味で断片的な資料にすぎなかったことも事実である。

一方、第2期には主要な交通機関としての地下鉄の開通(1980年11月)を契機に、民間開発のための環境をさらに整備するための区画整理事業が開始する。中世からの条里遺構が現存していた水田地帯は新たな区画に整備され、その中に舗装道路が縦横に建設されていく。こうした中で広大な水田地区に縦横に調査トレンチが掘られ、面的には不十分とはいえ、線的に各地区の地層や遺構の状況が判明していくことになる。また、区画道路の新設に伴い民間による共同住宅などの建設が増加し、道路で区画された内部も発掘調査を行う機会が増えていく。

第2期は遺跡の広い範囲にわたって発掘調査が行われるようになったため、第1期に出土した遺構・遺物の遺跡全体の中での位置づけが可能になった。中央環状線から西に古墳の分布がさらに広がり、川辺1丁目付近まで分布していることが判明した。そこでは本書で報告する一ケ塚古墳が発見されている。また、それまで下水工事に伴う調査で存在が確認されていた遺跡東部の古墳時代集落とは別に、遺跡西部の台地上にも集落が存在することが明らかになった。さらに中世の屋敷地の新たな発見や旧石器時代の石器製作址と思われる遺構の発見など毎年のように新しい事実が判明し、各時代における遺跡の性格や特徴に対する我々の理解もしだいに具体性をおびたものとなってきている。

第1章 長原・瓜破遺跡の調査

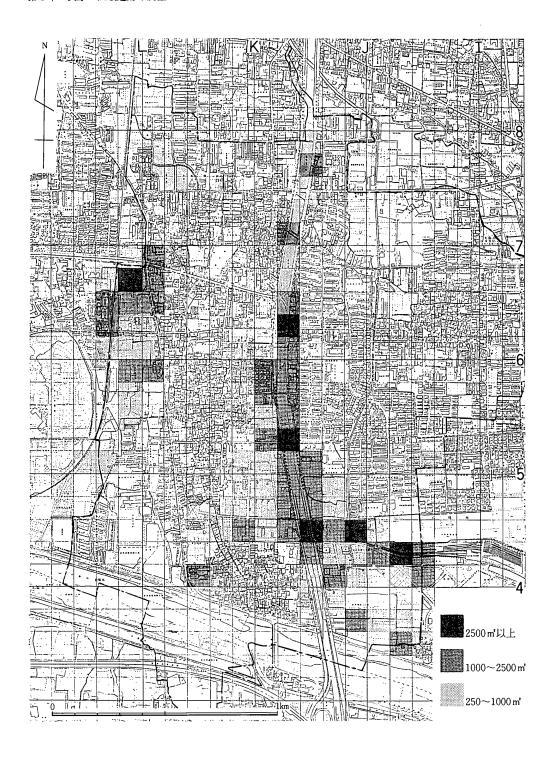


図3 長原遺跡の発掘状況

そして、この時期のもう一つの成果は広範囲の発掘調査に裏付けられた遺跡南部の基本 層序が確立され、より精度の高いものへと改訂されてきていることである。一方、民間の 開発に伴う調査は小面積のものが多いが、長原七ノ坪古墳の発見[高井健司1986]や主体 部の遺存する小型方墳の発掘[高井健司1987大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1988] などがあり、重要な情報を提供してくれることもある。こうした民間開発に伴う発掘調査 は今後さらに増加し、主要な調査契機になっていくであろう。

区画整理事業の一定の進展をみた現在、民間開発の勢いは一層拍車をかけてきており、 区画整理事業の完了を待たずしてこの地域の開発における第3期ともいうべき時期に入ろ うとしている。

3)発掘調査の地域的偏差

図3は長原遺跡での発掘調査面積を地区別に図示したものである。地区は「大阪市文化財協会1983 I] で記した大地区表記を基本にしてそれをさらに100m画の小区画に区分したものである。また、発掘面積のデータは1987年度までのものを使用した。

発掘調査が遺跡の中央を南北に走る府道大阪中央環状線沿いに集中し、とくに南部ではその西と東にひろがる水田地帯が主たる発掘対象地になっていることがわかる。また、遺跡西部の水田地帯も発掘が進んでいる。これらの地域は近畿自動車道建設や地下鉄工事、そして区画整理事業の対象地である。一方、長原・川辺・出戸・六反などの近世以来の集落や府営・市営住宅が建ち並ぶ長原遺跡東部および北東部では小規模な発掘が散発的に実施されているにすぎない。とくに東部および北東部は主要な遺構面が現在の地表から2~3m下にあり、そこまで掘削のおよぶ大規模な工事が少ないこともあって、大面積の発掘は行われていない。しかし、弥生時代から古墳時代の住居跡や古墳、中世の集落などが存在していることが部分的な調査で確認されており、長原遺跡の各時代における特色ある歴史はこれらの地域の資料が判明することでより明確になるものと思われる。また、換言すれば我々がいま手にしている資料は長原遺跡の比較的偏った地域から出土したものに限定されており、この地域の歴史を復元するにあたって多くの制約を被っているということができよう。

4)遺跡の地域区分

本書では、区画整理事業の施行地域を対象に長原・瓜破遺跡を後述のような地区に区分

第1章 長原・瓜破遺跡の調査

調査地区	発掘次数	調査地地番	調査面積
瓜破東南地区	NG82-023	瓜破東8,長吉長原西3	800
(4·5L)	NG83-044	瓜破東8,	1200
	NG84-024	瓜破東8	618
	NG87 - 064	瓜破東8	250
	NG87 - 065①	瓜破東8	560 320
西地区	NG87 - 065② NG82 - 028	瓜破東8 長吉長原西1	700
(5•6K,5•6L)	NG83 - 032	長吉長原西1	2810
(0-014,0-012)	NG83 - 053	長吉長原西2	720
	NG83-070	長吉長原西2	750
	NG84-012	長吉長原西1	1498
	NG84-029	長吉長原西1	188
	NG84-047	長吉長原西2	692
	NG84-067 NG84-070	長吉長原西1	161
	NG84 070 NG85 016①	長吉長原西2	83
	NG85 -016(1)	長吉長原西2	1770
i i	NG85 - 016② NG85 - 080	長吉長原西2 長吉長原西2	780 134
	NG86-008	長吉長原西2	91
	NG86-041	長吉長原西2	528
	NG88-016	長吉長原西2	110
中央地区	NG83-023	長吉長原1	120
(5·6J,5·6K)	NG85-009	長吉長原1,2	25
	NG85-059	長吉長原3	35
	NG85 - 077 NG86 - 036 NG86 - 060①	長吉長原3	10
	NG86-036	長吉長原3	123
	NG86 - 060(1)	長吉長原3	274
	NG86 - 0602	長吉長原3	550 6
1	NG86-067 NG86-090	長吉長原3 長吉長原3	147
	NG87-020	長吉長原3·4	375
	NG87-041	長吉長原2	55
	NG87-054	長吉長原3	45
	NG87-054	長吉長原3	255
	NG87-062	長吉長原3	155
	NG88-017	長吉長原2	16
	NG88 - 027	長吉長原2	190
東南地区	NG82-031	長吉川辺3	450 106
(3•4I,3•4•5J)	NG83-009 NG83-029	長吉川辺3 長吉川辺3	106
	NG83 - 076	長吉川辺3	96
	NG85-013	長吉川辺3	1400
	NG86-054(1)	長吉長原東3	486
	NG86-054②	長吉長原東3	205
	NG86-058①	長吉長原東3	680
	NG86-058② NG86-070	長吉長原東3	245
	NG86-070	長吉川辺3	138
	NG86-078	長吉川辺3	12
	NG87-016 NG87-027	長吉長原東3~川辺3 長吉長原東3	335 260
	NG87 - 028①	長吉川辺3	255
	NG87 - 028②	長吉川辺3	345
1	NG87-031	長吉川辺3	720
	NG87-039	長吉長原東3	190
	NG87-040	長吉長原東3	275
	NG87 - 050	長吉川辺3	65 460
j	NG87 051 NG87 060	長吉川辺3	460 945
	NG87-069	長吉川辺3 長吉長原東3	235
	NG87-076	長吉川辺3	205
	NG87-076 NG87-090	長吉川辺3	610
1	NG88-001	長吉川辺3	522
	NG88-015	長吉川辺3	440
	NG88 -022①	長吉川辺3	93
1	NG88 - 0222	長吉川辺3	150
1	NG88 - 0223 NG88 - 029	長吉川辺3 長吉川辺3	255 455
	NG88-029 NG88-036	長吉川辺3 長吉川辺3	229
	NG88 - 037	長吉川辺3	500
	NG88-042	長吉川辺3	134
	NG88-057	長吉川辺3	595
	NG88-059	長吉川辺3	288
	NG88-066	長吉川辺3	55
L	NG88-069	長吉川辺3	668

調査地区	発掘次数	調査地地番	調査面積
南地区	NG81-002	長吉川辺2	2900
(4.5J, 4.5K)	NG82-19	長吉長原4	1500
	NG82-027	長吉川辺1	880
	NG82-034	長吉川辺1	100
	NG82-046	長吉川辺1	50
	NG83-014	長吉川辺1	30
ł	NG83-046	長吉川辺2	200
	NG83-052	長吉川辺	260
l	NG84-048	長吉長原4	499
1	NG84-073	長吉川辺1	139
ł	NG85 - 034①	長吉長原4	140
i	NG85 - 034@	長吉長原4	370
	NG85 - 0343	長吉川辺2	145
1	NG85 - 0344	長吉川辺2	62
İ	NG85 035 (\$)	長吉長原4	186
ļ	NG85 - 067	長吉川辺2	200
1	NG85-070	長吉長原4	242
1	NG86-028	長吉川辺2	737
j	NG86-030	長吉川辺2 長吉長原4	51
1	NG86-043①	長吉長原4	20
1	NG86-043@	長吉長原4	147
1	NG86-085	長吉長原4	77
1	NG86-105	長吉川辺1	193
	NG88-020	長吉長原4	375

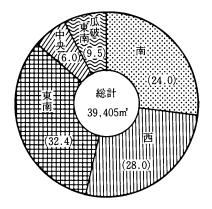


表1 区画整理事業関係の発掘調査一覧表

図4 各地区の発掘面積

(区画整理事業関係)

し、各地区ごとに記述している。区画整理事業の対象地域は、長原遺跡南半部と瓜破遺跡 東南部を含むものであり、その中に図5 (8頁)に示した地区を設定した。これは主とし て行政区画に基づき、機械的に区分したものであるが、第II章第2節に述べるように、地 区ごとに地層・遺構の内容に特色を見いだすことができる。また、表1・図4に示したと おり、区画整理事業は毎年度、複数の地区において実施されている。したがって、点在す る複数の調査地の中で、近接する調査地をまとめ、本文の記述をすることによって、遺構 相互の関係や各地区の特色を理解しやすくする必要があるのである。

こうした地区区分にしたがって、以下の記述を進めることにしたい。また、従来の大地 区名も同表に示しておいた。

なお、本書で報告する区画整理事業に伴う1982年度の発掘調査は「大阪市文化財協会 1989」の第 I 章第 1 節において記した経緯のもとに実施されたものである。また、実施に あたってはその前年度、大阪市教育委員会と大阪市都市再開発局との協議によって決定し た方針・原則を継承している。 (京嶋覚)

註)

- (1)1988年度までの資料に基づく。
- (2) 『長原遺跡発掘調査報告』 I に報告。
- (3) 『長原遺跡発掘調査報告』 II に報告。
- (4) 大阪文化財センター『長原』に報告。
- (5) 大阪文化財センター『城山』その1・2・3に報告。
- (6) 現在では円墳ないしは帆立貝形古墳であることが判明している。

第2節 調査の経過

1) 長原遺跡南地区 (82-19・27・34・46次調査)

•82-19次調査(図6)

1982年8月7日にI区から発掘を開始した。基本的には2m幅のトレンチを下水管埋設位置である道路中央部に設定した。60号墳が検出されたため東側を道路敷地内で拡張した。

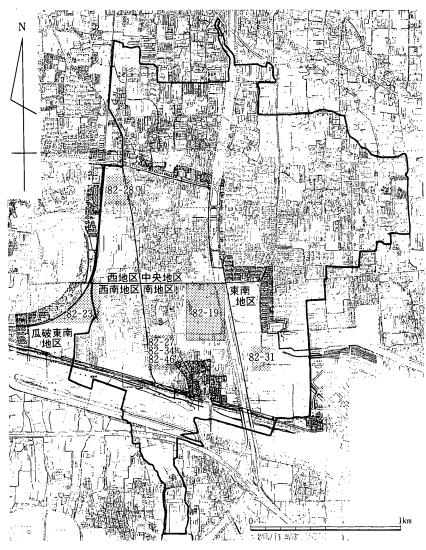


図5 区画整理事業の施行範囲と地区区分

(アミ目は本書で報告する調査地)

Ⅱ区では61~63号墳が検出され、東および西 側を拡張した。しかし、I・II区は現状が水 田であるため排土の搬出ができず、トレンチ の両サイドに置いていたこともあって、拡張 作業には人力で排土を移動しなくてはならず、 困難を極めた。Ⅳ・V区の長吉3号線部分は 現存する生活道路と重なっており、N区の65 号墳は道路を付け替えて拡張したが、67・68・ 69号墳は住宅に近い位置にあったため拡張調 査を断念せざるをえなかった。また、Ⅳ·Ⅴ 区は蛇行する生活道路を残して、これをまた ぐようにしてトレンチを設定する必要があっ た。さらに農具小屋の移転が円滑に行われな かったことや整地工事関係の車両の通路を確 保するために部分的に先行して調査したため、 トレンチは9分割され、遺構や地層の連続性 を把握することに支障をきたした。

調査中、I区の南側で整地工事に伴う擁壁 工事が行われ、70号墳が発見された。すでに 墳丘の盛土部分が削平されていたが、工事を 中断し、調査を実施した。発掘した古墳のう ち60~66号墳については保護砂を入れて埋め 戻した。II区は押し込み工法に設計変更され、 61~63号墳の破壊は免れたが、60・64~69号

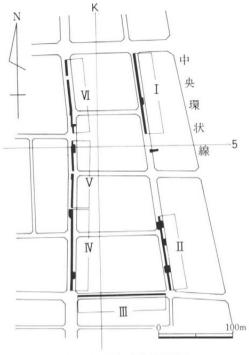


図 6 82-19次 調査地位置図



写真2 63号墳 保護砂による埋め戻し

墳では墳丘の縁辺部が削り取られたり、周溝部分が削平されることを余儀なくされた。 調査は翌1983年3月31日をもって完了した。 (京嶋)

•82-27次調査(図7)

1982年12月14日から4日間の試掘を行い、遺構・遺物の存在が判明したため、1983年1月12日から本調査を実施することとなった。

第1章 長原・瓜破遺跡の調査







写真4 一ケ塚古墳 保護砂による埋め戻し

調査地は幅22mの道路予定地であったので、下水管は南北に2本埋設されることとなっていた。そこで各々の埋設位置に幅2mのトレンチを掘削し、必要に応じて調査範囲を拡張した。拡張部分に限って、第4 層(層序については後述)まで機械で掘削したので、その上層の遺構については明らかにできていない。北側の東西トレンチを東から $I \sim III$ 区とし、同様に南のトレンチを VI ・ VII 区とし、西側の調査地を VIII 区とする。調査面積は約1040 m である。

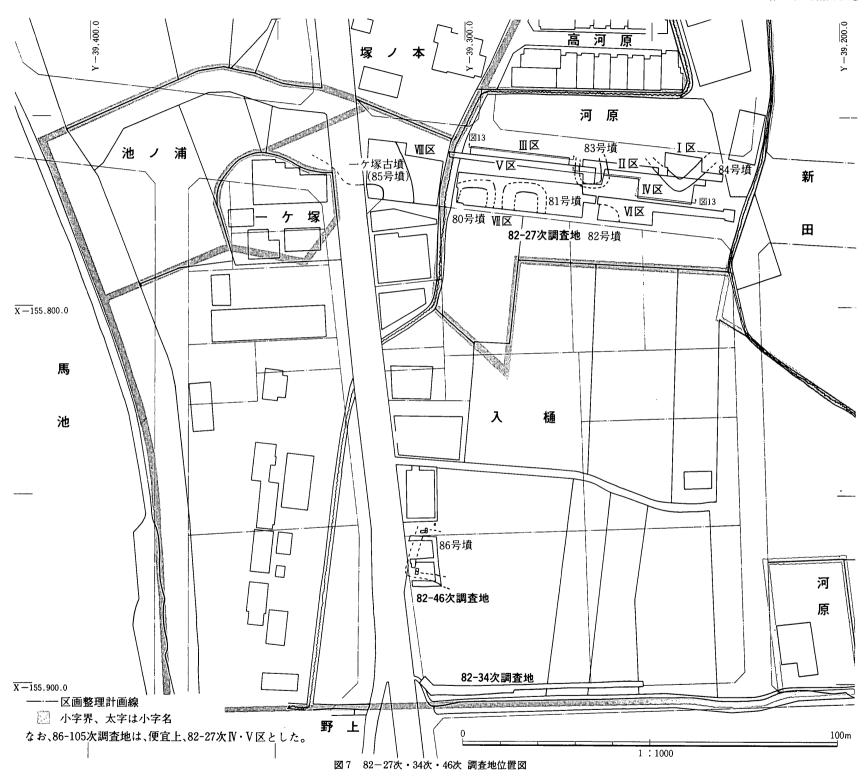
調査を開始して間もなく、80~85号の古墳 6 基が相次いで発見されたが、そのさなかに、調査地の近隣で86号墳が発見され、その緊急調査(82-46次)も並行して実施することとなった。またVIII区の一ケ塚古墳(85号墳)に関しては可能な限り、道路幅の全面まで拡張して調査した。そうした経緯もあり、協議の結果、VI・VII区については第 6 A 層の上面までで調査を断念し、埋め戻さざるをえなかった。よって今回の報告ではこの部分の下層の遺構・遺物が欠落しており、いずれ再発掘を実施したのちに報告する予定である。

調査は1983年3月31日に終了した。古墳の墳丘は、下水管工事の若干の設計変更によって墳丘の多くを保存することができた。

しかし、1986年度には $I \sim IIII区と VI \cdot VIII区の南に水道工事が行われることとなり、 VI \cdot VIII区については設計変更が可能であったものの、 <math>I \sim IIII区の南部分はいかんともしがたく、86-105次調査を実施することとなった。その本報告は後日行うが、今回は必要部分を <math>IV \cdot V$ 区として、合わせて報告する。 (積山洋)

•82-46次調査(図7)

82-27次調査を実施中、その南方約100mの地点で擁壁工事が開始され、掘削部分の断面で古墳の墳丘らしい地層が発見された。そこで、ただちに工事を中断し、都市整備局な



どと協議したうえで、1983年3月4日から緊急調査を実施することとなった。調査範囲は すでに機械掘削が終了していた部分を中心に、必要最小限の補助トレンチを設けることと した。調査面積は約50㎡である。

馬形埴輪と86号墳の一部を検出して、同年3月11日に調査を終了した。 (積山)

・82-34次調査 (図7)

82-23次調査を実施中の1983年1月に、その南130mで区画整理事業の擁壁工事が開始された。工事による掘削部分の断面観察から、一部で奈良時代以前の遺物包含層が掘削されていることが判明し、その部分について1月28日~2月1日に調査を行った。地名は長吉川辺1丁目で、小字は入樋である。

幅1~2mで長さ60mの東西方向の調査区である。工事掘削によって、沖積層下部層である第13層が0~20㎝掘り下げられた状況になっており、この面で遺構検出を行った。西30m部分は江戸時代以降の瓦組井戸が存在しただけであるが、東30m部分では古墳の周溝の可能性が強い浅い落込み2個所と、飛鳥~奈良時代の溝3条を検出した。遺物は全く出土しなかった。 (鈴木秀典)

2) 長原遺跡西地区(82-28次調査)

この調査地周辺は1982年度には文化財包蔵地としては周知されておらず、大阪市教育委員会発行の遺跡分布図では長原遺跡と瓜破遺跡・喜連東遺跡などの間に位置していた。しかし、長原遺跡を調査していく過程で、長原遺跡内の遺物包含層が当時周知されていた遺跡の範囲を越えて、広く分布していることが認識されてきた。そのため、大阪市教育委員会は大阪市都市整備局と協議し、遺跡の周辺地域であったこの調査地に対しても、先に試掘調査を行い、遺物包含層の存在を確認した結果で調査に着手することになった。試掘調査の結果では、東部には長原遺跡第6層が存在しており、西部にも第4層相当層が広がっていることが判明したため、本調査を行うことになった。

調査は1982年12月23日から実施した。東西方向の計画道路である長吉一号線内(幅員16 m)に幅2mの調査区を2本設定することになった(図8)。北に設定したトレンチを北調査区、南のトレンチを南調査区と呼称する。南調査区の基準線は道路南側境界線に平行して北に4m離れて設定した。北調査区は南調査区の基準線に平行して、北に7m離れて設定した。南調査区は周辺に広がる耕作地への進入および耕作地の排水のため、連続した

第1章 長原・瓜破遺跡の調査

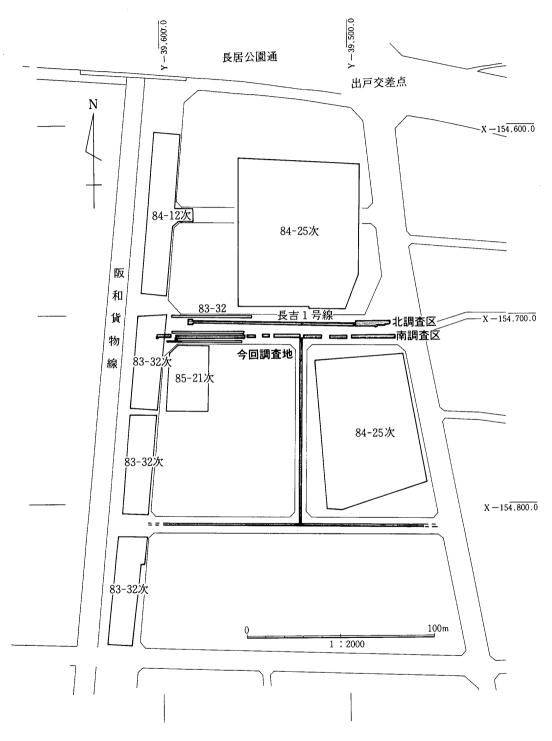
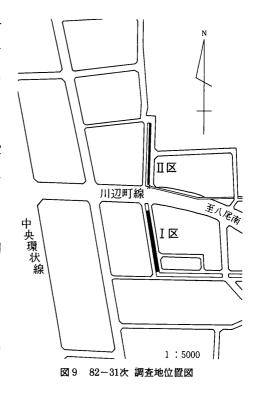


図8 82-28次 調査地位置図および周辺調査地

トレンチを設定できず、至るところで分断せざるをえなかった。北調査区は東部の18mを幅2mとし、西部は幅1mの調査区となった。また、長吉一号線のほぼ中央から南に伸びる計画道路と長吉一号線の南に計画されている道路予定地の中央にも幅1mのトレンチを設定し、調査を行ったが、この成果については1984年度の調査成果とともに報告することになった。これら南北トレンチ・南側道路のトレンチの調査も含めて、1983年3月24日に調査は終了した。 (松尾信裕)

3) 長原遺跡東南地区(82-31次調査)

1983年2月3日から、川辺町線の南側であるI区の南端から北に向けて調査を開始した(図9)。



当初、調査区を3 m幅で設定して表土を機械掘削したが、I 区中央部は23mにわたって大正川の旧流路で地山層まで掘削されていたほか、I 区全長82mのうち63mは近代の削平が地山層まで到達しており、包含層や遺構はみられなかった。また北端においても縄文土器や石器群の包含層の上面に現代盛土がのっている状態であった。I 区南端で7世紀後半の土器埋納ピットや10世紀に埋没する南北溝S D01を検出し、北端の縄文時代の包含層からは石鏃や調整加工砕片が多く出土したので、それぞれ調査区を幅5 mまで拡張した。北端の包含層では縄文土器片や石器群を1/10の出土平面図にレベル値をとりながら取り上げた。川辺町線の北側のII区は調査区の西半が現在の大正川にかかり、平面的に調査するには安全面で問題があったので、5 mごとに1 m×1 mのピットを掘り、層序および遺構の確認につとめた。調査は3月9日に終了した。 (黒田慶一)

4) 瓜破遺跡東南地区(82-23次調査)

当調査は瓜破東8丁目において、計画道路中央の下水管埋設工事部分の幅2m、総延長412mについて行ったものである。

第1章 長原・瓜破遺跡の調査

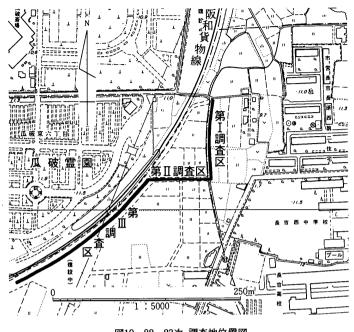


図10 82-23次 調査地位置図

調査地は道路の屈曲により、大きステースを表している。大きの間にはいる。その長いでは、第1調査区が105.5m、第11調査区が89m、第間額査区が217.5mである。第1は、第1が、第1であるが、第1でものではは、10・2区・3区・3区・3区・3区・3では、10・2区・3区では、10・2区・3区では、10・2区・3区では、10・2区・3区では、10・2区・3区では、10・2区

と地区分けした (註1)。

1982年9月24日に第Ⅰ調査区の草刈りを行い、調査を開始した。以後、一部並行しながらも第Ⅱ調査区、第Ⅲ調査区と順に調査を実施し、翌1983年3月31日に現地調査を終了した。なお1983年1月28日~2月1日には当調査の作業を中断し、82-34次の調査(本書収録)を行った。

調査における掘削はすべて人力で層位ごとに実施し、遺構・遺物の検出に努めた。ただし、現在の道路・農業用水路部分については調査を行っていない。第I調査区では計画道路敷地内で調査区の拡張や補足的な小トレンチを設定した。 (鈴木)

註)

(1) 下水管路中心線上で直線距離20mごとに区割りした。

(趙哲済原表)
1990
長原遺跡南部の総合層序
\sim 1

1 _ L	1 1	本	柱状図	層相	層 厚 (cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C-14 y. B. P.	時代
	据	0 層 1 層	\bigvee	現代盛土現代耕土	15~25	(縦線は黒色帯)			現代
	1			含細礫灰褐~黄褐色シルト質砂	1)		小溝群・犂間 日本製陶磁器	Md:本片	近世・近代
	無	3 層		含細礫淡黄褐~灰色粘土質シルト	12~20		↓小溝群·犂間·島畠 瓦器·瓦質土器·陶磁器	Cb:木炭	州
政		4 A 層	•	含細礫黄灰色中粒砂			→ 水田面		
	無 無	4 B層 II		暗水褐田礫質砂 褐水田砂質ンルト ~シルト (10~45) 含細礫黄灰色中粒砂	約 20			Pt: 泥炭 S1: 土壌	鎌
闽	4			灰色砂質シルト	約 15		須恵器 ← 水田面 上師器 ↓ 小溝群・犂間 瓦器・黒色土器	!	
	層 第4	C M		明黄褐色砂質シルト	* 20		 掘立柱建物 ← 水田面		中
製	#	4		にない現物田ンルト国砂田などの 一世の 一世の 一世の 一世の 一世の 一世の 一世の 一世の 一世の 一世	#1 ZO		11 1.7		;
	張∨層	5 B 層	0000		10~80 2~ 8		十 親 跡 ————————————————————————————————————		
絃	継	第6A層 I		暗青色砂・粘土質シルト		タニジ	← 外田園		茶豆
	₩ 9	- 1	•	灰色中粒~細粒砂	IIV 2		→ 田田 十		i
屉		BB '		含砂・礫黒褐色~暗灰色シルト質粘土	¬	×11 %	上師器·須恵器		飛馬
	挪	1 N N N	•	灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂 会砂里協会シルト質粘土	Al 2	←乾痕	◆ 水田面		- 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1
恕	紙		0	黒褐色砂·礫質粘土	35 35		- 加売 - 1年 - 1		1
	~ 匯	7 B層 II		褐色極粗粒砂~粘土質シルト				-	
史				暗褐色粘土質シルト	N 2		(←水出面:八尾南遺跡) ↓ 方形周溝墓・竪穴住居 庄内式・畿内V様式		古墳前期
	- 1	⋖	0 0	青灰~黄灰色砂·礫	₩ 40		← 方形間溝蟇・溝		沙王後期.
橨	無 ∞	80 BB					幾内皿·IV様式・		弥生中期
	麗 紙	S C		にぶい黄褐色極粗粒砂~中粒砂==================================			★葉形石鎌ひとの足跡		
쪧	捆	۷ و		現物 ロングト質 作工 序句 シラト解禁士	VI 2	← 乾痕	→ 水田面・溝 + 総内 様式・※ はいます。		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
	無	9 A 🗟			3~15		映期 長原式・石斧 畿内 「様式・時期 長原式・石鎌		条件計語
4	<u></u>	Н	0000	灰オリーブ~黒褐色砂礫	% 30				
	無			暗灰黄色シルト質粘土	10~40		畿内I様式·竪杵		
恕	8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	Ве ' Ве		灰オリーブ色シルト質粘土	$3 \sim 14$		土偶		
	E	2		質粘土	20		石棒 晩期長原式・石斧の柄・弓		!
踵	•	>		(水オリーブ色シルト質粘土 単規~規原角シルト階粘土	10~35		土器棺墓		組文晚期
	無			灰色シルト質粘土~砂礫	210		↓竪穴住居・貯蔵六 四基式石鎌		
				オリーブ黒~灰色シルト・粗粒砂質粘土	7~25		後期出語		縄文後期
		B	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	緑灰~オリーブ灰色砂礫~細粒砂・シルト	08 VII	→ 地震		*19图令休色	
1	無	P		井	16	←乾痕		腐植質土物	*
		12 A 層	١٩١١	黒褐色礫質粘土~シルト時に各細粒が弱ション	15		中期北白川C式·石鎌	←4740±110 SI ←4740±190 SI ←4900±140 SI	SI (Gak-11323) SI (Gak-14942) SI (Gak-14941)
	揺		\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	"間外に和心に見った。」 暗黄灰色シルト質水山ガラス(2次堆積)		1 治験		-	
恕	12	第12B層——	1/1/1/		2 2		中期船元Ⅱ式		組文中期
踵	P		0 0	黄灰色砂礫	≥ 15		土壙 有效少商與 凹基式石鎌	←4900±100	
	第11	第12C層		緑灰色シルト質極細粒砂~砂質シルト ・火山ガラス質シルト(~黒ボグ:風成)	≥ 45	火山灰層準	質器・細石刃	Cb(Gak-14940)	4年 大平期
下部	捆	(漸移帯)	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	仮色細粒シアト	ΛΙ ΓΟ Ι	◆ 乾痕 ———————————————————————————————————	剝片・ハンマーストーン	横大路火山灰層)	
. DOm	13	Í				_			
.12 -	B	第13B層 (第13C層)		黄褐~灰黄色シルト質粘土~火山灰(3cm)] 	15~50	人山灰層準 [[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[[?剣片・石核甲	(←2.1~2.5万 平安神宫	後
段丘區			0.000	· 点和工/ 砂~砂質粘土	g		五窓	火山灰層)	日石器
	£		000	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	30~20	1 1			
- I	第 15	P	· · · · · ·	緑灰色砂質粘土~砂礫・アーコース質砂。	≥ 200	ヒメマツハダー不懸命		←27890±480 Wd (Gak-6977)	第2節
ш	中位段丘相当層	國 示 国	0 0 1	緣灰色砂礫~砂·粘土·泥炭質粘土互層 <	≥ 230	1			調査の経典の経典を表現である。
1									

第II章 調査地域の概要

第1節 基本層序

長原遺跡南部における基本層序は『長原遺跡発掘調査報告』 II・III [大阪市文化財協会 1982・1983 I]で詳述され、その後、発掘調査の進展とともに改訂されてきた(表 2)。この基本層序は遺跡東南地区における調査資料を基準にしたものであり、他の地区の層序との対比関係は各調査資料の分析を通じて明らかにされつつある。『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 I [大阪市文化財協会1989]では南地区において基本層序との対比が初めて公にされ、この地区と東南地区との地層の連続性が明らかにされた。1982年度の調査地は東南地区の82-31次調査を除いて第8~12層の地層がほとんど遺存していない地区にあり、南地区では第7層以上の地層にその連続性を認めることができる。

図11は本書で報告する南地区の82-19次調査地およびその北部の中央地区を対象にしたパネルダイアグラムである(註 1)。ここでは第13層相当の灰白色シルト層ないし黄色粘土層上には、古墳の墳丘盛土下に黒色粘土~シルト層の第 7 B層が遺存しているが、そのほかでは灰黒色ないし暗灰色粘土の第 7 A層・第 6 B層相当の古代における水田耕土となっている。また、分布範囲の狭い水成層第 6 B II 層はほとんど存在せず、これによって被覆された水田面である第 7 A層上面は第 6 B層あるいは第 6 A層上面の水田の耕作によって壊されている。したがって、図中の範囲では第 7 A層上面の畦畔遺構は、北部の一部にしか認めることができないのが現状である。

図中の範囲における南部では、第6B層上面の水田面も断片的にしか確認されておらず、第6A層の耕作によって破壊されているようだ。しかし、第6A層の下部に第6B層と認定しうる地層が遺存していることは多い。一方、北半部ではしだいに第6A層と第6B層の区分が明瞭となり、第6B層上面を覆う第6AII層の水成層を介在する部分も多くなる。とくに図中の北端部付近では、砂礫からなる第6AII層の厚い堆積があり、第6B層上面の水田遺構が良好な状況で保存されていた。

第11章 調査地域の概要

第5層は図の北端部付近で第6AII層が厚く堆積する地点を除いて、ほぼ全域に分布する。したがって、この地区のほぼ全域で検出される水田遺構は第6A層上面の水田である。 第5層上には第4B層の灰色ないし灰褐色粘質シルトがある。第4B層はI・II・IIIに区分され、長原遺跡のいくつかの調査地点では第4BII層の薄い水成層に覆われた水田耕土である第4BIII層が確認されている。

遺跡内で広範に分布している中世の耕土である第4BI層は水成層の第4A層で覆われている。これまでの調査所見にしたがえば、第4BI層の水田は13世紀後半から14世紀前半ごろに第4A層で埋まったと考えられ、第4BII層の水田は12世紀代に耕作時期があったと推測される。図中の範囲ではごく一部で第4A層が検出されているにすぎず、第4B層上面は第2・3層によって壊され、北半部の一部で畦畔遺構が検出されているだけである。北半部の第4A層が厚い地点ではこれを島状に削り出した「島畠」が確認されている。なお、西地区・瓜破東南地区など瓜破台地の高所に位置する地区では、西地区北部や谷状地形の中などの限定された部分を除いて、南部沖積層上部層相当層の堆積はきわめて薄い。

註)

(1) 南部基本層序との対比関係は京嶋・趙哲済・木原克司で検討した。また「城山遺跡 その3」地区における資料は[大阪文化財センター1986III] から引用した。

第2節 立地と概要

1) 長原遺跡南地区

南地区は長原遺跡南部の基本層序における第 $1\sim7$ 層が遺存するが、第 $8\sim12$ 層が欠如し、第 7 層の下は第13層である。

この地区は長原古墳群中の南群の中心部で、73基の古墳が調査されている。古墳より古い時期の遺構は確認されていない。古墳群の中央よりやや西側を南北方向に、大和川付け替えののちに廃された東除川が存在する。この川はこの地区の第6層以上の地層を構成する堆積物を供給したと考えられる。飛鳥時代から奈良時代後半と思われる第7A層・第6

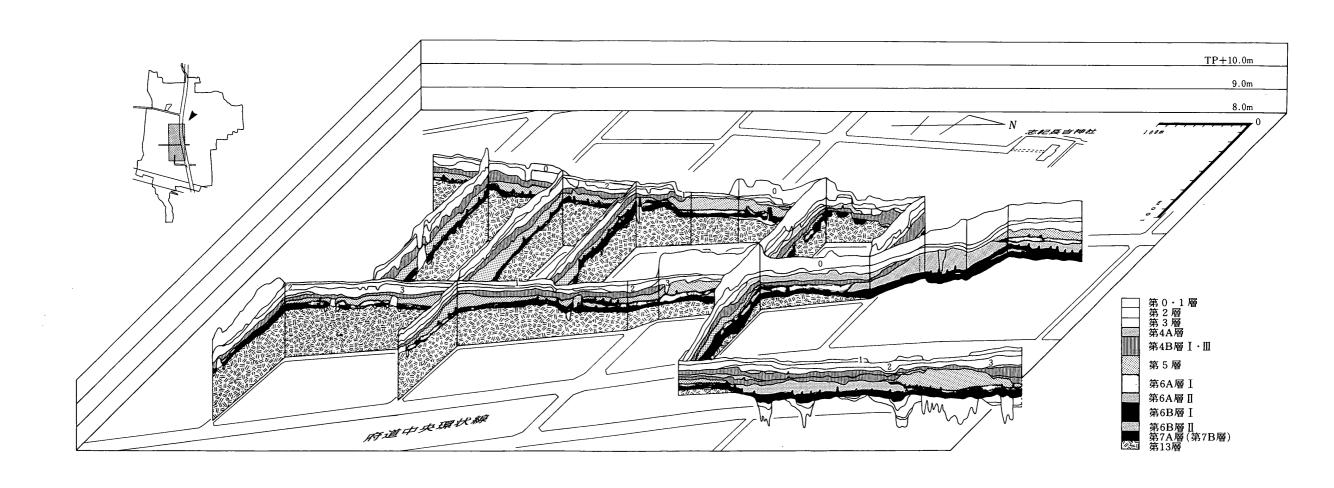


図11 長原遺跡南・中央地区の沖積層パネルダイアグラム

B層・第6A層の水田耕土がほぼ全域で検出されるが、水田面を覆う堆積物の量の多寡により、のちの耕起で地層や水田面が壊されている地点が多い。奈良時代末の洪水による堆積層である第5層は第6A層上面を覆い、古墳の墳丘も大半が埋没する。平安時代から鎌倉時代の屋敷地はこの地区内に $2 \sim 3$ 個所あり、第5層上に形成されている。この時期には再び全域が水田として整備されるが、地表にわずかに見えたと思われる古墳の高まりは削平され、多くの古墳は完全に地上から姿を消すことになる。

本書で報告する82-19次調査地は近世に埋められた東除川の東側で、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 I [大阪市文化財協会1989] で報告した調査地の北側にあたる。また、82-27・34・46次調査地は旧東除川の西側に位置している。

2) 長原遺跡西地区

この地区の南西には瓜破台地上を南東から北西方向にのびる谷があり、遺跡の西を画している。北部の一部で南地区と同様の層序を確認できるが、南部では第 $4\sim7$ 層に対比できる地層が欠落する部分が多い。前記の開析谷の斜面では第 $4\sim7$ 層に相当する地層が認められる。

北端部で5・6世紀の小型方墳が10基確認されているが、それ以南には5世紀後半から6世紀後半にかけての集落遺構がまとまって検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985、京嶋覚1986]。古墳群はさらに東および北側にも分布していることが確認されている。第6A層および第4B層に対比できる水田遺構が北部で認められるが、南半部では開析谷の斜面で認められるにすぎず、後世に削平されたと思われる。また、北半部で平安時代前期~後期の屋敷地が2~3個所で検出されている。

本書で報告する82-28次調査地はこの地区の北部に位置し、古墳群の南に展開する古墳 時代の集落範囲内にあり、西側では平安時代の屋敷地内におよんでいる。

3) 長原遺跡東南地区

この地区の地層は北西部を除いて遺跡南部沖積層下部層および上部層が認められ、遺跡 南部の基本層序の標識的な様相を示している。また、この地区の北西部の層序は南地区と 共通した様相を呈する。

南半部では弥生時代中期の水田遺構や方形周溝墓、後期の方形周溝墓、古墳時代中期の 集落や中・後期の古墳群がみつかっている。また、中央部では縄文時代晩期の集落[大阪

第II章 調査地域の概要

市文化財協会1982] や土器棺墓群 [大阪市文化財協会1983 I] が検出されており、長原遺跡における縄文時代集落の中心はこの地区にあると考えられる。一方、北西部は南地区に形成された古墳群の東端にあたり、塚ノ本古墳をはじめとする10基の古墳が調査されている。また、飛鳥時代から奈良時代の水田遺構も同様に検出できる。そのほか平安時代前期から後期の屋敷地が地区内に点在し、北西部の中央環状線内には平安時代から室町時代にかけての集落遺構が密集している。当該期の水田遺構は集落域と南部を除く広い範囲で検出されている。

この年度に実施した82-31次調査はこの地区のほぼ中央部に位置し、縄文時代晩期の集 落遺構が分布する地域である。

4) 瓜破遺跡東南地区

この地区は2)で触れた長原遺跡の西を画する開析谷の西側にあたる。瓜破台地上に位置し、多くのばあい地表面下30㎝以内で台地を形成する粘土層または砂礫層が検出される。したがって、表土層以下の地層はあまり遺存しておらず、長原遺跡の基本層序との対比関係は明確ではない。遺構はほとんど地山上で検出され、古墳時代中・後期の土壙や飛鳥時代から中世にいたる溝や建物が検出されている。

古墳時代の遺構はこの地区の北東に分布しているようであるが、今のところ検出例は少ない。しかし、東接する長原遺跡西南地区の長吉高校建設に伴う大阪府教育委員会の発掘調査では、高校敷地西部に古墳時代中期に属する溝・ピットなどが検出され、「長吉野山遺跡」と記されている。このことからこの付近に当該期の集落が存在していた可能性がある。また、この地区の西半部では飛鳥時代を中心とする遺構の分布がみられ、府営瓜破東住宅建設に伴う発掘調査では溝と塀に囲まれた飛鳥時代の建物群の一角が明らかとなった[南秀雄1987]。これに先行する1984年度の区画整理事業に伴う発掘調査では7世紀後半と考えられる建物と井戸が発掘され、井戸から多くの土器を出土した(註1)。

今回報告する82-23次調査は長原遺跡西南地区に近いこの地区の北東部にあたり、古墳 ~飛鳥時代の遺構などを検出している。 (京嶋)

註)

(1)84-24次調査。

第川章 調査の結果

第1節 長原遺跡南地区の調査 (82-19・27・34・46次調査)

1)調査地の層序と遺物 (図12~14, 図版3・12)

南地区の層序は前章第1節で述べたように遺跡南部基本層序との対比関係が把握し得る。 ただ、部分的にはその対比が困難なばあいもある。したがって、本節において使用する地 層名は原則的には南部基本層序のそれと同一名とし、必ずしも一致しない層準はその旨を 明記しておくこととする。以下に表題の調査地における層序を下位から順に記述する。な お、82-34次調査地での第 $1\sim4$ 層相当層準については最後に述べる。

沖積層下部層

第13層:灰白色シルト〜黄色粘土層で、上面の標高は19次調査地でTP+9.2〜10.4m、27次調査地ではTP+11.0〜11.4m、34次調査地ではTP+11.7〜11.8mである。19次調査地ではV区南端がもっとも高く、ここから北東方向にゆるやかに高度を下げている。VI区北部で段状をなして低くなっており、調査地内ではこの地点がもっとも低い。27次調査地では東から西に向かってゆるく下がっているが、西端のVII区では再び高くなっている。本層上面では遺構は認められなかった。

沖積層上部層

第8層:27次調査地では第13層の上に沖積層上部層の第7層・第6層が直接堆積しているが、83号墳の墳丘の下で第7B層の下にのみ、本層が残っていた。検出面はTP+11.4m弱で、層厚は約10㎝である。灰黄褐色粘質シルトで、顕微鏡観察によれば、わずかながら火山ガラスが認められ、火山灰層が再堆積した可能性もある。この層準は本遺跡南部基本層序のどの層準に比定するか不明である。

第7層:灰黒色〜黒色の粘土ないしシルト層である。本層直下に第13層が認められる。古

墳は第7B層上面に築かれている。第7B層は古墳盛土の下にのみ認められ、その上層の第7A層は第6B層との分離が難しい。このため、第7A層はごく一部で分離できたものの、その上面と断定しうる水田遺構は確認できなかった。第7A層は、34次調査地では古墳周溝の可能性の強い落込みの埋土としてのみ存在する。

第6層:暗灰色粘土ないし灰色~青灰色粘土質シルト層である。本層はA・Bに区分され、 前述のとおり第6B層は第7A層との分離が困難である。

19次調査地では、I区北部で検出された第6B層は上面で水田畦畔が検出されたが、この地層の下位は灰黒色を呈し、第7A層との分離が可能であったが、上面は第6B層によって壊され、畦畔は検出できなかった。第6B層はI区北部・VI区南部では第6A層との間に水成層である第6AII層が挟在し、両層が明瞭に区分できる。他の地点では第6B層の上半部は第6AI層によって著しく乱されている。また、水成層第6AII層が層厚50cmと厚く堆積する部分がI区SD02・03北側に認められる。また、VI区SD14の埋土上半部をなす砂礫層も同じ層準である可能性が高い。第6AI層上面では畦畔が検出される。

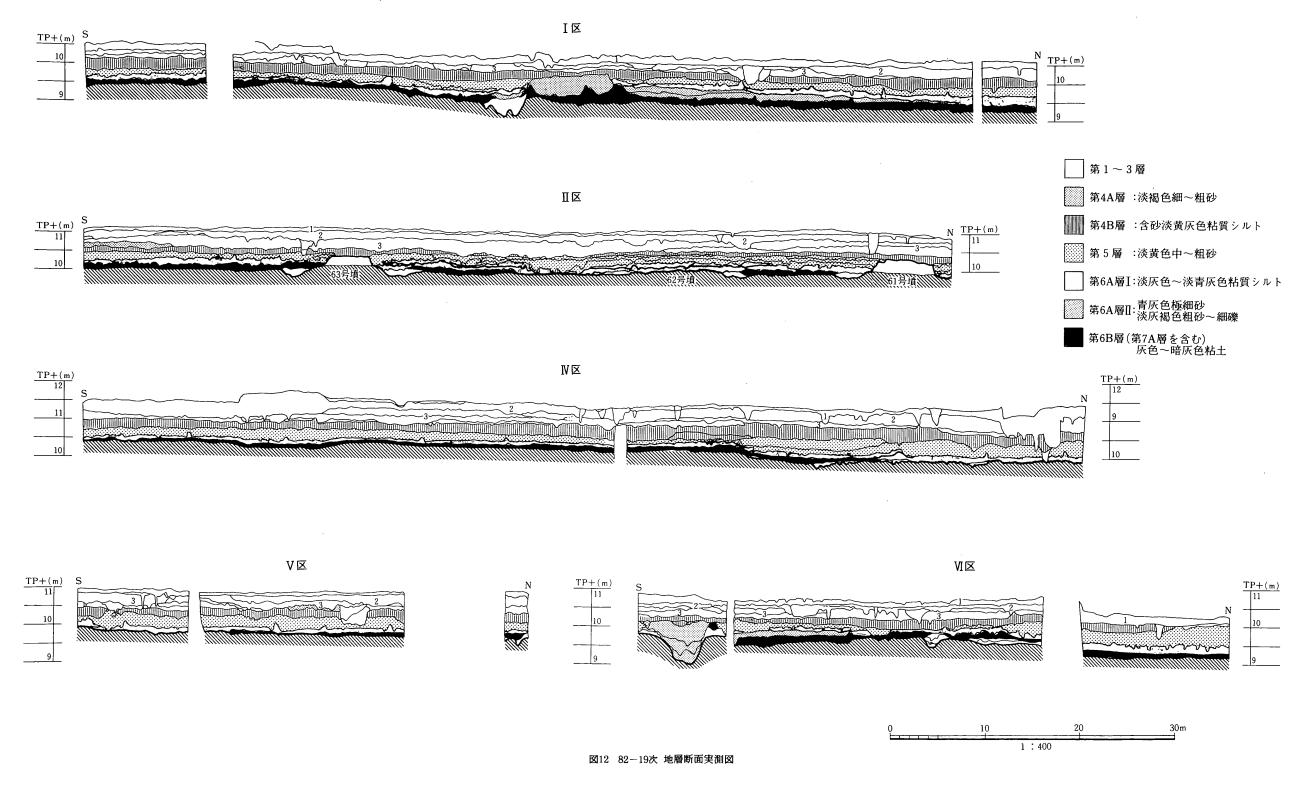
27次調査地でも、本層は3層に細分される。下層の第6B層は黒色〜暗灰色のシルト質粘土ないし粘質シルトで、上面に畦畔が検出される水田耕土である。VIII 区の一ケ塚古墳(85号墳) 周濠内の下層と、III・IV区の中央付近から東に、第13層と古墳周溝埋土の直上に堆積している。いずれもその上面を、砂からなる水成層の第6AII層が覆っている。両者の中間地区では、このふたつの層準が認められないが、直上の第6AI層の下位に第6B層と類似する様相が認められ、ここではのちに耕起されて失われた可能性がある。その上に明褐色〜灰黄色シルト質粘土の第6AI層が全域に堆積する。鉄分が沈着し、上面には畦畔が検出される。

34次調査地では第6 B層の灰黄~淡灰色シルト質粘土が西30m、第6 A層(淡) 灰色(シルト質)粘土が西10m部分にのみ存在した。地層の比定は層相と、両層 の基底面でそれぞれ検出される第6層(あるいは第7層)水田関連の用水路と思 われる溝の存在から推定した。第6層の上面はTP+11.9m前後である。

第5層: 淡黄色中砂ないし細礫を含む水成の粗砂層で、本遺跡の第6A層上面を広く覆う 大規模な洪水層である。上面に遺構は認められなかった。

19次調査地では、上面の標高は $TP+10.0\sim10.5$ mをはかる。 $III \cdot IV \cdot V$ 区およびVI区北部に顕著な堆積がみられる。

第1節 長原遺跡南地区の調査



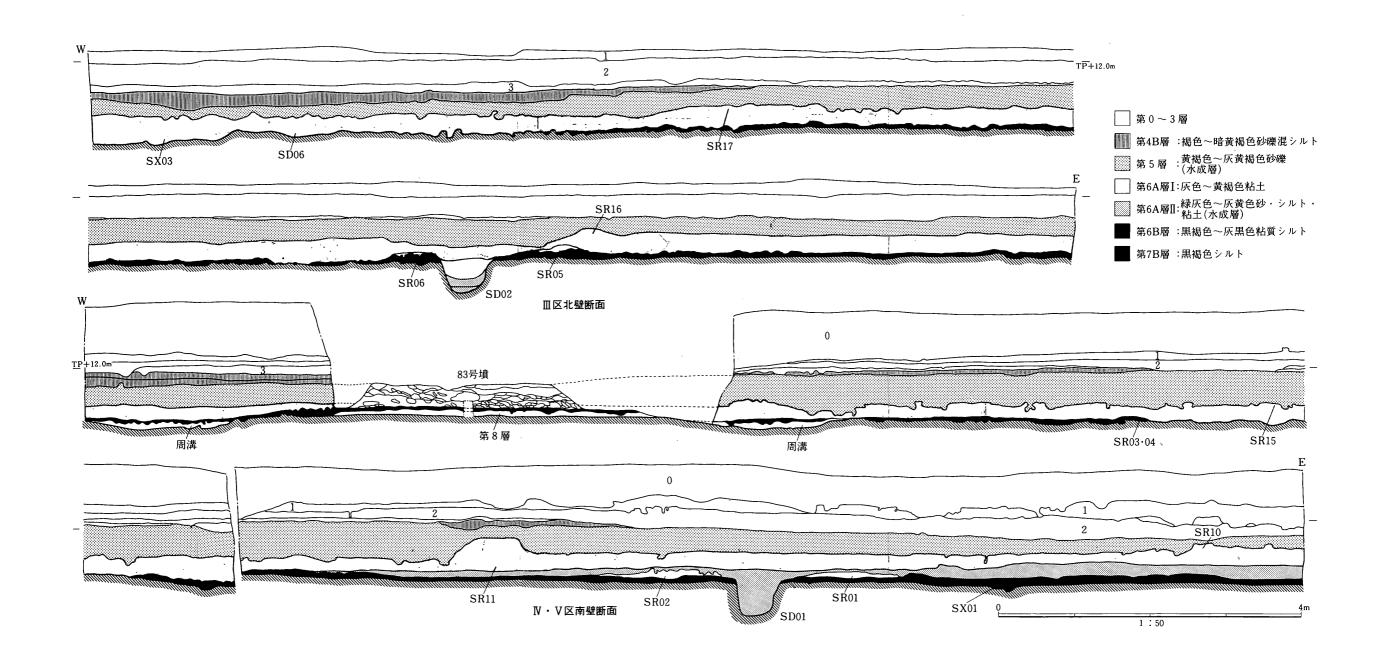


図13 82-27次 地層断面実測図 (実測位置は図7参照)

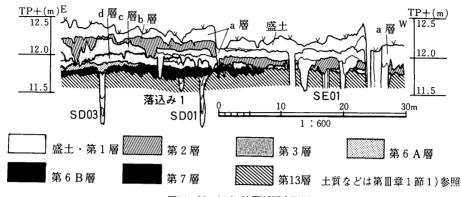


図14 82-34次 地層断面実測図

27次調査地では、層厚20~50cmで、西へ行くにしたがって薄くなり、WII区では 耕起されて本来のラミナ構造を失い、第4層と理解すべき層準となっている。

34次調査地では本層は存在しなかった。

第4層:含砂淡黄灰色粘土質シルト層ないし淡褐色細〜粗砂層である。

19次調査地では、上面の標高はTP+10.2~11.0mである。第4B層上面を薄く被覆する水成層第4A層相当層は、II区南部とV区に認められるが、第4B層はほとんどの地点で第2層ないし第3層直下で検出される。

27次調査地では、西端のWI区に非水成で灰黄色の砂が分布し、これは前述のとおり第4層に相当すると考えられる。III・V・WI区より東で、数個所で薄く検出された黄褐色〜褐色の礫・砂混シルトは、第5層と第3層の境界面から切り込むごく浅い溝状の遺構になるようで、本層の段階のものと考えている。III・V区で検出した溝SD07などには水成の第4A層が堆積している。

第3層:含砂灰褐色シルト層で、平安~室町時代の遺物が含まれる。第2層下面の掘込み によって、遺存状況はあまりよくない。

第2層:灰褐色ないし茶灰色粘土質シルト層で、現代耕土直下で検出される。現代水田の 床土面をなす。

第1層:現代耕土である。上面の標高は19次調査地でTP+10.3~11.2m、27次調査地で TP+11.8~12.2mをはかる。

82-34次調査地の第1~4層相当層準について

上から順に第6層上面までのa層(現代耕土)、b層(灰白色砂礫多混シルト)、c層

遺物

・82-19次調査 (図15・16)

石鏃(1)流理状構造をもつ安山岩製の凹基式石鏃である。長さ3.5㎝、幅2.2㎝、厚さ0.5㎝をはかる。石材が流理状構造をもつため、調整加工痕は階段状を呈している。形態的には両側縁部にくびれがある点に特徴がある。技術的には最終の調整加工を裏面で入念に行い、両側縁に細かな鋸歯状の加工を施す。61号墳墳丘上面で出土した。

翼状剝片(2)長さ6.3㎝、幅3.2㎝、厚さ1.1㎝をはかる翼状剝片である。瀬戸内技法の剝片剝離技術によって剝ぎとられた目的剝片で、山形の打面調整を施したのち、その頂点からややずれた位置に打撃を加えている。表面には前の剝片剝離の際に剝落した薄い剝離痕が残る。また、表面に残された石核底面に相当する部分には、後世の非目的的な剝離痕跡が認められる。翼状剝片として分類できるが、打面調整・打点の位置・基部の残し方に特徴がある。63号墳の墳丘上面で出土した。 (清水和)

1 · 2 は第4 B層下面で検出された古墳の墳丘上面で出土しており、古墳の盛土中に含まれていた可能性が強いが、断定はできないため、ここで記述する。

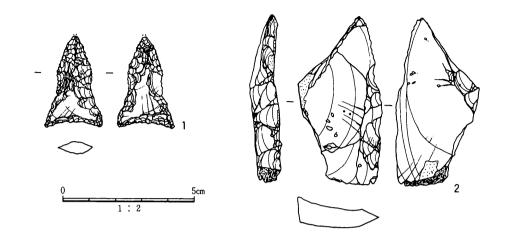
第5層出土遺物 (図15・16, 図版43・44)

衣蓋形埴輪(3)立ち飾りの破片で、遺存する二辺に沿って、それぞれ2本の平行する 線刻が両面に施され、それをつなぐ線刻が1本残る。

円筒埴輪(4・5) 4は底部の破片で、外面はタテハケ、内面はタテハケののち下半部はナデで仕上げる。底部の下端面に粘土の接合痕が明瞭にのこる。5は口縁部を欠くもので、内外面とも左上がりのナデ調整である。内面には粘土接合痕が明瞭にのこる。

飛雲文軒平瓦(28) Ⅳ区北端部で出土した。上下に圏線があり、その中に左に流れる飛雲文がある。瓦当面の約半分にあたり、中心飾りのない型式と思われる。灰色を呈し、堅緻に焼きあがっている。

土師器甕(27)最大径が15.6㎝の甕の体部で、口縁部を欠く。外面はユビオサエによる 凹凸が顕著にみられる。内面調整は板状工具によるナデである。体部外面の下位には水平



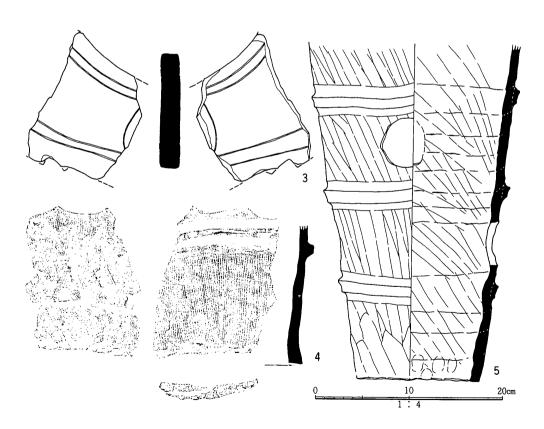


図15 82-19次 各層出土遺物実測図 (1)

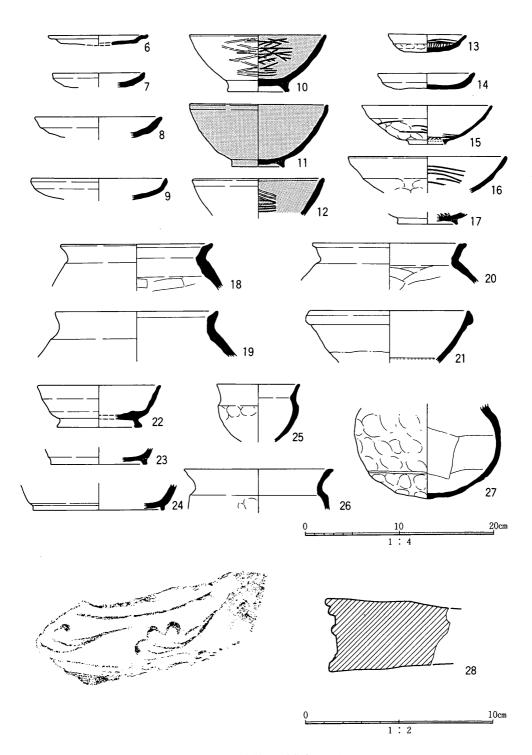


図16 82-19次 各層出土遺物実測図 (2)

にめぐるくぼみがあり、製作時に使用した輪状の台などの痕跡かもしれない。

土師器小型壺(25)頸部に強いヨコナデが施され、外面はユビオサエ、内面は板状工具によるナデで仕上げている。

須恵器杯($22 \cdot 24$)いずれも杯 B [奈良国立文化財研究所1976] で、22は口径13.2cm、高台径9.2cm、器高4.4cmをはかる。外方に大きくふんばった高台をもち、外面はヘラケズリ後にヨコナデしている。24は断面方形の高台が底部外周付近にめぐり、その径は14.0cmである。22は飛鳥 IV(註 1)、24は平城宮 V(註 2)に比定しうる。

第4B層出土遺物(図16、図版43)

土師器皿(6~9)口径10.0~10.6㎝と14㎝前後に分類できる。前者の6は口縁部を水平に折り曲げ、端部を上方に肥厚させる a 類 [大阪市文化財協会1982, 235頁] に属し、7は器壁がやや厚く、端部を上方に若干つまみあげる。後者の8は厚手の口縁部で、9は口縁部を上方に屈曲させている。6・8はB-II-2期 [大阪市文化財協会1983 I]、他はIII~IV期 [大阪市文化財協会1982] と思われる。

土師器甕($18\sim20\cdot26$)いずれも外面をナデで仕上げた体部から短く屈曲する口縁部をもつもので、口縁端部の外縁を外方に突出させる。体部内面は板状工具によるナデ調整である。26は8世紀末 ~9 世紀初頭、他はB-II-2期であろう。

須恵器杯(23) 杯 B で、底面の外周付近に高台がめぐり、外面の高台と杯体部との境界が不明瞭である。平城宮 Ⅵ~Ⅶであろう。

黒色土器椀($10\sim12$) $10\cdot12$ は内黒A類、11は両黒B類である。 $10\cdot11$ はともに高くふんばる高台をもつ。10の内外面と、12の内面はヘラミガキで、11は内外面ともヘラミガキと思われるが、明瞭でない。いずれもB-II-2期[大阪市文化財協会1983I] であろう。

瓦器椀(15) 口径13.9㎝、高台径4.0㎝、器高4.1㎝をはかる。体部外面はユビオサエののち一部にヘラミガキを施す。内面は不明瞭だが、底部に斜格子状の暗文がある。

瓦器皿(13)口径8.4㎝、器高1.8㎝をはかる。内底面に平行ミガキ、それ以上には圏線ミガキがみられる。瓦器は椀・皿ともに $II-3\sim III-1$ 期 [大阪市文化財協会1982] である。

白磁碗(21)口縁部が玉縁状をなすもので、口径16.7㎝をはかる。内面と外面上半に緑がかった白色の釉が施されている。見込みには沈線がめぐる。

第 2 層出土遺物(図16,図版43)

瓦器皿(14) 口径10.4㎝、器高1.7㎝をはかる。平底からやや外反ぎみに短く口縁がの

びる。口縁部外面をヨコナデする。

瓦器椀(16・17)16は口径16.8㎝、17の高台径は6.2㎝である。16の口縁部外面はヨコナデ調整で、それ以下はユビオサエで仕上げる。内面には雑なヘラミガキがみられる。17は断面三角形の高台がつき、内底面には斜格子状暗文がみられる。いずれもII — 3 期 [大阪市文化財協会1982] であろう。

このほかにも図示しなかった第2・3層出土遺物として、白磁皿・灰釉陶器椀や緑釉陶器の細片などの遺物が出土している。 (京嶋)

•82-27次調査

第6AII層出土遺物(図17,図版45)

水成の洪水層である本層からは、各時代の遺物が出土しているが、もっとも新しいと考えられる土器はさほど多くない。

土師器杯(29) 口径約12㎝、器高約2.5㎝をはかる。全体に器面の剝離が著しく、調整不明であるが、ナデのようにも見うけられる。

土師器甕(33・34) 口縁端部は肥厚して外下方に張り出す33と、ごくわずかに内上方につまみあげる34とがある。いずれも内面はていねいなナデ、外面は粗いナデである。

土師器小型壺(30)復元口径約8.6㎝で、口縁部をヨコナデし、内外面をていねいにナデている。

須恵器杯(31) ヘラ切りのままの底部から、体部は緩やかに立上がっている。蓋の可能 性もある。

須恵器甕(32)緩やかに外反する口縁部で、端部はコの字形におさめている。調整は粗 雑な回転ナデである。

以上の土器は、以下に述べる第5層の土器とさほど変わらないようにも見うけられるが、新しい様相を示す29などは、第5層の49・53よりやや底が深く、わずかに古い時期とみることも可能である。

第6AI層出土遺物(図17,図版45)

須恵器杯身 (37・38) 37は低い高台を有する杯Bで、底部は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデである。38は受部径12.1㎝で、底部は比較的広く回転ヘラケズリしている。

須恵器甕(36)コの字形に整えた口縁端部の近くに、断面三角形の凸帯をめぐらせた古 墳時代の土器である。

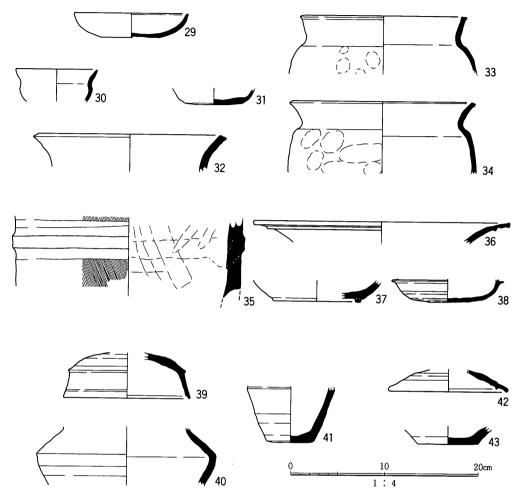


図17 82-27次 各層出土遺物実測図 (1)

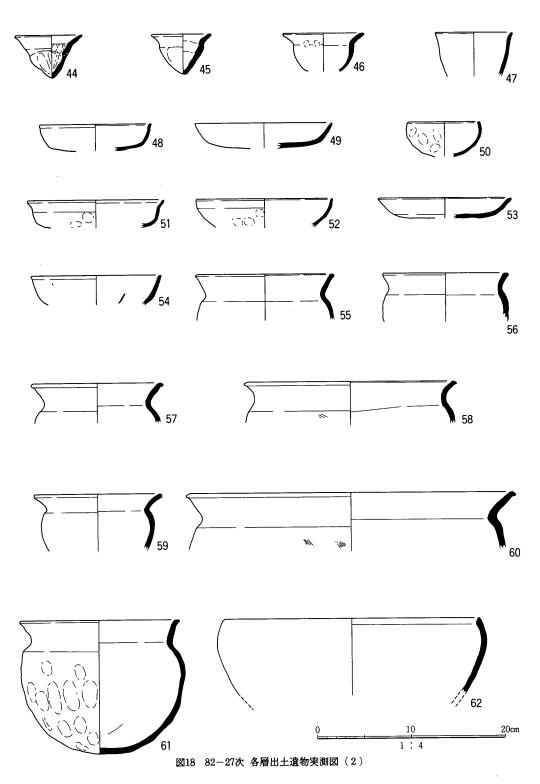
円筒埴輪(35)分厚い器壁に低いタガを貼付けた埴輪で、内面は強く粗いナデ調整、外面は1次調整のタテハケのみである。

第5層出土遺物 (図17・18, 図版45)

本層は第6AII層同様の洪水層で、各時期の土器が多く混じっている。

土師器杯(48~53)49・52・53は復元口径14㎝前後で、内面に暗文はない。口縁部をヨコナデし、端部は丸くおさめている。内面はナデ、外面は不調整である。52は椀の形態に近く、49・53は器高2.2~2.6㎝と浅い。他の土器は時期の古いものである。

土師器甕(55~61) 口縁端部を外方に肥厚させるものがほとんどで、水平に張り出すもの55・56・61と、下方に張り出すもの57・58・60がある。前者の外面は指頭痕の顕著な粗



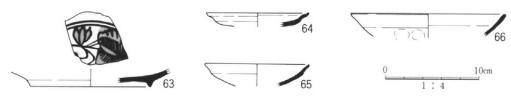


図19 82-27次 各層出土遺物実測図 (3)

いナデ、後者はナデの下に部分的にハケメが認められる。59は完形品である。ほかに59があるが、非常に小型である。

土師器鉢(62)復元口径約27㎝の鉄鉢形土器で、外面調整は剝離のため不明である。

土師器小型土器 (44~47) 44・45は粗製のミニチュアの甕である。46・47は口縁部をヨコナデし、内外面は比較的ていねいなナデである。46は、とりあえず甕とした56とプロポーションが同じである。

須恵器蓋(39・42) 古墳時代と飛鳥時代のもので、39は口径13.4cm、42は12.4cmである。 須恵器壺(41・40) 41は直線的に立上がり、肩部に凹線文または小さな屈曲が認められ る体部で、下位に回転ヘラケズリを施している。底部はヘラ切りのままである。40は摩耗 の著しい広口壺で、肩部の稜はやや鈍く、下半を回転ヘラケズリしている。

以上の遺物のうち、新しい様相を示すものは奈良時代末~平安時代初頭の範囲でその時期を考えておきたい。なお、第5層の最新の遺物の年代については今後の課題である。 第4層出土遺物(図19)

瓦器椀(66)復元□径13~14cmの細片である。ヘラミガキの有無は明らかでない。 第3層出土遺物(図19)

土師器皿(64)復元径11cm弱、口縁部は軽く屈曲し、ヨコナデで仕上げている。

瓦器皿(65)復元径11㎝程度で、器形は浅い。口縁部にのみ炭素が吸着しており、他は灰色を呈している。

第2層出土遺物(図19,図版82)

陶磁器(63) 高台径12.8cmをはかる中国製 青花の皿である。高台には砂が付着している。 豊臣氏大坂城のころのものである。

ほかに、凸面に縄タタキ、凹面に布目を残す平瓦の小破片が第6AI層とその上層から出土している。 (積山)

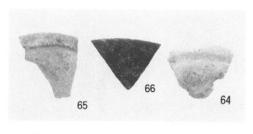
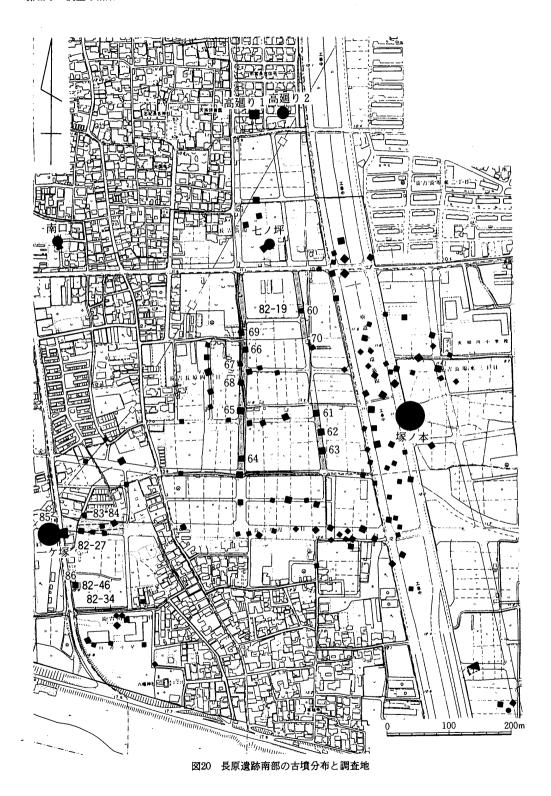
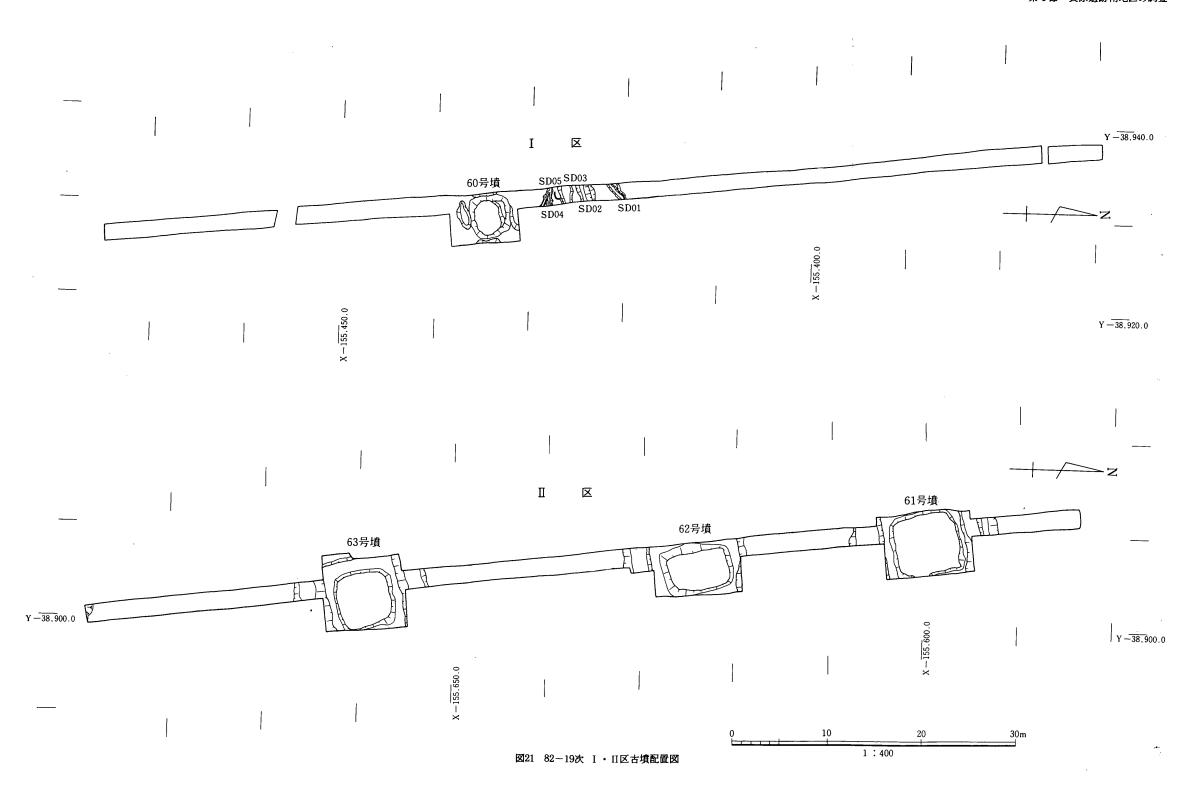
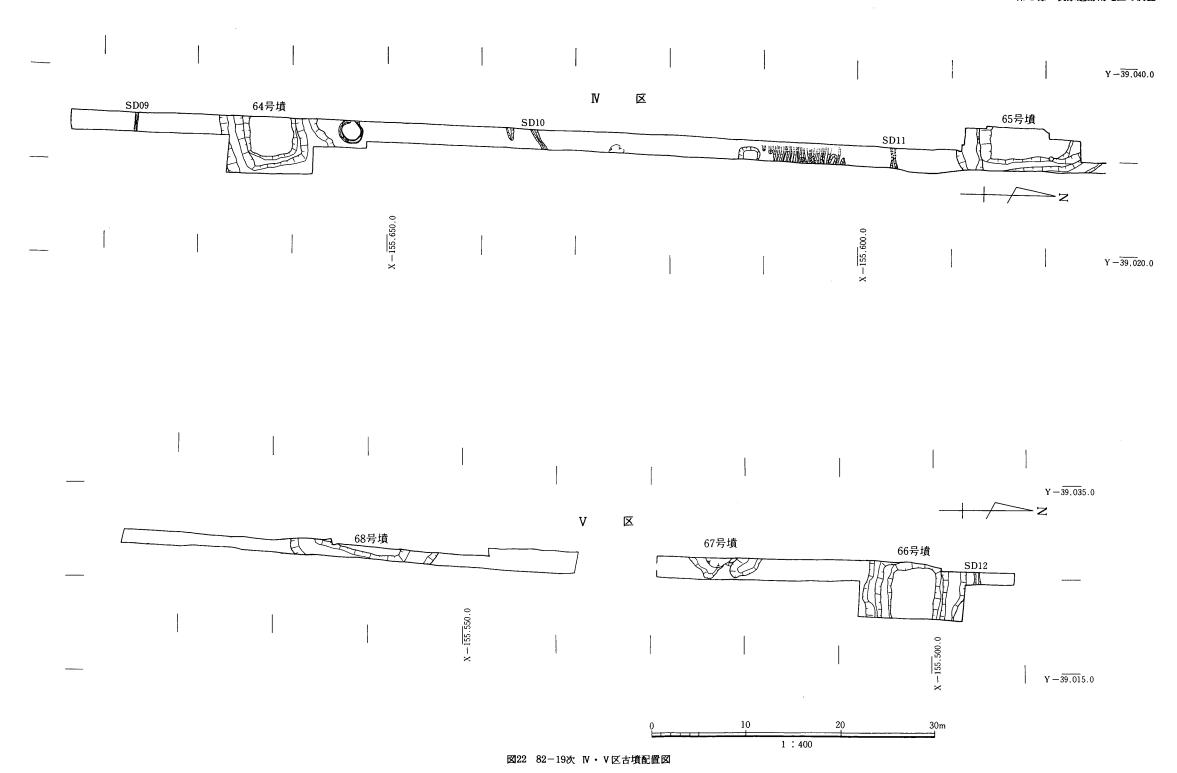


写真5 82-27次 第3層・第4層出土遺物







2) 古墳時代の遺構と遺物

南地区の古墳時代の遺構は60~70号墳(82-19次)・80~85号墳(82-27次)・86号墳(82-34次)の古墳18基である。いずれも第7B層上に盛土して築かれている。後述するように83号墳では主体部が検出されたが、それ以外の古墳は墳丘中央部が未調査であるか、あるいは墳丘が削平されているため、主体部は検出されていない。また、一ケ塚古墳(85号墳)を除いて、すべて方墳またはそれと推定される古墳である。以下に、古墳の番号順に遺構・遺物について記述する。

• 60号墳

遺構 (図23, 図版3)

82-19次調査 I 区の中央部で検出された。墳丘は、基底部で南北4.7m、東西5.2mの方形を呈し、周溝の最深

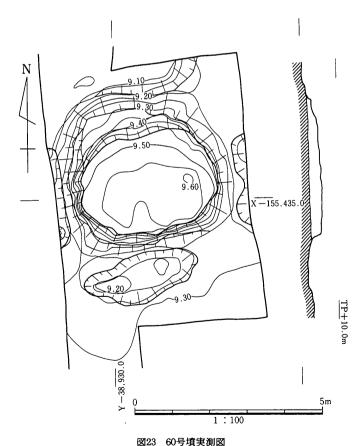
部からの高さは0.5m である。墳丘南辺の周 溝は最大幅が1.3m、 深さ0.2mであるが、 コーナーにあたる部分 は浅く、一辺の中央部 がもっとも深い。

墳丘の方位はN-10°-Wである。墳丘の周縁は飛鳥時代以降の水田の耕作時に削られて円形に近い形状を示している。須恵器・円筒埴輪の破片が墳丘上面で出土した。

遺物

須恵器

(図24, 図版46)



杯蓋 (67) 約1/2 を残し、口径11.2㎝、器高4.6㎝をはかる。天井部が高く、天井部と口縁部との境界に稜線をつまみだす。口縁端部は内傾する面をつくり、浅く凹む。焼成は良く、淡灰色を呈する。

杯身(68)底部を欠き、器高はわからないが、口径は復元値で9.9㎝である。外上方に 突出するような受け部からやや内傾して口縁部が立上がる。立上がりの基部は器壁が薄く、 端部に向けて厚くなる。口縁端部は内傾して浅く凹む。焼成は良好で、淡灰色を呈する。

いずれもT K47型式(註3)で、図示はしていないが列点文を施した壺の体部破片もある。 円筒埴輪(図24、図版46)

口縁部付近の破片70と底部の破片69および上下に円形のスカシ孔のある破片71の3点がある。70は外面に縦方向のハケを施したのちに左上がりのハケを施し、内面もハケで仕上げているが、タガを貼付けた部分の内面はユビオサエである。タガは断面形が三角形を呈するものである。69は底径12.0㎝の底部片で断面が低い台形をなすタガがある。外面は縦方向にヘラ状の工具でナデており、内面は指でナデ上げている。ただし、器面が磨滅しているため、細かいハケメであるかもしれない。71は胴径22.0㎝をはかる。調整は外面が左上がりのハケメ(8条/㎝)で、内面がユビナデである。断面形が低い台形を呈するタガを有する。スカシ孔は直径約5㎝ほどの円形である。焼成はいずれも良好で浅黄橙色を呈するが、71は雲母片を含む。

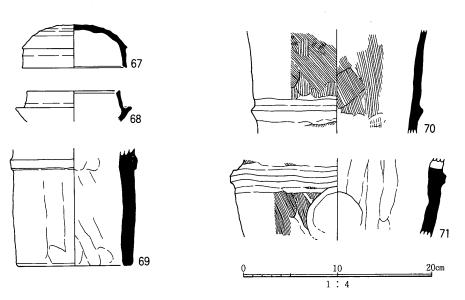


図24 60号墳出土遺物実測図

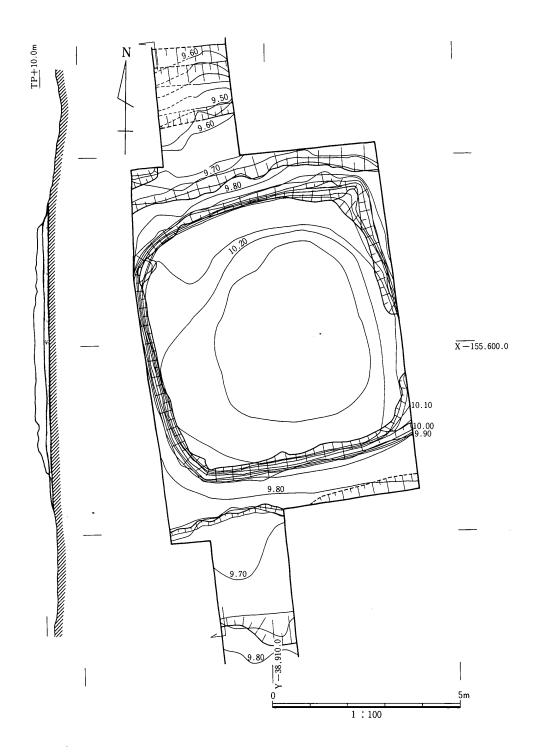


図25 61号墳実測図

•61号墳

遺構 (図25, 図版4)

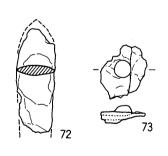
82-19次調査 II 区の北部で検出した。墳丘は南北の一辺が長さ9.0mの方形を呈し、周 構のもっとも深い部分からの高さが0.9mをはかる。調査範囲では東西の規模は明らかに できなかった。墳丘の方位は $N-15^\circ$ -Wである。墳丘の北側と南側は、周縁が幅 1 mに わたって後世に削り取られている。東側と西側についても同じ程度削られていると推定さ れる。周溝は幅 $3.5\sim3.9$ m、深さ $0.1\sim0.2$ mをはかり、北周溝が南周溝より10cm近く深い。 南周溝の墳丘側の肩部は地山を削り、再度粘土を貼付けて整形している。また、溝の底部 も粘土で平坦に整地している。後述するように、墳丘上面で鉄製品が出土したため、墳丘 中央部にトレンチを設定し、精査したが、主体部は確認できなかった。

遺物は、一辺7.0mの盛土残存部上面の周縁部の幅1mの範囲と、墳丘が削られ、地山の露出した部分および周溝内から、須恵器・埴輪が多く出土した。また、墳丘上面を清掃中に中央付近で鋲留のある鉄片と鉄鎌・鉄鏃と思われる鉄製品が出土した。

遺物

鉄製品 (図26、図版50)

74は基部を直角に折り曲げた鎌である。刃部と基部のなす角度はわずかに鋭角であり、 柄に装着したばあい、刃と柄のなす角度は鈍角であったと思われる。刃部が湾曲していた



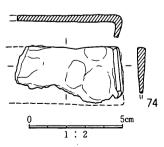


図26 61号墳出土鉄製品実測図

か否かは残存する部分では確認できない。72は鉄鏃の鏃 身部と思われる。断面がレンズ形を呈し、鎬はみえない。 小型の剣とみることも可能である。73は鋲留のある鉄片 で、鋲の直径は9㎜である。鉄片の表面には直線的にわ ずかな段がみられ、2枚の鉄板を重ねた部分であると推 測する。鋲は上の板の端近くに打たれている。また、下 の板の裏面にもわずかな段がみられ、もう一枚重なった 部分とみることもできるが、断定はできない。鋲の位置 や大きさなどからみて、横矧板ないし三角板鋲留式短甲 の破片であると推断しうる。

須恵器 (図27, 図版46・47)

高杯蓋(75)約1/4の破片で、口径13.4cm、器高4.4cmに復元できる。天井部は平坦で中央部に直径2.5cm、

高さ0.6㎝のつまみがつき、これを中心にして列点文がめぐる。天井部から稜線を介して垂直に口縁部がのびる。口縁端部は内傾する面をなし、浅く凹む。明青灰色を呈し、胎土中に長石の細粒を含む。

有蓋高杯(76~81)完形になるものはないが、脚部4個体と杯部2個体がある。杯部76 は比較的厚い器壁の体部から小さく受部をつまみ出し、口縁端部は浅く凹む。76の底部は幅の狭いヘラケズリであるが、77はヘラケズリののちにヨコナデしている。脚部はすべて長方形のスカシ孔を三方に穿ち、脚端部はヨコナデにより二ないし三面の面をつくる78・80・81と下方にわずかにつまみ出した79がある。いずれも裾部で大きく広がる。長石を少量含む精良な胎土で青灰色を呈し、焼成は良好である。

壺(82・83) いずれも口縁部の破片である。82は外上方にまっすぐのび、端部を外方に 屈曲させ、面をつくる。内外面ともナデ仕上げで装飾はない。83は体部からゆるやかに外 反し、端部に面をつくっておわる口縁部で、口縁下に2.5㎝間隔で2本の稜線をつくるこ とによって、外面が三つに区分されている。この間にはそれぞれ10条を1単位とする波状 文が施されている。82は精良な胎土で灰色を呈し、焼成は良好である。83は灰白色を呈し、 焼成は若干あまい。

把手付椀(84) 口縁部を欠く破片で、体部に3cmの間をおいて2本の稜線をつくり、その間に5条を単位とする櫛描き波状文が施されている。底部付近は不定方向のヘラケズリがなされ、平底を呈するが、底面は欠損している。把手はなく、接合部も遺存しないが、形態からみて把手がつくものと思われる。灰色を呈し、焼成は良好である。

器台(86・87) 高杯形器台の杯部と脚部の破片である。86は口径46.6㎝、深さ16.2㎝と推定される。口縁端部は丸くおさめ、その直下に稜線をつくる。体部には2本を1単位とする稜線が2帯あり、下段の稜線以上は櫛描き波状文が施されている。底部片には脚部が一部遺存しており、脚部に長方形のスカシ孔や波状文があることがわかる。脚部87は脚端部の破片で底径42.0㎝に復元される。杯部と同様に2本1単位の稜線がある。下端部は面をつくる。稜線の上方には長方形のスカシ孔と波状文が認められる。杯部内面は焼成時に器面が剝離している。灰~暗灰色を呈し、焼成は良好である。

このほかに甕ないし壺の体部片と思われる破片85がある。外面に細かい平行タタキを施し、その上から凹線を施す。内面はていねいなナデである。これ以外にも数片、同様の破片があり、いずれも灰色を呈する焼きの良いものである。

以上の須恵器は82が墳丘の盛土部と周溝の間の墳丘が削り取られた部分で出土している

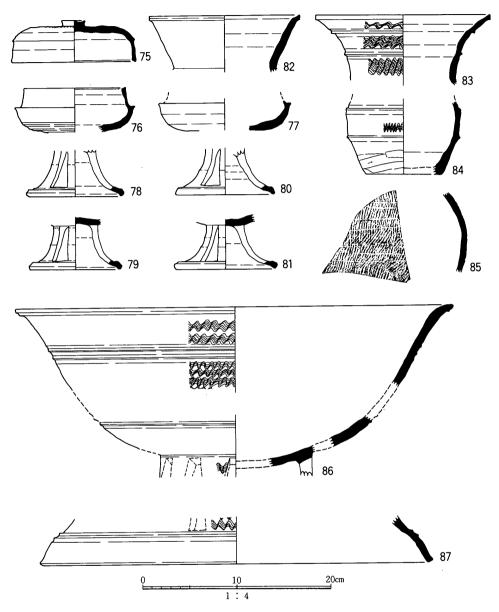


図27 61号墳出土土器実測図

以外はすべて墳丘上面で出土しており、本来墳丘上に置かれていたものと推測される。これらの須恵器はTK216型式からTK208型式に属すると思われる。

円筒埴輪 (図28~32, 図版48~50)

多数の円筒埴輪片が出土したが、これらは大型と小型に大きく分類できる。大型の埴輪

は胴径が $40\,\mathrm{cm}$ 前後のもので断面形が台形の突出するタガをもつ。スカシはすべて円形である。外面はタテハケの1次調整ののちにB種ヨコハケ [川西宏幸1978] の2次調整を施しているが、ナデ調整と思われる破片も1点ある。ハケメは $5\sim10$ 条/ cm のもの $111\sim116$ が多いが、 $13\sim14$ 条/ cm の細かいもの110や、 $2\sim3$ 条/ cm の粗いもの $106\sim108$ もある。調整や胎土などから10個体程度は識別できるが、底部は3 個体しか認められず、口縁部は1点も認められない。31号墳([長原遺跡調査会1978] 報告の4号墳)で口縁部を欠く大型の円筒埴輪が逆位に立てられていた例もあるため、同様に欠損した大型円筒埴輪が立てられていたと考えることも可能であろう。

小型の円筒埴輪はほぼ同一規格の製品である。底径12~15 cm、口径18~24 cmで、断面台形ないしM字形の低いタガを3帯もち、タガによって4分割された上から二段目と三段目に円形のスカシ孔を穿つ。口縁端部はまっすぐのびて上端部がヨコナデにより浅く凹む。底部は厚くつくられ、自重ではみ出した粘土を内面からのユビオサエで整形している。外面調整は左上がりのナナメハケを全体に施し、タガを貼付け、最下段を除く上3段に7~10条/cmのB種ヨコハケを施す。ヨコハケは比較的粗くなされており、ナナメハケを多く残すものが多い。内面はすべてユビナデである。上から二段目のスカシ左側に、平行する2本の刻線で上向きの弧を描くへラ記号が、それと推定できる破片を含めて、11点に認められる。色調・焼成は灰色~褐灰色の硬質のものと黄橙色の軟質のものがある。前者は口縁部が著しく歪んだものが多い。

このように小型の円筒埴輪は規格性の高いものであり、15点以上の個体数を確認できる。 前述の大型の円筒埴輪ではなく、これらの小型の円筒埴輪がこの古墳の主たる埴輪列を構成していたと考えることが妥当であろう。

朝顔形埴輪 (図33, 図版50)

122・123は口縁部の破片である。口縁部は頸部にタガを貼付けて角度をあまり変えずに

のびる。タガ部を除く内外面は $6 \sim 8$ 条/cm のハケで調整する。124は肩部で、4 条/cmのナナメハケを外面に施す。肩部下には断面M字形の低いタガを貼付けている。125は円筒部中位と思われるものである。外面に左上がりのナナメハケを施したのち、低いタガを貼付け、B 種ヨコハケを施すものである。これ

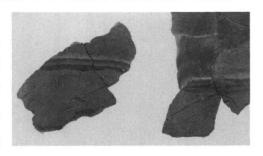


写真6 61号墳小型円筒埴輪のヘラ記号

第川章 調査の結果

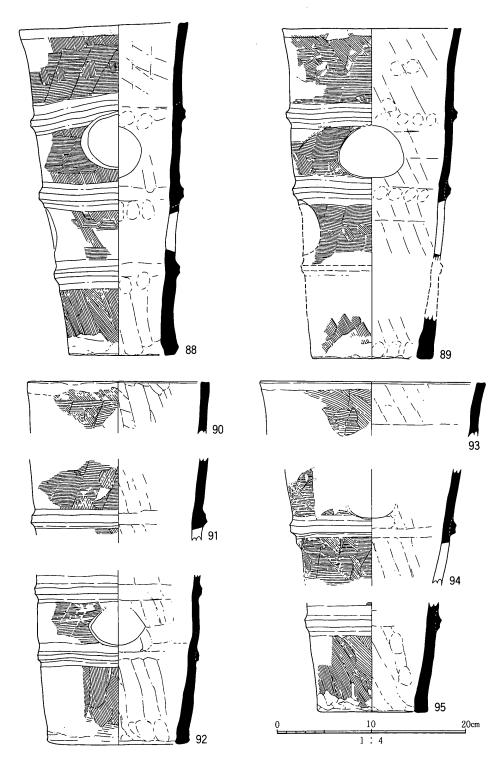


図28 61号墳出土円筒埴輪実測図(1)

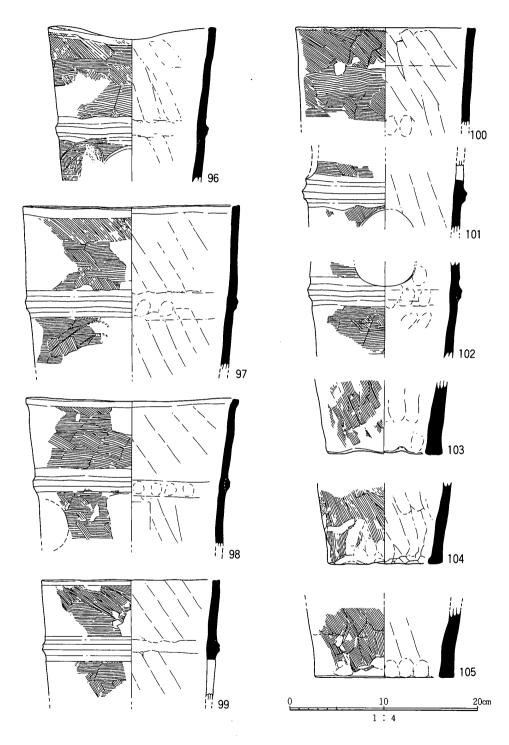


図29 61号墳出土円筒埴輪実測図(2)

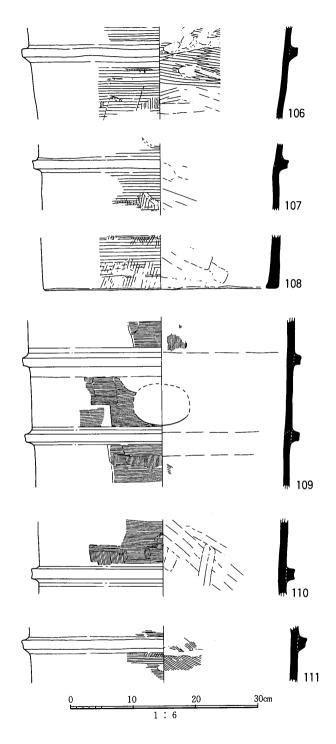


図30 61号墳出土円筒埴輪実測図(3)

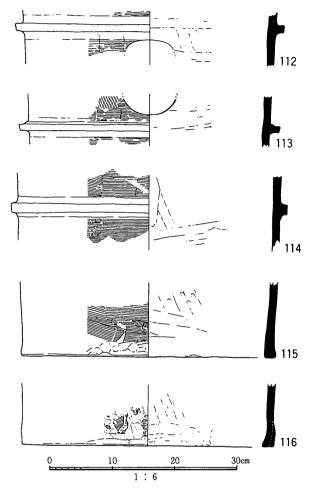


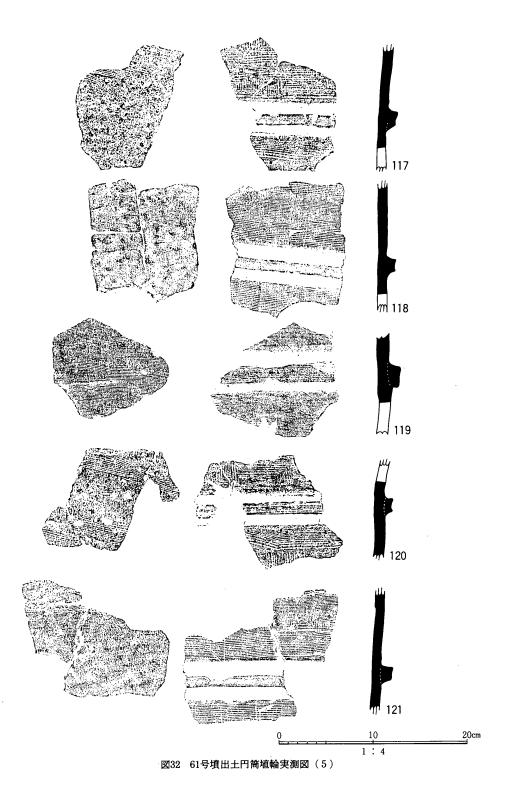
図31 61号墳出土円筒埴輪実測図(4)

は前記の小型の円筒埴輪と共通した調整技法を示している。しかし、円筒部中位にスカシ 孔のない段があることから、タガが4帯以上あることになり、小型の円筒埴輪にみられな かった形態であるため朝顔形埴輪の円筒部として扱った。これ以上の根拠はなく、円筒埴 輪である可能性も否定できない。

朝顔形埴輪は出土量が少なく、123が墳丘上面の北西隅で出土しているほかは、古墳周 囲の飛鳥時代から奈良時代の地層からの出土品であるため、朝顔形埴輪が確実にこの古墳 に立てられていたと断言はできない。

形象埴輪(図33,図版50)

家形埴輪の屋根部分の破片126が出土している。これは切妻屋根の破風の破片である。



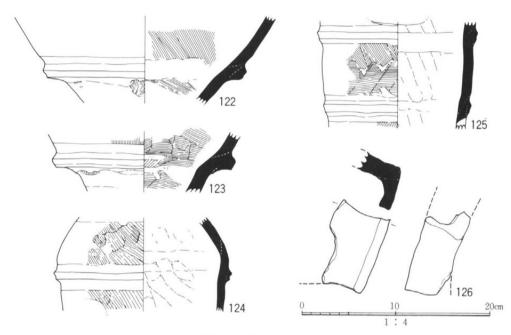


図33 61号墳出土朝顔形埴輪・形象埴輪実測図

ただし、この古墳からはほかに形象埴輪はほとんど出土しておらず、この古墳に伴うものではないかもしれない。 (京嶋)

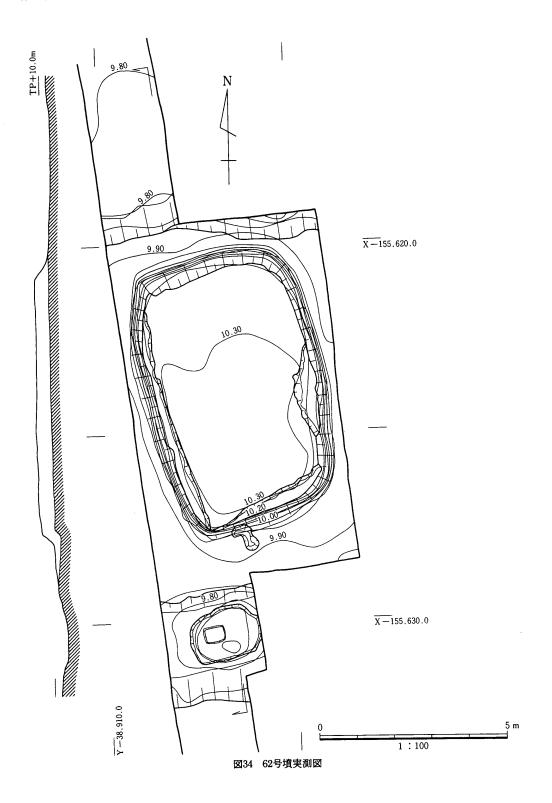
•62号墳

遺構 (図34・35, 図版5)

82-19次調査II区の中央部で検出した。墳丘は基底部で南北10.5 m、高さは周溝底から0.5 mである。東に拡張したが、東西の規模は明らかにできなかった。飛鳥時代以後の水田開発のため、墳丘の北側は約1.0 m、南側は約1.3 mの幅で盛土が削り取られている。東側と西側はさらに大きく削り込ま



写真7 62号墳墳丘南辺部の盛土 (上の黒い部分は周溝埋土)



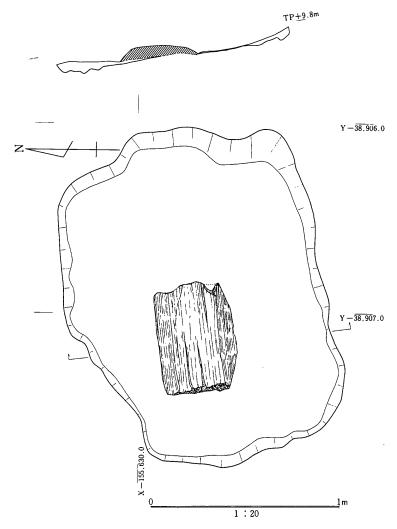


図35 62号墳南周溝内木製品出土状況

れており、盛土の遺存する部分は南北7.4m、東西5.0mの長方形を呈する。墳丘の方位は N-15°-Wである。周溝は北周溝の外側の肩は明確でなかったが、南周溝の幅は2.9m、深さは0.1mである。南周溝内には東西1.9m、南北1.4mの浅い凹みがあり、幅41cm、長さ57cm、最大厚6cmで断面形が薄い半月形を呈する木製の板が曲面を上にして出土した。明瞭な加工痕は認められなかったが、曲面は樹皮をはいで、面取り風に加工されているようで、両木口は直線的に切断されている。

墳丘南辺部では南周溝の内側の肩口から墳丘側に1.5mの幅で地山が削り込まれ、その

後、再度盛土されている。

遺物は墳丘上面および周溝内から須恵器が出土したが、埴輪は細片がごく少量出土した のみで、図化できるものはなかった。

遺物

須恵器 (図36, 図版51)

把手付椀(127)底部と把手を欠く 1/4 の破片で、口径14.0㎝、器高10.8㎝をはかる。 丸みをもった体部から口縁部が直立する形態で、口縁端部は丸くおさめる。体部には約4 ㎝の間隔をおいて 2 本の稜線があり、その間に 8 条を単位とする櫛描き波状文が施されている。別に断面形が円形の把手の破片があり、胎土・焼成が類似することから、同一個体のものと思われる。灰色を呈し、焼きは良い。

要(128・129・131~133)128は大きく外反する口縁部で、口径20.5㎝に復元される。端部を上下に若干のばし、幅1㎝の面をつくる。その直下には突線をめぐらし、突線の直下には波状文を施している。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。131はやや外反ぎみにのびる口縁部で、口径は17.6㎝をはかる。端部は上方につまみだし、外面中位に1本の稜線をつくって、その上下に波状文を施す。部分的に褐灰色を呈し、赤みを帯びた色調であるが、堅緻である。129は上半を欠く口縁部の破片で、外面に1本の稜線がある。色調は灰色を呈し、焼きは良い。132は体部上半から頸部にかけての破片で、頸部には波状文が、体部外面にはカキメが施されている。体部内面は横方向にナデ仕上げされている。黄灰色を呈するが焼成は良好である。133は口径47.4㎝に復元される大甕である。接合できないいくつかの破片から復元図化した。歪みの多い体部から直立ぎみに立上がり、緩やかに外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめており、直下に1本の稜線をめぐらしている。口縁部外面は横方向を主体とするナデ仕上げで、体部外面の上半には格子目々タキが、下半には平行タタキが認められる。体部内面には目の細かい同心円の当て具痕がかすかに残るが、おおむねナデによって擦り消している。暗青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土に長石を多く含む。

これらの須恵器は大半が墳丘上面で出土しており、周溝内からは若干の破片が出土したにすぎない。 T K216型式から T K208型式であろう。 (京嶋)

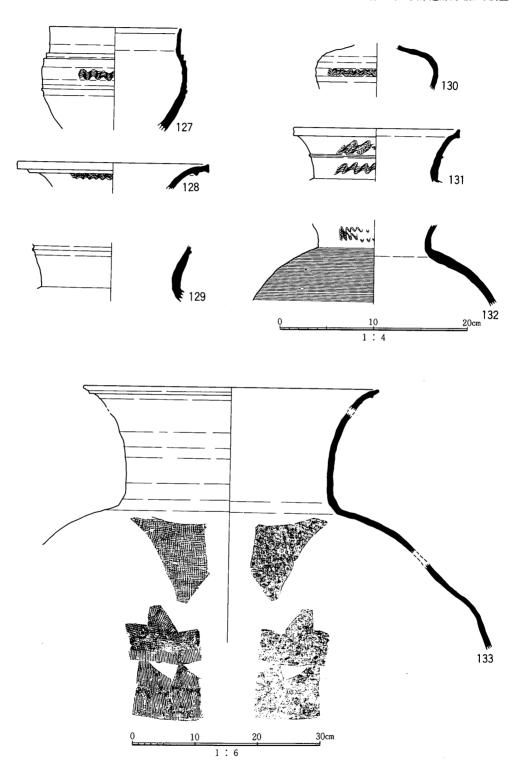


図36 62号墳出土土器実測図

•63号墳

遺構 (図37, 図版6)

82-19次調査II区の南部で62号墳の南25mに位置する。墳丘規模は基底部で南北9.5m、東西8.0m以上、周溝底からの高さ0.7mをはかる。墳丘の周囲は後世の開発によって約1.2mの幅で削り取られている。盛土の遺存部分は一辺6.3mの方形を呈する。墳丘の方位はN-15°-Wである。南周溝の墳丘側の肩部は一旦地山が削り込まれたのちに再度粘土を貼付けて整形している。周溝幅は2.8~3.1m、深さは最大で0.2mをはかる。

遺物

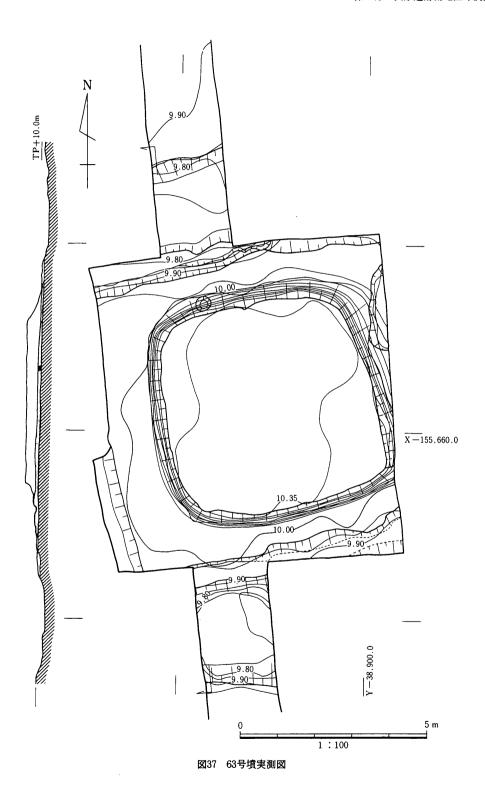
須恵器 (図38, 図版51)

甕(134~136) 134は口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は比較的短く、端部は端面下部をやや強くヨコナデする。口縁部下方の外面に14~15条を単位とする櫛描き波状文を施す。体部は縦方向の平行タタキで成形し、内面は同心円当て具痕が残る。灰色を呈し、焼成は良い。135は口縁部から体部下半部にかけて遺存する。口縁部は短く、端部は上下に若干つまみだし、浅く凹む面をなす。端部の直下に1本の稜線をつくり、その下に6条を単位とする櫛描き波状文を施す。体部の外面は平行タタキで成形したのちカキメを施して仕上げている。内面は同心円当て具痕が残る。青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土中に長石を含む。136は大甕の体部下半部で外面は縦方向の平行タタキで、底部付近は横方向の平行タタキが重なるようにして施されている。内面は細かい同心円当て具痕が残るがナデ消しているように思われる。胎土に長石・石英を含み、灰色を呈する。

これらの須恵器は134が墳丘上面の北東隅、135が墳丘上、136が西周溝内から出土した。 T K23型式に属するものである。

円筒埴輪 (図39、図版52)

137~139は口縁部で、口径26.0~27.5㎝に復元できる。いずれも斜め外方に直線的にのび、上端部をヨコナデして面をつくる。外面は端部付近はヨコナデするがそれ以下はナナメハケである。内面は横方向に近いナナメハケを施したのちに部分的にユビナデを施すものがある。円筒中位の破片140と142は断面形が低い台形を呈するタガをもち、一対の円形スカシがある。調整は外面が左上がりの5条/㎝のハケメで、内面はユビナデないしユビオサエである。底部付近の141・143~145は外面に左上がりに5~6条/㎝のハケメを施したのち、断面形が低い台形のタガを貼付けている。底径は13.0~15.2㎝に復元される。内面はやはりユビナデないしはユビオサエで仕上げている。これらの埴輪はハケ原体が5~



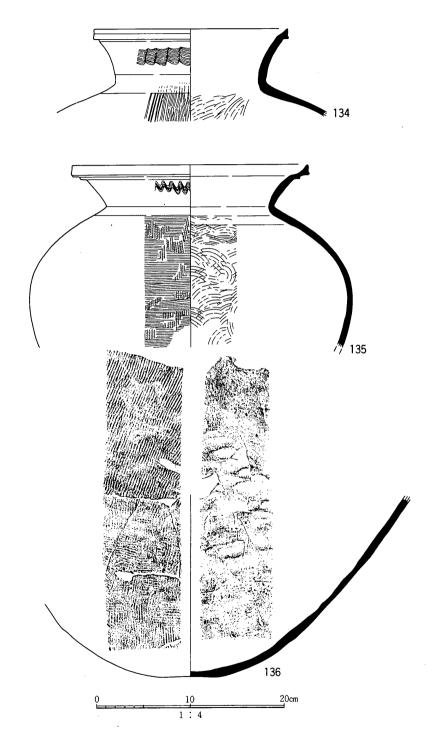


図38 63号墳出土土器実測図

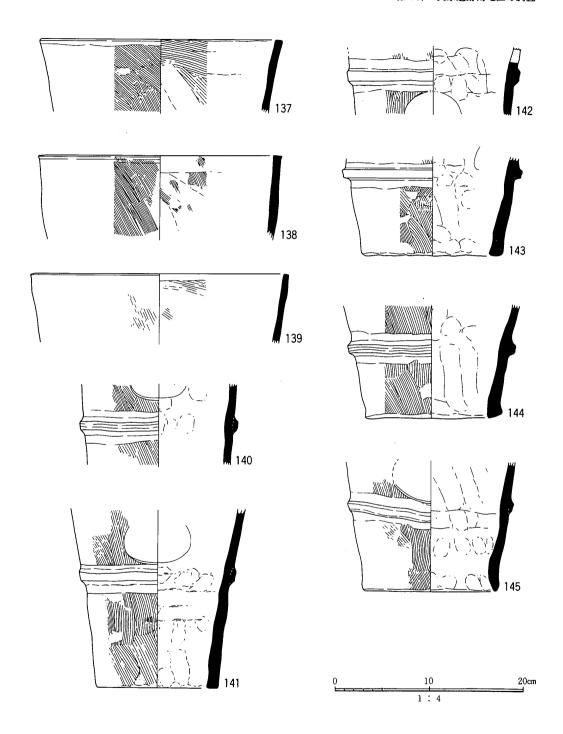


図39 63号墳出土円筒埴輪実測図

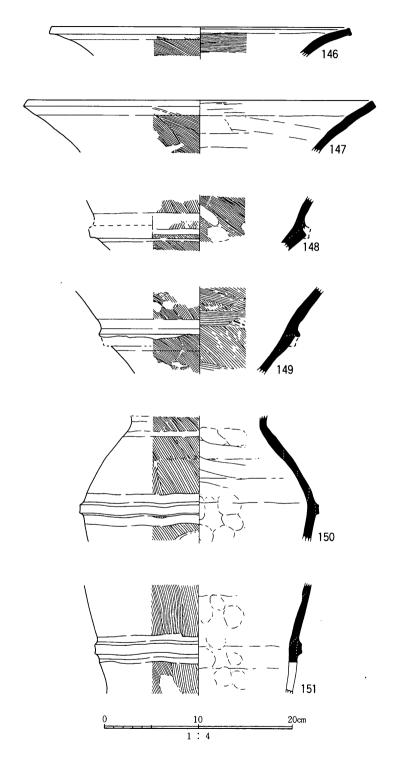


図40 63号墳出土朝顔形埴輪実測図

6条/cmで共通し、口縁部やタガの形状、内外面の仕上げに共通性が認められる。いずれ も淡黄色を呈し、長石・クサリレキを含む軟質で、少量の雲母を含んでいる。

朝顔形埴輪(図40,図版52)

大きく開く口縁部で、復元口径は146が32.3㎝、147が37.0㎝である。149は頸部上端の内側に口縁部を接合し、接合部の外面にタガを貼付ける。148は口縁部の接合時に頸部の上端面が口縁部との間に段をつくり、それを覆うようにしてタガが接合されていることが明瞭にわかる。150の肩部はあまり張らず、わずかな曲面を描いて円筒部にいたる。外面はいずれも5~7条/㎝の左上がりのナナメハケを施したのちにタガを貼付けている。円筒部には円形のスカシが認められる。口縁部の内面調整はハケであるが、147のみがナデである。肩部から円筒部にかけてはユビナデないしユビオサエである。149の口縁外面と150の肩部外面には赤色顔料が塗布されている。朝顔形埴輪も円筒埴輪と類似したハケ原体を使用しており、胎土や仕上げも共通している。

形象埴輪は出土していない。また、図化しえた埴輪は周溝内から出土した。 (京嶋)

• 64号墳

遺構 (図41. 図版7)

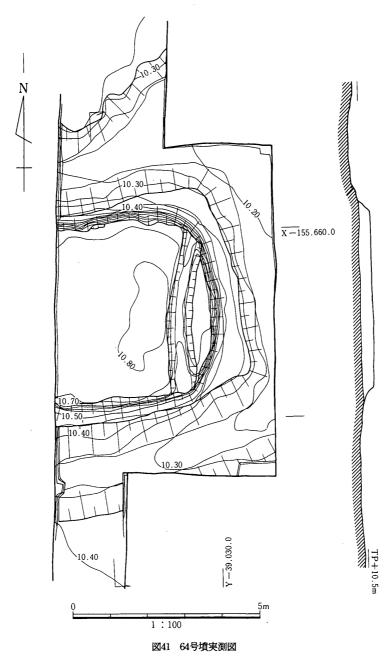
82-19次調査IV区の南端部で検出された。57号墳 [大阪市文化財協会1989] の北約25mに位置する。墳丘の規模は基底部で南北7.0m、東西は西側が拡張できなかったため不明であるが、5.7m以上をはかる。残存する高さは周溝底から0.6mである。墳丘方位はN-10°-Wである。墳丘盛土部分は東側を中心に0.5mの幅で削り取られている。盛土部の東辺には幅50~70㎝、深さ16㎝の南北溝が墳丘を削り込んでいるが、これは第4B層下面で検出されたもので、出土遺物はない。周溝は幅2.2~2.5m、深さは最大で0.2mをはかる。遺物は主として東周溝内から出土している。

遺物

須恵器 (図42, 図版53)

杯蓋(152)天井部を欠く破片で、口径11.9㎝に復元できる。天井部のヘラケズリはあまり下方までおよんでおらず、口縁端部は内傾する面をつくる。灰白色を呈し、焼成は良好である。

杯身(153)底部を欠き、口径10.0㎝に復元される。あまり上方までヘラケズリのおよばない体部から丸みをもった受部を介して、やや内傾して立上がる口縁部をもつ。口縁端



部は内傾する面をつくる。灰白色を呈し、焼成は良好である。

把手付椀(154)丸底で球形に近い体部から稜線をつくって口縁部が直立する。口縁部は上方で若干内傾ぎみになる。稜線の下には4~5条を単位とする櫛描き波状文が2段に

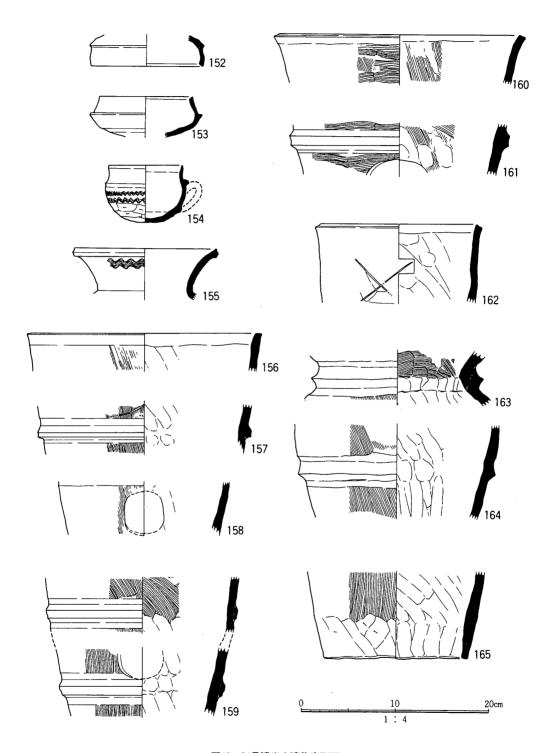


図42 64号墳出土遺物実測図

描かれている。体部には断面形が円形の粘土紐で把手がつけられていたが、欠損している。 把手の上の接合部上には直径 5 mmほどの粘土小塊が付せられている。底部は不定方向のへ ラケズリで丸く成形されている。灰白色を呈し、焼成は良い。

甕 (155) 口径15.3㎝に復元される口縁部である。口縁端面は上部と下部が別にヨコナデされており、角張った形状をなす。その直下の外面に10条を単位とする櫛描き波状文が施されている。灰色を呈し、焼成は良好である。

上記の須恵器はいずれもTK47型式と思われる。

円筒埴輪(図42,図版53)

外面調整がB種ヨコハケ(6~7条/cm)の2次調整を施す160・161と1次調整のタテハケのみの156~159・165がある。前者は接合できないが、同一個体と考えられる。口径26.8cmに復元される口縁部はやや外反し、上端で面をつくる。内面にはハケメを施す。後者は同様な口縁部の形態を示すが、内面調整はユビナデである。しかし、159は内面にハケ調整がみられ、前者と共通している。157はタガの上方にヘラによる線刻がみられる。156~158は同一個体と考えられるもので、157の線刻は最上段に刻まれたものと推測される。また、165は底径15.4cmの底部の破片であるが、製作過程において埴輪を倒立させ、下端部内面はユビナデで、外面は板状の工具でナデつけて調整している。このため、下端面は水平に揃っていない。156~158のハケメは11~12条/cm、159・165のハケメは6~8条/cmである。また、前者のB種ヨコハケを施す埴輪は胎土中に雲母を含み、後者との違いが明瞭である。

朝顔形埴輪 (図42, 図版53)

頸部から肩部にかけての2片の埴輪である。163は肩部から頸部にかけての破片で、「く」字状に屈曲する部分に断面形が三角形を呈するタガを貼付ける。口縁部内面はハケ調整、肩部内面はユビナデである。164は肩部を中心とする破片で、円筒部の一部も認められる。円筒部と肩部の境界には断面形が三角形のタガがある。外面は左上がりのナナメハケ、内面はユビナデで、タガを貼付けた内面のみがユビオサエである。淡黄色を呈し、胎土中に長石・チャート・クサリレキを含む。焼成は良好だが、軟質である。 (京嶋)

•65号墳

遺構 (図43, 図版8・9)

82-19次調査N区北端部で検出された。墳丘規模は基底部で南北11m以上、高さは周溝

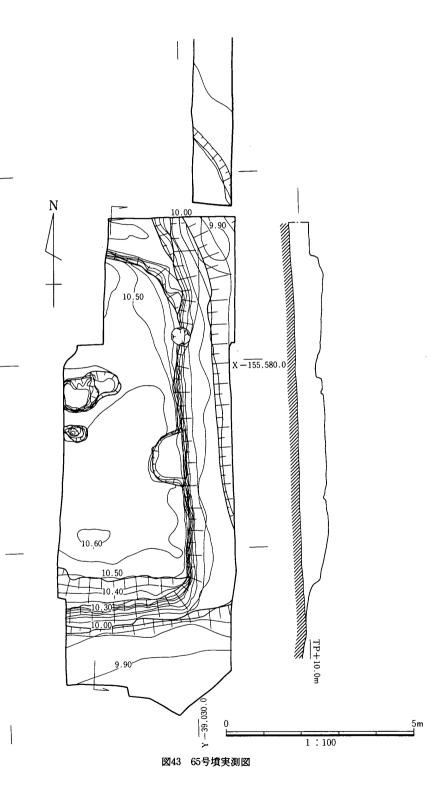




写真8 65号墳朝顏形埴輪出土状況

底から0.7mをはかる。墳丘西辺部は幅1mにわたって削り取られ北辺部も墳丘上面が削平され、一段低くなっている。墳丘の方位はN-5°-Wである。周溝は幅1.7~2.5m、深さ0.1mで北東隅がもっとも幅が狭い。墳丘上面には黒色土器が出土するピットや小土墳が認められた。南周溝内および墳丘上面で円筒埴輪・須恵器が少量出土した。

遺物

須恵器 (図44, 図版54)

杯 (166) 口径12.2cm、底径8.9cm、器高3.5cmをはかる。大きな平底から外上方にのびる体部をもつ。口縁端部はわずかに外反させ面をつくっておわる。体部の底に近い部分は横方向のナデであるが、それ以上はロクロによるヨコナデである。底面は大部分が欠損しているため調整は不明である。暗青灰色を呈し、堅緻に焼きあがっている。

把手付椀(167)口縁部と底部を欠く破片である。復元底径は10.0cm、最大腹径は16.8cmの大型の椀である。体部中位に2本一単位の稜線を2帯つくり、その下にさらに1本の稜線をつくる。3帯の稜線の間にはそれぞれ12条を単位とする櫛描き波状文を描いている。体部下方の底部に近い部分は不定方向のヘラケズリを軽く施し、内面はヨコナデである。暗灰色から灰黒色を呈し、焼成は良い。

いずれもTK73型式に属するものと思われる。

円筒埴輪(図44,図版54)

外面に2次調整のB種ヨコハケを施す171~174と1次調整の左上がりのタテハケ調整のみの168~170・175とがある。前者の口径は171が21.6cm、172が22.2cmで口縁上端部は面をなす。172~175は同一個体と考えられるもので、外面調整は最下段を除いて、8~12条/cmの左上がりのタテハケの上からB種ヨコハケを施している。最上段にはヘラによる線刻が認められる。タガは断面形がM字形を呈するものである。内面調整は最上段がナナメハケであるほかはユビナデである。胎土は長石を含み、にぶい黄橙~浅黄橙色を呈する。焼成は良い。後者は口径18.6cm~22.4cmで、やや外反ぎみにのびる口縁部の上端は面をなす。外面調整は左上がりナナメハケで、内面調整は口縁部の2点がナナメハケであるのに対して、底部の1点はユビナデである。色調・胎土については前者との差異は認められない。

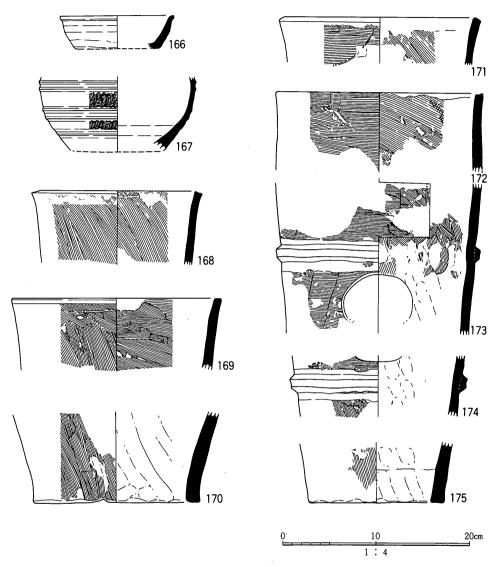


図44 65号墳出土遺物実測図

これらが墳丘上面や周溝内で出土しているものであることを重視すれば、この古墳には 両種の円筒埴輪が立てられていたと考えるべきであろう。

朝顔形埴輪 (図45, 図版54・55)

口径61.8 cm をはかる大型 $176 \cdot 177$ と口径37.6 cm の小型 $178 \sim 180$ がある。大型の $176 \cdot 177$ は斜め上方にまっすぐのび、口縁端部付近でさらに屈曲して外反する口縁部である。外面 調整は8.4 / cm のナナメハケで、内面調整は横方向のハケ仕上げである。タガの接合はヨ

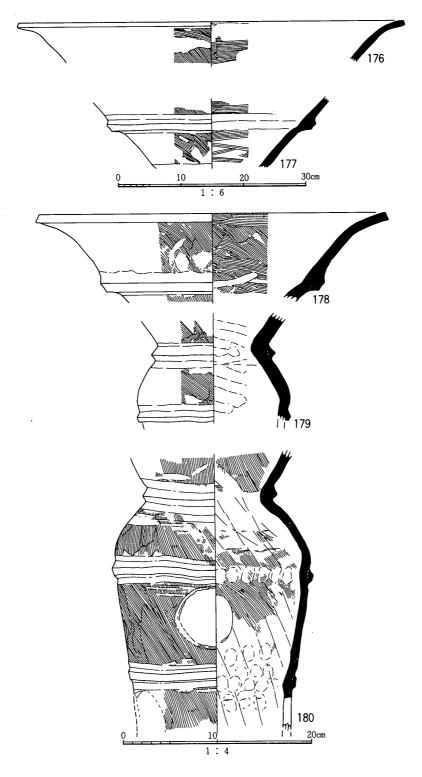


図45 65号墳出土朝顔形埴輪実測図

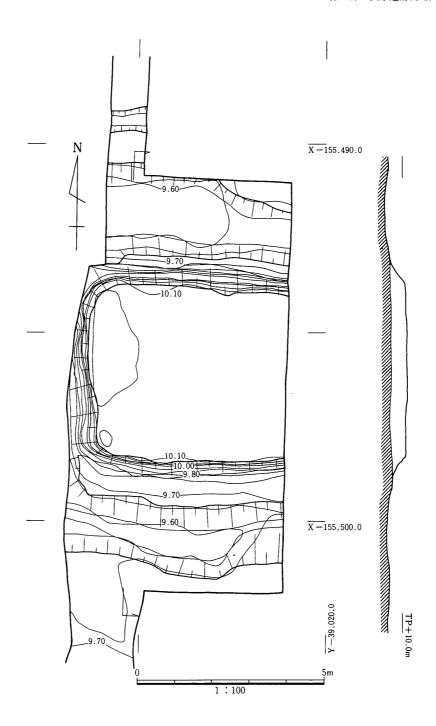
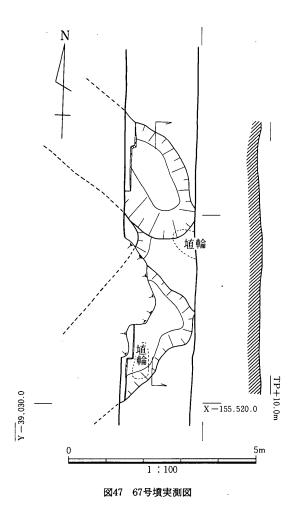


図46 66号墳実測図

コナデによってなし、内面も横方向のナデを施す。小型の178~180は張りの小さい肩部から斜め上方にのびる頸部と口縁部をもち、口縁端部付近でさらに大きく外反する。外面調整は左上がりのナナメハケで、内面調整は口縁部が斜めから横方向のハケ仕上げ、肩部から円筒部にかけては一部にハケメが残るが、おおむねユビナデないしユビオサエである。 肩部から頸部にかけて屈曲する部分には断面形が三角形のタガが貼付けられている。

前者の大型品は浅黄橙色を呈し、雲母を含む。一方、小型品はにぶい黄橙色を呈し、クサリレキを含む。小型品が円筒部を含めて2点出土しているのに対して、大型品は口縁部だけしか出土しておらず、この古墳に伴うものとするにはやや躊躇される。 (京嶋)



•66号墳

遺構 (図46, 図版9)

82-19次調査 V区の北端部で検出された方墳である。後述する67号墳の北20m、69号墳の南15mの位置にある。墳丘は基底部で南北7.5m、東西5.8m以上、周溝底からの高さ0.6mをはかる。墳丘の南辺は0.8mの幅で削り取られ、北辺は0.3mの幅で削り取られている。墳丘の方位はほぼ座標北方向を示す。周溝は北および南側のみを調査したが、幅1.6~2.4mで、深さは最大で0.1mである。

遺物

墳丘上面および周溝内から、外面ナナメハケを施す円筒埴輪や朝 顔形埴輪の細片がごく少量出土し ているが、図化できるものはなかっ た。 (京嶋)

•67号墳

遺構 (図47, 図版10)

82-19次調査 V 区の中央部で、後述する68号墳の北約20mに位置している。墳丘東隅の 周溝のみを検出した。周溝のコーナー部は地山の上面をほとんど掘削しておらず、とぎれている。幅は2.3m、深さは0.1mである。墳丘は西側にあるが、生活道路や住宅があるため拡張調査ができず墳丘の規模は不明である。しかし、道路西側の住宅への下水管埋設に 伴う立会の際に墳丘の盛土を確認しており、西方 5 mまでは墳丘が続くことがわかっている。

周溝内から須恵器・円筒埴輪が出土した。

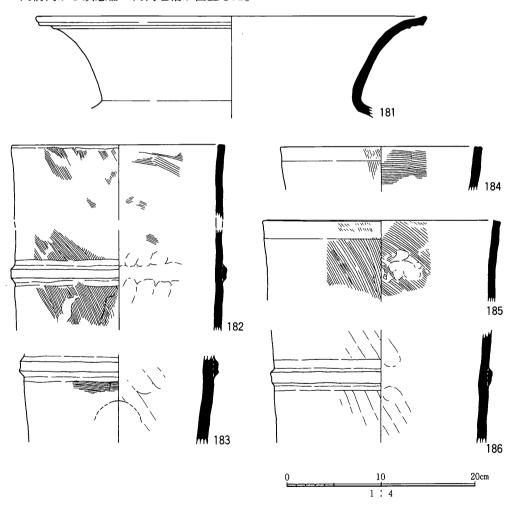


図48 67号墳出土遺物実測図

遺物

須恵器 (図48, 図版55)

甕(181) 口径41.6㎝をはかる大甕の口縁部である。外上方に直線的にのびて緩やかに 外反する口縁部で、端部は上方に若干つまみあげる。端部の直下ににぶい稜線を1本めぐ らしている。内外面ともにヨコナデ調整である。灰白色を呈するが、焼成は良好である。

TK216型式に近いものと思われる。

円筒埴輪(図48,図版55)

外面調整が左上がりのナナメハケの182・184・185と左上がりのナデ調整の186、そして B種ヨコハケを施す183がある。182・184・185は口径21.6~25.6㎝をはかり、まっすぐ上 方にのびて、口縁部上端面に浅く凹む面をつくる。断面形が低い台形のタガをもち、内面 調整は最上段がハケで、それ以下はユビナデないしはユビオサエである。灰白~橙色を呈し、長石・クサリレキを含む。186は断面形が低い台形をなすタガをもつ中位の破片である。調整は内外面ともに左上がりのナデ調整である。灰白色を呈し、焼成はややあまい。183は断面形が台形を呈するタガをもつ破片で外面に B種ヨコハケが認められる。内面は ユビナデである。淡黄色を呈し、焼成は良い。

182は周溝埋土から出土しているが、それ以外は周溝埋土の直上にある水田耕土からの出土遺物である。しかし、これらは比較的まとまって出土しているため、この古墳に伴う可能性が高いと考えられる。 (京嶋)

• 68号墳

遺構 (図49, 図版10)

82-19次調査 V 区の南部で65号墳の北20mの位置にある。東および西側は拡張することができず、墳丘の東辺部を検出したにとどまる。墳丘規模は基底部で南北10.0m、周溝底からの高さは0.6mである。墳丘の方位は $N-10^\circ-E$ である。周溝は幅約3.0m、深さは0.1mをはかる。墳丘の西側は生活道路があったため未調査であるが、道路西端の工事の立会時に墳丘の一部が検出されており、未調査部分の西に5 mまでは墳丘が続くことが確認されている。遺物は墳丘上面で埴輪が出土している。

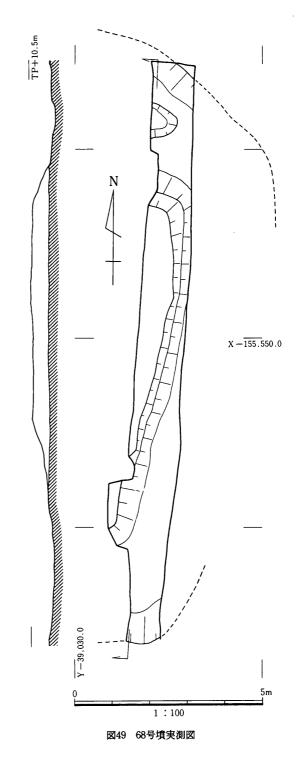
遺物

円筒埴輪 (図50, 図版55·56)

外面調整が1次調整の左上がりのナナメハケのみである187・188とB種ヨコハケの2次

調整を施す189・190がある。前者 は187が7~9条/cm、188が5~ 6条/cmのナナメハケを施したの ちに断面形がM字形を呈するタガ を貼り付けている。内面はユビナ デないしユビオサエで調整する。 188の下端部外面には板状工具に よるナデが横方向に施され、比較 的薄く仕上げられている。後者の 189は最下段の外面は縦方向のナ デであるが、それ以上はB種ヨコ ハケを施す。タガは低いM字形で ある。190は最下段を含めて全体 にB種ヨコハケを施すもので、最 下段の下端部外面には一部ナデが 認められる。小型の円筒埴輪で最 下段の外面にもB種ヨコハケを施 しているのはこの埴輪だけである。 タガは189と同形態である。189・ 190の内面調整はともに縦方向の ユビナデないしはユビオサエであ るが、190の最下部のみが横方向 のナデである。いずれも浅黄橙色 を呈し、長石・クサリレキを胎土 中に含む。

これらの円筒埴輪はすべて墳丘 上面で出土していることから、前 記の64・65・67号墳と同様にB種 ヨコハケの2次調整を施すものを 含む2種以上の埴輪がこの古墳に



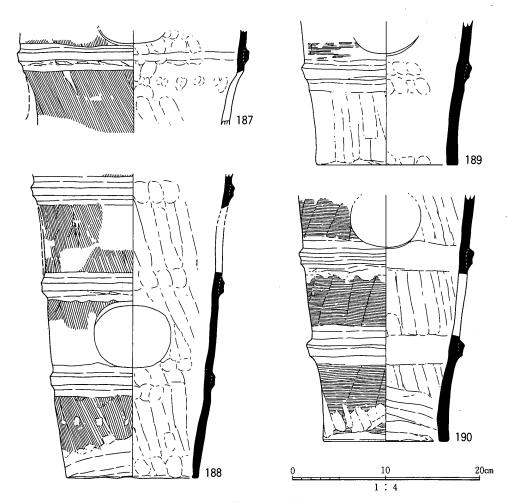


図50 68号墳出土円筒埴輪実測図

立てられていたと考えることができる。

朝顔形埴輪(図51,図版56)

191は口径29.0㎝の口縁部で、口縁端部の下端を下方に垂下させる。頸部と口縁部の接合部には断面形が台形を呈するタガを貼付ける。外面調整は13条/㎝の細かいタテハケで、内面調整も同様の横方向のハケを施す。口縁端部の形態は通常の朝顔形埴輪にはみられないものであり、朝顔形ではないかもしれない。にぶい黄橙色を呈し、胎土中に長石・石英・雲母を含む。やや軟質である。

形象埴輪(図51,図版56)

衣蓋形埴輪(192)円筒部の底径16.2㎝、笠部外縁が直径39.0㎝に復元される。破片は

いくつかに分かれ、接 合できないが、図のよ うに復元することがで きる。円筒部は一対の 円形スカシ孔があり、 内外面ともにユビナデ 調整である。笠部の外 面は全体に縦方向のハ ケメを施したのち、笠 周縁の幅8cmの間は不 定方向のハケを、それ 以外の部分は回転を用 いたヨコハケを施して いる。内面はユビオサ エである。笠部とその 頂部の円筒部の境には 断面形が三角形を呈す るタガがめぐっている。 頂部の円筒部は基部の

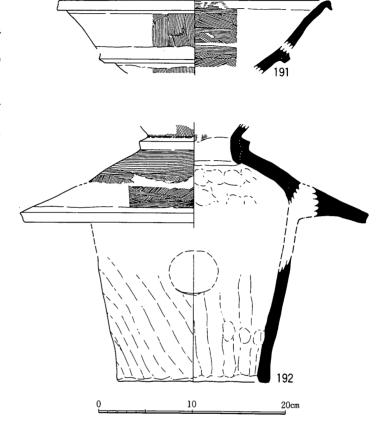


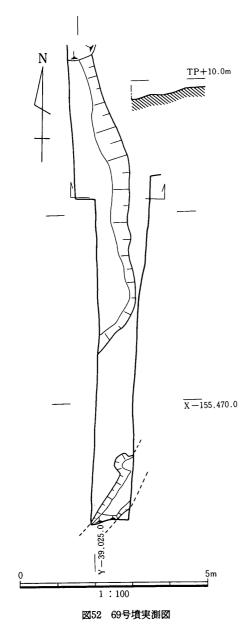
図51 68号墳出土朝顔形埴輪・形象埴輪実測図

みをのこし、笠部から大きく外方に屈曲し、上方に開く形態であったことがわかる。この部分の外面はタテハケで内面は横方向のハケメを若干残すがナデで消している。浅黄橙色を呈し、焼成は良好で硬質である。前記の191は胎土・調整が類似しており、笠頂部の円筒部とみることも可能である。 (京嶋)

• 69号墳

遺構 (図52, 図版11)

82-19次調査VI区南端部で周溝の一部を検出した。この古墳は1984年度に実施した84-48次調査でも墳丘および周溝の一部を調査しており、墳丘規模は約10mと推定することができる。周溝の幅は $2\sim3$ m、深さは0.2mである。遺物は周溝内から円筒埴輪が出土している。



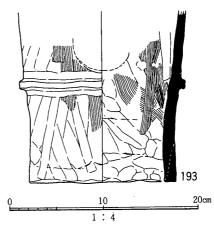


図53 69号墳出土円筒埴輪実測図

遺物

円筒埴輪(図53,図版56)

193は底径13.8㎝の円筒埴輪下半部である。 外面に6条/㎝のタテハケを施したのち、断 面形が比較的高い台形を呈するタガを貼付け る。ハケは粗雑なもので、一部にしか施され ておらず、成形時の粗雑なナデがハケに消さ れることなく広い範囲に残っている。内面も 同様で、一部にハケメがみられるだけである。 下端面に粘土の接合痕が残る。にぶい黄橙色 を呈し、胎土に長石・チャート・クサリレキ を含む。 (京嶋)

•70号墳

遺構 (図54, 図版11)

82-19次調査 I 区の南20mで擁壁工事の際 にその存在が判明し、調査された。墳丘の西

および東側の周溝にあたる部分には周溝埋土が認められなかった。墳丘規模は東西8.6mと推定される。墳丘の高さは0.3mである。墳丘方位は $N-10^\circ-W$ である。遺物はほとんど出土しなかった。 (京嶋)

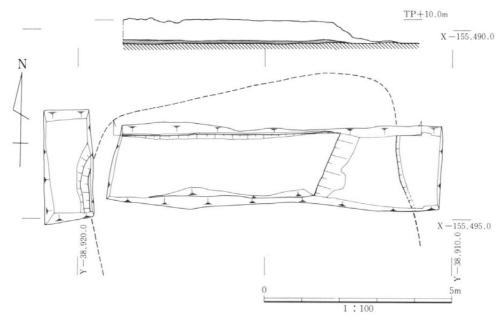


図54 70号墳実測図

•80号墳 (図56, 写真9)

82-27次調査のVI・VII区は、第 I 章第 2 節 で述べたような事情があるため、とりあえず、 判明していることだけ報告しておく。

80号墳はVII区の西で検出した。墳丘は第6 AI層上面で、東西約6m、南北約3.5m、 高さ約0.3m程度であった。トレンチによる 部分的な知見を基にすると、一辺7m程度の 規模と推定される。墳丘直上(第4層下面) から有黒斑の埴輪細片が1点、出土している。 (積山)

•81号墳 (図56, 写真10)

82-27次調査WI区で検出した。墳丘は第6 AI層上面で、東西約5.5m、南北約3.5m、 高さ約0.25m程度であった。方墳ならば一辺 7~8m程度の規模と推定される。(積山)



写真9 80号墳検出状況 (第6 A層上面)



写真10 81号墳検出状況 (第6A層上面)

•82号墳 (図56)

82-27次調査VI区の南西隅で検出した。第6AI層上面まで掘り下げた時点で、東西約2m、南北約0.5m、高さ0.25m程度の墳丘を検出したが、その大部分が調査区外におよんでいる。80~82号墳は再調査後にあらためて報告する予定である。 (積山)

•83号墳

遺構 (図13・55・57, 図版13・14)

82-27次調査II区で検出し、V区(86-105次調査)で再調査した古墳である。一辺約6mの方墳と推定される。墳丘縁辺部は第6層によって、幅1.5~1.8mにわたって帯状に削りとられ、水田土壌化していた。よって墳丘の中心部のみ、高さ約0.4mで、約2.5m四方の高まりとして残っていたが、その墳頂は第4B層によって覆われていた。周溝は残存幅1.5~2m、深さ約0.2mであった。西周溝は形状が不定形で、屈曲するかもしれない。東周溝の埋土上面から須恵器194が、また墳丘東縁辺部の第6層から195~198が出土した。墳丘は第7B層から下の土を掘り起こし、拳大~人頭大のブロックを盛り上げたもので、その際の作業工程の単位らしき分層面を、水平に3回前後認めることができる(図13)。

墳丘の中心で主体部が検出された。墓壙の掘形は東西2.2m、南北0.9~1 mで、おおむ

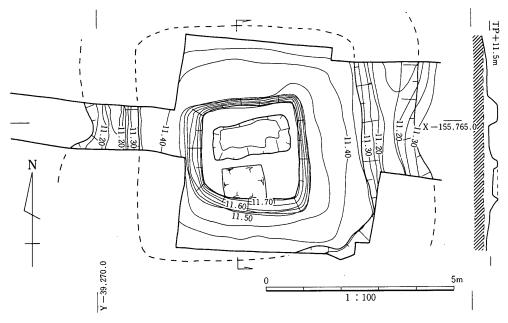


図55 83号墳実測図

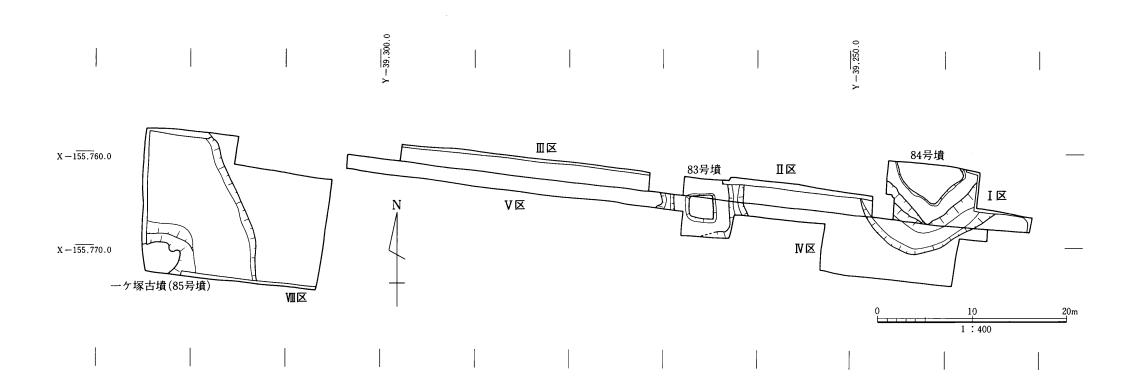
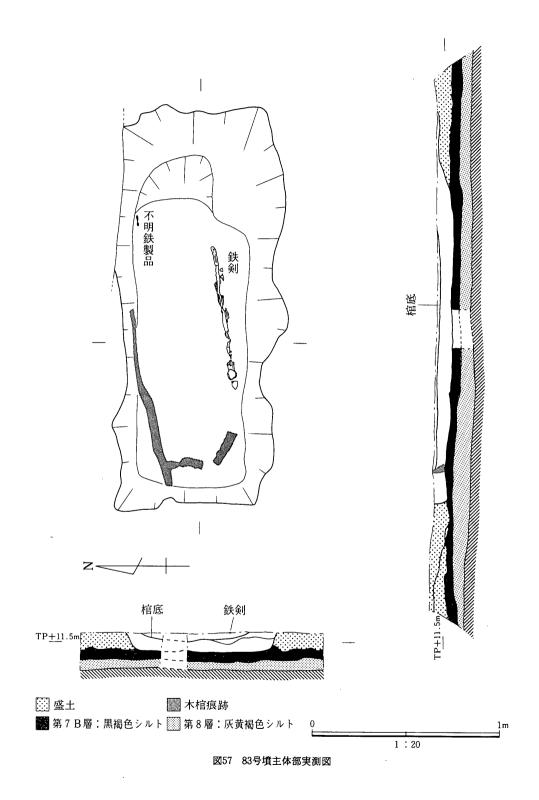


図56 82-27次 古墳配置図



ね長方形であるが、確認面がほとんど底付近であったため、各辺の凹凸が著しい。墓壙内西側では、灰白色粘質シルトが帯状に認められ、木棺痕跡と思われる。土圧のためか歪んだ形状をしており、確実なことはわからないが、西木口板の痕跡が棺底より深く、墓壙の底まで達していることからみて、おそらく組合せ式木棺であろう。棺内南側とおぼしき位置で鉄剣が出土した。切先が西を向いていたので、被葬者の頭位は東であったと推定される。鉄剣と北側板との幅は0.45mで、また南側板と北側板の幅はせいぜい0.6m程度かと推定される。茎から0.3mあまり北東では長さ約10㎝の鉄片が検出されたが、遺存度が極端に悪く詳細は不明である。墓壙内埋土は後日洗浄したが、他の副葬品はなかった。

遺物

鉄製品 (図57)

鉄剣 取り上げ後、保存処理を施したが、遺存度が悪く旧状に復することができなかった。全長76.4cm (剣身は65~66cm)、幅3cm程度である。茎には目釘穴が認められ、剣身には鞘の木質が部分的に遺存していた。

不明鉄製品 棺内北東部で出土したが、先述したように極端に残りが悪く、詳細不明である。

須恵器 (図58, 図版57)

杯身(194) 口径約9 cm、器高5 cm程度のやや深めの杯である。口縁端部は丸くおさめ、 受部は水平に引き出されている。ロクロ回転は時計回りである。

把手付椀(195~197) 195は口径約8 cm、器高5.4cmをはかる小型品である。口縁部は直

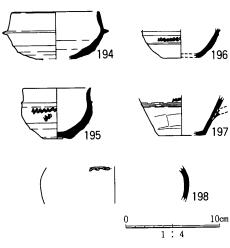


図58 83号墳出土遺物実測図

立してわずかに外反し、シャープな稜の直下には細かい波状文をめぐらせている。体部下半はやや粗い回転ヘラケズリである。197は静止ヘラケズリの外底面から、体部が直線的に立上がる形態で、ごくわずかに認められる稜の直上に波状文を施している。把手は接合部付近では断面が楕円形である。器壁は薄い。196は、鉢とすべきかもしれない。体部は緩やかに立上がり、波状文の直上で2段の稜をもっている。底部は静止ヘラケズリである。

腿(198)壺の一部かもしれない。残存部

第1節 長原遺跡南地区の調査

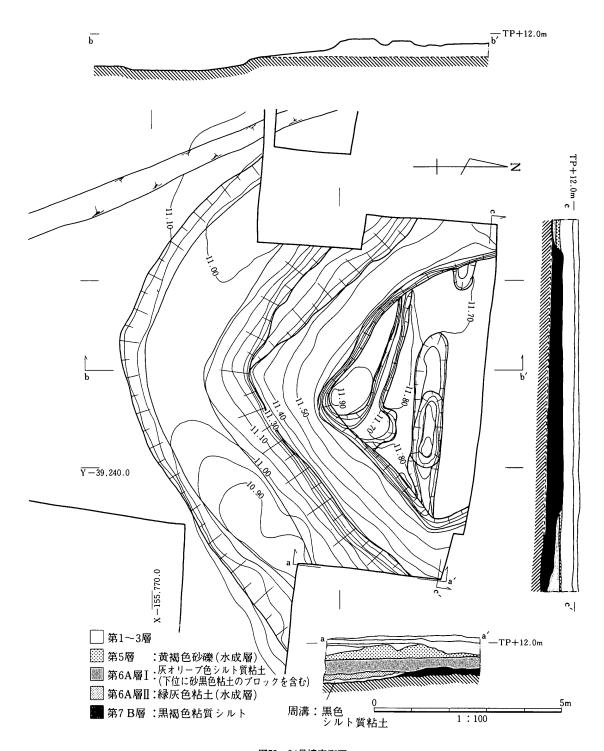


図59 84号墳実測図

第Ⅲ章 調査の結果



写真11 84号墳衣蓋形埴輪234出土状況 (試掘時)

の上半には自然釉がかかっている。波状文を めぐらせている。

以上の須恵器は、必ずしも83号墳に伴うとは断言できないものが多いが、初期須恵器の範囲でとらえてよいと思われる。ただ、杯身194などの特徴からみて、T K73型式までは遡らないであろう。 (積山)

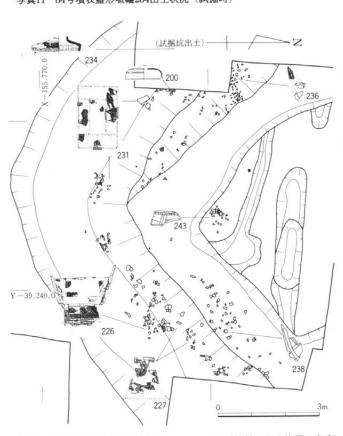


図60 84号墳遺物出土状況実測図

(円筒埴輪の出土位置は省略) は本来の埋土の上に第6AII

•84号墳

遺構 (図59・60, 図版15~ 17)

82-27次調査の東端(I区)で検出された。南北約7m、東西約9.5mにわたって墳丘を検出した。墳形は不明であるが、方形であれば一辺約7m以上の規模と推定される。もっとも高い北端部は第2層によって覆われており、周溝底からの遺存高は約0.8mである。墳丘の縁辺部は、第6AI層によって幅約1.5~2.5mを帯状に削りとられていた。周溝は幅3~3.5mで、深さは0.3~0.4mである。溝内に

層が堆積していた。

墳丘縁辺部と周溝から須恵器と埴輪多数が出土した。200・201は南西の墳丘縁辺部と周溝、199・202・204・205・206は南コーナー付近から出土した。確実に周溝埋土から出土したのは199・200・201・205で、他は第6層の水田耕土に伴っていた。 (積山)

遺物

須恵器 (図61, 図版57)

杯蓋(199~201)199は口径12㎝弱と思われる小破片である。200は口径13.2㎝、天井部高3.7㎝をはかり、中央につまみがついていた痕跡がある。天井部は平たく、ロクロ回転反時計回りのヘラケズリを広く施している。内面中央付近に一定方向のナデを施している。口縁部はやや外開きで端部は内傾して浅くくぼむ。201は口径12.2㎝、高さ4.4㎝で、天井部はやや丸く、広い範囲を反時計回りのロクロでヘラケズリしている。内面中央の一定方向のナデや、口縁部の特徴は200と同じである。

杯身 (202・203) 202は受部径12.6㎝をはかり、やや広い範囲を時計回りにヘラケズリしている。203は復元口径11.2㎝で、立上がりはやや高く直線的である。

腿(204)口縁部の小破片である。復元口径は10.5㎝である。壺の可能性もある。

器台(205・206) 205は脚部裾の破片で、裾端部の復元径は約21 cm である。直線的に開き、内湾ぎみに端部にいたる。外面はやや鈍い稜の間に、上下 2 段に波状文を施している。厚く自然釉を被っている。206は高杯形器台の杯部の破片で、体部は平行タタキののち、細かいカキメを施している。その上方の稜は細くシャープである。

以上の須恵器はTK23型式ごろと考えられる。

(積山)

円筒埴輪(図62~64, 図版58~60)

図化可能な30個体中、18個体を図示したが、接合しない破片には同一個体のものがある

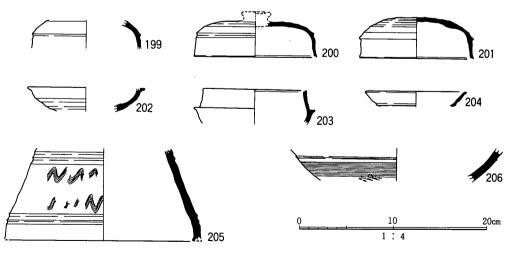


図61 84号墳出土土器実測図

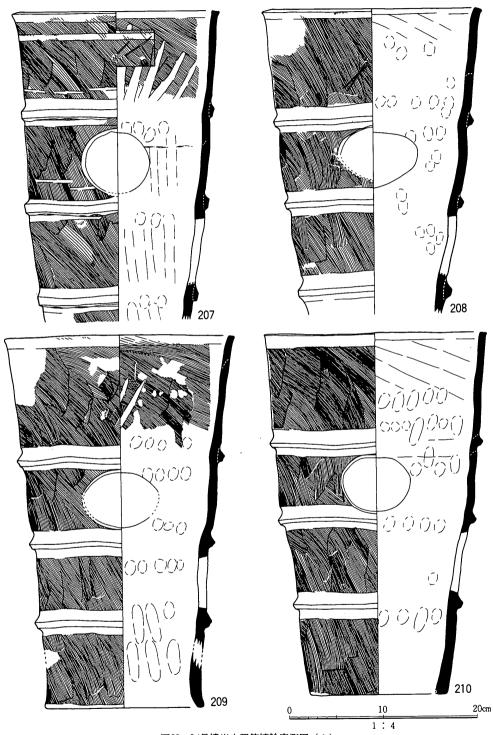


図62 84号墳出土円筒埴輪実測図(1)

かもしれない。

外面調整はすべて1次調整のタテハケのみである。ハケメの切合いをみると、ほとんどのばあい、むかって左のハケメが、右のハケメを切っている。ハケメの始点は各段で横方向に並ぶ傾向があり、したがって各々のタテハケはタガをはさんで直上の段のタテハケによって切られている。最上段などの外面に部分的なヨコナデを施すものが3例207・211・217ある。最下段には板をあてたかと思われる底部調整が認められる例221・224(ほかに1点)もある。

内面調整はナデで、最上段にはハケメを施し、さらにユビナデを行う例207・209・212がある。ハケメのかわりにあらためてナナメのナデを行う例208・210・211・213もある。 タガ位置付近の内面には、指頭痕が並ぶ傾向がみられる。

口縁部はほぼ直口で、ヨコナデできれいに調整している。底部は成形時の自重によって 粘土が少し外側へはみ出したままのもの209・219・220も少なくない。タガには断面が三 角形のもの216・213もあるが、多くは台形である。

へラ記号は斜めの「X」または「Y」に近いもの207・208・211・212と半円の弧線213・216・217に大別され、前者の破片はほかにも数点ある。207~218のほとんどすべてには、上から二段目付近まで赤彩していた痕跡が認められる。

以上の円筒埴輪の胎土は以下の2グループに大別される。

a:浅黄色~灰白色を呈し、長石・石英・チャート・黒雲母(註4)を含む。

b:褐色系で長石・石英・チャート・黒色粒(雲母?)赤色粒を含む。

aは213・214・216・217で、半円の弧線によるヘラ記号をもつ。他のほとんどはbで、そのヘラ記号は「X」または「Y」に近いものである。破片総数1300前後のうち、識別しえた限りでは、a グループ482点、b グループ739点、その他約50点である。なお、本古墳の胎土a グループは、一見、一ケ塚古墳(85号墳)の胎土a グループときわめてよく類似している。

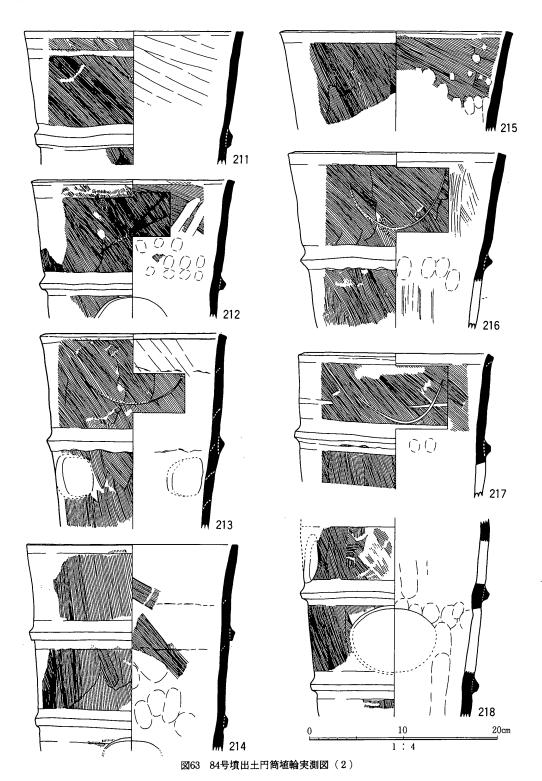
朝顔形埴輪(図64,図版57)

225は三つの破片から復元した。胎土・ハケメなどから同一個体と思われる。口縁部は 比較的しっかりしたタガをはさんで2段に外反する。小破片のため、調整などの細部は不 明である。胎土の特徴は円筒埴輪のaグループと同じである。 (積山)

形象埴輪(図65~70、図版61~66)

家形埴輪(226~230)大きく復元できた2個体226・227に加え、壁の小さな破片228~

第111章 調査の結果



- 94 -

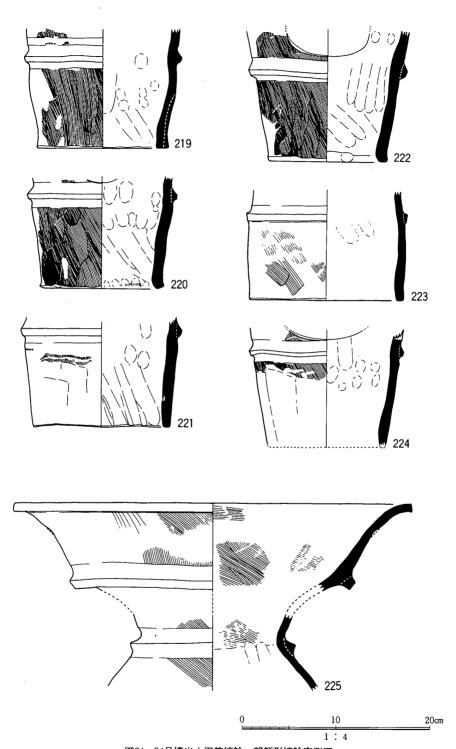


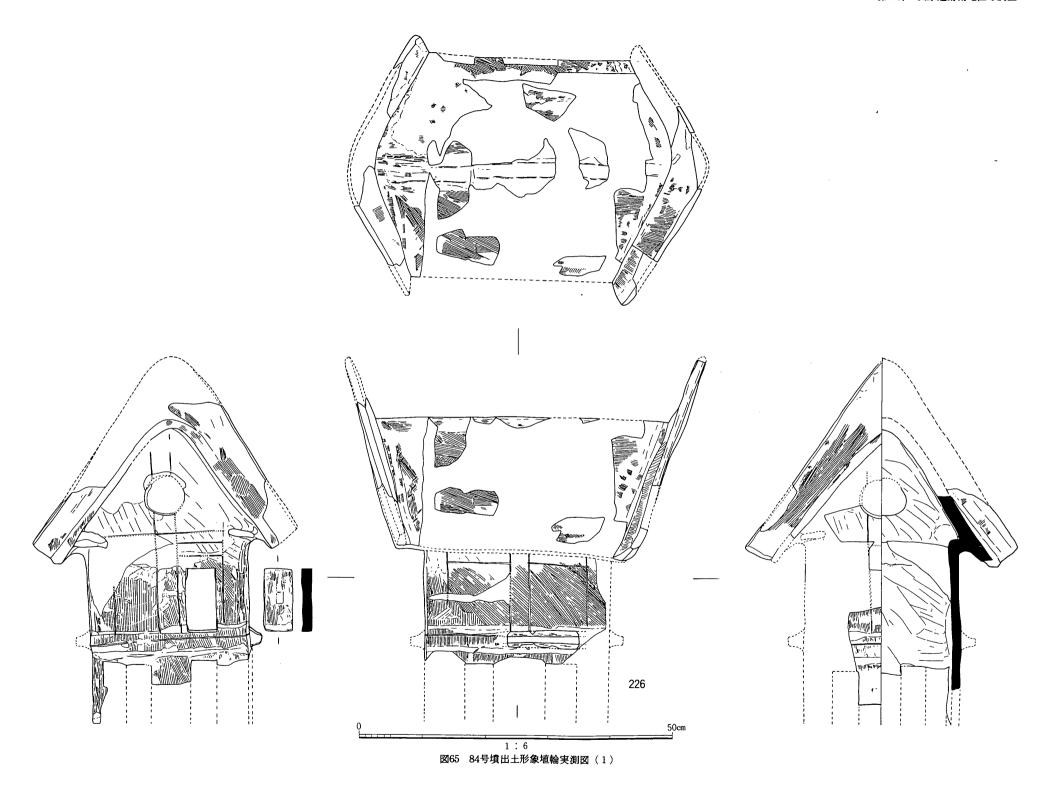
図64 84号墳出土円筒埴輪・朝顔形埴輪実測図

230がある。226は切妻屋根の高床倉庫である。平側の破風板の両端で58.5㎝、妻側で41.4 ㎝、高さは現状で59.2㎝である。階下のほとんどを欠いているものの、階上部は遺存状態がよく、全体の復元が可能である。一方の妻側に入口を設け、切り抜いた粘土板をはめ込み式の扉としている。この扉中央には小さな剝離の痕があり、もとは取っ手が付いていたものと思われる。壁廻りには線刻によって柱・梁材が表現され、桁材が妻側の軒近くに表される。また、ほとんどが剝落しているが、高床部から壁廻りを四周する突帯がめぐる。この突帯の剝離した面中央には、割付け線と思われる1本の刻線が施されている。棟上には一様に剝離の痕があり、おそらく堅魚木の受け材を載せていたものと思われる。外面の最終調整は妻側の屋根に取り囲まれた三角地帯がナデによるほかは、すべて10~11条/㎝の縦・斜めのハケで仕上げている。内面はナデのみである。

この家形埴輪は以上のような切抜き・突帯・線刻やナデ・ハケの調整がよく残っており、 これらの重複関係や粘土紐の接合状態の観察から、その製作工程の一端を復元することが 可能である。

以下に、観察事項と作業工程の復元について述べる。

- 1. 壁廻りのハケ調整は、必ず線刻の前に行われている。このうち、柱を表した刻線は高床からの突帯が剝離した面にまで延びている。また、この突帯をつける際のナデは切り抜かれた扉の下端にも確認できる。このことから、少なくとも階上部の壁作りに限っては、ハケ調整→線刻→突帯貼付け→切抜きの順で工程が進んだものと考えられる。
- 2. 断面図に示すように、平側の壁上端は平坦であり、その角に屋根は支えられた状態となっている。そして、この部分に接合の補強材として下から粘土が補充されている。これは壁上端に屋根下端が載り、廂部分をのちに付加する一般的な接合状態と異なっている。また、妻側の屋根が壁と接触する面は、一様に平坦な剝離面となっており、両者の製作に乾燥が進むだけの時間差があったことを示している。これらのことから、壁の上で粘土紐を積み上げて屋根を製作したとは考えがたく、すべてか一部かは不明であるが、ある程度の形となった屋根を最終的に壁の上に載せたものと考えられる。
- 3. 屋根棟上の剝離面には屋根を覆うハケ調整の一部がみられる。したがって、屋根においてもハケ調整→突帯貼付けという順序であったと考えられる。
- 4. 妻側の桁材は屋根・壁の両方にくっついている。したがって、桁材を表現した突帯はこれらの製作が終わったのちに取り付けたと考えられる。



以上をまとめれば、この家形埴輪には壁・屋根製作という大きな二つの作業工程があり、 細部の表現はハケ調整ののちに、線刻→突帯貼付け→切抜きの順序で行われるということ になる。

227は寄棟屋根のみであり、壁廻りを欠いている。平側の棟長17.5㎝、軒下端の復元長34.8㎝、妻側の幅6.6㎝、軒の復元幅33.6㎝、復元高35.6㎝であり、屋根の勾配が強い。棟上には堅魚木を載せるための受け材が2本平行してあり、その間に細長い孔があいている。外面は8~9条/㎝のていねいなハケで調整され、赤色顔料が塗られている。内面はナデのみである。屋根の下端には一様に凹みがみられ、この下に壁が続き、軒の出の小さい廂がつくものと思われる。硬調な仕上がりで、色調は灰白色である。

228~230は壁廻りのコーナーの破片である。摩滅のためか、ハケ調整は確認できない。 229・230は底部にあたる。228・229には一端に切抜きがあり、コーナーからの長さが226 の床柱とほぼ一致する。また、230の突帯は226の高床のものに似ている。これらの色調は 浅黄橙色で、226とやや異なるが、先に述べた特徴から226と同一個体の可能性が高い。

盾形埴輪(231~233)少なくとも2個体に識別することが可能である。それぞれをA・Bタイプとする。Aタイプは復元案を示した231である。盾面の復元幅37.6㎝、復元高57.1㎝をはかる。厚手・粗い線刻・盾面を区画する梯子状の文様(以下、梯子文と仮称)を特徴とする。その文様構成は、梯子文で仕切られた外区の内向する山形文と、内区の菱形文からなる。復元では、この山形文を横方向を三つ、縦方向を上下対称と仮定して、二つとその半分のものを二つとしている。山形文の中は乱雑ぎみに直線で埋めている。刻線の重複関係から、まず外枠の山形をつくり、次に中央に近いところに線刻し、その後、順次外側に向かって施文していったことがわかる。なお、この山形文は梯子文ののちに刻まれている。内区には菱形文様をおそらく市松状に配していたものと思われる。この菱形文は十字を先に、次に外枠、最後に中を埋めている。器台は上半部が円周にして約1/4と盾面よりもよく残っている。下端にスカシ孔の一部がある。調整は外面中央をハケで、上部をナデで仕上げている。内面はナデである。また、盾面には赤色顔料のほか、一部緑色の顔料が塗られている。

これに対し、Bタイプは薄手・ていねいな線刻・盾面を区画する2本の平行線を特徴とするもので232・233がこれにあたる。また、色調は浅黄橙色でAタイプ(灰白色)と異なる。233は器台との接合部である。山形を重ねて文様を作り、それを半円と直線で仕切っている。232はこの233と胎土・色調とも似ている。外縁に沿って2本の平行線、内側に交

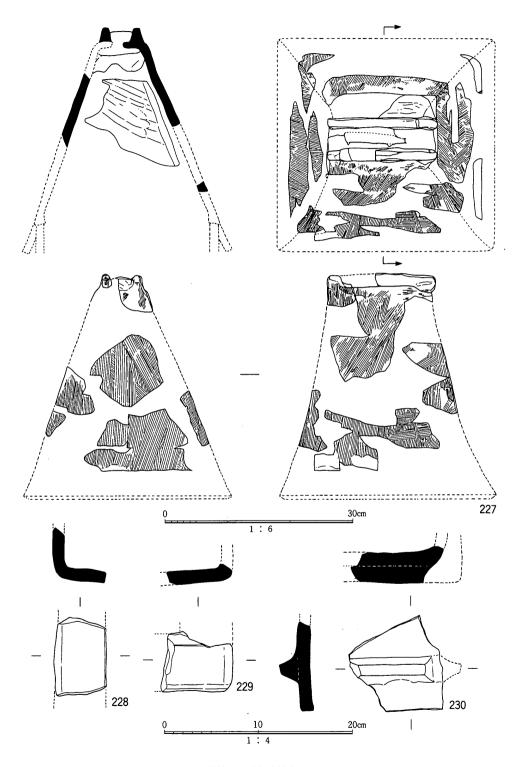


図66 84号墳出土形象埴輪実測図(2)

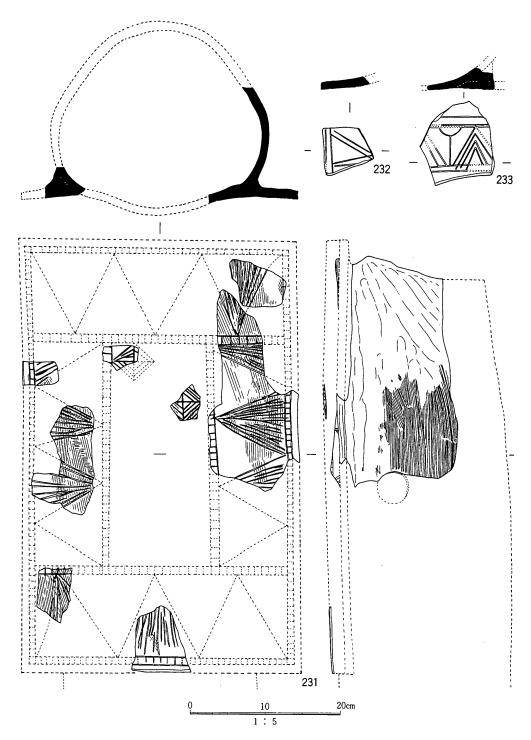


図67 84号墳出土形象埴輪実測図 (3)

錯する平行線が刻まれている。いずれも外面の摩滅が著しく、外面調整は不明である。

衣蓋形埴輪(234~240) 笠と立ち飾りの部分が少なくとも2個体分ある。234は笠であり、立飾りを受ける筒と、器台から突出している縁部分のすべてを欠いている。現状で径32.5㎝、高さ10.8㎝である。外面は所々剝落しているが、それ以外は遺存がよく、ハケで全体の調整が行われている。筒との接合部には低い突帯をめぐらしている。笠縁部と器台本体の接合を強固なものとするために、接合面に一様に斜め方向の粗い線刻を施している。内面はユビオサエが顕著で、粘土紐の接合状態がよく観察できる。外面に赤色顔料を施す。235も笠であり、234と異なり、縁部が多く残っている。径44.2㎝、残存高8.2㎝を測る。上端部は剝離面となっており、器台との接合部にあたる。このばあいには、器台の径は18.4㎝となり、笠の大きさに比べて、著しく径の細いものとなる。笠端部には突帯がめぐっており、これを取り付ける際のヨコナデがハケ調整を消している。ハケは基本的には図に向かって左から右に向かって移動している。内面はユビオサエが顕著であり、粘土紐の接合の状態がよく観察できる。これによれば、粘土帯の幅2.0~3.0㎝である。

236~240は立飾りの破片である。全体に摩滅が著しく、小さな破片となっているものが多いが、このうち比較的残りのよい238をもとにして他のものを復元している。大同小異はあるが、刻線の基本構成は、外縁・内縁に沿って平行する2本一対の弧線二対と、これらをつなぐ一対の弧線からなっている。また、線刻はこの順序で行われており、ハケ調整との先後関係は観察できるものについては、すべて線刻が後である。次に基本構成と異なるものについて補足する。236の先端部の破片は刻線が片面のみで、表裏対称とならない。また、弧線の間に斜めの弧線が入っている。239は突き出た部分が他のものに比べ短い。色調は灰白色である。

靱形埴輪(241・242)大きな破片がなく、絶対的に靱形埴輪であるといえるものはないが、先に述べた盾形埴輪と文様構成が異なること、裏面に文様をもたず衣蓋形埴輪の立ち飾りと区別されることから、靱形埴輪の可能性がもっとも高いものと考えている。241は曲りのない破片で、おそらく背板の一部であろう。鰭状の飾りに沿うように2本の刻線があり、これを限るようにして平行線、そして内側に2重の円(半円?)が描かれている。242もやはり平たい破片で背板の一部であろう。一端が突出しており、1本の線刻が施されている。

草摺形埴輪(243)器台となる円筒との接合部分(243)が1点ある。甲冑形埴輪の可能性もある。外面は摩滅が著しい。横方向の綾杉文、縦方向の直線文とこれに連なる斜め線

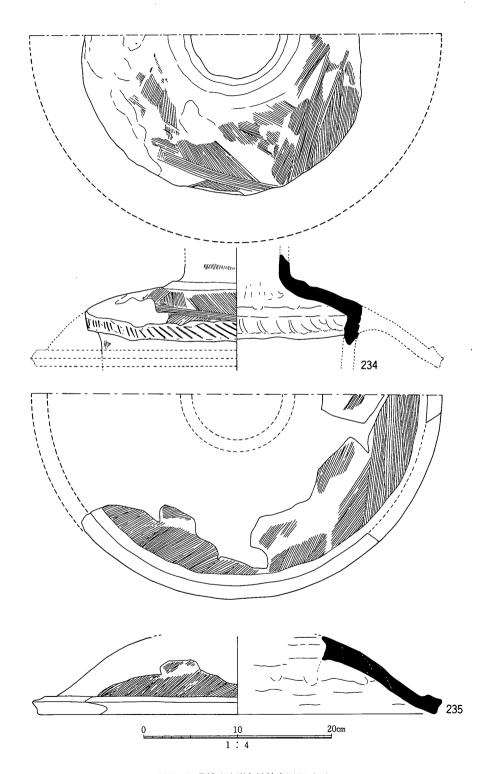


図68 84号墳出土形象埴輪実測図(4)

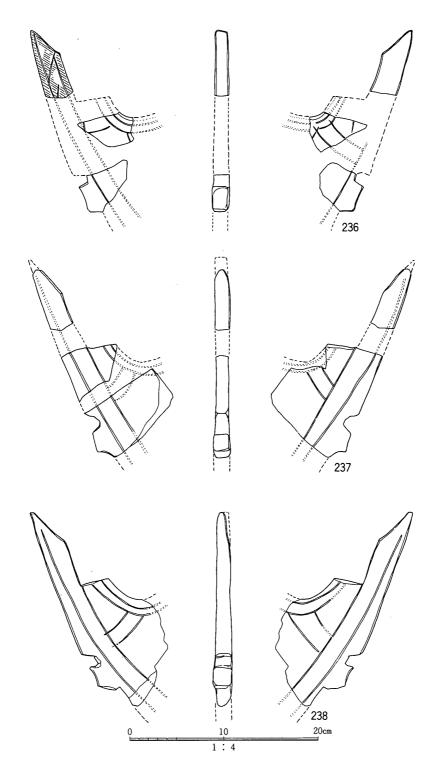
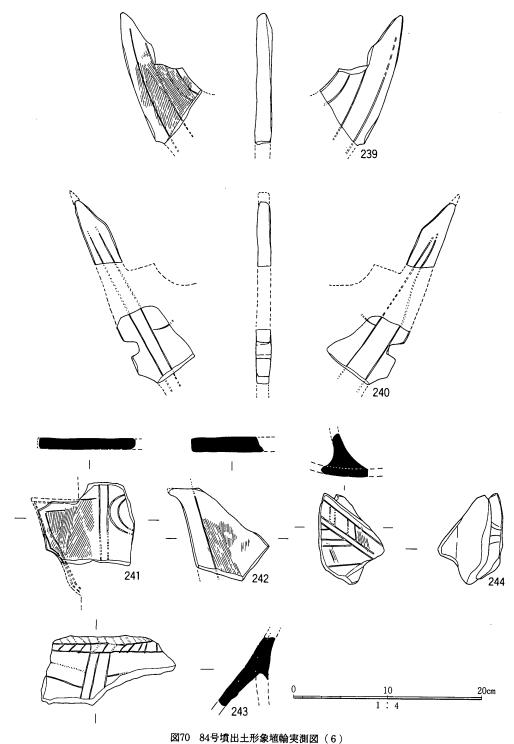


図69 84号墳出土形象埴輪実測図(5)



があり、この順序で施文されている。色調は橙色である。内面に粘土紐の接合痕を残す。 不明形象埴輪(244) 244は接合部の破片で、表面には斜め方向の直線が直角をなす2本 一組の直線を横切るように施文されている。円筒器台との接合部のようにもみえるが、接 合の仕方は先に述べた盾形埴輪と異なっている。全体に摩滅しているが、一部にハケ調整 が残る。色調は黄橙色である。

一ケ塚古墳(85号墳)

遺構 (図71~73, 図版18~21)

82-27次調査地のWI区で検出された古墳である。

墳丘は第6 A I 層の下で、南北3.1m、東西4.0mの範囲が高まりとして残っていたが、 周濠内での水田開発や水成の砂によってかなり変形されている。墳丘北東部の土壙状の掘 り込みなどもこの時期のものである。

本来の墳形を実測図の等高線から推測すると、TP+10.3m付近の上下で傾斜が変わることが読み取れるので、これが墳丘下端のラインと考えられる。そうすると、南北約5.0m、東西約5.5mを検出したことになる。遺存する墳丘の高さは、周濠のもっとも深いところから約1.1mである。円筒埴輪の基底部が3個体、かろうじて検出された。その間隔は、270と266で約1.3m、266と271では約1.1mとさほど変わらないことから、ほぼ原位置に近いと考えられる。したがって、墳丘の高さはほぼ築造時の旧状を保っているとみられ、盛土は、あってもごくわずかだったようである。また北西部の上端ラインに関しても、埴輪の位置からさほど離れていないと考えられる。

周濠は東外縁の地山(第13層)の上面から約1.1mの深さで、東西の幅は約8m、南北の幅は11m以上で、小型方墳の「周溝」とは規模が格段に異なる。濠の底は第6BI層の水田耕土で、それには黒色粘土のブロックが含まれている。このブロックが元来の周濠埋土であろう。その上は、砂礫からなる第6AII層の水成層で周濠が完全に埋まっている。

上述のように、検出した墳丘はごく小範囲に限られるが、周濠の規模の大きさからみて、長原古墳群の大多数を占める小型方墳とは考えにくいであろう。そこで地籍図などを検討すると、この墳丘と府道大阪羽曳野線をはさんだ西側に、字「一ケ塚」の存在が認められる(図 7)。1941年撮影の航空写真(図版 1)には円墳状の小丘と周濠らしい地割りが写っており、現在でもその痕跡が確認される。小丘は府道から約0.6m高く、その標高は TP+13.1mで、また検出した墳丘からは約1.9m高い。そこで、この85号墳の墳丘は字「一

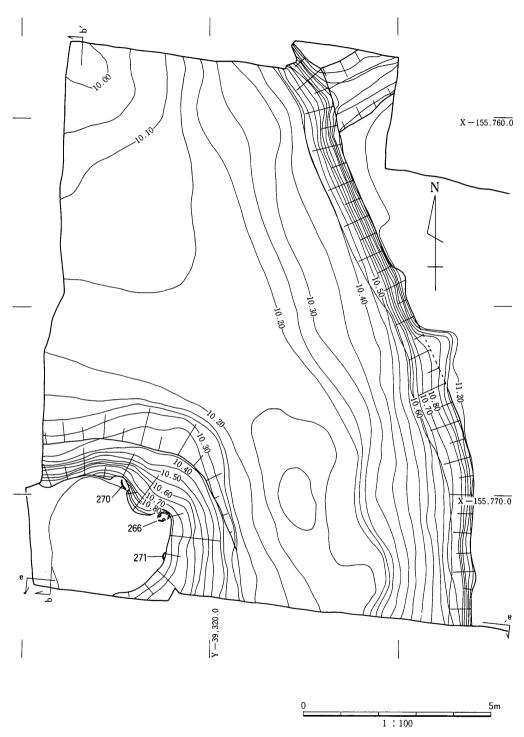
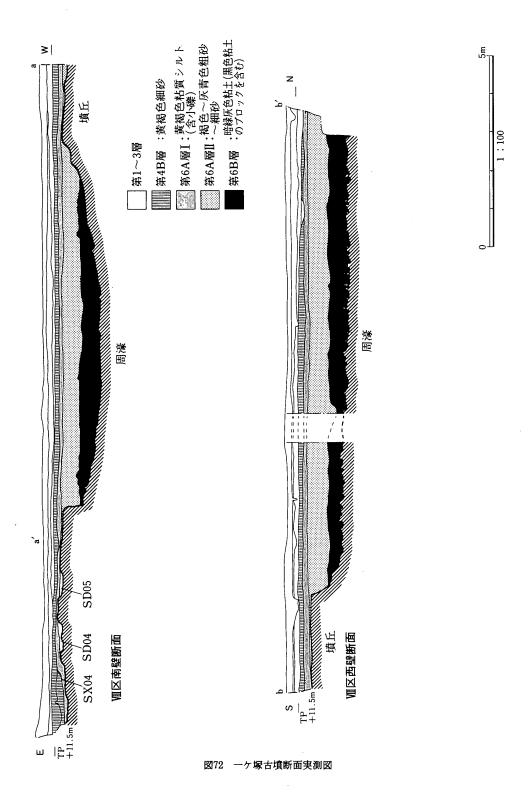


図71 一ケ塚古墳実測図



ケ塚」の小丘と一連のものとみなし「一ケ塚古墳」の名称を与えた。その墳形は前方後円 墳または帆立貝形古墳、さらには造り出しをもつ円墳のいずれかであろうと考えられる。

「一ケ塚」の小丘はその後(1988年3月)の試掘調査によれば、現代盛土の下約1.1mで現代耕土が認められたので、かなり後世の削平を被っているようである。そのため、本来の高さは不明であるが、数mはあったと思われる。また、ほぼ旧状の高さを保っていた前方部または造り出しは上面の地山(第13層)のレベルをみると、周濠外縁の地山よりも約0.1~0.2m低くなっている。このような小規模で低平な前方部(?)をもつ墳形としては、帆立貝形がふさわしいという見解もありうる。また、検出した墳丘の南東部が著しく削られて、変形を受けていることや、帆立貝形古墳や前方後円墳ならば前方部前端に向かいあう周濠の東外側ラインが直線になるのが通常であろうが、実際にはまるくカープして

いることから、小さな造り出しをもつ円墳である可能性も無視できない。なお、葺石らしい石 材は出土していない。

現在の地割りから、「一ケ塚」の小丘を含めた墳丘の規模をみると、東西長約45m程度である。ただ、この小丘がどの程度削られているのか不明なので、現状では本来の墳形はもとよりその規模も確定できず、さらに大きい古墳である可能性をも考慮しておく必要があるだろう。

周濠内の墳丘周辺から若干の土器と多量の埴輪が出土した。そのほとんどは第6B層から出土している。 (積山)

遺物

土師器 (図74, 図版67)

甕(245) 口縁部の破片である。口縁部は内 図: 湾しながら立上がり、端部はわずかに平坦面をもつ。器表面の剝離がひどく、調整は不明である。布留式でもかなり新しいものである。

円筒埴輪 (図75~78, 図版67)

図化できたのは29個体である(249と250、259と260は同 図74 -

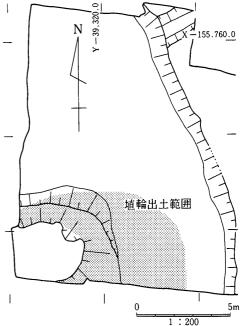


図73 一ケ塚古墳遺物出土位置

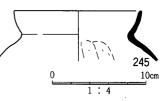


図74 一ケ塚古墳出土土器実測図

一個体であろう)。

外面調整は、タテハケのみのもの247~254・272~274とタテハケののちヨコハケを施すもの255~264・266~270・275に大別され、タテハケ後ナデを行うものが1点248あるほかは不明である。

タテハケは小破片も含むと11個体ある。垂直方向のものが多いが右下から左上に施すもの246・251・254などもある。246の最上段のタテハケはヨコハケを切っている。上から二段目のごく一部にはヨコハケが認められる。254は最下段に、粗くやや右上がりのヨコハケを施したのち、ナナメのタテハケを下から三段目まで行っている。最上段にはあらためて垂直に近いタテハケを施している。中間段のハケメは下から上へ施している。タテハケのほとんどは1次調整で施されたものであるが、254の最上段のタテハケは2次調整の可能性がある。

ヨコハケには断続的なものと連続的なものがある。

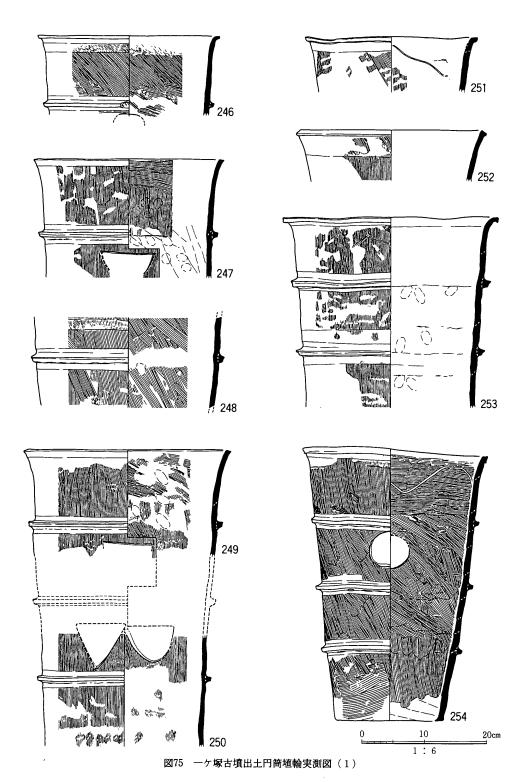
断続的なヨコハケは、256では口縁部付近に長さ $4\sim8$ m程度のわずかに左上がりのハケメを規則的に反復してめぐらせている。258では上から二段目の上半部に、3個所で切合って外面を一周するヨコハケが施されている。

連続的なヨコハケは255のばあい、不鮮明な部分もあるが、ほぼ1回の動作でハケメが停止せずに外面を一周している。他の埴輪は完周する接合資料でないが、257・258は4/5周程度の破片が接合し、ヨコハケに切合いが認められない(258の二段目の断続的ヨコハケをのぞく)のでこれにあたると思われる。他は1/3周以下の破片で、詳細は不明であるが、同一個体らしい破片のほとんどにヨコハケの切合いが認められないので、断続的なものであるとしても、1回の動作のピッチがかなり長いものと考えられる。

タガ間の各段に施すヨコハケは上下 2 段の例256もあるが、3 段の例257・258・260・261・267が多い。切合いがわかる例では、257は中央のヨコハケがその上下のハケメを切っており、258の最上段は下から上にハケメを施している。ハケ工具と共に砂粒が移動した例があり、256・257・260・261は上からみて時計回りの方向である。

内面調整はナデのちハケ246~248・251・254・256・261・263・264・270・274・275、 ハケのちナデ249・255・258~260・270、ナデ253・257である。

タガは比較的高くシャープなものが多いが、やや低く丸みのあるもの246・254・262・264・268・269などもある。通常、タガ接合時のヨコナデがヨコハケを切っているが、タガの直下にヨコハケがおよんでいる例256・257・260もあり、この部分に限ればヨコハケ



— 111 —

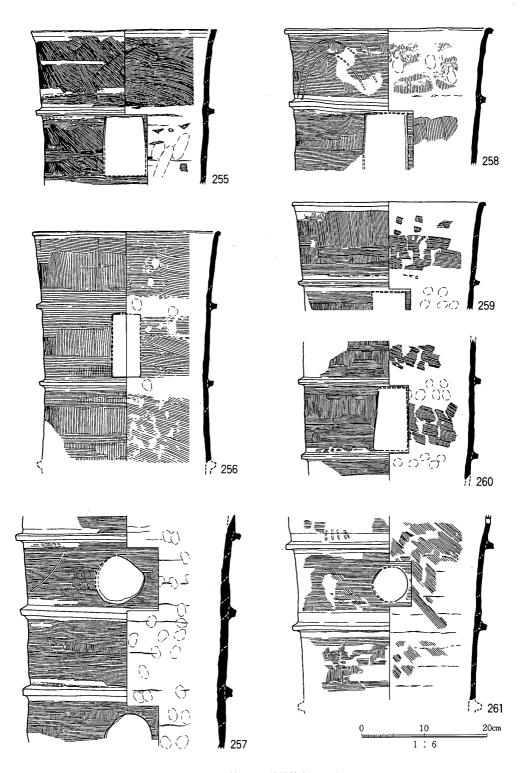


図76 一ケ塚古墳出土円筒埴輪実測図(2)

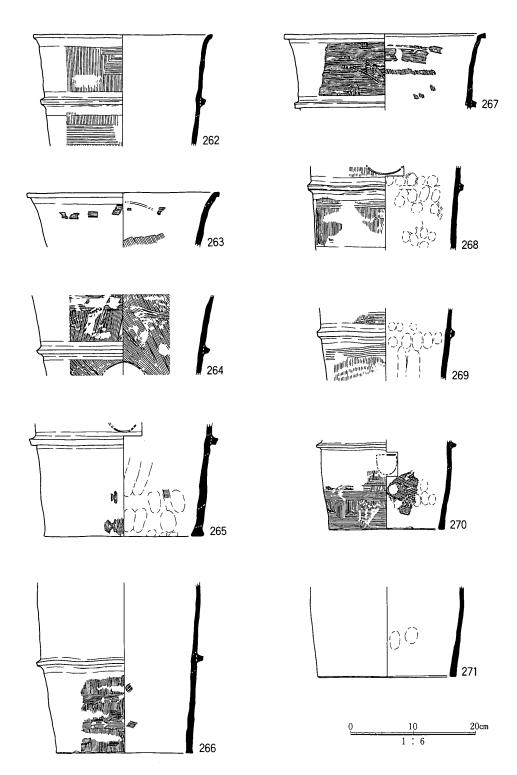


図77 一ケ塚古墳出土円筒埴輪実測図 (3)

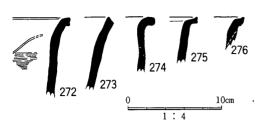


図78 一ケ塚古墳出土円筒埴輪実測図(4)

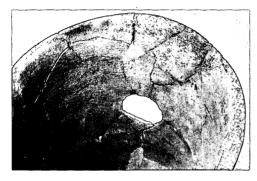


写真12 一ケ塚古墳円筒埴輪254内面のヘラ記号 254・256などに認められる。

の方が後のようである。

スカシ孔は円形が6例、方形が4例で、ほかに247は半円形、249・250は半円形+三角形+不明、という構成である。

口縁部の多くは外反したり端部を外側に折曲げるなどしているが、直口に近いもの247・249・252・255・273もある。底部はおおむね整った形態でていねいにつくられている。ただ、完周する資料に粘土帯の接合痕など製作技法がよくうかがえるものはない。

へラ記号は253・258・267の最上段外面と 251・254・263・272の同内面、そのほか257・ 261に認められる。

赤色顔料を塗布した痕跡は250・252・253・

すべて黒斑が認められることから、焼成は野焼きによるものである。

肉眼とライトスコープ(×30)の観察では、胎土は以下の5グループに大別される。

a: 浅黄~灰白色を呈し、長石・石英・チャート・黒雲母・赤色粒などを含む246・251・254・261~264・268・269・276など。

b: やや赤味がかった灰白色系統の色調で、長石・石英・黒雲母・赤色粒などを含む255・258・259・260など。

c:灰黄~浅黄橙色で、長石・石英・チャート・黒雲母・赤色粒などを含む247・249・250・252・256・267など。

d:灰白〜灰黄色系の色調で、長石・石英・チャート・黒雲母などを含む $248 \cdot 257 \cdot 275$ など。

e:少し赤味がかった灰白色で、長石・石英・チャート・黒雲母・赤色粒などを含む253・270・271・273など。

なお、各グループ内の底部と他の破片には同一個体のものがあるかもしれない。

朝顔形埴輪(図79,図版80)

277は肩部外面はていねいなナデ調整である。278は口縁部外面タテハケ、同内面はヨコ

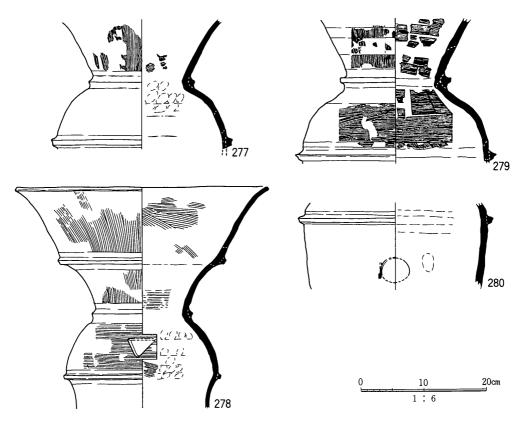


図79 一ケ塚古墳出土朝顔形埴輪実測図

ないしナナメハケである。肩部は長いヨコハケで中央のスカシは三角形である。体部には部分的にヨコハケが認められる。以上は胎土が円筒埴輪の a グループと同じである。279は口縁部外面にタテハケののち一部ヨコナデ、同内面にヨコハケをしている。肩部外面のヨコハケは主軸が一定でない。同内面はタテハケののちヨコハケで、上半は停止しながら継続させるヨコハケである。赤彩品で、胎土は円筒埴輪の d グループである。280は表面の剝離が著しく、調整などの詳細は不明である。外面を赤彩した痕跡があり、胎土は円筒埴輪の e グループと同じである。

壺形埴輪(図80·81,図版71)

281・282・285・286は形態の上では朝顔形埴輪と区別できないが、胎土・調整などから 283・287と同類と思われる。

もっとも残りの良い283は復元口径49.8cm、高さ約61cmで、口縁部外面はタテハケ、内面はヨコハケののち、ナデのようである。口縁部はタガ位置の上下でほとんど外反せず、

ほぼまっすぐに広がる。肩部は偏平で外面にはタテハケと、向かい合う弧状の 2 本線によるへう記号を施し、その中央に径 1 cm の小円孔を穿つ。肩部の下に幅 4 cm の鍔がつく。体部は高さ26 cm で、まっすぐに立上がる。287 もほぼ同様の個体である。 $281\sim283\cdot285\sim287$ の胎土は、円筒埴輪の d グループ(後述)である。外面を赤彩した痕跡がある。

284は復元口径38.8㎝、高さ約45ლで、口縁部外面はタテハケ、同内面はヨコハケである。口縁部はタガ位置で外反せず、まっすぐに伸びる。肩部はタテハケののちヨコハケで、1/2周程度の破片が接合しているが、ヨコハケは1回の動作で連続して施している。その方向は上からみて時計回り(砂粒の移動による)である。肩部直下には幅5㎝の鍔がつく。その下の体部は高さ16㎝で、まっすぐに立上がる。胎土は円筒埴輪のaグループである。

形象埴輪(図82~89, 図版72~79)

囲形埴輪(288~291)288の残存高は17.5㎝である。入口とみられる長方形の切取りのある側を正面とすると、その左右の幅は39㎝程度である。奥行きについては不明であるが、その平面形は正方形の一角を鉤の手状に屈曲させたものになると思われる。屈曲部では、入口の開かれる壁がもう一方の壁側に取付くが、その接合部からさらに3㎝ほど、入口のない側の壁が内部に入り込んでいる。また、入口の内外面には、それを取り囲むように、厚さ5㎜の粘土板を付加して肉厚にし、外面にはさらに線刻を施している。入口上部が周囲より突出しているが、上端を欠損しており、もとの形状は不明である。それ以外の壁の上端は平坦で、側面に横方向の突帯を2条めぐらしている。下の突帯にしても入口の切取り部分の上端に近いところにあり、やや高い位置に付けられていることが注意される。内外面はハケ調整(10条/㎝)ののち、ナデ調整を行っている。色調は灰白色、胎土に長石・石英・チャート・雲母・赤色粒を含んでいる。

289~291は288の下端部の破片と思われる。289・290は板状だが、291は左端がゆるやかに曲がっている。接地部分に幅2.6~3.2㎝、厚さ0.9~1.5㎝の突帯を付けるが、正置した状態で突帯を付けたためか、接地面では、両者の間にV字状の隙間ができている。色調は灰白色、胎土に長石・石英・チャート・雲母・赤色粒を含む。この破片には、家形埴輪のような基部がないこと、また、コーナーの部分が家形のようには角張らず、囲形と同じ曲率であることから、接点は確認できないものの、288と同一個体と考えられよう。

家形埴輪(292~307) 292は切妻の平地式建物に復元される。平側で破風板両端間の幅は52.6cm、妻側で33.2cm、基部下端から破風板先端までの高さは39cmである。屋根には不

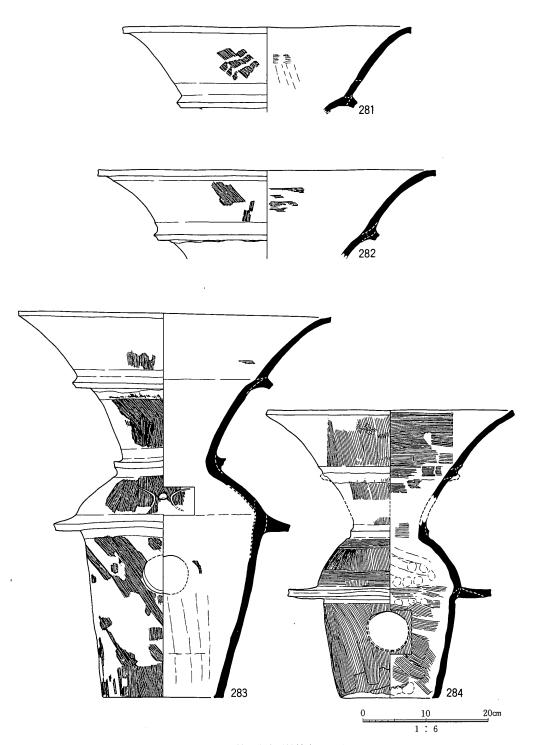


図80 一ケ塚古墳出土壺形埴輪実測図(1)

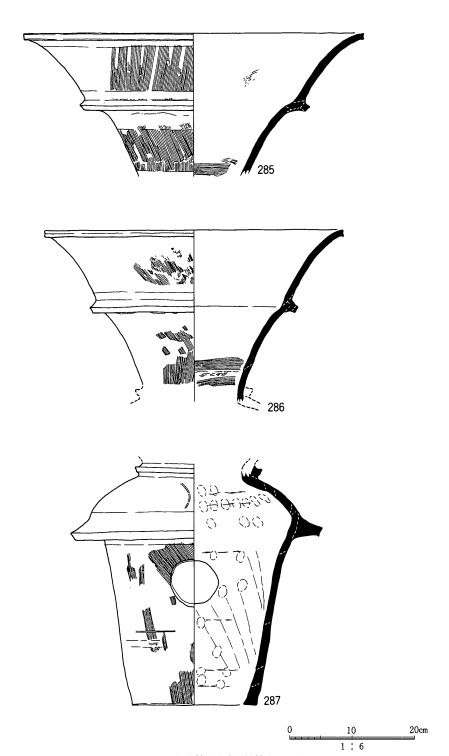
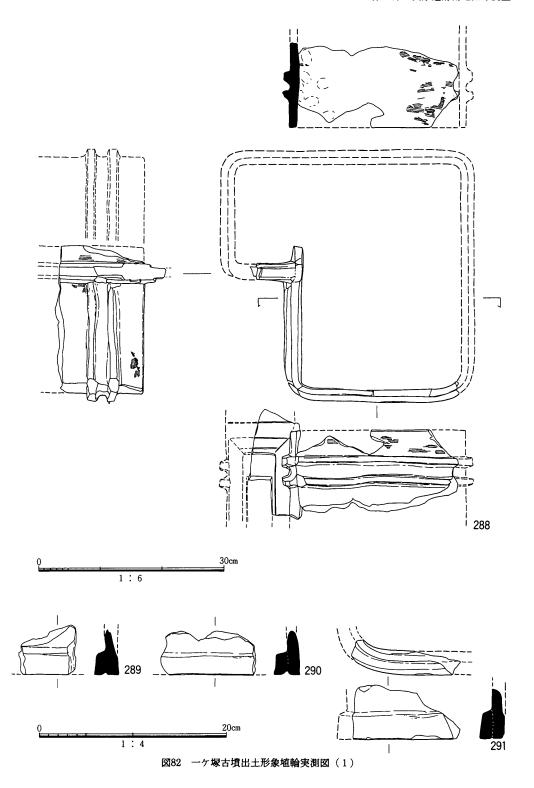


図81 一ケ塚古墳出土壺形埴輪実測図 (2)

第1節 長原遺跡南地区の調査



定方向のハケ調整(17条/cm)が全体にみられるが、網代や押縁の表現は認められない。 平側の壁の一面には、縦長の長方形と正方形の切取りがあり、入口と窓を表現したものだろう。また、その壁面には基部上端から屋根との接合部近くまで、一部は切取り面となりながら縦方向に刻まれる線刻がある。しかし、妻側の壁には切取りや線刻はなく、縦方向のハケ調整(12条/cm)がみられるだけである。この壁体部分の法量は桁行23.3cm、梁行20.9cmで、屋根の平面形のわりに、桁行と梁行であまり差がない。基部は高さ5.9cmで、上端に張出し幅2.3cm、厚さ2.7cmの突帯をめぐらす。突帯の断面形は台形に近く、先端をヘラ状の工具で削り、やや下向きの面をつくっている。縁に沿ってハケ調整(17条/cm)を施す。接地部分には、妻・平両側に半円形のスカシ孔が中央にそれぞれ1個所ずつ開いている。突帯貼付け→ハケ調整→壁面の線刻・切取りという作業手順がうかがえる。色調は灰白色であるが、部分的に赤色顔料の付着が認められる。胎土には石英・チャート・雲母・赤色粒が含まれる。

293は切妻の高床式建物に復元される。平側での破風板両端間の長さは64.5㎝、妻側で31㎝と推定され、破風板頂までの残存高は34.5㎝である。屋根には線刻で押縁が表現されている。その線刻は2本で一対となって、5個所で棟を横断している。また、それらの両端を押さえるように横方向に2条の線刻を施し、その間に縦方向の線刻を約1.5㎝間隔に

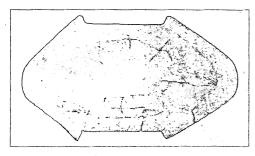


写真13 一ケ塚古墳家形埴輪292屋根

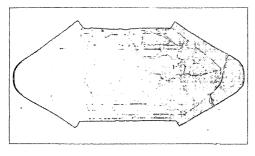


写真14 一ケ塚古墳家形埴輪293屋根

刻んで梯子状にしている。同様な梯子状の線 刻は軒先に近い部分にもみられる。平側の壁 面は、ナデ調整ののち、横または縦方向の線 刻を施している。それには複線で引かれたも のと、単線のものがみられ、前者は柱や長押 を表現したものと思われる。そうすると桁行 3間の建物を表現したものと考えられる。 側の壁面の一方には長方形の切取りがあり、 入口の表現と思われるが、この壁面はほぼ全 体にハケ調整(7条/cm)を残している。ま た、施されている線刻にも粗略さがうかがえ、 複線で引かれるものも平行な線とはなってい ない。複線で引かれたものを柱と考えてよけ れば、棟持柱や梁などにあたるものがある。

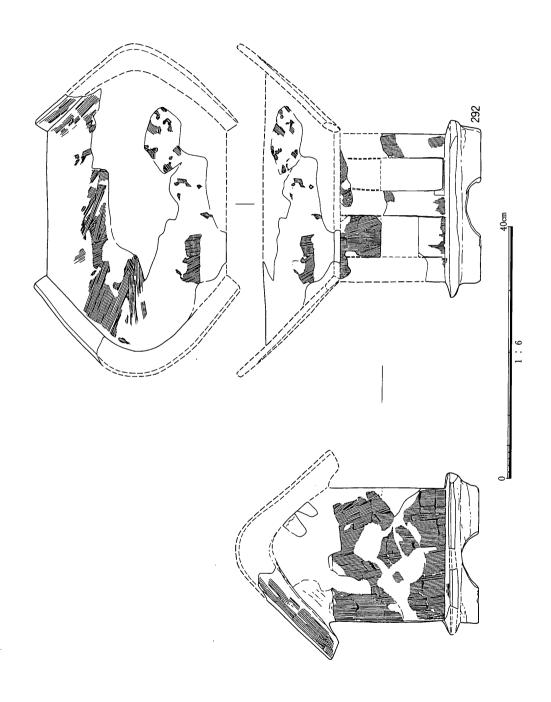


図83 一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(2)

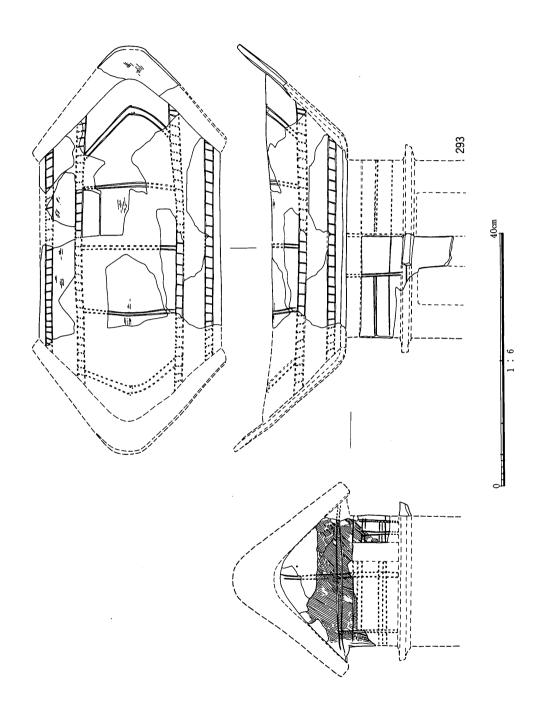


図84 一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(3)

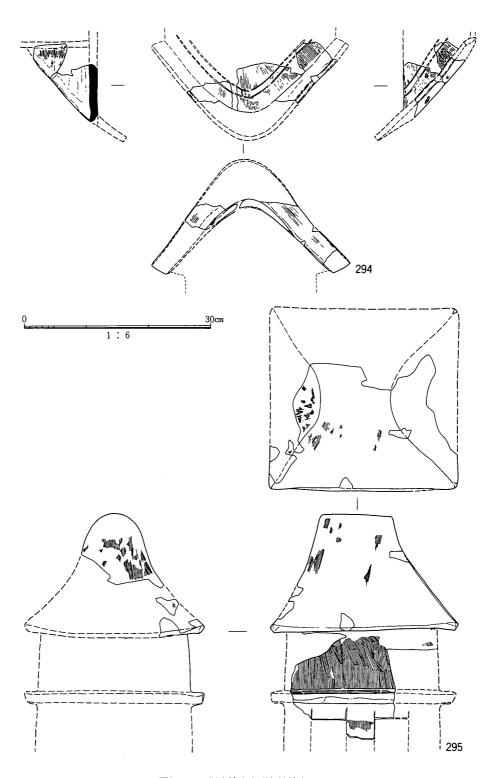


図85 一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(4)

入口の向かって右側に、2組の複線が認められるが、入口に近い方は扉の取付く柱、もう一方が角柱と思われ、梁行は2間と考えてよいだろう。桁行方向28.0cm、梁行方向20.8cmである。基部の残存高は8.0cmで、上端に張り出し幅2.3cm、厚さ1.6cmの板状の突帯をめぐらす。突帯との接合部には横1本の線刻があり、突帯貼付け位置にあらかじめ目安を設けていたようである。突帯の下には方形の切取りがあったことが、平側の一面で確認される。色調はにぶい黄色、胎土には長石・石英・チャート・赤色粒を含んでいる。

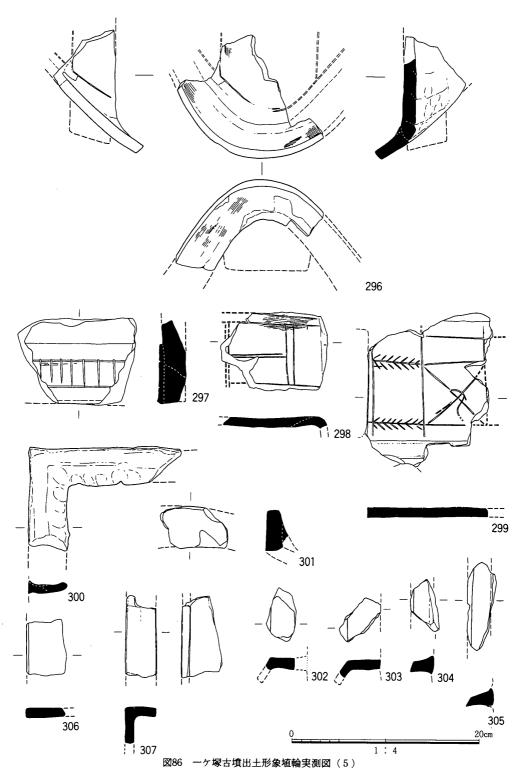
294は破風板と棟頂部の破片である。293の切妻の家とよく似た形態をとるが、屋根と破風板の接合方法、破風板側辺の調整法、線刻による押縁の表現に違いがみられることから別個体と判断した。破風板は棟の前面に付けられるのではなく、棟上に載せられ、その側辺には強いユビナデが施されている。また、棟を横断する2本一対の線刻があるが、軒と平行する梯子状の線刻はみられない。妻側左右の幅は32㎝と推定される。表裏にハケ調整(7条/㎝)が認められる。破風板の一部に赤色顔料が残る。色調は灰黄色、胎土に長石・石英・チャート・赤色粒を含む。

295は寄棟の高床式建物に復元される。正面左右の軒先間が30㎝、側面の軒先間が29㎝、残存高は36㎝である。側面からみた棟頂は角張らず、U字を逆さにした形態をとる。屋根には縦方向のハケ調整(約16条/㎝)があるが、線刻などは認められない。壁面が残るのは正面側だけであるが、こちらも縦方向を主とするハケ調整(13条/㎝)があるだけで、線刻などはみられない。正面幅24.5㎝、側面24㎝前後と推定される。屋根と同様、正方形にちかい平面形に復元される。基部の上端には、張出し幅2.2㎝、厚さ2.5㎝の断面台形の突帯がめぐる。突帯の先端部分にはヘラで平坦面をつくるが、上面には横方向のハケ調整(16条/㎝)が行われている。突帯の下2.5㎝ほど間隔をおいて方形の切取りが2個所にある。色調は灰白色、胎土には長石・石英・チャート・雲母・赤色粒を含んでいる。

296は破風板と棟頂部の破片である。押縁の表現と思われる線刻が、破風板に平行する方向、あるいは軒先に平行する方向に引かれる。裏面には粘土の継目を残す部分があり、棟柱を付けていた痕跡と思われる。破風板は他の個体に比べて厚く、側辺もていねいに整えられている。破風板外側にハケ調整(12条/cm)をよく残す。色調は灰黄色で、胎土に長石・石英・チャートのほか雲母を多く含む。

297は屋根の軒先である。先端部に幅6.3㎝、厚さ5㎜の粘土帯を貼付け、その間に横方向の梯子状の線刻を行う。先端部での厚さが2.9㎝あり、他の家形と比べてきわめて厚い。表面は全体にナデ調整される。色調は浅黄橙色で、表面から裏面の一部まで赤色顔料の付

第1節 長原遺跡南地区の調査



着が認められる。胎土には長石・石英・チャート・雲母・赤色粒が含まれている。

298は壁のコーナーの破片である。色調はにぶい黄橙色、胎土に長石・石英・チャート・赤色粒のほか、わずかながら雲母を含む。293あるいは294の一部である可能性が高い。2.本一対となった線刻が縦横に引かれている。表面は部分的にハケ調整(7条/cm)がみられるが、ほとんどはナデ調整されている。

299は壁面の破片である。残存高16.4cm、左側辺に切取りがあり、入口にあたると思われる。下端付近には、接合のはずれた跡があり、幅約2cmの突帯がめぐっていたと思われる。その下に切取り部分があるが全体の形は不明である。壁面の中央には、縦または横方向の線刻のほか、綾杉文や直弧文のような文様もある。色調は浅黄色で、胎土に長石・石英・チャートを含む。表面に赤色顔料が付く。

300は家形埴輪内部の突帯と思われ、外側に接合の剝がれた痕がある。表裏に指頭圧痕 を顕著に残し、外枠に沿って接合時についたユビナデの痕が明瞭に残る。色調はにぶい黄 色、胎土に長石・石英・チャート・赤色粒を含んでいる。

301~307は同一個体の破片と考えられるもので、色調は黄橙色、胎土に長石・石英・チャート・雲母・赤色粒を含んでいる。301は破風板、302~305は裾廻台、306・307は柱であろう。裾廻台には2形態があり、張出し幅が大きく、やや薄手のもの(302・303)と、張出し幅が小さく、肉厚になるもの(304・305)がある。307は角柱にあたろう。このように破風板をもち、裾廻台が上下2段にめぐると考えられることから、入母屋あるいは切妻の高床式の建物であったことが推測される。どの破片にもハケ調整の痕は認められない。

盾形埴輪(308~314) 7点の破片があるが、2形態に分けることができる。一方は盾面に山形文や菱形文を線刻するもの、他方は靱形埴輪の胴部によくみられる「忍岡系対称文」を施すものである。前者としては、308~311がある。色調は灰白色、胎土に長石・石英・チャート・雲母を含むが、すべてが同一個体とはしがたい。308は盾面と円筒の接合部付近のものである。表面は縦方向と斜方向に引かれた平行線によって区画されるが、縦方向の線刻の外側が外区と考えられよう。線刻の行われる順序としては、内区に残る縦横の格子目を全体に配したのち、菱形文を刻むが、縦方向に入る平行線で菱形文を分断し、その間と外区の菱形文についてはナデ消している。外区の山形文は最後に刻まれている。309・310は内区の一部と考えられるが、やはり縦横の格子目を線刻したのちに菱形文を刻んでいる。308の菱形文に比べやや小さい。311は1/2または1/4の菱形文と縦横の平行線が刻まれている。また、ナデ消された線刻の痕が随所に認められる。文様からみて内区の破

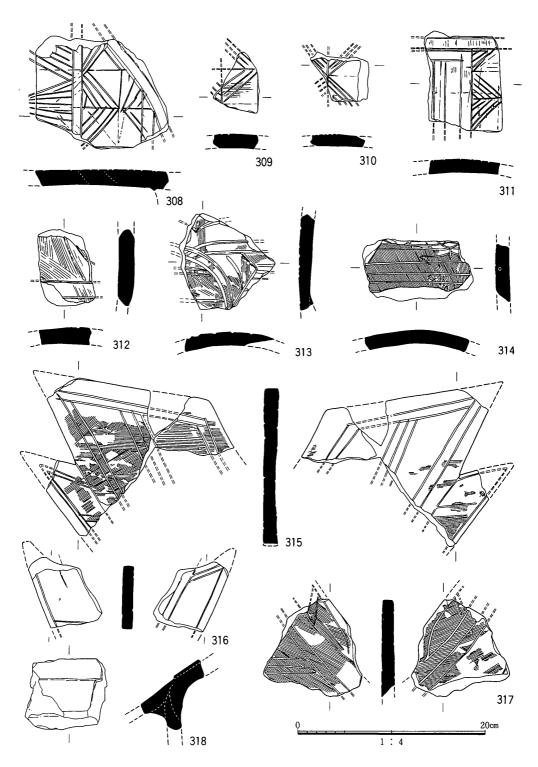


図87 一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図 (6)

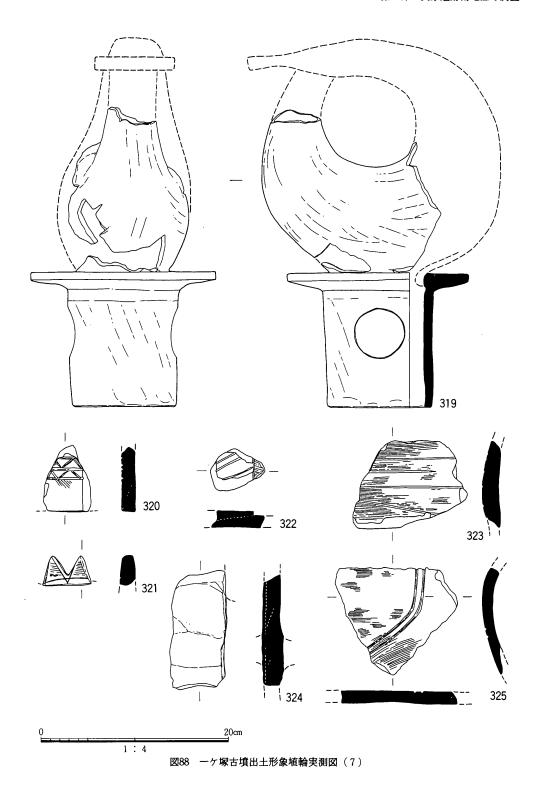
片であろう。310以外の破片の表面にはハケ調整(6条/cm)の痕が残る。

312~314は表面に「忍岡系対称文」を施すものだが、3点とも横断面が曲線を描いており、靱形埴輪ではなく、奈良県佐紀陵山古墳の盾形埴輪に類するものと思われる。いずれも色調は灰白色で、胎土に長石・石英・チャート・雲母・赤色粒を含んでいる。313は万年筆のペン先のような文様と、曲線を描きながら交差する平行線、それに横方向の平行線などを加えた線刻が施されている。314も基本的に313と同じで、ペン先状の文様などから構成されているが、粘土の継ぎ方からみると天地逆の文様となるようで、ペン先状の線刻の下にさらに4本の平行線が刻まれる。

衣蓋形埴輪(315~318)315~317が立飾り部分、318が笠部の破片である。色調は浅黄色、胎土に長石・石英・チャート・赤色粒を含み、立飾りには赤色顔料の付着が認められる。315は立飾りの先端部だが、復元される先端左右の幅が19㎝あり、大型の衣蓋であることがわかる。外形に沿うように2本一対となる平行線が引かれ、中央に、平行する3本の線刻が縦方向に入れられる。外側に付く鰭状飾りの一部も残る。316は外側の鰭状飾り、317は内側の鰭状飾りである。317の片面には、立飾り本体側の横3本の平行線が認められる。318は笠と基部の接合部分で、断面の観察から次のような手順で組み立てていることがわかる。まず、基部から笠の上半部までを成形し、その後に笠の下半部を付ける。そして笠部に突帯を貼付け、縦方向の線刻を施している。

鞆形埴輪(319)残存高31.6㎝、基部の突帯位置での幅19.6㎝である。多くの鞆形埴輪は表面を線刻で飾っているが、本例にはそれが認められず、鞆形埴輪以外の埴輪、例えば鶏の可能性も考慮したが、正面からみたばあいの輪郭が大きく円弧を描くことから、鶏の頸部や胴部とはしがたい。しかし、確実に鞆形であるといいきることもむずかしい。表面はユビナデ調整によって仕上げられている。基部は高さ14.4㎝、中央やや上位に円形の透かしを2方向に開ける。その上端に張出し幅3.8㎝のツバ状の突帯がめぐる。基部もユビナデ調整によって仕上げられている。色調は浅黄色、胎土に長石・石英・チャート・赤色粒を含んでいる。

草摺形埴輪(320) 裾廻りの破片である。先端から3.2㎝ほどあけて横方向の線刻を3本以上にわたって施す。その線刻の間を埋めるように、一辺ずつ刻まれた山形文が配されている。横断面はあまり曲率をもたず、大型品であったことをうかがわせる。表面はハケ調整(8条/㎝)ののち、ナデ調整、線刻と進められる。色調は灰白色、胎土に長石・石英・チャート・雲母を含んでいる。



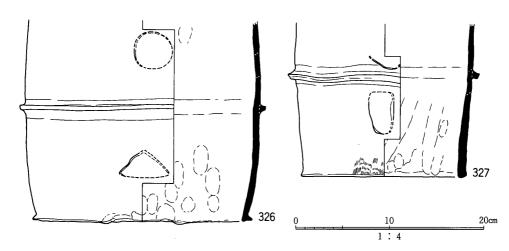


図89 一ケ塚古墳出土形象埴輪実測図(8)

不明埴輪(321~325) 321は山形の突起を二つもつもので、表面にだけ、縁に沿って線 刻が行われているほか、山形の谷を結ぶように弧状の線刻がみられる。色調は灰白色、胎 土に長石・石英・チャート・雲母・赤色粒を含む。

322・323はともに色調が灰白色で、胎土に長石・石英・チャート・赤色粒を含んでおり、同一個体の可能性がある。表面にのみいくつか線刻がみられるが、それらはほとんど平行することなく、間隔も一定しない。322はハケ調整(約10条/cm)ののち、粘土を貼り足し、その端をヘラで切って面を整えている。323の表面にもハケ調整(10条/cm)がみられる。これだけの破片では判断しがたいが、322は水鳥の羽根、323は尾羽根の可能性が考えられる。

324は板状の破片である。厚さ1.5㎝の粘土板に、さらに厚さ4㎜の粘土板を貼付けている。表裏に接合の剝がれた跡が認められる。上端付近には、切取りの行われている部分もある。色調は浅黄橙色、胎土に長石・石英・チャート・雲母が含まれる。

325は図の上下方向の断面が曲線を描く破片である。家形の屋根とするにはその曲線がゆるやかで、表面の平行する2本の線刻も幅広で深い。線刻は途中でゆるやかに屈曲している。また、表裏にハケ調整(8条/cm)が認められる。色調は明褐灰色、胎土に長石・石英・チャート・雲母を含んでいる。 (櫻井久之)

形象埴輪底部(326・327)326は大型品で、最下段から上に三角スカシと円形スカシが穿たれている。内外面の調整はナデである。327は形態では円筒埴輪と区別しがたいが、隅丸の方形スカシと半円形らしいスカシが、326のように各段に連続して配されている。

内面はナデ、外面は部分的にタテハケが認められる。何らかの形象埴輪であろう。(積山)

•86号墳

遺構 (図90・91, 図版22・23)

82-46次調査で検出した古墳で、第7B層の上に築かれていた。墳丘の盛土は地山(第13層)と第7B層の大きなブロックなどで構成され、乱雑に積み上げている。第6層以後の水田開発に伴い、墳丘は著しく改変をうけている。完全に埋没するのは第2層(近世)以前であるが、長原古墳群の多くが第4層(黒色土器・瓦器を含む)によって直接覆われているのに対し、比較的後世まで一部が地表に残っていた可能性が高い。

第6・7トレンチで墳丘のコーナーを検出し、これをもとに復元すると一辺11~11.5m の方墳と推定される。第1トレンチの南端で幅約2m、深さ約0.15mの周溝を検出し、埴輪などが出土した。周溝を明確にしえたのはこの部分だけで、第2・3トレンチでは周溝埋土と思われる層準が認められたものの、西端の立上がりは検出されなかった。

S D01は周溝の埋土を切って掘削され、南から北へ流れていた溝で、その流路は86号墳の墳丘西辺のラインに沿っていた。幅約0.8m、深さ0.2mである。また墳丘上では第3層基底面の溝S D02を検出した。

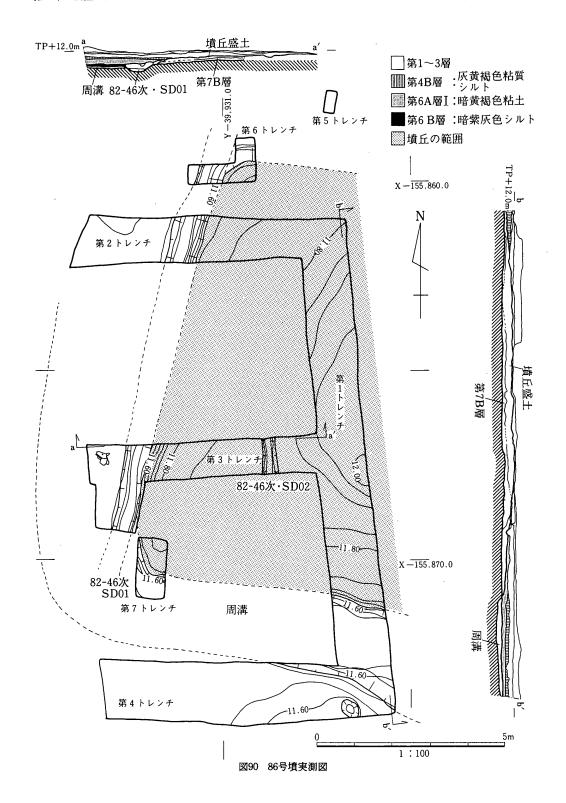
遺物は、第3トレンチ西端で、周溝から馬形埴輪の頭部345が半載された状態で、内面を上にして出土した。第6トレンチから胴部らしい細片がかなり出土していることから、元来は墳丘の南西コーナー付近にたてられていた可能性が高い。ほかに、330・332が第2トレンチ、336・338が第3トレンチ、334・335が第6トレンチの、いずれも周溝埋土から出土し、各々その上層から329・331・333が出土した。また第1トレンチの周溝から344が出土した。337・339・340・343は第2・3・6トレンチのSDO1から、341・342は第5トレンチから出土した。328は工事の掘削時に採集した。新しい層準から出土したものも多いが、とりあえずその多くは86号墳に伴うと考えている。 (積山)

遺物

須恵器 (図92, 図版80)

杯蓋(328・329)口径11.5~11.7㎝で、いずれも天井部は丸くなるタイプである。328 は稜が比較的鋭く、ヘラケズリの範囲は広い。端部内面は鋭い稜をなす。ロクロ回転は左 回りである。329は稜の断面が三角形で、端部面の稜は鈍い。

杯身(330) 口径10.4cmで、底部は丸い。口縁端部は段をなす。ロクロ回転は右回りで



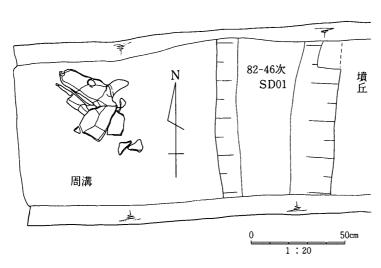


図91 86号墳馬形埴輪出土状況実測図

ある。

高杯(331)脚端部の径約8.2㎝で、端部外面は稜をなさず、断面形は薄くとがっておわる。小破片のため、スカシ孔の数などは不明である。

器台(332)ややに ぶい稜で区画された段 ごとに、波状文を2列 ずつ施して四方にスカ シをあけている。スカ

シ孔は三角形と半円形で、両者は段ごとに千鳥状に配されている。

以上の須恵器のうち、確実に86号墳に伴う330・332などはTK47型式ごろと思われる。 円筒埴輪(図92, 図版82)

すべて無黒斑で、窖窯焼成である。外面調整は一様に斜めに傾いたタテハケのみで、低い台形のタガを有している。タガの貼付けは粗雑なヨコナデによっており、粘土紐の接合痕が残っているもの338もある。口縁部はヨコナデでシャープに仕上げている。内面はナデ調整である。色調、焼成、ハケ工具などにより、4種類に分類できる。

333~335は、外面のハケメが粗く($4\sim5$ 条/cm)、淡赤橙色を呈する。焼成は極めて堅緻である。335はタガより下の外面は板ナデのようで、最下段であろう。336はハケメ($5\sim6$ 条/cm)がやや乱雑で、灰褐色を呈し、長石・石英などを多く含んでいる。337・341・342は橙~にぶい橙色で外面のハケはひじょうに細かい($13\sim14$ 条/cm)。内面はナデで、焼成は堅緻である。338・343は浅黄橙色で、ハケメは約6条/cmである。焼成は良好ながら、土師器のそれに近い。

朝顔形埴輪(図92,図版82)

339・340は剝離が著しく、内外面の調整などは不明である。同一個体か。344は最下段の円筒で他の埴輪より大きく朝顔形かもしれない。内外面ともナデ調整である。(積山) 形象埴輪(図93, 図版81)

第111章 調査の結果

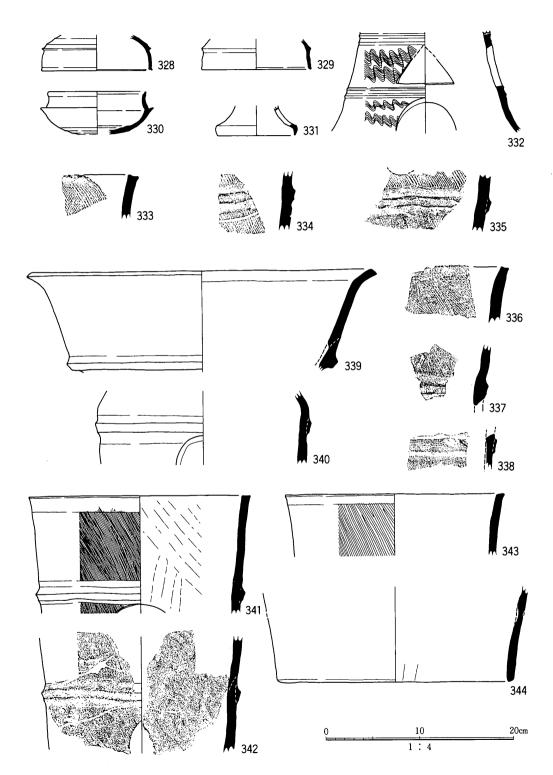


図92 86号墳出土遺物実測図

馬形埴輪(345)頭部の片面分がある。長さ40.8cm、残存高35.1cmである。図でみるように、轡などの細部はデフォルメされているが、全体にていねいな作りで肉感的な表現である。面繋は剝落しているものもあるが、頰革・額革・鼻革があり、額革と頰革のつながりには辻金具が表されている。鏡板はf字形を写したものと思われ、飾鋲の表現がみられる。引手の表現はあいまいで、直接手綱が鏡板・轡に取付く可能性がある。この手綱は頭部の後で収束している。首には列点文を2段に施した帯があり、胸繋を写したものと思われる。外面は全体をナデで調整している。内面には粘土紐の接合痕やナデ・ユビオサエがよく観察できる。これから、幅数cmの粘土紐を順次筒状に鼻先へむかって積み上げて製作

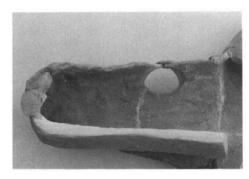


写真15 86号墳出土馬形埴輪345の内面

し、のちに頰骨の粘土板や面繋・手綱などを 取り付けたことがうかがえる。 (岡村)

• 落込み1 (図111, 図版31)

82-34次調査で検出した。調査区内では長さ3.8m、深さ0.05mの浅い落込みで、埋土は堅く締まった黒灰色シルト質粘土である。この遺構の埋土・形状は、南の道を隔てて存

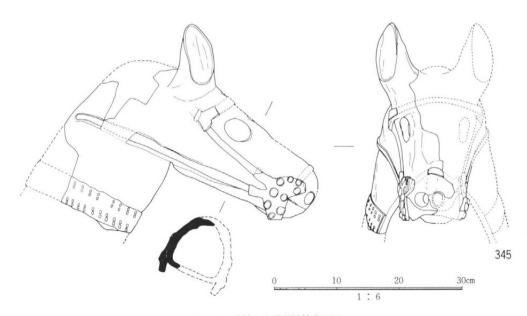


図93 86号墳出土馬形埴輪実測図

第111章 調査の結果

在する第18次調査地の古墳周溝[大阪市文化財協会1980]に酷似している。古墳であれば 北側に墳丘部分が存在する。遺物はない。

• 落込み2 (図111)

82-34次調査の東端部で検出した。調査区内では長さ2m、幅1.1m、深さ0.1mの浅い落込みで、埋土は落込み1と同じである。古墳であれば北側に墳丘部が存在する。遺物は出土していない。 (鈴木)

3) 飛鳥~奈良時代の遺構と遺物

・82-19次調査

水田

遺構(図94・95, 図版24・25)

本調査地のほぼ全域で第6A層上面の水田遺構を検出した。この水田遺構は水成層である第5層によって埋没する。耕土は第7層を耕起して形成された第7A層がその後の堆積物がないかごく少量の地点においてはそのまま第6A層水田の耕作土となっている。一方、第7A層の形成後の堆積層が厚い地点では第6B層さらに第6A層と土質に違いがある。

I区の北半部には第6 A層下に水成層が介在し、下位の水田面(第6 B層)と明瞭に区分できる。こうした堆積状況はII区南部でも認められた。このほかの地区では第6 A層と第6 B層の区分が困難であったため第5 層下で検出される第6 A層上面がおもな調査対象となった。I区北部とII区南部では第6 層相当の水成層が比較的厚く堆積したために、旧畦畔が完全に土砂に埋没し、また、旧微地形の変化を生じたため、第6 A層上面水田の畦畔は第6 B層上面水田のそれとは位置や方向が異なっている。そのほかの地区では基本的には第6 B層上面水田の畦畔を踏襲していると思われるが、若干異なる部分もある。第7 A層上面水田は第6 B層ないし第6 A層上面水田の耕作時に耕起され、畦畔痕跡を認めることができなかった。また、これまでも多く認められているように、畦畔は古墳の墳丘に接合し、墳丘を必要に応じて削りこむなどして積極的に利用している。61号墳は未調査の南東隅を除く墳丘の三つの隅に、62号墳は四隅に、63号墳は未調査の南東隅を除く三つの隅に畦畔が接合しており、方形の墳丘の各辺を畔として利用し、墳丘の四隅を畦畔の接点として意識している。62号墳は墳丘の西・東辺が北・南辺以上に大きく削りこまれ、現存する墳丘の高まりは長方形を呈していた。また、65号墳も検出された南辺があまり削りこ

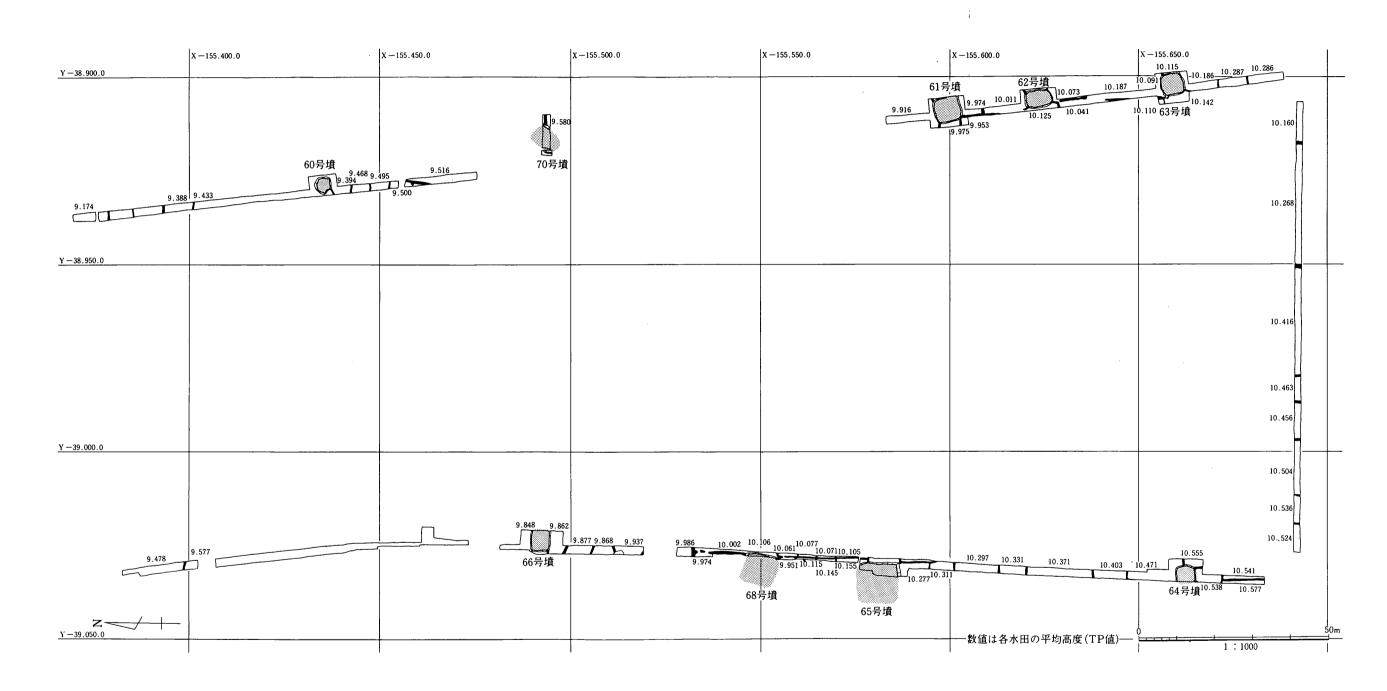


図94 82-19次 第6 A層上面水田畦畔配置図

まれていないのに対して、東辺は大きく垂直 に削りこまれていた。その他の古墳も墳丘外 周が幅約1mほど削られたものが多い。

第6 A層上面の畦畔の配置については、既 応の資料を総合して検討する必要があるが、 ここでは注目すべき畦畔について記すにとど め、続刊における検討に備えたい。東隅から 北にのびる畦畔は下幅1.2mをはかる大きい 畦で、北端で東西方向の畦畔に接続し、T字 状をなす。この東西畦畔は1984年度調査でも 検出された下幅0.9mの大きい畦で、間に古 墳2基を介しながらも100m以上直線的にの びる可能性が高い。また68号墳南東隅と65号 墳北東隅をつなぐ畦畔は、規模は小さいが前 記の南北畦畔と一連のものとみることが可能 である。

第6 A層水田の上面の平均標高をみると、おおむねIV区南部がもっとも高く、北東方向に高度を下げていくことがうかがわれる。したがって、用水の流れも基本的にはこの方向と思われる。II区南部の63号墳北西隅には墳丘西側の水田から北側の水田に引水する水口とそこから北西の水田に引水する小水路が平行する畦畔を築いてつくられている。そのほか、62号墳の南西隅と68号墳の南東隅に近い位置で水口が確認されている(註5)。



写真16 82-19次 II区63号墳北西隅の水口と畦畔

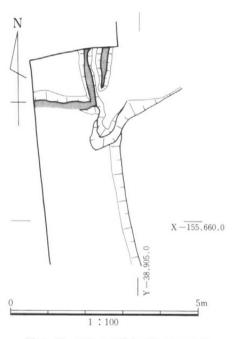


図95 82-19次 63号墳北西隅の導水施設

遺物

土師器 (図96, 図版83)

60号墳の墳丘上面で底部を欠く杯346、61号墳の墳丘上面で高杯347を出土した。前者は 内外面の調整が不明であり、時期は明確でないが、平城宮における杯Aである。後者は杯

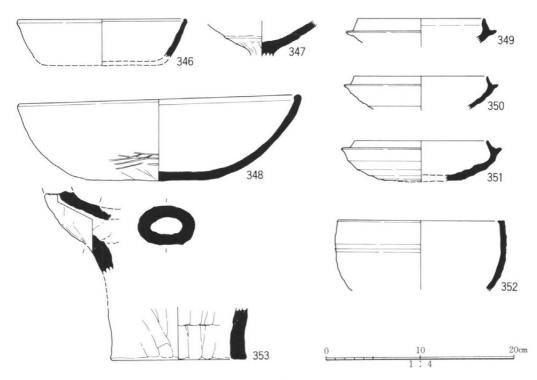


図96 82-19次 水田および溝出土遺物実測図



写真17 82-19次 II区第6A層上面の 土師器鉢出土状況

部の底部片であるが体部との接合部に段をつくるもので、飛鳥・藤原地域の編年における I~IIに多くみられる。348は第6A層水田の上面に食込んだ状況で出土した。丸底の底部で口縁部がやや内湾ぎみになる。口縁端部は丸くおさめる。体部外面には横方向のヘラミガキを施し、底部外面はヘラケズリする。内面の調整は器壁が荒れていて不明である。7世紀後半~8世紀初頭のものであろう。

須恵器 (図96, 図版83)

いずれもTK43~TK209型式の杯身であ

る。349は第6A層、350は第7A層ないし第6B層から出土した。351は口径14.0㎝の杯身で、端部が丸くおさまる短い口縁部をもつことからTK43型式と考えたが、体部外面のヘラケズリが上位までおよんでおり、61号墳の墳丘上面で出土していることから、古墳に

伴うものと考えるべきかもしれない。

溝

遺構 (図97~99, 図版26)

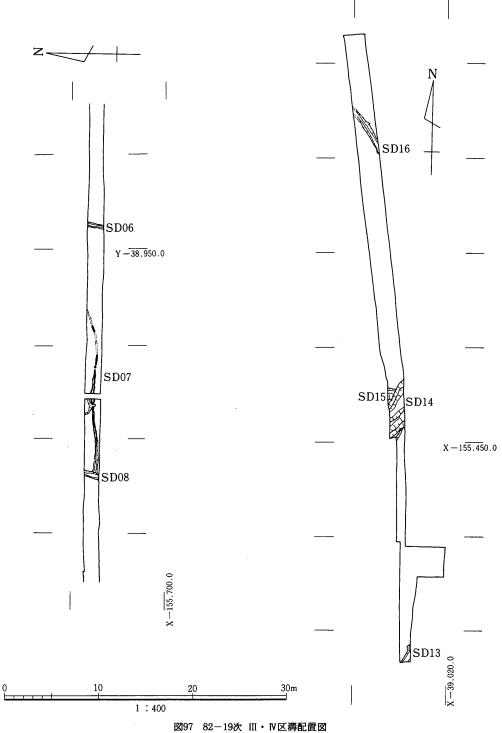
82-19次調査で検出された溝は表3のとおりである。溝には検出面が第7A層下面ないし第6B層下面・第6A層下面ないし第6B層上面のものに分けることができる。82-19次I区SD02・03(図98)はいずれも第6B層下面ないし基底面で検出され、SD02と一連と思われる87-70次調査のSD01や83-59次調査の溝も同様の層位関係にある。一方、SD02・03と一連の溝と考えられた82-19次VI区南部のSD14(図99)は、今回第6B層上面の遺構と考え、その埋土は第6AII層と理解した。しかし、I区SD02・03の西への延長部分と思われるのはVI区のSD14あるいはそれに切られる東西溝SD15しかなく、SD14が第6B層下面段階にすでに存在していたと考えることも可能である。また、VI区SD14の南西で検出され、一連の溝と想定される85-70次調査のSD701・702は第5層で埋まったものと考えられており、今回の調査における層位関係の理解と一致していない。

I区中央部のSD02・03の北側には第6AII層の水成層で埋まる東西方向の大畦畔が約2.5mの間隔で2本認められた。この畦畔はSD02・03が埋まったのちに構築されたものと理解しうる。その後、第6AII層によって完全に埋没している。この畦畔の間および南側堤とSD02北側堤との間は周辺部とは異なり、粗い砂礫層が厚く堆積し、水流の激しさをみることができる。このことから両大畦畔の間は、第6B層上面水田の時期に水路としての役割を果たしていたと考えられる。

その他の溝は規模も小さく、 第6B層以下の水田と関係する 溝と考えられるが、明瞭な水成 層の堆積がなく、灌漑用であっ たと断定はできない。溝内部か ら出土した遺物はほとんどない。 しかし、I区SD02・03の埋土 上面で出土した須恵器の椀352 はこの溝の埋没した下限を示し ている。



写真18 82-19次 I 区第6 B 層上面の大畦畔 (この間を水路として利用している)



地区	番号(SD)	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	埋土	層 位
Ι区	01	2.4	0.6	0.1	灰黒色粘土	第6B層下面
1	02	1.9	1.4	0.3	灰~暗灰色粘土	第6B層下面
	03	1.8	1.5	0.4	灰~暗灰色粘土	第6B層下面
	04	1.8	0.6	0.2	含砂灰褐色粘土	第6B層下面
	05	2	0.4	0.1	暗灰色粘土	第6B層下面
Ⅲ区	06	1.7	0.5	0.05	灰黒色粘土	第6A層下面
	07	16	0.3	0.1	灰黒色粘土	第6A層下面
	08	1.5	0.6	0.15	灰~灰黒色粘土	第6A層下面
N区	09	1.8	0.3	0.03	灰黒色粘土	第6A層下面
	10	2.2	0.6	0.05	灰黒色粘土	第6A層下面
	11	1	0.4	0.1	黒色粘土	第6A層下面
V区	12	1	0.6	0.15	含シルト灰黒色粘土	第6B層下面
NZ	13	2	0.6	0.3	灰黒色粘土	第6B層下面
	14	4.5	3.6	1	灰白~黄褐色細~粗砂含砂 灰黒色粘土	第6B層上面
	15	1.3	1.1	0.5	灰黒色粘土	第6B層下面
	16	5	0.7	0.2	暗灰~黒色粘土	第6B層下面

表3 82-19次 第6 A層以下で検出された溝一覧

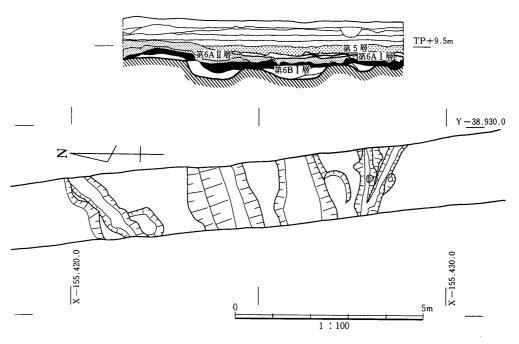


図98 82-19次 I区S D01~05実測図

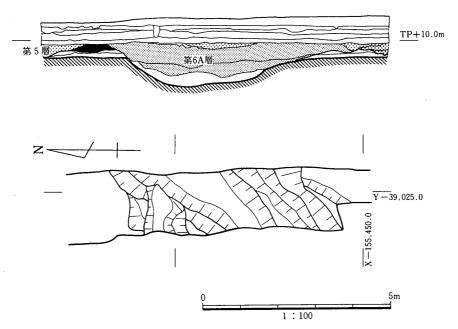


図99 82-19次 VI区S D14・15実測図

遺物 (図96, 図版83)

須恵器椀 (352) これは底部を欠き、台付である可能性がある。体部に 2 本の浅い凹線が接するように施され、その間は鈍い稜線をなす。口縁部はやや内湾ぎみで端部の上端をヨコナデし、面をつくる。焼きは悪く、瓦質を呈する。飛鳥 I ~ IIであろう。

TP+10.5m Y-39,030.0 Y -39,030.0 1:100

図100 82-19次 Ⅳ区円形周溝遺構実測図

円形周溝遺構 (図100, 図版27)

Ⅳ区南部の64号墳北側で検出された。第7 A層ないし第6B層下面で検出された。溝の内側は直径約2.0mで溝幅は0.2~0.5m、深さは0.05mである。北側の溝底は浅いピット状をなすところがある。周辺の地山上面には

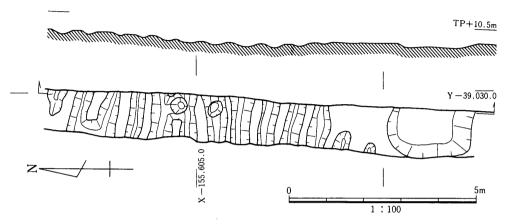


図101 82-19次 Ⅳ区畝状遺構実測図

第6A層上面からの踏込みが多く認められたが、この溝で囲まれた内側には認められず、水田に関わる遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。類例は城山遺跡で報告されているものがあるが [大阪文化財センター1986]、第13層相当層の下位で検出されているもので、層位的に大きく異なっている。また、東南地区の85-64次調査では、小型方墳の横に直径2.6mの円形周溝が検出されている。これは全周せず、一部とぎれているが、溝内から土師器壺などが出土し、小型方墳に付随する埋葬遺構と理解されている。

畝状遺構 (図101, 図版27)

Ⅳ区北部の第7A層ないし第6B層下面で検出された。南北11mの間、地山が浅く凹み、底面で東西方向の並列する構が認められた。これらの構は幅0.5m、深さ0.03~0.12mをはかり、淡灰色粘土層で埋まっていた。長原遺跡内ではほかに類例がなく、現状では性格を明らかにしがたい。出土遺物は土師器の細片のほか、鳥形埴輪(図96−353)が出土した。鳥形埴輪は首の部分と円筒部に分かれ、いずれも外面ナデ調整である。両者は接合できないが、調整・胎土の特徴から同一の個体とみてよい。 (京嶋)

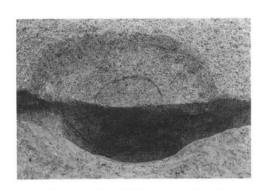


写真19 82-27次 WII区SB01の柱穴 (S P07)

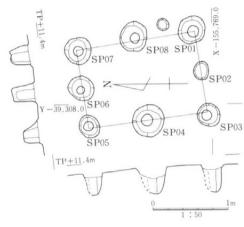


図102 82-27次 WII区S B01実測図

・82-27次調査

掘立柱建物

SB01(図102, 図版28)

▼Ⅲ区の85号墳(一ケ塚古墳)周濠外で、地山(第13層)の面で確認した建物である。直上層は第6 A I 層なので、これより古い遺構である。

建物は棟の方向がN-9°-Wで、桁行 2間×梁行 2間 $(1.6m\times1.1m)$ とひじょうに小規模である。柱穴も小さく、径 $0.23\sim0.45$ mの円形の掘形に径 $11\sim15$ cmの柱痕跡がかろうじて認められたにすぎない。掘形の埋土は地山 (第13層) などのブロックであった。

遺物がなく、その年代は確定できないが、 西のSD04や、一ケ塚古墳(85号墳)の周濠 に面した建物であることが注意される。一ケ 塚古墳と同時期とみることも不可能ではない が、SD04だけではなく、後述の第6B層上

面の水田畦畔や溝などの方向が、この建物の方向と近似していることも無視できない。

水田

遺構 (図103・104, 図版28・29)

本調査地で検出した水田遺構は上下 2 枚である。両者の耕土は、洪水層の第 6 A II 層の上下に堆積している。

下の水田層は、第6B層を耕土としている。この層準は、後述する溝SD01・02などと同一面で検出される。西端のVIII区では一ケ塚古墳(85号墳)周濠の中で第6AII層の下に、周濠埋土のブロックを含み上面に畦畔が検出された灰黒色〜暗灰色シルト質粘土の第6B層を検出した。ここでは層厚 $50\sim60\,\mathrm{cm}\,$

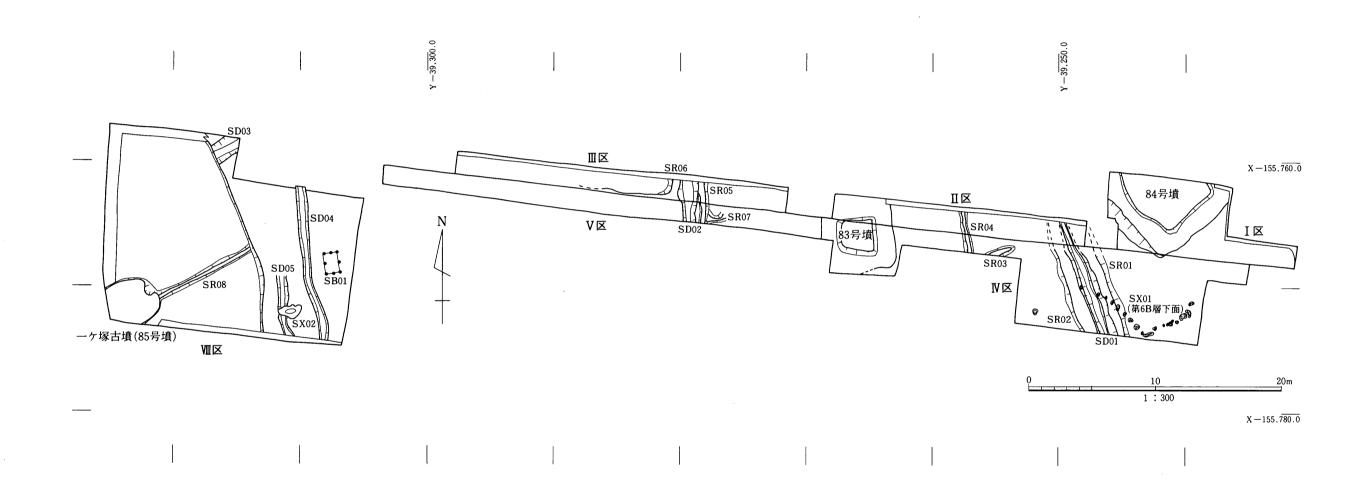


図103 82-27次 第6 B層上面遺構実測図

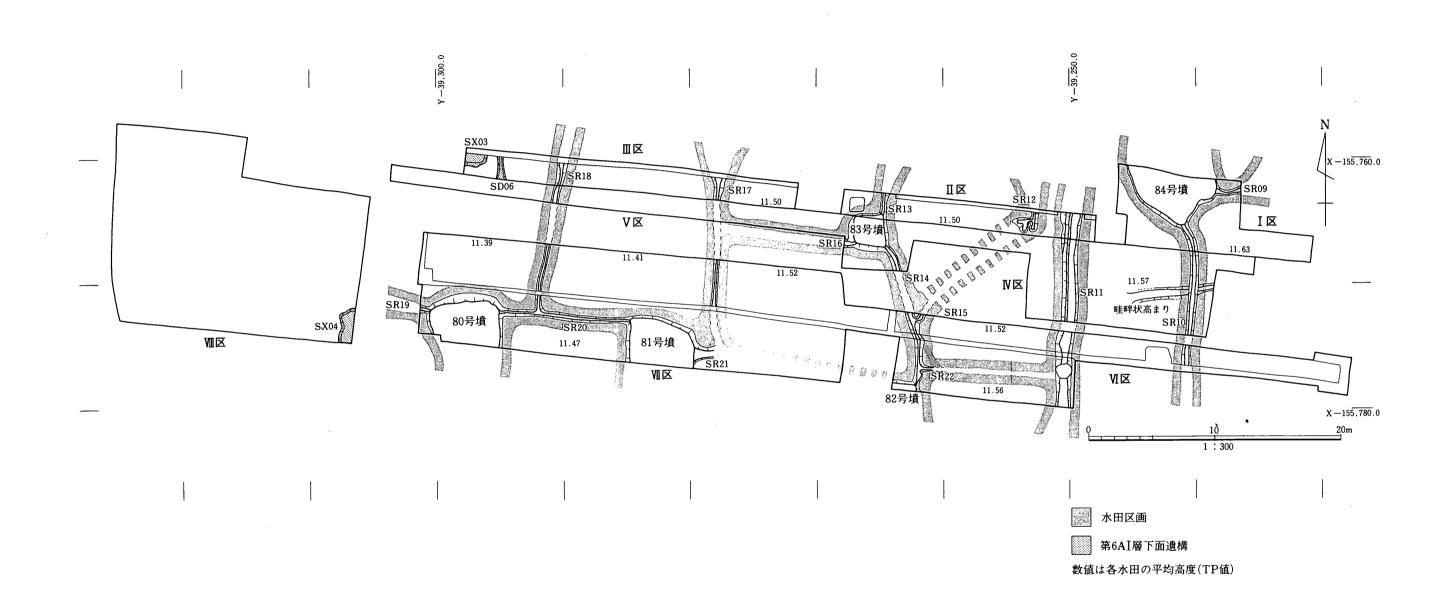


図104 82-27次 第6 A層上面水田畦畔等実測図

ように S R03が検出された。いずれも上面に第 6 A II層が残っておらず、下幅 $0.3\sim0.4$ m、高さ0.05m程度をかろうじて検出した。

この層準は水成の第6 A II 層が存在しないIII 区・ V 区の西半で、第6 A I 層の下位にプロックで含まれており、ここでは第6 A I 層が耕起された際に失われたと理解される。

上の水田層である第6AI層は、上面を奈良時代末~平安時代初期ごろの堆積とされる第5層の大規模な洪水層で覆われており、本遺跡で広範に検出される水田耕土層である。この水田では、古墳の縁辺部をかなり削りとって本来の墳形を変形させているが、遺存する墳丘のコーナーに畦畔がとりついている。このとりつき部での部分的な乱れを除くと、畦畔は北でわずかに西に傾きながらも、南北の方向をとっている。ただ、東西方向の畦畔については、古墳にとりつく部分以外の実態が明らかでなく、真東西とどの程度の偏差があるのか不明である。

SR11はN-3°-Eの方位をとる南北方向の大畦畔で、下幅約 $1.0\sim1.2$ m(上幅約0.5m)、高さ約 $0.25\sim0.30$ mで、他の畦畔は幅約 $0.3\sim0.5$ m、高さ約 $0.10\sim0.15$ mである。南北方向の畦畔は $N-2\sim9$ °-Eの方位で、SR11との東西の距離はSR10が東へ約10m、SR13が西へ約15m、SR16は西へ約28m、SR17は西へ約40.5mである。各水田は、西と北へむかうにつれ、標高が $0.05\sim0.10$ mずつ低くなっていた。

VIII区では第6 A I 層の上面が第5 層で保存されていなかったので、畦畔は失われていた。なお、第6 A I 層を除去すると、東端部のIV区で東西方向の畦畔状の高まりが検出された。この高まりは第6 A II 層の水成層が構成土となっているため、その堆積後に削り残されたものである。つまり、高まりの直上に第6 A I 層の畦畔がつくられたため、削り残された可能性があるが、実際には検出されていない。そこで、第6 A I 層の水田が経営されている期間中に畦畔の付替えが行われ、この高まりの直上の畦畔は姿を消したと考えることもできよう。

遺物 (図17・18, 図版45)

これらの水田の年代にかかわる遺物については、本節1)層序の項で示した。

溝

 $SD01 \cdot SR01 \cdot 02$

遺構 (図105, 図版30)



写真20 82-27次 IV区大畦畔SR11

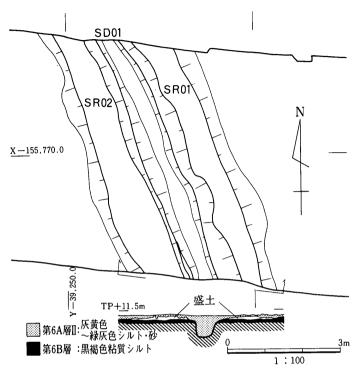


図105 82-27次 IV区S D01・S R01・02実測図

Ⅱ・Ⅳ区で検出した第6 B層上面の溝と、これに伴 う畦畔で、その方向はN-11°-Wである。S D01は 幅約0.6~0.9m、深さ約 0.5mの溝であるが、その 両側の第6 B層上面に、第 13層のブロックからなる盛 土が土手状に行われていた。 この溝の掘削土をそのまま 盛り上げ、畦畔SR01・S R02としたのであろう。い ずれも幅約1.3~1.7m、高 さ約0.1mであった。SD 01は第6AII層の水成層 (粗砂) で完全に埋まって

おり、周囲の第6B層の水田とともにこの洪水で廃絶したものである。

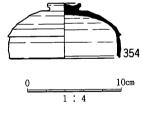


図106 82-27次 IV区SR01 出土遺物実測図

畦畔盛土の下面近くから古墳時代の須恵器蓋354が出土した。比較的残りが良く、SD01を掘削した際に84号墳の周溝の遺物が混じった可能性が高い。

遺物

須恵器 (図106)

杯蓋 (354) 口径11.6㎝、器高5.8㎝をはかる。丸い天井部の比較的広い範囲を回転ヘラケズリし、中央につまみがつく。ロクロ回転は時計回りである。

S D02 • S R05~07

遺構 (図107, 図版30)

III・V区で検出した。SD02は幅約0.9~1.6m、深さ0.4m程度の溝である。埋土は3層に分かれ、上層は人為的な埋土、中層は粘土で、下層は砂であった。SD01・SR01・02などを廃絶させた水成層の第6AII層は、ここでは中下層に堆積しているのみで、それ

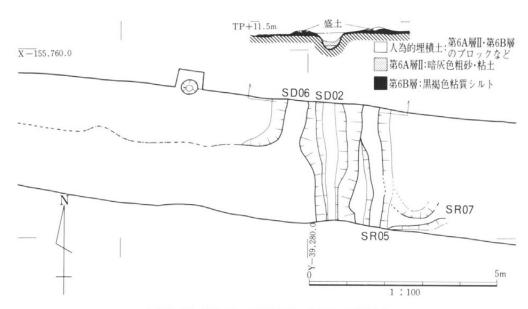


図107 82-27次 III · V区S D02 · S R05~07実測図

が再掘削によるのか、あるいはもともとこの 洪水がここまではさほどおよばなかったため かは不明であるが、その後も一定期間、溝と して機能したのちに埋められたと考えられる。 SR05・06はこの溝の両側の畦畔で、SR05 は幅1.3m、残存する高さ0.1~0.15mで、第 6B層上面に地山の第13層を掘削して幅0.6 m、残存高0.1mほど盛土していた。SR06



写真21 82-27次 III区 S D02断面

ではこの盛土は上の第6 A I 層の水田耕作によって多くが失われており、第6 B 層の幅 0.7m、高さ0.1m足らずの高まりの上にわずかに残っていたにすぎない。 S R 06は西へ直 角に曲がる様相を呈していたが、ほとんどが失われており、明らかではない。

S D02上層から円筒埴輪・朝顔形埴輪が3点出土した。357はⅢ区の第6 B層からも接合する破片が出土している。これらはS D02が埋められた年代を直接示すものではない。

遺物

埴輪 (図108, 図版82)

朝顔形埴輪(355)復元口径約48.5㎝の口縁部破片である。器面の剝離のため、調整の細部は不明であるが、外面の一部にタテ方向のハケメが残っている。口縁端部の形態・胎

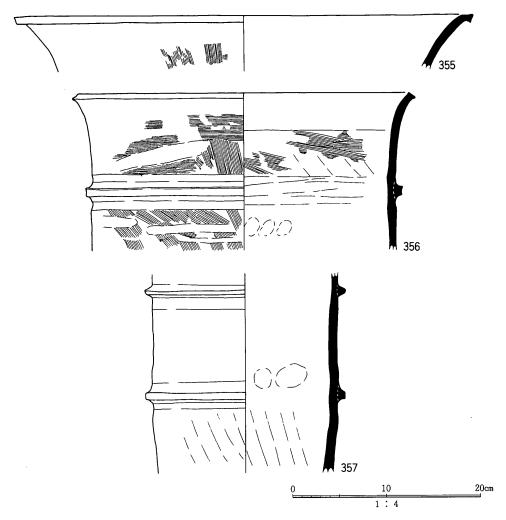


図108 82-27次 III · V区S D02出土遺物実測図

土ともに西約40mの一ケ塚古墳の朝顔形埴輪などとは趣が異なっている。

円筒埴輪(356・357) 356は復元径35.2cmで、口縁部は緩く外半している。外面調整はタテハケののち、ヨコハケ・ナデなどを施し、口縁部は内外面ともヨコナデしている。タガは台形でしっかりしている。内面はナデで、最上段にはやや斜めのヨコハケも行われている。黒斑が認められ、赤色顔料が塗布されていた。357はタガ部分の径が約21.5cmと小型で、外面調整は図の下段にナデが認められるほかは不明であり、内面調整はナデである。タガはやや不整形な形態をしている。黒斑が認められる。

これらの埴輪は、西隣の一ケ塚古墳に近い時期のものである。

S D03 (図109, 図版18)

▼区の北で、第6 A II 層除去後、検出した 溝である。検出幅1.6m、深さは0.2mで、一 ケ塚古墳の周濠とつながっていた。埋土は3 層にわかれ、中層に地山(第13層)のブロッ クが多く含まれていた。一ケ塚古墳より新し く、第6 A II 層より古い溝である。

遺物は須恵器の細片が出土したのみである。 S D04・05 (図110, 図版18)

▼四区の東で、第6AI層除去後、検出した 構である。SD04は検出幅0.6~0.8m、深さ 0.3m足らずで、直線的な北半部の方向はN

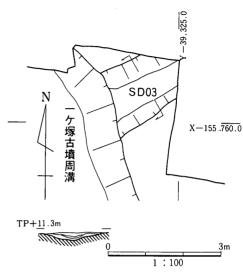


図109 82-27次 WII区S D03実測図

-5°-Wである。埋土は2層にわかれ、下半は水成の粘土であった。SD05は幅0.45~0.8m、検出長約5mで、南は深さ0.1mたらずで、北の方でしだいに浅くなり、その先は失われていた。遺物はない。

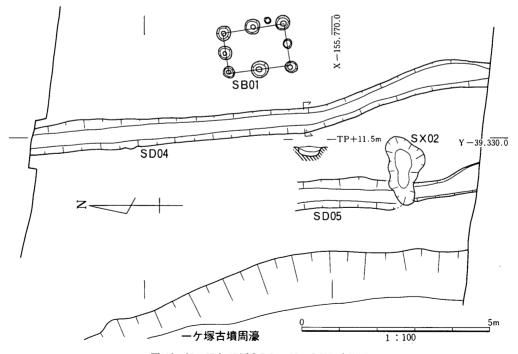


図110 82-27次 WII区S D04・05・S X02実測図

第111章 調査の結果 $\overline{X} = 155,890.0$ SD03~ 落込み 1-SD02 SD01 -SE01 10 Y-39,300.0 Ա_{20m} 図111 82-34次 主要遺構実測図

 $\stackrel{\square}{\mathbb{S}}$ S D 06 (\boxtimes 104)

Ⅲ区西端で検出した第6AI層下面の溝である。幅約0.4m、深さ0.1mたらずで、南でY-39.260.0は二股に分かれていた。

その他の遺構

S X 01 (図103, 図版16)

第6B層除去後、84号墳の周辺で遺構を検出した。周溝の南外側で、周溝の辺に沿って、不定形なくぼみ状の遺構が多数並んでいた。いずれも深さ0.05m以下と極めて浅い。埋土は第6B層で、本層の下面に伴うものである。埴輪列の痕跡かともみられるが、形状が不定形すぎること、84号墳は第7B層の上面に伴一うので、時期が合わないことなどからみて、そうは考えにくい。とりあえず、84号墳の周辺で第6B層の水田の時期に行われた何らかの耕作痕跡かと考えている。

S X 02 (図110, 図版18)

_ 第6AI層の下で、WII区で検出した性格不明の土壙状遺構である。東西の長径1.8m、南北の短径1.0mの規模で、埋土は水成層の砂(第6AII層か)であった。SD05を切っていた。

300 0 S X 03 (⊠104)

第6AI層下面の落ち込みで、III区西端で 検出した。東西1.8m以上、南北1m以上の 規模で、高さ11.1mの第13層(地山)が深さ 0.2mほど西へ落込んでいた。後述のSX04 と関連する可能性がある。遺物はない。 S X 04 (図104, 図版18)

WII区南東隅で第6AI層の下面で検出した落込みである。高さ11.4mの第13層が、SD 04をへて西から東に傾斜し、その深さは0.2~0.3m程度であった。

S X04と03の間(Ⅲ・M区とM区の間)には南北方向に小さな地形の落込みが認められ (図13・103)、現代でも北に流れる農業用水路となっていた。おそらくかなり古い自然地 形の痕跡であろうと思われる。 (積山)

•82-34次調查

濫

S D01 (図111·112)

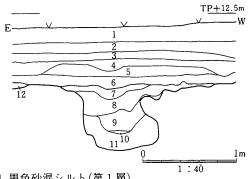
第6B層基底面で検出した断面U字形の溝である。幅0.8~0.9m、深さ0.7mで、埋土 は上から第1~4層に分かれる。第2・4層はブロックを多く含み、人為的な埋土と思わ れる。砂の堆積は全くみられない。水は地形から考えて南東から北西に流れる。南隣の第 18次調査地のSD01 「大阪市文化財協会1980」と同一の溝である可能性が高い。

S D02 (\$\omega\$111)

第6 B層基底面で検出した断面 U字形の溝で調査区を斜めに横切 る。幅0.4~0.5m、深さ0.2mで、 埋土は下部が黄灰色粘土、上部が 黄色粘土・灰色粘土のブロック混 合土である。

S D 03 (図111・113, 図版31)

第6A層基底面検出のU字形の 溝で、幅0.8~1.0m、深さ0.7m である。埋土は下底に黒灰色粘土 があり、中ほどまで砂と粘土が堆 積したのち、黄灰色粘土・灰白色 粘土のブロック混合土で埋ってい る。水は地形から考え、南から北 へ流れたとみられる。第18次調査



- 1 黒色砂混シルト(第1層)
- 2 灰白色砂礫多混シルト(第2層)
- 3 淡茶灰色砂混シルト
- 4 灰白色砂混シルト (第3層)
- 5 黄灰色シルト混粘土
- 6 灰黄色シルト質粘土(第6B層)
- 7 淡灰色粘土(SD01第1層)
- 8 灰色・黄色粘土ブロック混合(SD01第2層)
- 9 灰色粘土 }(SD01第3層) 10 黒色粘土 }
- 11 橙黄色粘土ブロック混灰色粘土(SD01第4層)
- 12 灰色・黄色粘土ブロック混合

図112 82-34次 S D01断面実測図 (調査地北壁)

第111章 調査の結果

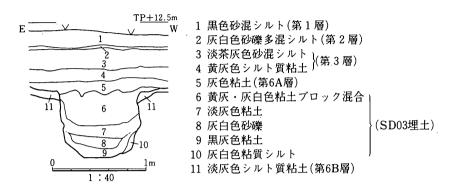


図113 82-34次 S D03断面実測図

で検出されたSD02 [大阪市文化財協会1980] と同一の溝である可能性が強い。(鈴木)

4) 中近世の遺構と遺物

・82-27次調査

溝

S D07

遺構 (図114, 図版32・33)

調査地を東西に貫くように検出された大きな溝で、2個所で直角に折れ、一部が南北方向をとっている。第4層の下、第5層の上から掘り込まれていた。検出した最大幅は約2m、深さはもっとも深い部分で約1mであった。南北方向の部分は長さ約13m、方位はN-6°-Wである。その北端から西へ伸びる部分は長さ約20mを検出し、その方位はE-4°-Sである。ここでは南の肩の一部に、蛇行して先行する溝らしき痕跡が認められた。西端部はトレンチ壁面の崩壊のため、明らかでない。また南端から東へ伸びる部分はE-7°-Nの方位で、長さ10m程度を確認した。埋土は水成層で、下位はシルト・礫などからなり、上位は砂である。底面のレベル差などから、水は南から北へ、また東から西へ流れていたと推定している。遺物はほとんどないが、わずかに瓦器の細片が $1\sim2$ 出土している。

S D 08 (図114)

II区の第3層と第5層の境界面で、南北方向に浅く検出した溝である。上部をかなり削平されているらしく、残存幅約1.5m、深さは0.1m足らずである。時期を判断できる遺物は出土していない。

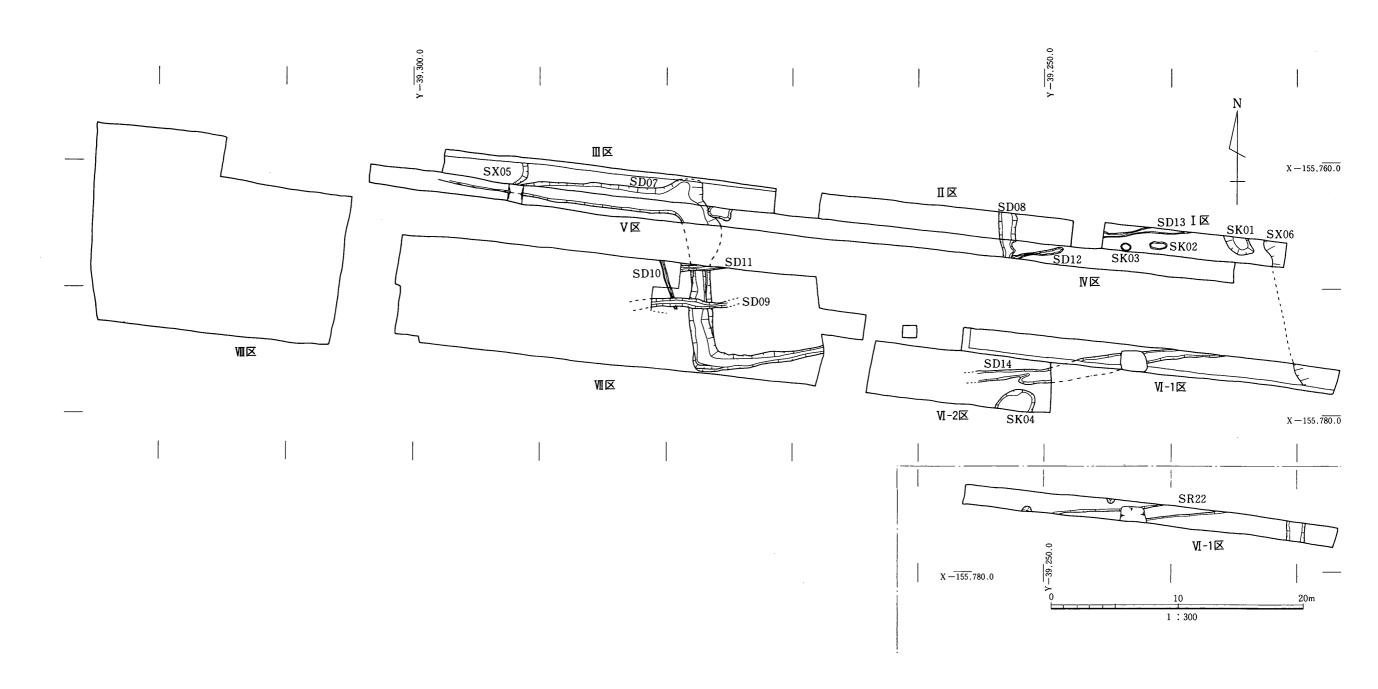


図114 82-27次 中近世遺構実測図

S D09 • 11~13 (図114, 図版33)

S D07・08などを切る小溝である。幅は0.6m程度のS D10もあるが、他は0.3~0.4m 以下で、深さも0.1m前後にすぎない。耕作にかかわる溝であろう。遺物はない。

S D10 (図114, 図版33)

▼II区で部分的に検出した溝で、SD11に切られている。幅0.3m、深さ0.1m足らずの規模である。遺物はない。

S D14 • S R22

遺構 (図114)

VI区の第 2 層の下で検出した東西方向の畦畔と、その直下の溝である。S D14は幅約 0.9m、深さ0.15m程度の溝で、埋土は砂礫である。この溝の直上には下幅約 1 m、残存 高0.1~0.15mの畦畔が造られていた。その構成土はS D14の埋土と類似した砂礫であり、溝を埋めたのと同時に畦畔に造り替えたものと思われる。これらの遺構はいずれもE-8°-Nの方位である。またその北側には径約0.6m、深さ0.1m程度のピットがこれらに 沿って並ぶかのように検出されている。

遺物 (図版82)

SD14から中国製染付の細片596が出土した。豊臣氏大坂城のころのものである。

土塘

S К 01 (図114, 図版32)

I区の第2層の下で検出した。深さ0.7~0.8mの性格不明の土壙である。埋土は第6 B層の黒色粘質シルトや第13層(地山)などの大きなブロックからなり、人為的に埋められていた。遺物はない。

S K 02 • 03 (図114. 図版32)

I区の第2層の下で検出した。後世の削平によるためか、いずれも深さは0.1m弱であった。遺物はない。

S K 04 (図114)

径3 m弱の大きな土壙である。VI区の第2層の下で検出した。深さ約0.5mで、人為的に埋め戻されていた。時期を判断できる遺物はない。

その他の遺構

S X 05 (図114)

III区西端の第4層の下で検出した落込みである。東から西へ緩く傾斜し、その深さは 0.2mほどである。埋土はSD07と同様の水成層(砂)であった。

S X 06 (図114, 図版32)

I・Ⅵ区の東端で検出した第2層下面の落込みである。深さ約0.4mでさらに東へ落込んでいる。調査地の東隣は東除川の旧ルート(1704年の大和川付替以前)であり、それに関るものであろう。遺物はない。 (積山)

•82-34次調査

井戸

S E 01 (図111)

第2層基底面で検出した井戸である。井筒の上部が瓦組となっている。井筒は調査区外の南方に広がる。 (鈴木)

5) 小結

1982年度の区画整理事業に伴う発掘調査では、長原遺跡南地区の調査が質量ともに中心 的位置を占めている。その成果のうち、埴輪などの考察については第Ⅳ章「遺構と遺物の 検討」に譲るとして、以下では簡単なまとめを行っておきたい。

18基にのぼる古墳の検出は、この地区の調査成果をもっとも特徴づけるものである。その概要は一覧表を参照されたいが、注目すべき成果がいくつかある。

長原古墳群で発見された古墳は、1989年12月現在で182基に達しているが、そのほとんどが後世に著しく墳丘を削平され、地下に埋没した古墳である。そのなかで、83号墳で検出された主体部は、過去に発見された数少ない例に貴重な資料を追加することとなった。墓壙内には組合せ式の木棺が置かれたと推定され、棺内にはわずかに鉄剣1本と用途不明の小さな鉄製品1点が認められたのみであった。ほかに木棺直葬の主体部が検出された例としては、94号墳・城山4号墳(105号墳)・城山6号墳(168号墳)・166号墳・179号墳などがあり、94号墳・166号墳では墳丘上から2基検出されている(註6)。よって83号墳にもさらに主体部が存在した可能性は否定できないが、調査範囲内では確認できなかった。墳丘規模が判明している94号墳が一辺約10m程度であるのに対し、本墳は一辺6mとひじょ

古墳名	墳 形	規模 m	須恵器	埴輪	その他	時期
60号墳	方	4.7×5.2	0	円		3
61号墳	方	9×	0	円・朝・家	鉄鏃 鎌 鋲留短甲	2
62号墳	方	10.5×	0	破片		2
63号墳	方	9.5×8以上	0	円・朝		3
64号墳	方	7×5.7以上	0	円・朝		3
65号墳	方	11以上×	0	円・朝		2
66号墳	方	7.5×5.8以上		円・朝		
67号墳	方		0	Pi Pi		2
68号墳	方	10.0×		円・朝・衣蓋		2
69号墳	方	10.0×10.0		円		3
70号墳	方	×8.6				
80号墳	方	7.0×7.0				
81号墳	方	7.0×7.0				
82号墳	方?					
83号墳	方	6.0×6.0	0		木棺直葬 鉄剣ほか	2
84号墳	方?	7.0×9.5	0	円・朝・家・盾・靭・衣蓋・草 摺		3
ーヶ塚(85号墳)	帆立貝	5.0×5.5		円・朝・壺・囲・家・盾・衣蓋・ 鞆・草摺		1
86号墳	方	11.2×	0	円・朝・馬		3
落込み1					古墳?	
落込み 2				30.00	古墳?	

表 4 1982年度 区画整理事業に伴う調査で検出した古墳一覧

(時期は長原古墳群1~4期を示す)

古 墳 名	墳形 規模m	主体部 数	副 葬 品	時期
83号墳	方6×6	木棺直葬 1	鉄剣 不明鉄製品	2
87号墳	方 ×12	土器棺		3
94号墳	方9.8×9.8	木棺直葬 2		2
城山4号墳(105号墳)	方 6.6×	木棺直葬 1	管玉 ガラス玉 櫛	2
城山5号墳(167号墳)	方 3×3	土器棺		2
城山6号墳(168号墳)	方 ?	木棺直葬	圭頭太刀 環頭小刀ほか	2
七ノ坪(130号墳)	前方後円 24.4	横穴式石室 土器棺	馬具一式 鉄製武器・武具玉 須恵器	4
166号墳	方?	木棺直葬 2	鉄製農工具 鉄剣 鉄鏃 金環	2
179号墳	方8.3×8.3	木棺直葬	直刀	2
180号墳	方12×12	土器棺		2

表 5 長原古墳群 主体部検出古墳一覧

(時期は長原古墳群1~4期を示す 註7)

うに小規模であることからみると、主体部は1基だけであると思われる。副葬品をみても、 本墳は他に比べて貧弱で、墳丘規模が小さいことと一連の傾向であろう。

なお、副葬品に関しては、今回報告した61号墳で、墳丘の残存部上面から鋲留式短甲の 破片や鉄鏃・鉄鎌などの鉄製品が出土していることも重要な成果である。

また、61号墳・84号墳・一ケ塚古墳(85号墳)などでは埴輪や土器が豊富に出土した。 61号墳には初期須恵器とともに大小2種の円筒埴輪が多数伴い、長原古墳群の埴輪編年に 重要な資料を提供することとなった。『長原・瓜破』Iで報告した、初期須恵器を伴う45 号墳の円筒埴輪は、外面調整の多くがタテハケのみであったのに対し、61号墳のばあい、 逆にほとんど2次調整のヨコハケで占められている。両者はかなり近い時期であるにもか かわらず、円筒埴輪の製作技法に異なった様相が認められることは、注目しておいてよい。

84号墳・一ケ塚古墳の埴輪については第Ⅳ章で触れる。なお、一ケ塚古墳は有黒斑の埴輪をもち、長原古墳群1期であることが判明したが、先に細かく検討したように、現状では東西長約45mで周濠がめぐることのほかは不明で、墳形も前方後円形・帆立貝形・造り出しをもつ円形のいずれか決しがたかった。あえていうなら、帆立貝形ではなかろうかと予測している。また84号墳の円筒埴輪の胎土はa・b2種からなり、両者はヘラ記号も異なり、タガも断面三角形のものはaグループにだけみられるなど、二つの工人集団からもたらされたことを推測させるものである。

飛鳥・奈良時代の遺構は水田・溝などが主なものである。7世紀を中心とする第6B層に伴う溝・流路・水田については第Ⅳ章で取り上げるので、ここでは第6AI層上面の大 畦畔を検討しておきたい。

82-27次SR11は南北方向の大畦畔で、そのY座標はほぼ-39,250mである。過去の調査で検出されている南北の大畦畔との距離をみると、『長原・瓜破』IのSR02はそのほぼ真東約331.5mで検出されている。これを仮りに3町とみれば、1町約110.5mになる。本書の82-19次で検出された68号墳の東辺で南北に伸びる畦畔はSR11より北へ100m以上はなれて検出しているが、南の畦畔はその東約222.4m、北の大畦畔は223.6mに位置しており、同様に2町とすれば1町111m前後となるようである。ほかに[長原遺跡調査会1978]の32工区で長さ約100mにわたって検出された南北の畦畔があるが、その層位は第6AI層と確認できるわけではない(註8)。

中世の遺構では82-27次の大溝SD07が注目される。南東から北西に向かって2個所で 直角に折れていた溝で、基幹的な農業用水路と考えられる。ただ、現状ではこれと連続す る遺構がみつかっていないので、今は細かい検討ができず、将来にまつべきところが大きい。 (積山・京嶋)

註)

- (1) 本文中の飛鳥 I ~ Vは [奈良国立文化財研究所1978] の分類にしたがう。
- (2) 本文中の平城宮 I ~ VIは [奈良国立文化財研究所1976] の分類にしたがう。
- (3) 本文中の須恵器型式は[田辺昭三1981]にしたがう。
- (4) 風化すると外見が金色を呈することが多く、習慣的には「金雲母」と呼ばれている。これは本来、黒雲母が風化したものである。
- (5) [大阪市文化財協会1982] では水田址(古)において、水口が存在せず、畦畔の交差する部分が低いばあいが多いことから、交差部分をオーバーフローして隣接する水田に引水するのではないかとした。しかし、この方法は水を制御する手段としては適切とは思えず、部分的に用いられた方法と思われる。岡山県百間川遺跡の弥生時代中・後期の水田では、水口によって配水を制御し、下位の水田においては畦畔越しの「かけ流し灌漑」であったと考えられている。長原遺跡においても、基本的な引水方法には水口や63号墳北西隅にみられた導水施設が用いられたと考えられる。
- (6) 北隣の八尾市亀井遺跡でみつかった亀井古墳でも木棺直葬の主体部が2基検出されている[大阪文化財センター1980]。
- (7) 表5でとりあげた古墳の出典は以下のとおりである。

87号墳[大阪市文化財協会1984]、94号墳(出戸4丁目遺跡1号墳)[大阪市文化財協会1982、77頁]、 城山4~6号墳(105・167・168号墳)[大阪文化財センター1986 I]、セノ坪古墳(130号墳)[大阪 市文化財協会1986]、166号墳[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1986]、180号墳[大阪市教育委員 会・大阪市文化財協会1989]

なお、87号墳の土器棺は中心主体ではない。また、179号墳については現在整理中である。

(8) 試みに測図してみると、この南北畦畔はSR11から東へ約417mに位置する。4町なら1町約104.3mとなる。ただ、SR11はN-3°-Eで真南北からわずかに振れており、またこの南北畦畔から南へ200m以上隔たっているので、両者の正確な間隔は不明である。

第2節 長原遺跡西地区の調査 (82-28次調査)

1)調査地の層序と遺物(図115)

調査地周辺の地形は、西が低く東の方が高くなる地形を呈する。地表面の海抜は東端付近でTP+10.1mをはかり、西端ではTP+9.5mとなる。これは調査地の東150m付近に存在する旧東除川から溢れ出た洪水砂層が、旧流路を中心に自然堤防状の高まりとなって広がっていることに起因すると考えられる。しかし、地山(第13層)は東が低くTP+8.9mで検出され、西はTP+9.3mと地表面とは逆の傾斜になっている。そのため、堆積の状況が東部と西部とでは異なり、東部では堆積層の枚数も多く、厚いのに反し、西部では枚数が少なく、薄くなっている。

この調査地は遺跡の北西部に位置しているにもかかわらず、長原遺跡南部の基本層序と 対比することが可能であるため、以下の記述はそれに基づいて下位から行う。

沖積層下部層

第13層: 黄色〜黄白色のシルト〜粘土である。上面の海抜は東がTP+8.9mで西がTP+9.3mをはかる。上層に第6層が堆積している範囲ではTP+8.9mで、第4層下部層が堆積する範囲はTP+9.0m、第4層上部層が堆積する範囲はTP+9.3mと段々に西が高くなっている。本来、なだらかな斜面であったこの一帯が水田開発された結果、3段の平坦面が形成されたのであろう。この層より下位の堆積を把握するために、2個所で深掘りトレンチを設定した。東部ではTP+8.2mで、西部ではTP+7.7mで緑灰色粘土が検出された。この層内には乾痕が発達しており、緑灰色粘土層以下が第14層に対応する可能性もある。

沖積層上部層

第6層:灰色を呈し、細砂が混じる粘質シルトである。第13層の上面が低くなる東部に分布する。東端部分で2枚に分かれるが、あとは細分できない。上面の海抜はTP +9.0mである。

第5層:褐色を呈する極細砂〜細砂である。第6層上面の凹みに堆積する水成層である。 東端に分布している。

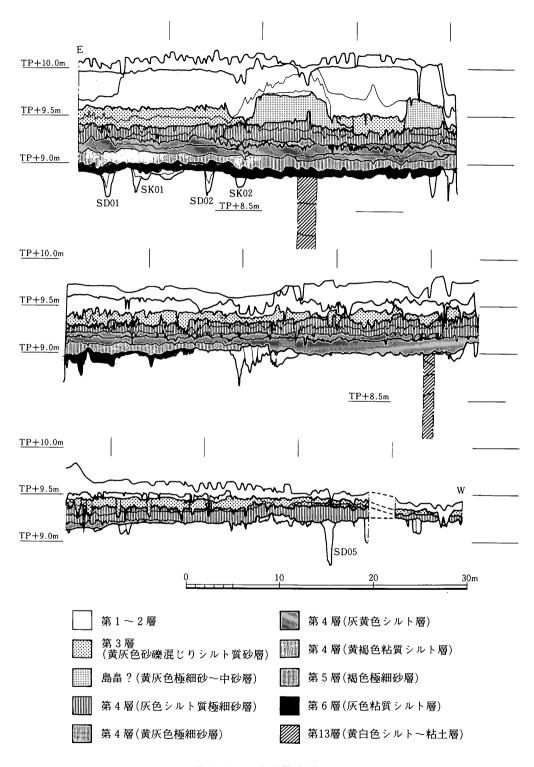


図115 82-28次 地層断面実測図

第4層:長原遺跡南部の基本層序の第4層に相当すると考えられる層である。この調査地 では5枚に細分できる。上位から黄灰色~黄褐色を呈する水成の極細砂~中砂、 灰色~灰黄色を呈するシルト質極細砂~シルト(灰色シルト質極細砂層)、黄灰 色〜灰色を呈する水成の極細砂(黄灰色極細砂層)、灰黄色を呈するシルト(灰 黄色シルト層)、黄褐色を呈する粘質シルト(黄褐色粘質シルト層)と堆積して いる。この中で最上層の水成砂層は東部に分布し、2個所に高さ0.25m・幅10m、 高さ0.25m・幅4.5mの高まりとなって残っている。「島畑の芯」(註1)とい われるものであろうか。上位から2層目の灰色シルト質極細砂層は調査地全面に 堆積する層で、上位に水成砂層の高まりが残る所では畦畔が確認できる。黄灰色 極細砂層は下位層の上面の凹みに堆積する水成砂層である。灰黄色シルト層は西 端部にまで広がらない。上面には耕作による小溝群が多く検出される。最下層の 黄褐色粘質シルト層は東部にしか堆積していない。これら5枚に細分した層の内、 最上層は第4 A層に対比できよう。それ以下の4枚の層は第4 B層に対比すると 考えられる。畦畔や小溝群が検出されることから、これらの層は水田として利用 されていたと考えられる。第4層は下層の第5層が部分的にしか堆積していない ため、この調査地では直接第6層を覆っている。

第3層: 黄灰色を呈する砂礫混じりシルト質砂層である。東部では2枚に分かれ、下位はマンガン汚染で黒褐色を呈している。この層の上面の海抜は東端がTP+9.6m、西端がTP+9.4mと、東部が高くなっている。

第2層:灰褐色を呈するシルト質砂層である。上面に近世の坪境の溝を検出した。

第1層:現代の耕土層である。

遺物

第6層出土遺物 (図117, 図版84)

須恵器(396~398)396は口径10.8㎝の杯身で、立上がりはやや内傾し、口縁端部は浅く凹む。灰~灰白色を呈し、胎土内には長石粒を含む。397は壺の頸部で、頸部下端の径が12㎝をはかる。口縁端部は欠損する。中位に凸線をめぐらし、その上下には波状文を描く。胴部は残存する上端の傾きから判断して、球形になると考える。灰白色を呈し、長石粒を含む。398は の胴部で、最大径は11㎝をはかる。上位に凹線をめぐらし、その下に波状文を描く。胴部下半には一部粗いハケメが残る。灰色を呈し、胎土に長石粒を含む。

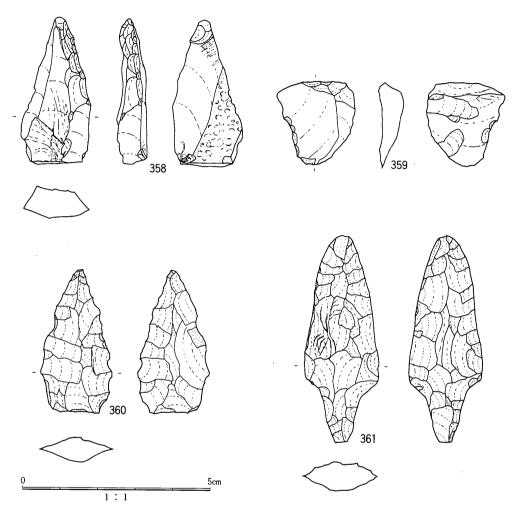
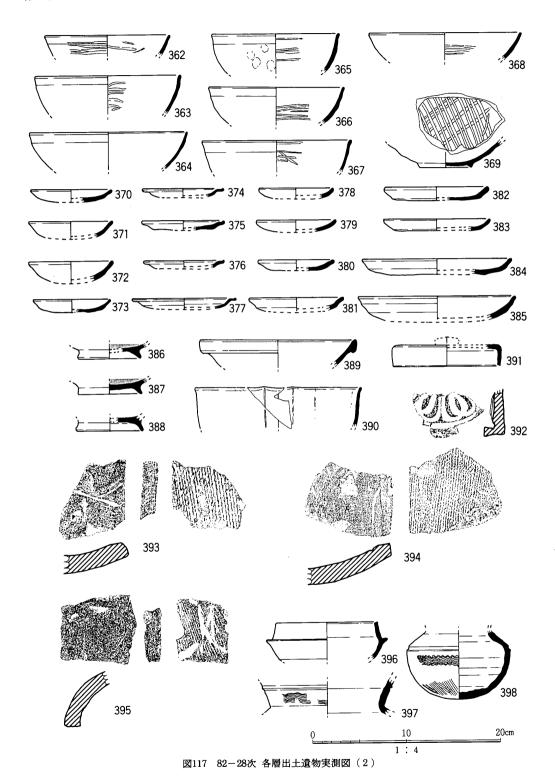


図116 82-28次 各層出土遺物実測図 (1)

第4層出土遺物 (図117, 図版84)

瓦器椀(362~369)362・363は内面に暗文が密に施され、外面上部にも暗文が施されている。364は表面の剝落が著しい。365~368は外面には暗文はなく、内面にのみ施されている。362・363ほど密に施されてはいない。369は内底面に格子状の暗文が施されている。362~364は灰色シルト質極細砂層より出土した。365~369は灰黄色シルト層出土である。

瓦器皿(370~373) 口径8.2cm・8.6cm・8.9cmをはかる皿で、口縁部をヨコナデする。 内外面に暗文は観察できない。370は灰色シルト質極細砂層、371~373は灰黄色シルト層 出土である。



土師器皿 (374~385) 口縁部が体部から水平に開き、端部が肥厚するもの374~377、口縁部が緩やかに内湾するもの378・379、口縁部が外反するもの380・381、体部の境で屈曲して緩やかに内湾する口縁部をもつもの382~385とに分けられる。また、口径の大きさで8㎝前後の小型374~376・378~380、11㎝前後の中型377・381~383、16㎝前後の大型384・385に分けられる。胎土の違いで、精良で褐色のクサリ礫を含むもの374・376~380・383・384と、長石・チャートなどの砂粒を含むもの375・381・382・385とに分けられる。374・375・378~380・382~385は灰黄色シルト層、376・377・381は黄褐色粘質シルト層出土である。

黒色土器(386・387) 高台径が386は6.6㎝、387は6.8㎝をはかる。いずれも炭素が内面にのみ吸着するA類である。灰黄色シルト層から出土している。

土師器椀(388) 高台径が6.8㎝をはかる。灰褐色を呈し、長石粒を含む。灰黄色シルト 層出土である。内外面に炭素が吸着していないので土師器に分類した。

白磁碗(389) 口径16.5㎝前後をはかる。灰黄色シルト層から出土した。

灰釉碗(390) 口径17.6㎝前後をはかる。小破片であるため、傾きや文様の観察に不安があるが、口縁部付近の体部外面を押圧して、輪花状の口縁部を作る。押圧した部分には縦に沈線が描かれている。内外面には緑色を帯びる灰白色の釉がかかる。

須恵器蓋(391)水平な天井部からほぼ垂直に折れ曲がる口縁部をもつ。口縁端部は平 坦ではなく凹みがある。外面には自然釉がつく。

軒丸瓦(392)単弁蓮華文軒丸瓦である。直立した外縁をもち、珠文はない。蓮華文の文様帯の幅は3cmと狭く、間弁が内区の圏線まで伸びている。瓦当は薄い。胎土は精良である。

平瓦(393・394) いずれも凸面に縄のタタキメが付き、凹面には布の圧痕が残る。393 は凹面端部は調整するものの、側面には糸切り痕のような弧状の連続線がかすかに残る。 胎土には砂粒が多くみられる。394は凹面端部と側面を箆で調整している。胎土は精良で、砂粒の混入は少ない。

丸瓦(395) 凸面は縄のタタキメはなく、ナデやケズリの2次調整を行ったのであろう。 凹面には糸切りによる条線が残る。砂粒を含んでいる。

打製石器(図116, 358~361) 358はサヌカイト製のナイフ形石器である。 a 面には右側縁に細部調整が施されている。 b 面には自然面が残る。西部の第4層(灰黄色シルト層)より出土している。359はチャート製の剝片で、両側縁に細部調整が施されている。東部

の第1層より出土している。360・361はサヌカイト製の石鏃で、360は西部の第4層(灰 黄色シルト層)より、361は西部の第4層(黄褐色粘質シルト層)より出土した。

以上、各層準からの出土遺物を観察したが、遺物は主として第4層から出土している。第6層出土の遺物は下位層準の遺構群出土の遺物と近接した時期の物であることから、耕作した際に下位遺構を削平したのであろう。第4層出土の遺物は瓦器から黒色土器まで含むが、図示した遺物を第4層内の各層ごとに概観すれば、傾向として第4層内の上位層は瓦器を含み、下位層は瓦器を含まず、黒色土器や須恵器を含んでいる。上位層の灰色シルト質極細砂層からは図117の362~364・370が出土し、さらに、図示していないが、瓦質羽釜の足が出土している。中位層の灰黄色シルト層からは365~369・371~375・378~380・382~390・392・393が出土している。下位層の黄褐色粘質シルト層からは376・377・391・394・395が出土している。上位層は瓦質羽釜(三足)が出土することから、14世紀前後の遺物を含み、中位層は13世紀代の瓦器を含んでいる。下位層は10~11世紀代の遺物が出土している。こうしたことから10世紀以降14世紀前後の間、この地域が水田として開発されていたことが推定できる。

2) 古墳時代の遺構と遺物

この時期の遺構は調査地の東部に集中して検出された(図118)。西部には柱穴が数個所で検出されたが、時期を決定できる遺物がなく、所属時期は不明である。

溝

S D01

遺構 (図119, 図版34)

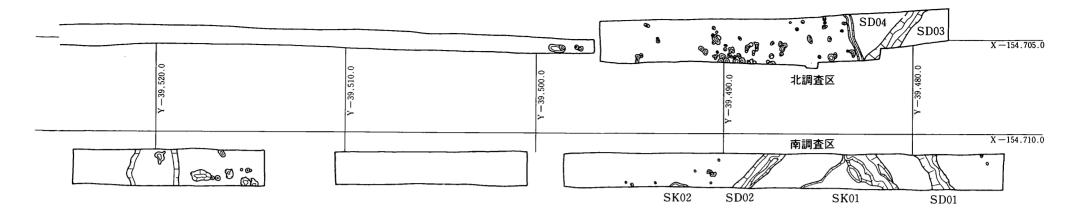
幅0.8m・深さ0.25mをはかる。N-25°-Wの方位をもつ。断面形は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれる。上層は黒灰色シルト質粘土で、下層は淡灰色砂混じりシルトである。土師器・須恵器のほか滑石製の双孔円板が出土した。

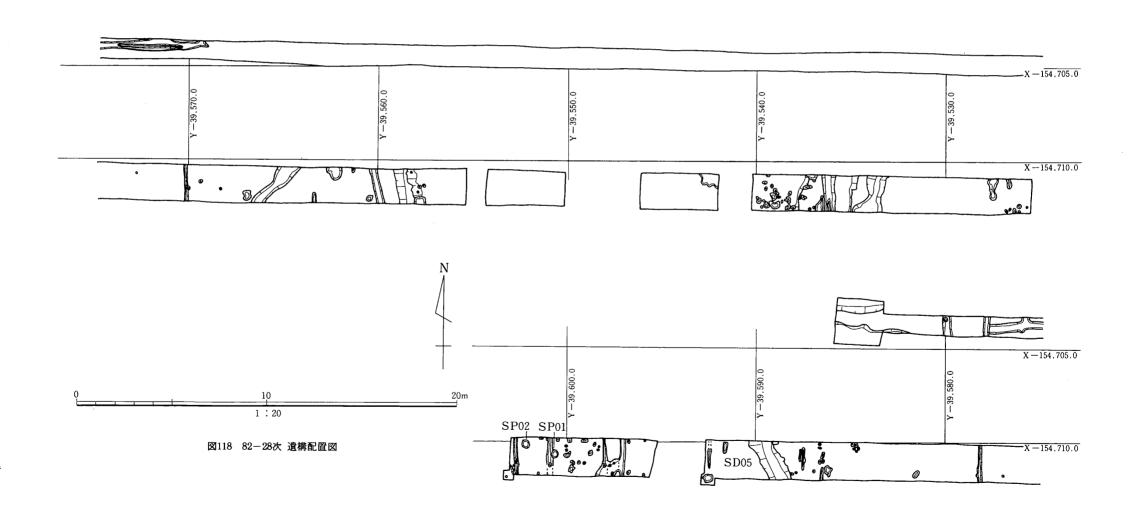
遺物 (図120, 図版85)

土師器壺 (399) 直線的に開く口縁部と球形の体部をもつ小型丸底壺である。口縁部は 体部とほぼ同じ径になる。口径 9 cmをはかる。長石粒を含み、橙色を呈する。

土師器甕(400)外反する口縁部をもつ。口縁部内面には横方向の粗いハケメが残る。 口径14cm前後である。

第2節 長原遺跡西地区の調査





須恵器杯身(401) 口縁部および底部を欠損する。受部最大径は13.1cm前後である。

須恵器**略**(402)偏平な球形の体部をもつ。上方に2条の沈線をめぐらし、その間に櫛描き列点文を描く。体部最大径は10∞前後である。

須恵器器台(403) 高杯形器台の脚部である。杯部が残存しており、杯部内面には同心 円文が残る。脚部は外反ぎみに広がる。脚部外面は2条一単位の沈線によって3段以上に 区画され、区画内には櫛描き波状文が描かれ、そのあと三角形のスカシが穿たれている。 なお、波状文は最上段には1条、二段目には2条、三段目には3条めぐっている。

滑石製双孔円板(404) 長径2.2㎝、短径1.8㎝、厚さ0.4㎝をはかる、不整六角形の双孔 円板である。中央の2個所に径0.2㎝ほどの小孔がある。全体に作りが粗雑で、形も円形 ではない。表面調整も充分には行わず、自然面を残している。実測図の左面は中央部分に

のみ加工痕が認められ、周囲には未加工の剝離面が残る。右面は全体に加工痕があるが、 2個所に自然の凹みが残っている。

S D02

遺構(図121, 図版34・35)

幅0.8m、深さ0.24mをはかる。N-45°-Eの方位をもつ。埋土は2層に分かれ、上層 は黒色シルト質粘土、下層は灰色砂混じりシ ルトである。土師器・須恵器が出土した。

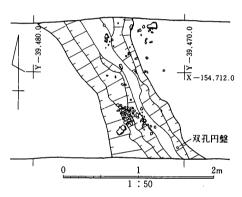


図119 82-28次 S D01実測図

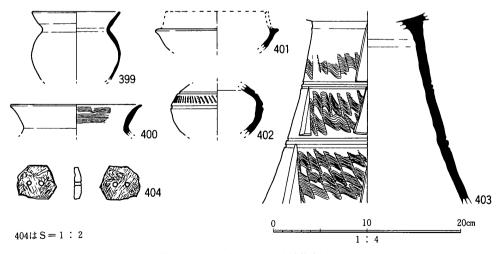


図120 82-28次 S D01出土遺物実測図

第111章 調査の結果

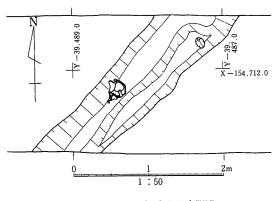


図121 82-28次 S D02実測図

遺物 (図122, 図版85)

須恵器杯身(405) 口縁部と底部を欠 損する杯身である。受部最大径は12.5cm をはかる。

須恵器甕(406) 口縁部は外反し、端部は上下に拡張させる。頸部には逆「V」形の記号がある。体部外面の調整は縦方向の平行タタキで、内面には同心円文が残る。口縁径は19.4cmをはかる。

405 1406

図122 82-28次 S D02出土遺物実測図

S D03

ルトである。南調査区のSD02を北に延長した位置に検出したことや、方位もほぼ近いこ

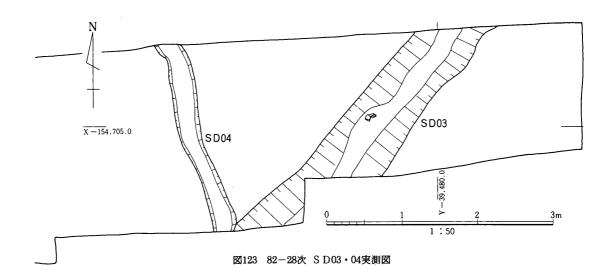
遺物

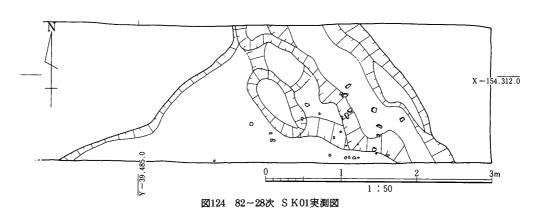
須恵器が出土しているが、細片のため図示しなかった。

S D04 (図123)

とから同一遺構と考えられる。

北調査区に検出した幅0.3m、深さ0.05mの浅い溝である。方位はN-18°-Wである。 S D01の北の延長線上に位置するが、規模が小さいことから同一の遺構かどうか疑わしい。 遺物は出土しなかった。





土壙

S K01

遺構 (図124, 図版34・35)

南調査区のSD01とSD02の間に検出した。方形を呈する浅い落込みの一部と考えられる。この遺構の東端は深さ0.23mと一段深くなっており、浅い落込みと溝が重なっているとも考えられるが、北部には延長にあたる溝が検出され

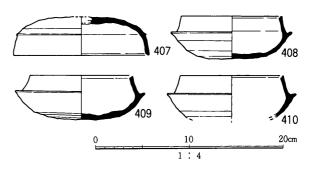


図125 82-28次 S K01出土遺物実測図

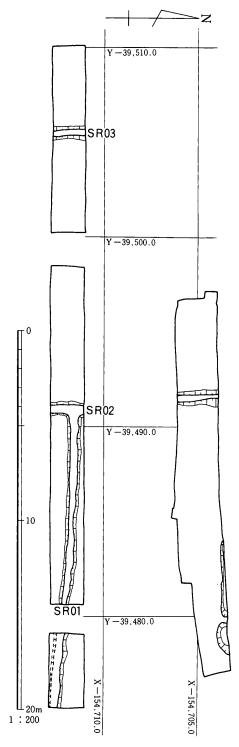


図126 82-28次 第6層上面水田畦畔実測図

ていないため、ここでは土壙と理解しておく。埋土は2層に分かれ、上層は黒灰色シルト質粘土、下層は淡灰色砂質シルトである。

遺物 (図125, 図版85)

須恵器蓋杯 (407~410) 407は蓋で、高さ2.2㎝をはかり、口縁部はやや内湾している。端部は内側に浅い凹みがある。408~410は杯身で、口径が10.7~10.9㎝、高さは4.7㎝前後をはかる。口縁部は内傾しつつ、外反している。端部の内側には浅い凹みがある。

SK02 (図118, 図版34)

S D02の西に検出した。ごく一部を検出 しただけであるため、全体の規模は不明で ある。深さは0.1mをはかる。埋土は黒灰 色シルト質粘土である。遺物は出土してい ない。

3)飛鳥〜奈良時代の遺構と遺物 水田 (図126)

この時期の水田耕土は第6層に相当する。 層序の項で述べたように、第7層はこの調 査区には堆積していない。また、第6層も 調査区全面には広がっておらず、東部の第 13層の低い部分に堆積している。周辺での 調査の成果をみても、西部にはこの層準の 水田は検出されておらず、第6層の分布範 囲の西限にあたるのであろう。

水田面には東西方向の畦畔 (SR01) と

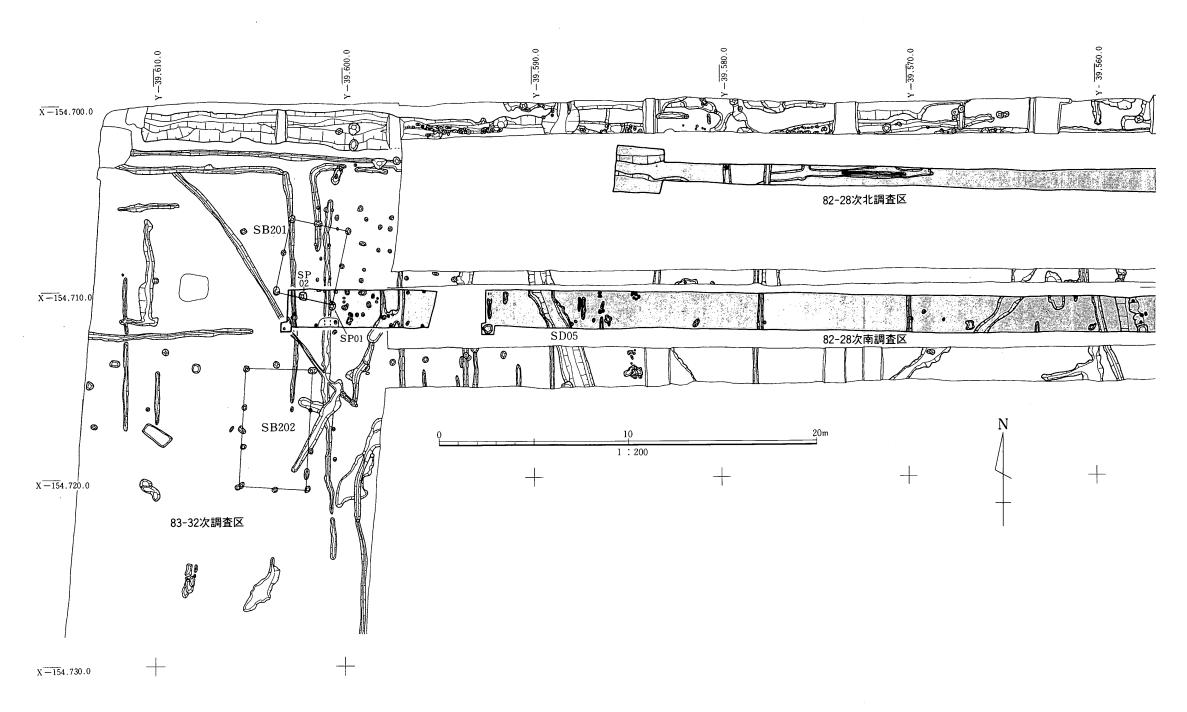


図127 82-28次 調査地西部検出遺構および周辺調査検出遺構

南北方向の畦畔 ($SR02 \cdot 03$) が検出された。SR02 & SR03の距離は14.6 mをはかる。 水田面の高さは北から南に低くなり、東から西に低くなる。

4) 平安時代以降の遺構と遺物

柱穴

S Z 01~02 (図127)

調査区西部に柱穴が数個所検出された。これらは83-32次調査で検出された柱穴と組み合って、平安時代の掘立柱建物(SB201)を構成する。

溝

S D 05 (図127)

西部に検出された北で西に振る方位をもつ溝である。幅1.1m、深さ0.45mをはかる。 この溝も83-32次調査や85-21次調査で検出した溝と同一の溝である。

このほか、第4層内に耕作に伴う小溝群が検出された。いずれも幅 $10\sim15$ cm前後で、南北方向の溝である。

S D06

東部の北調査区に検出された東西溝である。近世の坪境の溝であろう。この中から犬形 土製品(図版85)が出土した。犬形土製品は大坂城跡で出土しているものと同じ作りの物 である。

5) 小結

82-28次調査では長吉1号線およびその南に計画されていた道路予定地内に幅の狭い調査区を設定したため、この周辺に存在している遺跡の全容を把握するには至らなかった。 しかし、その後に行われた数度の調査によって、この周辺の遺跡の概要が明らかになった。 それらの成果に基づいて、この調査地周辺の概要を述べることにする。

北・南の両調査区の東部に検出したSD01~04・SK01などの遺構は、すぐ南の敷地で行った84-25次調査の南区で検出された遺構群と関連する遺構であろう。84-25次調査でみつかった5~6世紀に属する集落遺跡は掘立柱建物16棟・井戸1基とこれらの間を縦横に伸びる溝群などで構成されている。ここに検出された建物はその主軸方向に違いがあること、柱穴に切り合い関係があることなどから、数期にわたる集落と考えられる。SD01

~04・S K01などから出土した遺物は、南の84-25次調査の遺構内出土遺物の年代観とほぼ同じ時期であり、それらと密接にかかわる遺構であろう。この時期の集落はこの調査区の南でも確認されており、この周辺は5~6世紀には集落として開発されていたのであろう。また、82-28次調査ではナイフ形石器やチャート製の細部に調整を施した石器が出土しているが、84-25次調査でも有茎尖頭器や剝片が出土しており、当該期の石器製作址が存在していた可能性もある。

西部では1983年度以降の区画整理事業に伴う発掘調査が続けられ、平安時代の掘立柱建物が10数棟検出されている。82-28次調査は幅の狭いトレンチであったため、建物の復元はできなかったが、隣接する83-32次調査では82-28次調査で検出した柱穴と組み合って、掘立柱建物が復元されている。西部には5~6世紀代の遺構はあまり存在しておらず、平安時代になって、集落として開発が進行したのであろう。布目瓦片や灰釉陶器が出土することなどもあわせて考えれば、平安時代になると寺院を中心とした集落が調査区の西に広がっていたのではないだろうか。阪和貨物線の西には奈良時代後期~平安時代にかけての「成本廃寺」が存在していたと推定されており、周辺からは飛雲文系の軒瓦が発見されている。今回の調査地の平安時代の遺構・遺物が直接それと結び付くかどうかは不明であるが、ほぼ同時期の遺構・遺物であることから、「成本廃寺」との関連も考慮する必要があろう。

鎌倉時代以降、この周辺は耕作地として活用されたらしく、住居などの遺構は検出されず、耕作土と考えられる第4層が広く分布している。そこには耕作に伴う溝が発見されるだけで、集落の中心は別の地域にあるのであろう。この景観は近世以降まで続いている。第3層下面に検出した島畠状の砂の高まりは大きな洪水に見舞われても、なおかつ耕地として活用していたことの証左になろう。 (松尾)

註

(1) [大野薫1989] による。

第3節 長原遺跡東南地区の調査(82-31次調査)

第 I 章第 2 節でも述べたように、川辺町線の南側の I 区は層ごとに遺物を上げ、各層の上面を精査する方向で調査を行ったが、北側のII区は現大正川の脇であり、調査を行うにあたって安全面に問題があったことから 5 mごとに 1 m×1 mのピットを一つ開け、層序を確認するにとどめた。したがって調査の水準を異にし、同列に論じることはできないので、I 区と II 区を別個に記述する。

1) I区の層序と遺物 (図128~130)

沖積層下部層

第 13 層: 黄色シルト〜粘土層で、南端での上面の標高はTP+9.98〜10.10mで、北端ではTP+9.55〜9.65mをはかる。南から北に緩く傾斜しているようである。

沖積層上部層

- 第9 C層: 淡青灰色あるいは黒色のシルト混粘土〜粘土からなり、層厚4〜15㎝をはかる。 北端は大阪市営地下鉄第45・46工区調査地 [大阪市文化財協会1982] の該当層 と同様に縄文土器の細片や石器の調整加工砕片を多く含む。本層上面は深さ約 0.1mの凹地状になり、橙灰色シルト混粘土の堆積がみられたが、第9 C層の 一部と考えられる。本層からは132点の石器群が出土し、石鏃製作に特徴的に 伴う楔形石器と、細かな調整加工砕片からなり、有機的まとまりをもった一群 といえる。
- 第6 B層: 南端で検出した、縄文時代晩期の土器片や5~6世紀の須恵器・土師器・埴輪 片(図134)を含む灰褐色砂~砂礫層で、層厚10~20㎝をはかる。
- 第4B層:南端で検出した。石鏃や6~11世紀までの須恵器・土師器・黒色土器・埴輪片 (図135)を含む褐色粘土混細砂層で、層厚3~12㎝をはかる。
- 第4A層:南端で検出した、13世紀前葉までの土師器や黒色土器・瓦器片(図136)を含む灰褐色粘土混シルト層で、層厚5~15㎝をはかる。
- 第 3 層:南端で検出した、12~13世紀の輸入白磁・土師器・瓦器・瓦質土器・東播系須恵器片(図137)を含む褐色粘土混粗砂層で、層厚2~15cmをはかる。

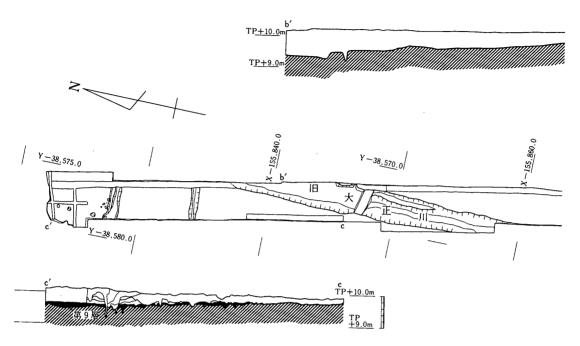


図128 82-31次 I 区平面図・断面図 (見開き)

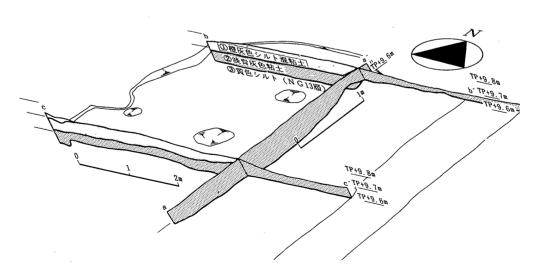
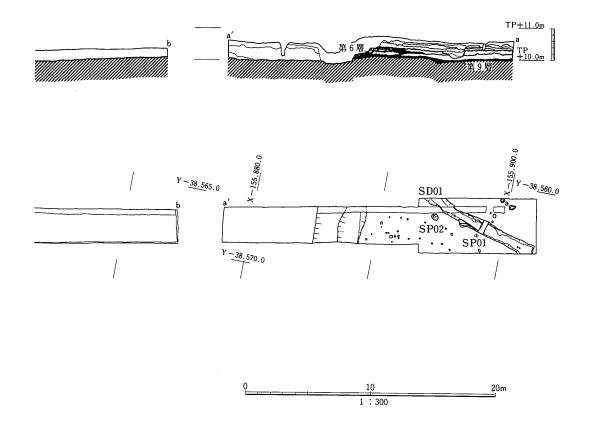


図129 82-31次 I 区北端第9 C 層堆積状況



第 1 層:現代耕土のほか、第2次大戦後に行われた旧大正川の埋めたてや地山層の掘削 跡の盛土などからなり、I区の大半の地山上は本層1層のみである。(黒田)

遺物

第13層直上出土遺物 (図132・133, 図版88)

無茎凹基式石鏃(412) I 区南端から出土した。素材の主要剝離面側に面的な調整加工を施したのち、表面の側縁部に細かな調整加工を施している。先端部のつくり出しと、丸く成形された脚部の形態は特徴的である。

無茎凹基式石鏃(415) I 区北部から出土した。素材の主要剝離面側の側縁部に調整加工を施したのち、同じく表面の側縁部に調整加工を施している。基部のえぐりは浅い。弥生時代の石鏃形態の特徴をもつ。

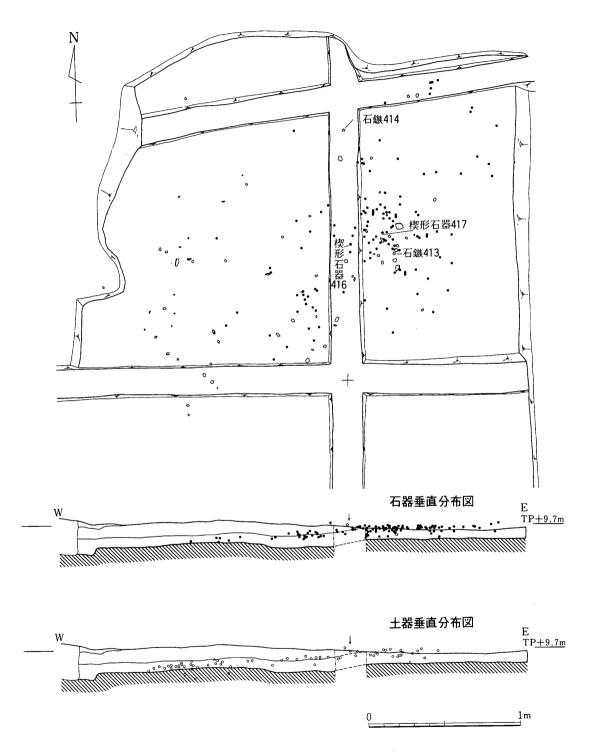


図130 82-31次 I 区北端石器・土器出土状況

No.	形式	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
414	石鏃	1.6	1.1	0.1	0.1	安山岩
	石鏃(先端)		(略)			安山岩
413	石鏃	1.2	1.1	0.2	0.2	安山岩
	楔形石器	2.0	0.9	0.3	0.6	安山岩
417	楔形石器	2.9	2.8	0.9	7.0	安山岩
416	楔形石器	3.1	1.8	1.3	6.7	安山岩
i	楔形石器	3.9	1.5	1.6	1.3	安山岩
	楔形石器の砕片					安山岩
	楔形石器の砕片					安山岩
	不明石器					安山岩
	剝片 21点					安山岩
	砕片 101点					安山岩

No.	形	式	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
411	石	鏃	第4B層	(1.6)	1.9	0.2	0.7	安山岩
412	石	鏃	第13層直 上	2.2	1.9	0.4	1.0	安山岩
	剝	片	第9C層 直上	3.6	1.7	0.5	3.6	チャート
	剝	片	第13層直 上					安山岩
	砕	片	現代盛土					安山岩

I 区南端出土の石器群 総数5点

					- 1		
No.	形式	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
415	石 鏃	第13層直 上	3.6	1.7	0.5	2.5	安山岩
418	縦長剝片	第13層直 上	4.7	1.5	0.7	4.2	安山岩
	水磨痕のある剝片	現代盛土					安山岩

I区北端 第9C層出土の石器群 総数 132点

I 区北部出土の石器群 総数 3 点

表6 83-31次 石器群の組成および計測表

(単位はcmとg)

縦長剝片(418) I 区北部から出土した。あらかじめ調整された平坦な打面から、連続して剝離された縦長剝片である。右側縁部には、当該剝片を剝離したのちに、打面側からの打撃によって裁断面が残されている。この剝片剝離技術は、旧石器時代に特徴的な剝片剝離技術である。

第9 C層出土遺物 (図133, 図版88)

無茎凹基式石鏃(413・414) I 区北端から出土した。413は素材の表面の右側縁部と主要剝離面に調整加工を施した石鏃で、基部のえぐりは浅い。414は、薄く剝ぎ取った素材の周辺部に調整加工を施した石鏃で、先端部のつくり出しと、先鋭に成形されかつ非対称

X −155<u>.700.0</u> =17 =[] Œ 辺 町 線 1:1500

図131 82-31次 調査地の旧地形

な脚部の形態に特徴をもつ。

 一 楔形石器(416・417) I 区北端からはこの 楔形石器のほか、その砕片やその他の剝片類
 が出土している。これらの石器群は一定のまとまりをもっており、石鏃製作を目的とした
 石器製作址であったと思われる。

第 6 B 層出土遺物 (図134, 図版86)

— 縄文土器(425)425は晩期の土器片で、突 帯をもたない屈曲する肩部の破片である。

- 須恵器杯蓋(419・420)いずれも復元径は 13~14㎝で、天井部と口縁部の境の稜は鈍い。 - 419は灰白色、420は明青灰色を呈する。

須恵器杯身(421・422)復元径約10~11cm x-155.800.0 をはかり、421は口縁端部を丸くおさめ、受部を水平に引出し、明青灰色を呈する。422 は受部を外上方に引出し、灰白色を呈する。

土師器杯(423)復元径約10㎝をはかり、 口縁部外面と体部内面にナデ調整を施し、体 部外面はユビオサエを施す。浅黄橙色を呈し、 少量の長石粒と赤色クサリレキを含む。

土師器甕(424)外面はナデとユビオサエ、 内面はナデ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、 少量の長石粒と赤色クサリレキを含む。

円筒埴輪片(426) 橙色を呈し、タテハケ がみられる。

第4B層出土遺物(図132・135, 図版86~88) 無茎凹基式石鏃(411)素材の表面に面的

な調整加工を施したのち、主要剝離面側にも、 面的な調整加工を施している。とくに、主要 剝離面側の基部えぐり部分の細かな調整加工 と、脚部の先鋭な形態は特徴的である。 先端部分は欠 損している。

須恵器杯蓋(427)復元径15.6㎝で、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。口縁部と天井部を界する稜線はにぶい。色調は灰白色で、胎土は長石粒とクサリレキを含む。

須恵器杯身(428・429)428は復元径12.0㎝で、口縁端部は上方へ小さくつまみ上げ、受部は外上方へ引出し、丸くおさめる。色調は灰白色で、長石粒やクサリ礫を含む。429は復元径10.4㎝で、内傾する立上がりは口縁端部近くで上方につまみ上げられる。灰白色を呈し、長石粒とクサリレキを含む。

須恵器杯身(430・431)431は外上方へ直線的に引



写真22 82-31次 I 区中央旧大正川 (南から)

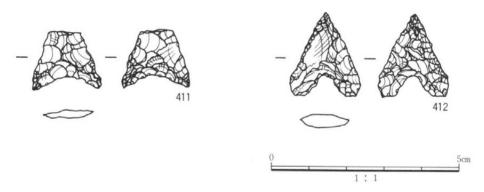
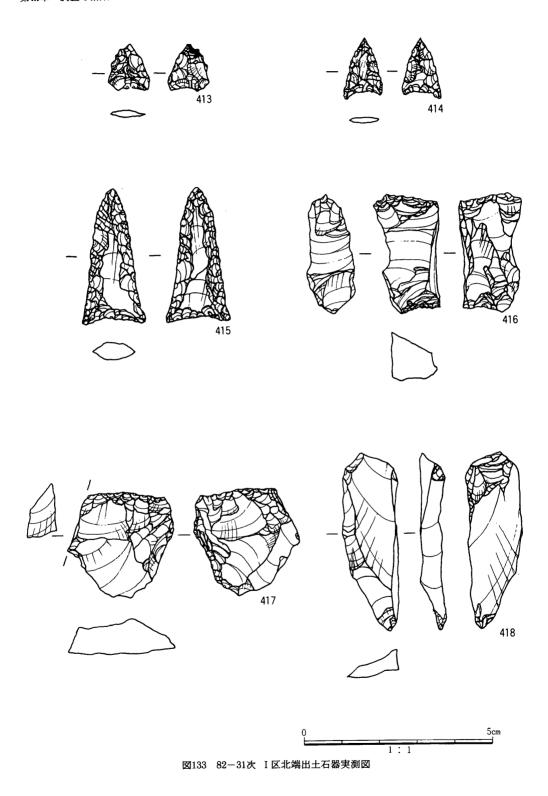


図132 82-31次 I区南端出土石鏃実測図

き上げられた体部の破片で、口縁端部は丸くおさめられている。灰白色を呈し、長石粒とクサリ礫を含む。430は復元径10.6cmをはかり、小さな平底で、体部はやや丸みをもって立上がり、口縁端部を丸くおさめている。底部約1/2は回転ヘラケズリを施している。灰白色を呈し、長石粒とクサリレキを含む。

須恵器皿(433)底部の復元径が約18.5cmで、底部を回転ヘラケズリし、内面は回転ナデに直交する方向で、皮様のものでナデている。

須恵器高杯(446) 脚端部の復元径が9.3㎝の杯部を欠失した高杯の脚部で、端部は強い ナデを施し、ほぼ平らにおさめている。脚部中央に円形のスカシ孔を一つ穿っている。



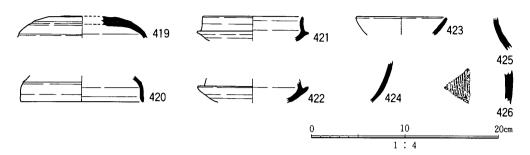


図134 82-31次 I区南端第6 B層出土遺物実測図

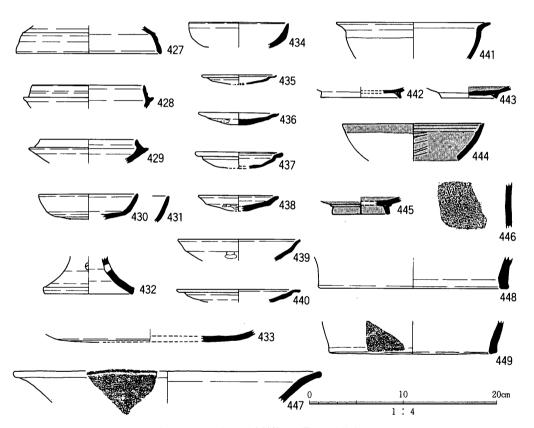


図135 82-31次 I区南端第4B層出土遺物実測図

土師器杯(434・439・442) 439は直線的に広がる体部とやや屈曲した口縁部をもち、口縁端部は外反ぎみにつまみ上げられている。口縁部外面および体部内面は強いナデが施され、体部外面はユビオサエで調整されている。褐灰色を呈し、1~2 mmの小石を含むなど胎土はやや粗雑である。442の高台は復元径8.8 cmで、断面形は三角形を呈する。色調は明黄褐色で、胎土は長石粒・赤色クサリレキを含むが、精緻である。434は復元径10.8 cmで、

底部から丸みをもって立上がる体部と、小さく丸くおさめられた口縁端部をもつ。手法は口縁端部外面と体部内面をなでるほか、体部外面はユビオサエを施す。淡黄橙色を呈し、赤色クサリレキと小石を含む。

土師器皿(435~438・440)いわゆる「て」字状口縁をもつ皿と、外反ぎみの口縁部をもつ皿がある。438は復元径8.6㎝で、器壁がやや厚く、口縁部が屈曲して外反ぎみに立上がり、端部は丸くおさめている。にぶい赤褐色を呈し、小石・長石粒・赤色クサリレキを含むなど、胎土はやや粗雑である。436は復元径8.6㎝で、やはり口縁部が外反ぎみに立上がるが、口縁端部は上方につまみ上げられている。橙色を呈し、やはり小石・長石粒・赤色クサリレキを含むなど粗雑である。435は復元径8㎝の器壁が薄い「て」字状口縁をもつ皿で、灰白色を呈し、胎土は少量の小石を含むが精緻である。440は復元径が約13㎝で、その他の皿が8~9.5㎝であるのと比べて大きい。胎土は生駒西麓産の土器の胎土に似る。

土師器鉢(441)復元径約16.5㎝で、半球形の体部に外反する口縁部をもつ。口縁部内外面と体部内面には強いナデが施されている。橙色を呈し、胎土は小石・長石粒を含み、やや粗雑である。

黒色土器椀(443~445) 443・444は内黒のA類で、444は復元径15.2㎝で、口縁端部内縁に浅い沈線をめぐらし、内面に幅の広いヘラミガキを施す。また口縁部外面に帯状の黒斑がついている。外面および断面は明黄褐色を呈し、長石粒を含むが胎土は精緻である。443は復元径が6㎝で、断面形が三角形の高台をもち、明黄褐色を呈する。445は両黒B類

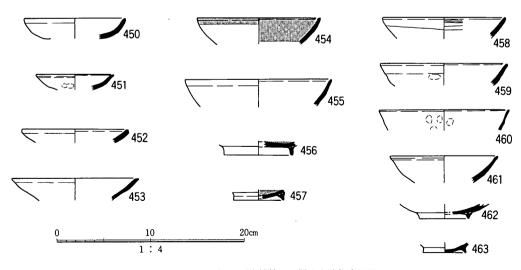


図136 82-31次 I 区南端第4 A 層出土遺物実測図

で復元径6㎝、高さ1.1㎝の器壁が厚く高い高台をもつ。断面は橙色を呈する。

円筒埴輪(446・448・449)448は底部の復元径が20cmで、内外面にヨコナデを施している。橙色で、赤色クサリレキや小石を多く含む粗雑な胎土である。449は底部の復元径が18cmで明黄褐色を呈す。胎土は長石粒・赤色クサリレキ・小石を含み精緻である。446は破片で、ヨコハケとナナメハケが看取できる。明黄褐色を呈し、長石粒や小石を含む。

朝顔形埴輪(447)復元径32.5㎝で、朝顔形埴輪の口縁片と思われ、全体にハケメ調整を施したのち口縁端部をナデている。明黄褐色を呈す。

第 4 A 層出土遺物 (図136, 図版87)

土師器杯(450・453・455)450は復元径10.8㎝、器高2.2㎝で、体部は丸みをもって立上がる。橙色を呈し、長石粒・赤色クサリレキを含むやや粗雑な胎土である。455は復元径15.7㎝で、口縁端部は丸くおさめる。表面の磨滅のため詳細が不明であり、黒色土器B類の椀になる可能性がある。胎土は長石粒・小石を含みやや粗雑である。453は復元径13.5㎝で、外反する体部をもち、口縁端部外面と体部内面がナデ調整で、体部外面はユビオサエである。色調は橙色で、胎土は長石粒・小石を多く含み粗雑である。

土師器皿(451・452) 451は復元径が8.2㎝と小さく、丸い体部と短く外反する口縁をもつ。橙色を呈し、胎土はやや粗雑である。452は復元径11.3㎝で内湾ぎみに丸く上方につまみ上げた口縁端部をもつ。浅黄色で赤色クサリレキを含むが、精緻な胎土である。

黒色土器椀(454・456・457)いずれも内黒A類で、454は復元径13.2cm、外面・断面は灰白色を呈す。長石粒・角閃石を含む。456は復元径が7.4cm、高さ1cm、断面形が台形の高台をもつ。外面・断面は黄橙色を呈す。457は復元径5.4cmで、断面形が三角形の高台をもち、外面・断面の色調は浅黄橙色である。

瓦器椀(458~463)460・461は暗灰色、458・462・463は灰色、459は白色を呈する。461は復元径11.5㎝をはかる。458は復元径13㎝で、細かい圏線ミガキを内面にいれる。460は復元径13.9㎝で器壁が薄い。459は復元径13.5㎝で、褐色クサリレキを含むが精緻な胎土をもつ。462は復元径5.3㎝、高さ0.7㎝の断面形が三角形を呈する高台をもち、底部内面に0.5~1㎝間隔の平行線のミガキを施している。463は復元径4.6㎝、断面形が三角形を呈する高台をもつ。

第3層(I区南端)出土遺物(図137、図版87)

輸入白碗椀(467)直線的に伸びる体部内面に、細い沈線を1本いれている。

土師器杯(464)黒色土器B類の椀になる可能性があり、復元径13㎝をはかる。体部内

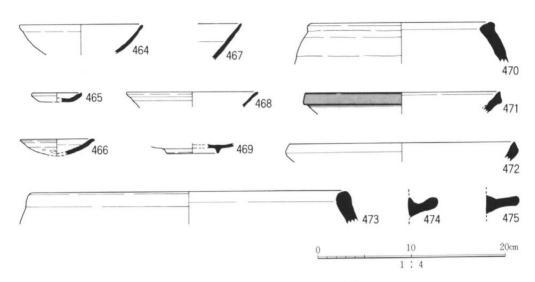


図137 82-31次 I 区南端第3層出土遺物実測図

外面にナデを施す。断面は褐灰色で、長石粒・クサリレキを含むが胎土は精緻である。

土師器皿 (465・466) 465は復元径5.3cm、器高0.9cmで、底部外面は未調整である。淡 黄色を呈し、胎土は精緻である。466は復元径8cm、器高1.6cmで、口縁端部が軽く外反す る。口縁外面と体部内面にナデ調整を施す。橙色で、長石粒・赤色クサリレキ・小石を含 むなど胎土は粗雑である。

瓦器椀(468・469) 468は復元径14㎝で、器壁が薄く浅い器形である。色調は灰色を呈する。469は復元径5.4㎝で、高さは0.5㎝、断面形が三角形を呈する高台をもつ。色調は灰色である。



写真23 82-31次 I 区南端 S P 01

瓦質甕(470)復元径19㎝で内傾する口縁部をもつ。口縁端部は外方に肥厚し、口縁部内面ともどもナデ調整を施しているが、口縁部外面はユビオサエ程度の粗雑なナデである。外面は褐灰色、内面・断面はにぶい橙色を呈し、小石や長石粒を含むが精緻な胎土をもつ。

瓦質羽釜(474・475) いずれも羽の部 分のみの破片で、体部からはがれている。 色調は474は浅黄橙色、475は灰白色であ る。

土師質甕(473)復元径約33㎝で、内傾する口縁部は端部を丸くおさめている。 浅黄橙色を呈する。

東播系須恵器鉢(471・472)472は復元径24㎝で回転ナデを施し、明青灰色である。471は復元径20.8㎝で、口縁端部は下方に肥厚している。外面が緑黒色、内面・断面が灰白色を呈し、瓦質であるが、東播系須恵器と思われる。12世紀末~13世紀前半の様相を示している。



写真24 82-31次 I 区南端 S D01断面 (黒田・清水和)

2) 飛鳥時代の遺構と遺物 (第4B層基底面検出遺構) ピット

S P01

遺構 (図128 · 138)

7世紀末の土師器杯476が入ったピットで、第6層上面の精査時には層上面の汚れのため発見できず、下層までの掘削におよんで検出できた。直径約0.3m、深さ0.3m、褐色粘土を埋土とする小ピットである。

遺物 (図139, 図版87)

土師器杯(476)復元径17.4cm、器高5.2cmの灰白色を呈する杯で、平底で体部はやや丸みをもって外上方へ開き、口縁端部は丸くおさめる。手法は底部を正方形を描くようにへラで削ってから、体部の下 1/3 をヨコ方向に、ヘラで右から左に削っている。胎土は褐色クサリレキと長石粒を含むが精緻である。飛鳥Ⅳ期ごろに比定できる。

3) 平安時代の遺構と遺物(第4B層基底面検出遺構) 溝

S D01

遺構 (図128 · 138)

北で東に約15°振った、幅約1m、深さ0.25mの南北溝で、本調査区南端で西に曲がる

第川章 調査の結果

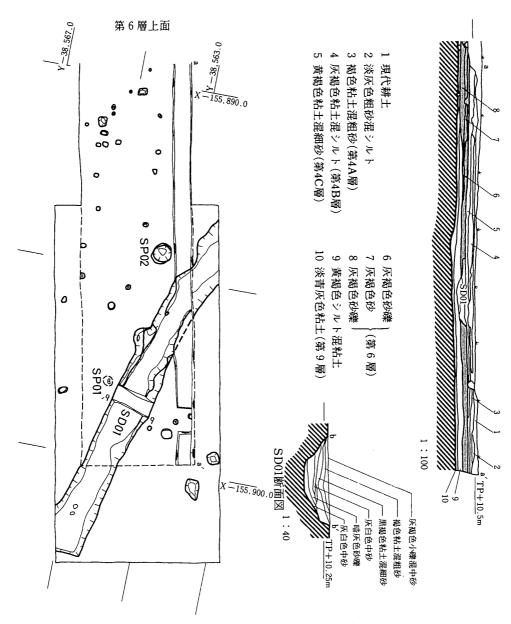
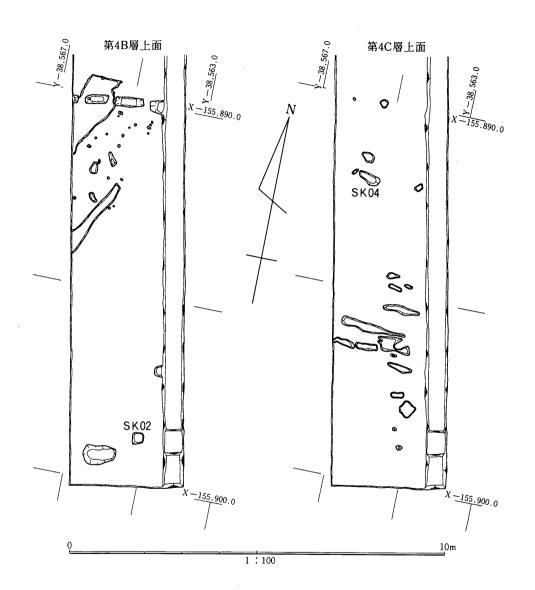


図138 82-31次 I区南端平面図・断面図(見開き)

ようである。溝の断面形は台形を呈し、第4B層で完全に埋没する。古墳時代初頭の製塩 土器477、同後期の須恵器杯身478といった古い遺物のほか、土師器杯479と黒色土器椀480 が出土している。遺物はきわめて少ない。

遺物 (図139, 図版87)

製塩土器 (477) 脚端部の径が約5㎝、器高は5㎝以上をはかる製塩土器で、脚台が低



く、杯部が直線的に立上がっている。くびれは小さく、脚底部は平底である。杯部底は薄い。色調は浅黄橙色で、胎土は小石や赤色クサリレキ・長石粒を含むが精緻である。

須恵器杯身(478)復元径11.4cm、器高4.5cmで、体部の約1/2に時計回りのヘラケズリを施している。底部内面に細い条線のタタキ痕が残る。色調は明青灰色を呈し、胎土はクサリレキや長石粒を含むが精緻である。

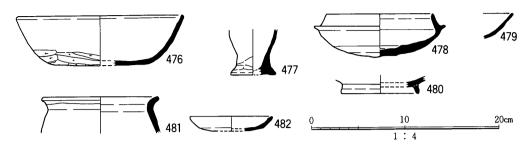


図139 82-31次 I 区南端遺構出土遺物実測図 S P 01:476、S D 01:477~480、S K 02:481、S K 04:482

土師器杯(479) ユビオサエを施した底部から緩やかなカーブをえがいてナデ調整された体部が立上がる。色調は浅黄色を呈する。

黒色土器椀(480)体部上半を欠損しているが、高台の復元径8.4㎝の内黒A類で、下部でやや肥厚した断面形が台形を呈する高台がつく。表面は灰黄色、断面は明赤褐色を呈し、胎土は少量の長石粒を含む。

このほか径0.5m、深さ約0.2mの円形を呈するピットSP02(図 $128 \cdot 138$)を検出したが、遺物は皆無で時期は不明である。

4) その他の遺構と遺物 (第4A・4B層上面遺構)

第4B層上面で第4A層を耕土とした時代の東西方向の耕作痕跡を、第4A層上面で第3層形成以降の南北方向の耕作痕跡を発見した(図138)。いずれも溝状ないしはピット状の遺構で、深さも0.05~0.1m程度と浅い。

土壙

S K 04

遺構 (図128)

第4B層上面で検出した。長径0.6m、短径0.25m、深さ0.07mの楕円形を呈する土壙で、埋土として第4A層が入っていた。土師器皿482が出土している。

遺物 (図139)

土師器皿(482)復元径8.8㎝、器高1.5㎝である。体部は丸みをもって立上がり、外上方へ開き、口縁端部を丸くおさめる。橙色を呈し、胎土は赤色クサリレキ・長石粒・小石を多く含み、やや粗雑である。

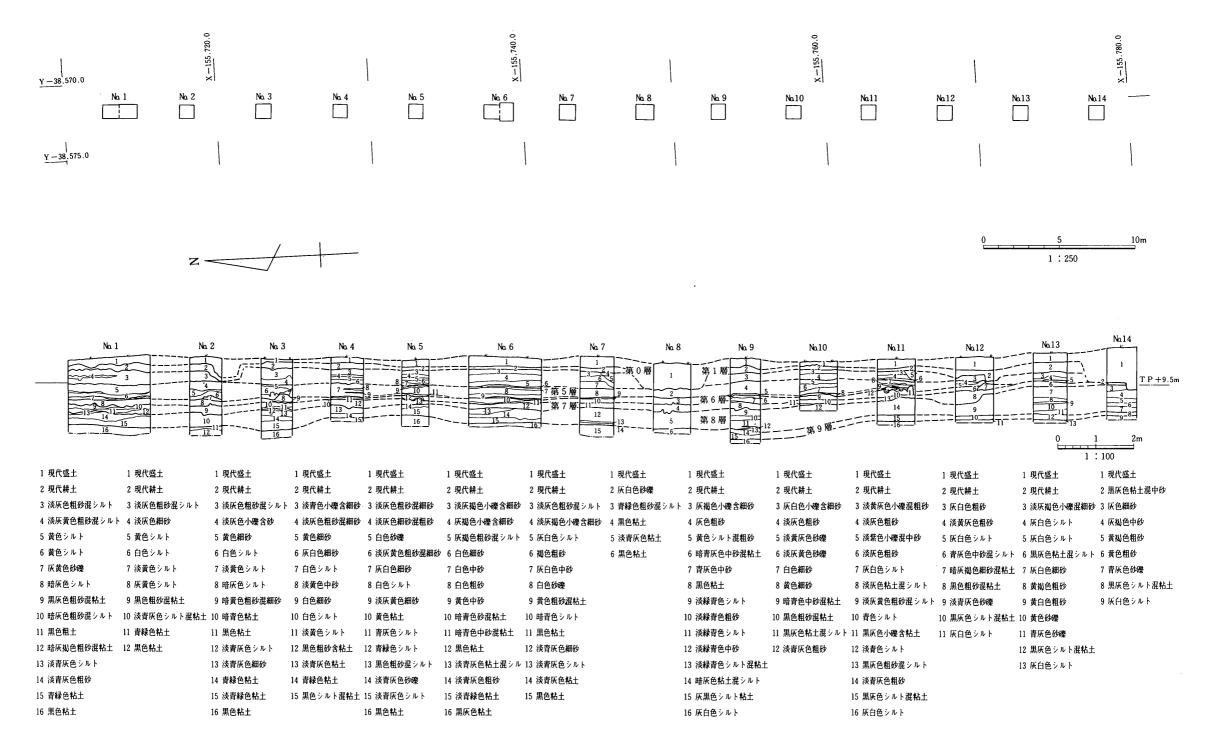


図140 82-31次 II区平面図・断面図

S K 02

遺構 (図128)

第4 A層上面で検出した土壙で、一辺0.3mの方形を呈し、深さは0.05mである。灰褐色粗砂混シルトを埋土とする。土師質甕481と京焼風の陶器片が出土した。

遺物 (図139)

土師質甕(481)復元径12.2㎝をはかる。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁端部は平らにおさめられている。内外面ともナデ調整が施され、灰褐色を呈す。 (黒田)

5) II区の層序 (図140)

当調査地は平野養護学校の西に位置することから、同校敷地で行った調査結果 [大阪市文化財協会1983 I] にしたがって層名を比定した。当地は第9~7層段階では南から北に緩やかに傾斜する地形であったが、第5層の洪水層の堆積でほぼ天端がTP+9.5mの平坦な土地となった。ゆえに、南では第5層の層厚は5 cm程度と薄く、北では $40\sim50$ cmと厚い。

沖積層上部層

- 第9層: 暗灰色あるいは黒色のシルト混粘土~粘土からなり、層厚8~30㎝をはかる。南のNo.14~11ピットでは上面がTP+8.7~8.8mと平坦だが、No.9ピットでTP+8.3mと急に下がり、No.5・4ピットでTP+8.6mとまたやや高くなり、No.3~1ピットでTP+8.35mと低平地をなしている。
- 第8層: 青灰色砂礫〜淡青灰色粘土からなり、層厚30〜75cmをはかる。全体的に北部のほうに粘質土が堆積し、南部は砂礫〜細砂と粗くなる。
- 第7層:暗青色あるいは黒色の粗砂混シルト〜粘土からなり、層厚10〜35㎝をはかる。本層は古代の水田耕土であったとみられるが、とくにNo.1〜5ピットでは踏込みもしくは耕起跡と思われる凹凸があり、No.5ピットでは水田上面に特徴的にみられる薄層の堆積(暗青色粘土混シルト)がある。本層上面はNo.13・14ピットでTP+9.6mをはかり、これより北はTP+9.35〜8.9mと徐々に低くなっている。
- 第6層: No.12ピット以北に分布し、青緑色あるいは灰黄色の粗砂混シルト〜中砂混粘土からなり、層厚は15〜20㎝をはかる。本層も古代の水田耕土であり、No.3ピットで ・ 時が検出された。本層上面はNo.12ピットでTP+9.45m、No.1ピットでTP+



写真25 82-31次 II区調査風景 (南から)



写真26 82-31次 II区No.12ピット東壁断面

9.1mというように、やはり南から北に緩やかな傾斜をみせるが、第7層ほど急ではない。No. 13・14ピットに本層の堆積がみられないようにみえるのは、相接する水田面の高低差を緩和する方向で本層と第7層が同化し、水田耕土として利用されたためで、もとは水成層である第6層がそもそも分布しなかったためではない。

第5層:白色あるいは黄色の砂礫~粘土 からなる洪水層で、層厚5~50 cmをはかる。南にいくほど薄く なるのは後世、削平されたため である。

第4層以上の層は、発掘面積が狭く、 したがって採集遺物が僅少なので、本遺 跡南部基本層序の各層に比定できない。

6) 小結

82-31次調査地は以上述べてきたように、各層位ごとに調査を行った I 区と、ピット掘りによる全体の層序の確認にとどまった II 区に分けられるが、 I 区においても旧大正川の掘削や地山層途中までおよぶ近代の削平のため調査の対象になったのは南端と北端のみである。南端では第4 A層上面と第4 B層上面・基底面で調査を行い、前2 面においては耕作に伴う溝状遺構など耕起痕跡の検出にとどまったが、第4 B層基底面では7世紀末の土師器杯を伴うピット S P01や10世紀後半に埋没する北で東に15°振った南北溝S D01を検出した。

I 区北端においては第9 C 層で縄文時代の石器や土器の細片を 1/10の平面図にレベルをおとしながら採集し、垂直分布図を作成することによって、その堆積の傾向を掌握する

ことができた。垂直分布図をみると、土器の細片が石器群と比較して下位の淡青灰色粘土層に多く分布している。楔形石器やその剝片の出土は当地が石鏃の製作址であることを物語ると思うが、これら石器群は主に上位の橙灰色シルト混粘土層に多く分布し、傾斜地に流れ込むように堆積していた。近接する大阪市営地下鉄45・46工区[大阪市文化財協会1982]の成果と同様、縄文時代晩期の石器製作址であろうと考えられる。

II区においては第9~6層まで南から北に傾斜する地形であったのが、第5層の洪水層の堆積およびそれ以降の削平でフラットになる傾向がある。また第6・7層は平野養護学校の調査地と同様に古代水田の耕土層であったことが、畦などの検出で明らかになった。 (黒田)

第4節 瓜破遺跡東南地区の調査 (82-23次調査)

調査地は瓜破台地上にあり、丹北郡条里の6条4里・同5里内にあたる。第II調査区は ほぼ条里の里界線上に位置する。小字名は野代・大溝である(註1)。

検出した遺構は5世紀から現代までの各時期のものがあり、6・7世紀と9・10世紀のものが多い。旧石器~弥生時代については遺構はないが、7世紀以降の遺構や地層から石核・石鏃などの石製遺物が出土している。

第Ⅰ調査区の北部では近現代に瓦や火鉢の製造(註2)のための粘土取りが行われ、遺構の残存状況が悪かったが、南部ではほぼ全域で古墳~平安時代の遺構が存在した。第Ⅱ 調査区は東部に中近世の条里里境の東西溝があり、この部分ではより古い遺構は削平され 失われていたが、中部から西部にかけては古墳~平安時代の遺構が密に存在した。第Ⅲ調査区では古墳~飛鳥時代の遺構がまばらに現れた。

遺構番号は古代以前が400番台、中世が300番台、近世が200番台、近現代が100番台である(註3)。

1)調査地の層序と遺物

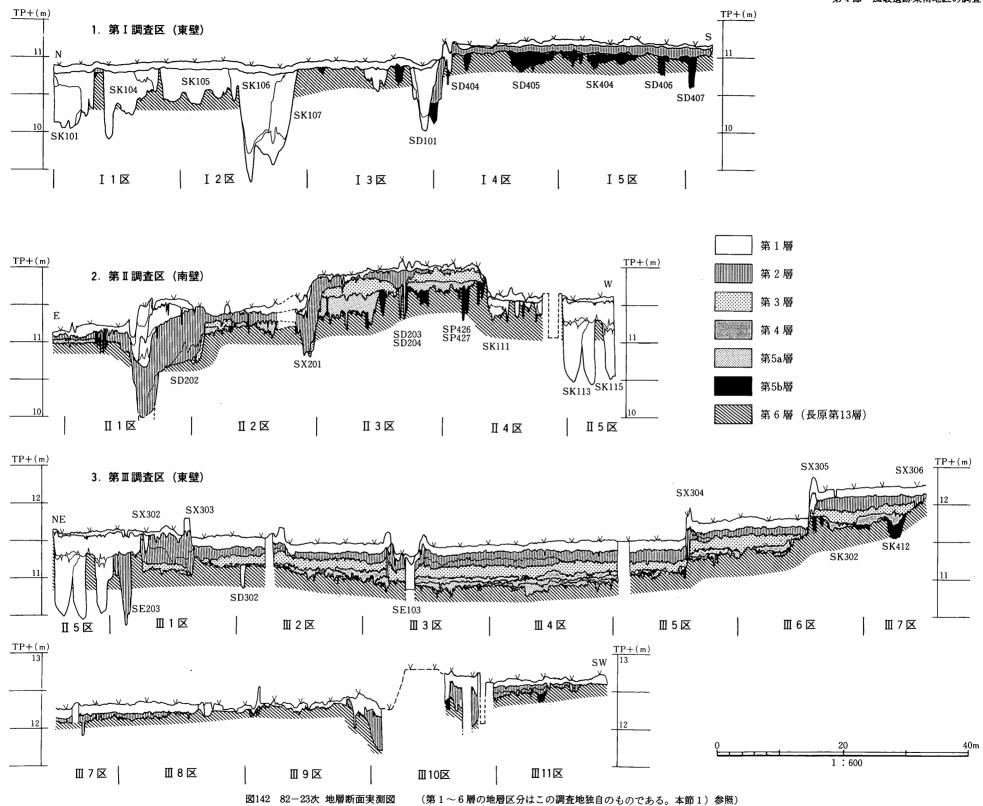
第 I ~III調査区それぞれで地層の様相は異なり、全調査区を通じて連続した地層区分はできなかった。そこで調査区ごとに地層を時期区分し、地層番号を付した。上から現耕土層(第1 a 層)、近現代の地層(第1 b 層)、近世の地層(第2 層)、中世後半の地層(第3 層)、中世前半の地層(第4 層)、古代以前の地層(第5 層)、地山層(第6 層)である(註4)。第5 層は土師器・須恵器・黒色土器・瓦が出土し、それに第4 層は瓦器、第3 層は瓦質土器、第2 層が肥前陶磁器と、上の地層になるにしたがい次々と新しい種類の遺物が加わっている。各層の細分は第2 a 層・第2 b 層・第2 c 層・・のように表記した。以下に調査区ごとに典型的な層相と地層・遺構の概略を示す。図141・142・148・151・15 2を参照されたい。

第 I 調査区 (図142・148, 図版42)

第1a層:暗灰色砂混シルト

第16層:黄色粘土・淡灰色砂混シルトのブロック混合

第 2 層:灰白色砂混シルト



第5a層:橙黄色粘質シルト

第5b層: 黒灰色粘土

第 6 層:橙黄色シルト質粘土

第1b層は主に土取り穴の埋土として存在する。第5b層は第5a層基底面で検出される遺構の埋土である。

第 I 調査区は湾曲しつつ南北に延びる幅 2 m、長さ105.5mの調査区である。調査区中央南寄りに現在、農業用水路が東西に走る。この構の両側で地層・遺構の状況が異なり、 構を境に北部、南部に分け大略を記す。北部は 1 ~ 3 区、南部は 4 • 5 区におおよそ相当する。南部では一部で拡張を行い、また周囲に補足トレンチ 1 ~ 5 を設けた。

第1層(現耕土)上面は北部でTP+10.9m、南部で同11.2m、第6層(地山)上面が

北部で同10.8m、南部で同11.1m弱と、 ともに南に向かいやや高くなる。

北部では第1層直下が第6層となり、この上面で近現代の土取り穴SK101~108とそれらによる破壊を辛うじて免れた6世紀の土壙、9~10世紀の柱穴・構などが検出された。南部では第1層の下にほぼ全域で江戸時代の第2層があり、その下に古墳~平安時代の遺物包含層である第5a層が薄く、途切れ途切れではあるが存在し、その下が第6層である。第6層を切って、6世紀から7世紀にかけての建物や溝・土壙、9~10世紀の溝があり、第5層を切り、15世紀の土壙が存在した。

遺物 (図143, 図版89)

南部では第1層から翼状剝片を剝離したと思われる旧石器時代のサヌカイト製石核(図147)533、第2層からは肥前陶磁器に混じり、須恵器492、土

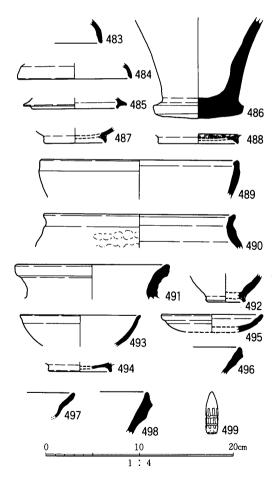


図143 82-23次 第 I 調査区各層出土遺物実測図

師器495、瓦器493・494、第5 a層からは須恵器484・491、土師器487・489、黒色土器A類(註5) 488、12.7m機銃弾499が出土した。499は側面に条痕が8条ある。後端部には孔があり、曳光弾とみられる。この形態のものは第2次大戦中アメリカ軍が使用あるいは戦後日本に払い下げになった物しかなく、おそらく大戦時にアメリカ軍機により打ち込まれたものと思われる(註6)。

北部では第1層直下が第6層であったが、第6層を掘り込む近現代の土取り穴や溝から、 古墳時代後期から室町時代にかけての須恵器483・485・486・496、土師器490・497、瓦質 土器498などが少なからず出土しており、かつて付近に存在した遺物包含層の一端が知ら れる。

第 II 調査区 (図142・151, 図版42)

第1a層:黒灰色砂混シルト

第1b層: 黄色粘土・淡灰色砂混シルトのブロック混合

第2a層:灰白色砂混シルト

第2 b 層:上部灰白色砂混シルト、下部灰白色粘土・灰白色砂礫

第 3 層:灰黄色砂混粘質シルト

第5a層:黒みをおびた黄(淡)灰色砂混粘質シルト

第5 b 層: 黄灰色砂混粘質シルト

第 6 層:淡黄色粘土

第1 b層は主に条里里境の東西溝SD102と土取り穴の埋土として存在する。第3層とした地層は出土遺物が少なく、時期が明確でない。第4層である可能性もある。第5 b層は第5 a層基底面で検出される遺構の埋土である。

第II調査区は幅2 m、長さ89mの東西方向直線の調査区である。第1 層(現耕土)上面の高さは東端でT P + 11.2m、西端でT P + 11.6mである。もっとも高いのは中央やや西よりの3 区でT P + 12.0mである。第6 層(地山)上面は東端でT P + 11.5m、3 区で11.8mである。両層上面ともに西端が3 区より低いのは、4 区より西では第6 層上部が土取りにあっているためである。

2・3 区では調査区内を斜めに横切る中近世の東西溝(条里の里境の溝) S D202・301 や、この溝に沿って行われた段状の地下げ S X201・301によって、また、4・5 区は近現代の土取り S X102、S K113~115のため、より古い遺構はかなり破壊されていた。ただ

し、2・3区では中近世の攪乱を免れたところで、4区では土取りの深さが20~30cmと浅かったため、共に多くの遺構が残存していた。

これらは $5\sim10$ 世紀の遺構で、 $2\cdot3$ 区に溝・土壙、4 区に柱穴が主に分布する。ただし、これらは層位および出土遺物から $5\sim10$ 世紀の遺構とは分かるが、出土遺物が少なく、古墳時代あるいは平安時代といった、より細かな時期を示しうる遺構はごくわずかであった。とくに 4 区では近現代の土取りにより、遺構上部を削平されており、それが著しい。

地層では近現代に土取りが行われた4・5区を除き、第2層が全体に分布し、とくに2・3区では里境の東西溝SD202や、それに並行する段SX201の埋土として厚く堆積している。また、面的には調査できなかったが、1区中央を南北に走る現用水路の下に、杭列を伴う第2層の深い落込みがあり、南方のため池につながる江戸時代の南北溝と思われる。東西溝SD202は現用水路の東では存在せず、南北溝にT字形に取り付いていたとみて誤りない。

中世後期の第3層は3区にのみ、近世の東西溝に削り残された形で存在するが、平安時代10世紀以前の地層である第5 a層は1・2区では第2層の下に、3区では3層の下にと、中近世の東西溝と近現代の土取りにより攪乱された部分以外では全面に存在した。2~4区ではこの第5 a層直下の第6層の上面で多数の遺構が現れ、これが、前述の古墳~平安時代(5~10世紀)の遺構である。ただし、この第5 a層とその下面で現れる遺構の埋土(第5 b層)は遺構の密度に比して、遺物の包含がきわめて少なく、地層の黒味も少ない(周辺での開発に伴う試掘調査においては注意が必要であろう)。

遺物 (図144、図版89・90)

第1層からは1~3区で古い時期の遺物が多く出土した。須恵器501、中国製青花507、中国製青磁508・510、平安時代複弁蓮華文軒丸瓦509などである。507は染付皿B1群[小野正敏1982]である。508・510は碗と皿で共に体部外面の釉下に放射状の箆凹線があり、

外底面の釉を輪状に掻き取っている。これらの中国製磁器は15・16世紀のものである。

第2層からは土師器503、瓦器504、瓦 質土器505、備前焼506、瓦512、土人形 513 (写真27) が出土している。512は平 瓦で凸面には縄タタキメ、凹面には布目

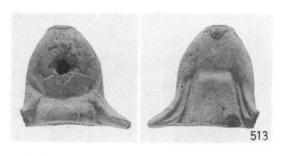


写真27 82-23次 第11調査区 (第2層) 出土の土人形

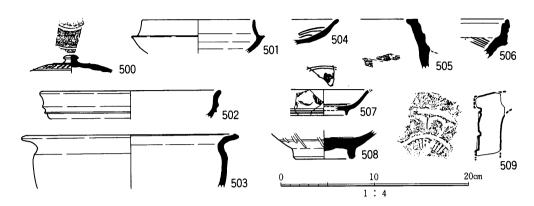


図144 82-23次 第 II 調査区各層出土遺物実測図

が残る。第3層では図示できる遺物は出土しなかった。

第5 a 層では須恵器500・502、瓦511がある。500は高杯の蓋の破片で、天井部外面には 凸線と放射状に施した櫛描列点文がある。511はいわゆる行基葺の丸瓦である。須恵質で 凸面の一部には平行タタキメが残り、凹面には斜め方向の糸切り痕と布・紐の圧痕が顕著 である。

第III調査区(図142·152, 図版42)

第1 a 層: 黒色砂混シルト

第1 b層: 褐灰色砂混シルト

第2a層:上下2層に分かれることが多く、上層が灰色砂混粘質シルト、下層が灰白色砂 混シルトである。

第2 b 層:灰白色砂混(粘質)シルト

第 3 層:上下2層に分かれることが多く、上層が黄灰色砂混(粘質)シルト、下層が灰 黄色シルト質粘土である。

第 4 層:橙黄色を強くおびた灰黄色シルト質粘土、第5 a 層:橙黄色を強くおびた灰色 砂混粘土

第5 b層: 黒味をおびた灰色シルト質粘土

第 6 層:橙色を強くおびた黄色 (シルト混) 粘土

第2 a層は第1 b層とすべきものを誤って部分的に含めている可能性がある。第5 b層は第5 a層基底面で検出される遺構の埋土である。

第Ⅲ調査区は弧を描きながら南東方向に伸びる幅2m、長さ約210mの調査区である。

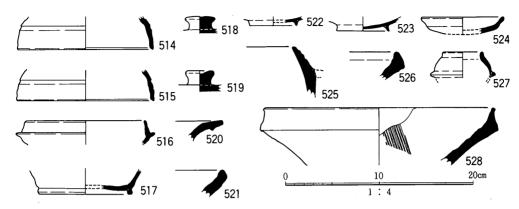


図145 82-23次 第[[調査区各層出土遺物実測図

南端近くでは、道路敷であるため調査が行えなかった部分がある。数個所ある幅約1mの 農作業用通路もできるだけ断ち割り、連続した土層図を作成した。

第1層(現耕土)上面の高さは北端部でTP+11.6m、南端部でTP+12.7mである。 3区北部がもっとも低く、TP+11.3mで、北および南へ地境の畦を越えるごとに徐々に標高を高めている。第5層(地山)上面は北端部でTP+11.4m、南端部でTP+12.6mである。もっとも低いのは3区南部で10.9m弱である。

平安時代以前の耕土層である第5 a 層は6 区南部以南を除いてほぼ全面に存在した。第5 a 層下面の起伏は現在の耕土面のそれと、かなりの部分で一致している。遺構は6~7世紀の土壙・溝や第5 a 層下面の鋤跡群などが散在する。

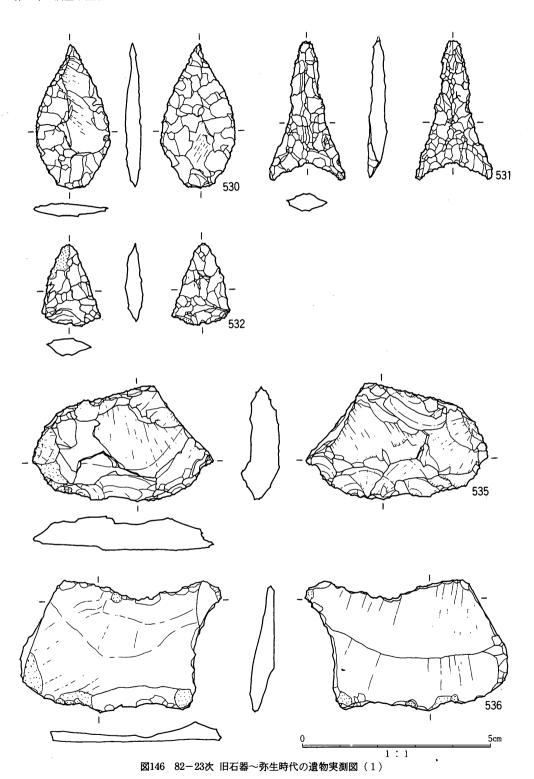
遺物 (図145, 図版89)

5世紀後半~10世紀の土器は各層から出土するが、小片であり、第4層より上で出土する瓦器も同様である。図化できた遺物はきわめて少ない。

図と写真で示したものには、第2層出土: 瓦器522、備前焼528、第2層あるいは第3層出土: 須恵器520・526、瓦質土器525、第3層出土: 土師器527、須恵器516・521、瓦器523、第5a層出土: 須恵器517・529がある。6世紀後半の須恵器514・515・518・519と瓦器524は11区のSD423検出時に出土したが、前者はSD423、後者は第2層の遺物であろう。520・529は5世紀の甕・壺である。521・526は東播系の練鉢である。522・523は摩滅のため暗文は不明である。527は瓦質土器の可能性がある。 (鈴木)

2) 旧石器~弥生時代の遺物(図146・147, 図版92)

以下に本項を含め、旧石器時代から現代にいたる遺構・遺物の記述を行うが、調査区名



— 214 —

は原則的に「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」のように略して記載する。

旧石器~弥生時代の遺構は存在しなかったが、第1層から旧石器時代の石核が出土した ほか、7世紀以降の遺構や地層から旧石器~弥生時代の石製遺物が少量出土した。これら はすべて原位置を動いており、層位や共伴遺物で時期を決めることができない。遺構内お よび包含層出土のものを形態で分類し、記載する。

石鏃(530~532)530は凸基無茎式の木の葉状の薄い石鏃である。全長3.8㎝、最大幅2.0㎝、厚さ4㎜、重さ2.5gである。先端はやや細長く尖る。刃部は両面から鋸歯状の剝離を施してつくり出している。サヌカイト製である。7世紀の溝SD406から出土したが、弥生中期のものと考えられる。531は凹基無茎式の石鏃で全長3.6㎝、厚さ4㎜、重さ1.9gである。先端と基部の先を欠損するが、ほぼ完形である。細長い二等辺三角形をなし、中部から先端にかけてさらに細長くのび、石錐のようにもみえる。刃部は比較的大きな剝離を両面から行って刃をつけている。その結果、逆Y字の稜ができあがっている。サヌカイト製である。9~10世紀の溝SD414から出土したが、縄文後期あるいは晩期ごろのものであろう。532は基部の先を左右両方とも欠いているが、基部中央の剝離からみて、基部がほぼ一直線になる平基無茎式の石鏃と考えられる。刃部先端を一部欠損する。この石鏃は剝離回数が少なく、中央部の稜も明瞭でないため、未製品の可能性もある。全体に風化が激しい。サヌカイト製で、全長2.2㎝、厚さ4㎜、重さ(現存)1.2gである。Ⅲ5区の2層(江戸時代の地層)から出土した。時期は不明である。

石核(533・534)533は自然面の残るサヌカイト製の石核である。もともと風化の進んだ石であったらしく、石のきめは粗い。背面側を剝離したあと、90°転回して打面を調整し、次の打撃で翼状剝片を剝離したものと思われる。 I 4・5 区の1層(現耕土層)から出土した。6.1㎝×4.2㎝、厚さ1.7㎝である。旧石器時代のものであろう。534は9.0㎝×5.6㎝、厚さ2.9㎝のサヌカイト製の石核である。風化した自然面が残る。腹面には縦長の剝片の剝離痕、背面には打点の残る剝離痕がみられる。ひじょうに無造作な剝離を行っているので、旧石器時代の遺物ではないようにみえるが、長原遺跡ではこういった一見無造作な剝離を行っている旧石器時代の遺物がよく出土する。このため時期については断定できない。 III 4 区の第3層(中世後半の地層)から出土した。

楔形石器 (535) 535は折れているのでよくわからないが、楔形石器と思われる。両極から剝離を行っている。側面には自然面が少し残っている。階段状の剝離が数個所みられる。3.0㎝×4.7㎝以上で、厚さ1.0㎝である。石材はサヌカイトである。江戸時代の溝IISD

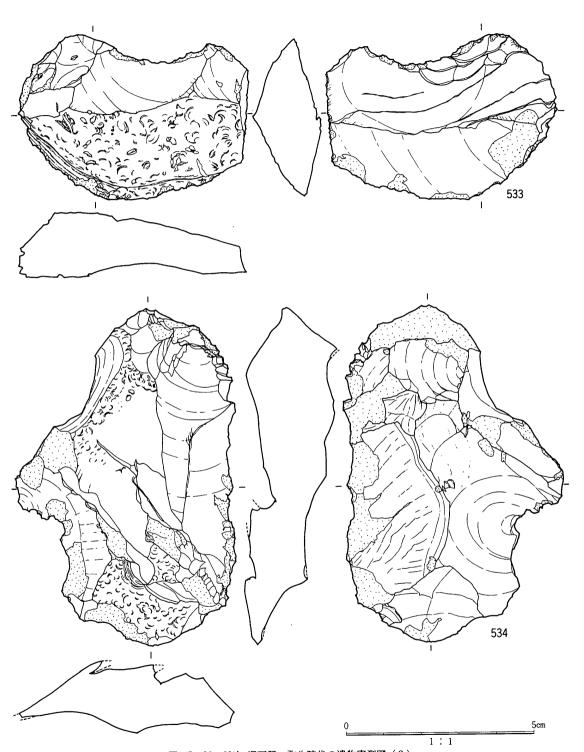
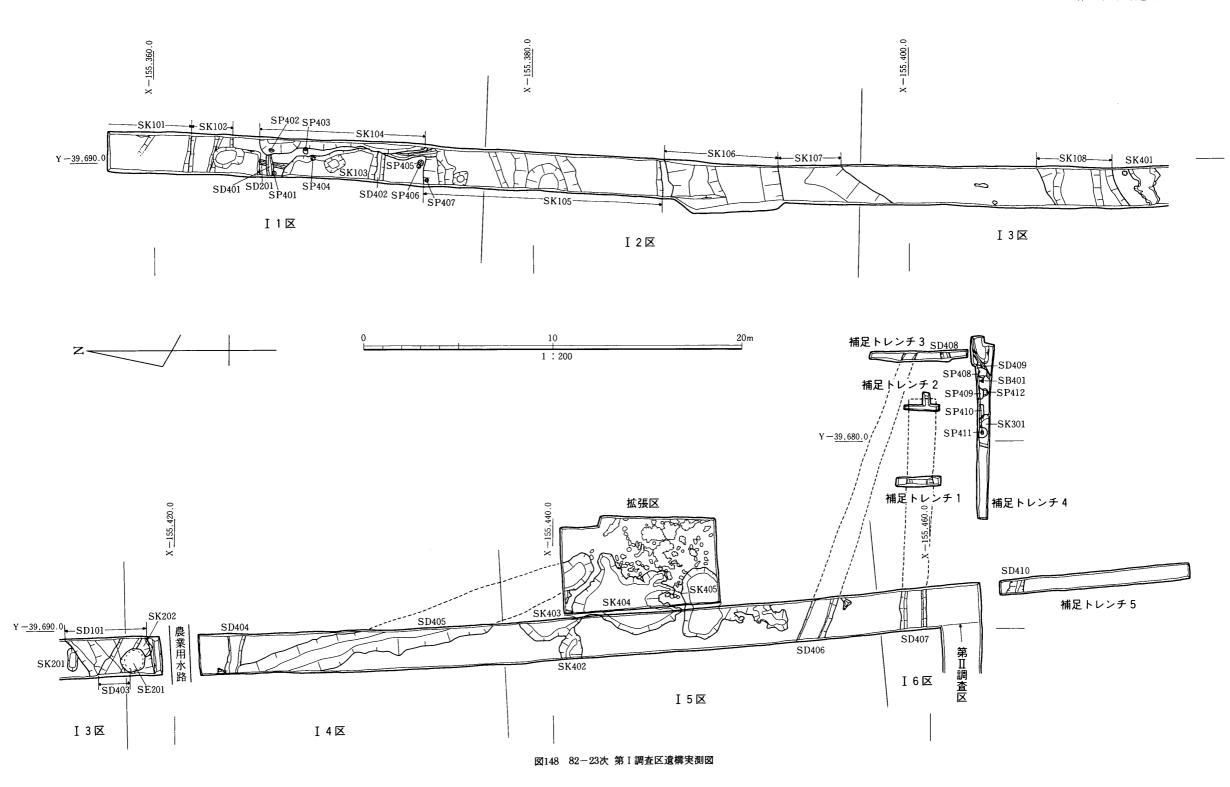


図147 82-23次 旧石器~弥生時代の遺物実測図(2)



遺物番号	形式	出土位置・層	時 期	縦×横cm	重さg	石 材
530	凸基無茎式石鏃	SD406	弥生(中期)	3.8×2.0	2.5	サヌカイト
531	凹基無茎式石鏃	连無茎式石鏃 SD414 縄文(後期) 3.6×2.		3.6×2.0	1.9	サヌカイト
532	平基無茎式石鏃	III5区2層	不明	2.2×1.5	1.2	サヌカイト
533	石核	I4•5区1層	旧石器時代	6.1×4.2	44.0	サヌカイト
534	石核	III4区3層	不 明	9.0×5.8	110.1	サヌカイト
535	楔形石器	SD203	縄文時代	3.0×4.7	16.2	サヌカイト
536	剝片	III5区2層	不 明	3.3×4.6	14.0	サヌカイト
	剝片	6点				サヌカイト
	砕片	2点	,			サヌカイト

表 7 82-23次 旧石器~弥生時代の遺物一覧

202から出土したが、縄文時代の石器と思われる。

剝片 (536) 536は摩耗が激しいので詳しくはわからないが、翼状剝片の縁辺部に 2 次加工を行って刃をつけているようにみえる。 2 次加工を施した部分は細かい剝落がみられる。 両端は折れている。サヌカイト製で、3.3 cm × 4.6 cm、厚さ0.6 cm である。時期は不明である。Ⅲ 5 区の 2 層(江戸時代の地層)から出土した。 (松本啓子)

3) 古墳~飛鳥時代の遺構と遺物

古墳~平安時代(10世紀以前)の遺構は、いずれも第6層(地山)の上面で検出され、埋土にも際だった違いをみいだせない。さらにほとんどの遺構で遺物の出土が皆無もしくは少量なため、古墳時代の遺構なのか、あるいは平安時代に属するものなのかといった、より細かな時期を示しえない遺構が少なくない。これらの時期を明確にできない遺構については、「4)古墳~平安時代の遺構と遺物」で記載している。

第 I 調査区では 5 世紀以前の遺構は確認できなかった。 6 世紀後半~ 7 世紀前半の遺構は 4 区以南に集中して存在するが、この時期の遺物は 3 区以北の土取り穴からも少なからず出土し、北部にも広がっていた可能性が強い。

第II調査区では2区西部から3区にかけて5世紀後半の土壙が存在した。このほかに、3~4区の第6層上面で検出した時期不明の柱穴・溝などの諸遺構(「4) 古墳~平安時代の遺構と遺物」参照)の多くも、直上の第5 a層に含まれる遺物のほとんどが5世紀後半のものであることから、この時期に属する可能性が高い。

第Ⅲ調査区ではほぼ全域でこの時期の遺物が出土するが、量は少ない。遺構もごく少数、

溝・土壙が散在するのみである。ただし1区では包含層中に5世紀後半の土器が目立つ。 また、11区の6世紀後半の溝SD423は遺物量が多く、付近にこの時期の居住地が存在すると思われる。

十塘

SK401 (図148, 図版37)

I3区で検出した。幅0.3~1.3mで深さは0.05~0.30mである。底面には小さな凹凸が 顕著にみられる。埋土は灰白色砂混粘質シルトである。検出面を第1層が覆っており、か なり削平されているようだ。6世紀の土師器・須恵器の小片が少量出土した。

S K 402~405 (図148・149, 図版38)

いずれもI5区とその東の拡張部に存在する。幅0.6~5.0m、深さ0.05~0.20mの不定形のくぼみで、埋土は黒灰色粘土である。底面には小さな凹凸が全面に存在する。SK404の埋土からは7世紀の土師器、須恵器537が少量出土している。

S K 406 (図151)

II 2 区西端部に存在する。S K407が一部重なるが切り合い関係は認められなかった。 長さ1.7m以上で、幅 $0.6\sim0.8$ m、深さは $0.20\sim0.25$ mである。東半分が約0.1m深く、段がつく。埋土は淡灰色砂混粘質シルトで 5 世紀後半の土師器・須恵器が出土した。S K407の遺物と接合できたものがある。

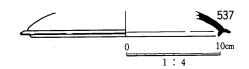
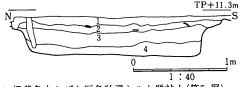


図149 82-23次 S K 404出土遺物実測図



- 1 橙黄色をおびた灰色砂混シルト質粘土(第5a層)
- 2 黒灰色シルト質粘土(SK407上層)
- 3 淡灰色シルト質粘土(同中層)
- 4 橙黄色をおびた淡灰色砂混シルト質粘土(同下層)

図150 82-23次 S K 407断面実測図

S K 407

遺構 (図150・151)

SK406と一部重なり、平面形が三角形に近い土壙で、東西幅2.4m、南北幅2.1m、深さ0.30~0.35mである。断面形は逆台形で埋土は3層に分かれる。上層が黒灰色シルト質粘土、中層が淡灰色シルト質粘土、下層が褐橙色をおびた淡灰色砂混シルト質粘土である。遺物は上層に多く、中・下層からも少量出土した。上層の遺物で中層あるいは下層出土のものと接合できるものが複数あった。

遺物 (図153, 図版90)

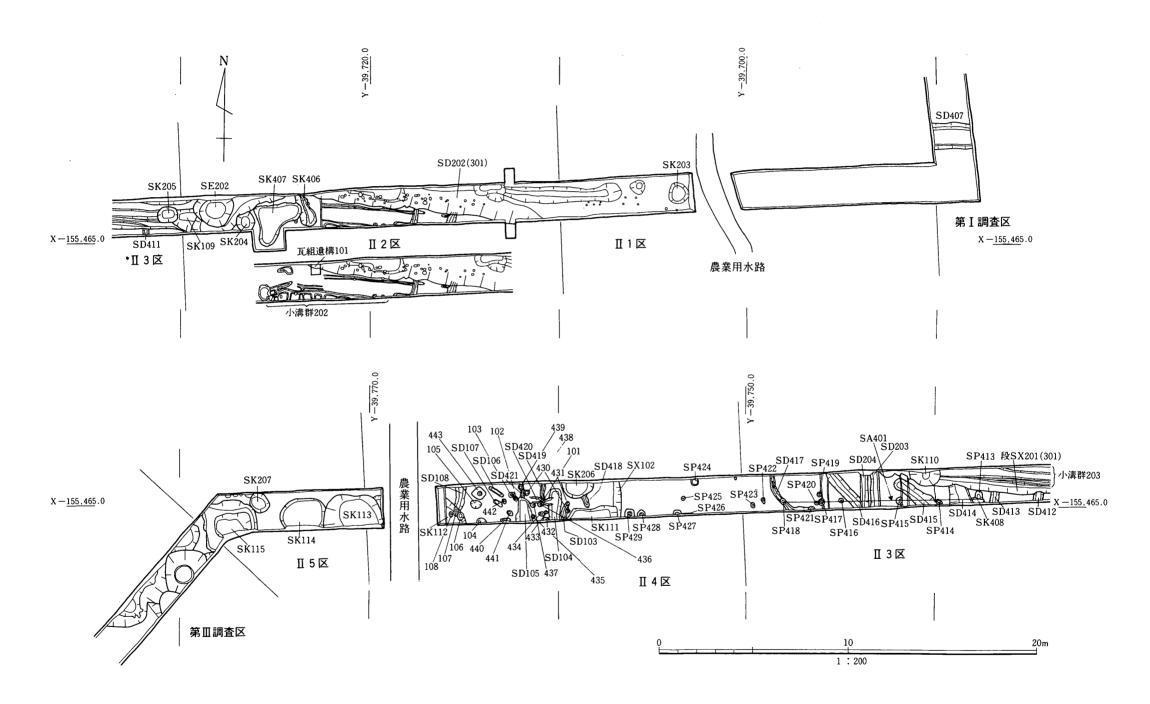
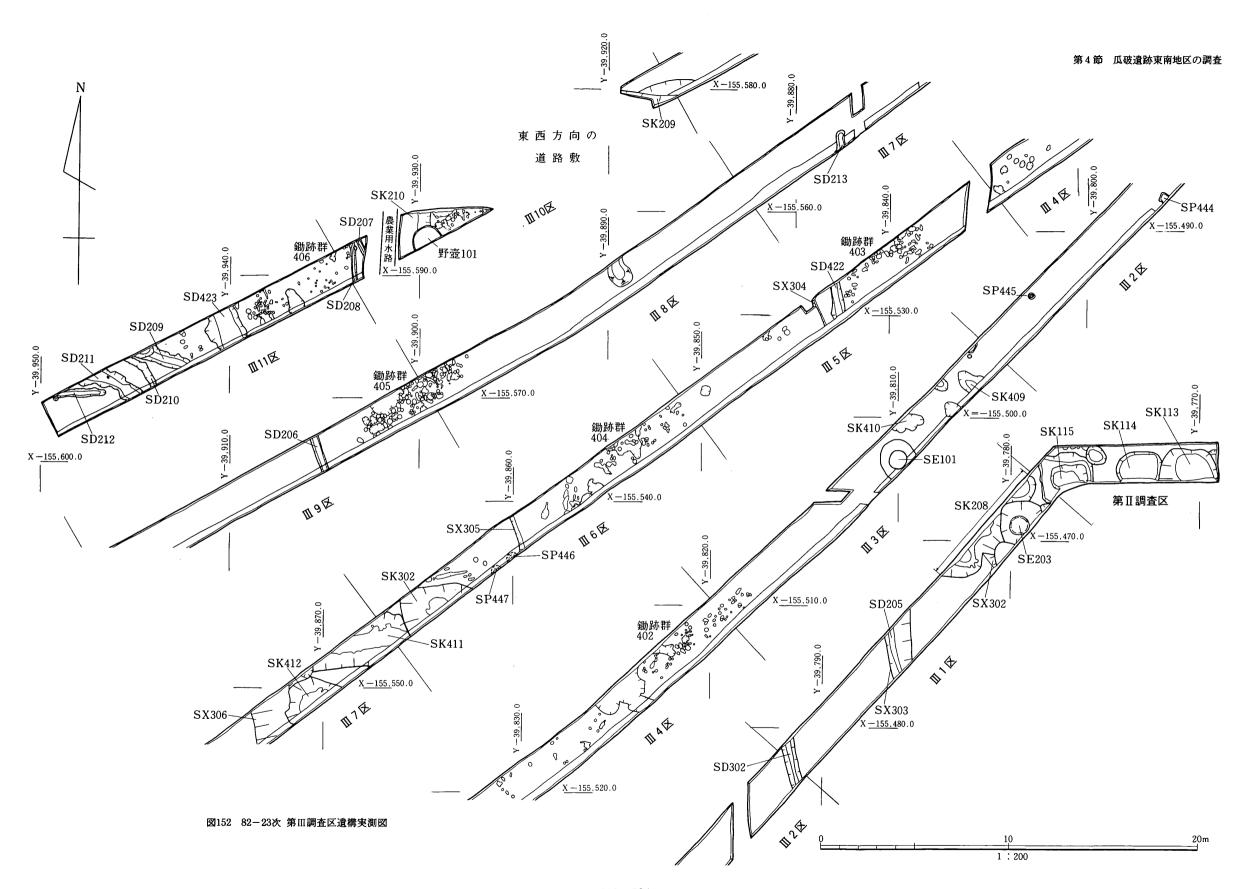
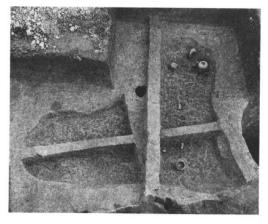


図151 82-23次 第II調査区遺構実測図 (遺構密集部分ではSPの記号を省略している)





540

写真28 82-23次 S K 407遺物出土状況

写真29 82-23次 S K 407出土 須恵器のヘラ記号

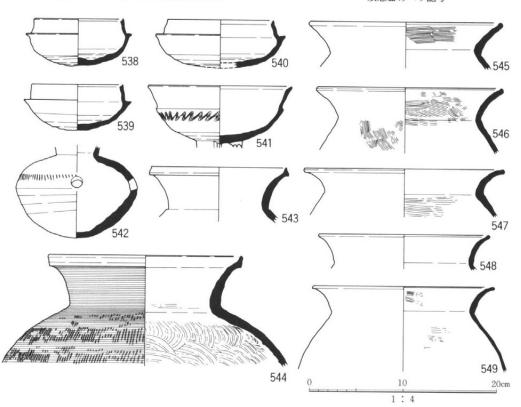


図153 82-23次 S K 407出土遺物実測図

須恵器杯身538~540、同高杯541、同題542、同甕543・544、土師器甕545~549が出土した。540の外底面にはヘラ記号がある(写真29)。542の肩部外面には平行のタタキメがめぐる。544の内面の同心円文は顕著に残っている。土師器は摩滅が著しい。

S K 409 (図152・154)

III 3 区北部にある長さ1.2m以上の不定形の土壙で、深さは0.1m、埋土は黒味をおびた灰色砂混粘質シルトである。 5 世紀後半の須恵器550・551が出土した。周囲の土壙も同様な形態、埋土である。同時期のものであろうか。

S K 410 (🖾 152 • 154)

III 3 区北部の土壙の一つ。平面は不定形で深さは0.1m前後である。底面に小さな凹凸がある。埋土は黄灰色粘土で、7世紀前半の土師器、須恵器552・553が出土した。

S K 411 (図152・154, 図版41・91)

III 6 区から7 区にかけての東西方向の浅い溝状の土壙である。幅3 m、深さ0.10~0.15 mで、底面には径0.1~0.2m、深さ数cmの小さなくぼみが散在している。6世紀後半から7世紀前半にかけての須恵器555が出土している。埋土は黒味をおびた灰色シルト質粘土である。

SK412 (図152・154, 図版41)

III 7区の幅が3m以上で、深さ0.3mの土壙である。底面には小さな凹凸が著しい。埋土は黒味をおびた灰色シルト質粘土である。土師器・須恵器が出土し、5世紀後半の須恵器が目だつが、7世紀の須恵器554も含まれている。

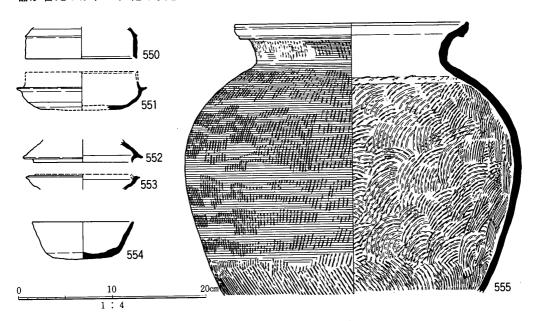


図154 82-23次 S K409~412出土遺物実測図 S K409:550・551、S K410:552・553、S K411:555、S K412:554

溝

S D 403 (図148)

I3・4区で検出したもので、江戸時代以降の遺構SD101、SK202、SE201に上部を削平されている。残存した幅は1.5mで、深さは0.95mである。本来の幅は2m近くあった可能性がある。埋土は灰色砂混粘土である。出土遺物はなかったが、遺構の方位とSD404下部との埋土の類似から6~7世紀の遺構である可能性が強い。





写真30 82-23次 S D 405遺物出土状況

I4区の東西方向の溝である。SD405と一部が接するが、切り合い関係は確認できず、同時期に並存する可能性がある。幅0.7~1.0m、深さ0.07~0.25mである。埋土は上部が淡灰色砂混シルト質粘土、下部が灰色砂混粘土である。6世紀後半ごろの須恵器556~558が少量出土している。

S D 405 (図148・155, 図版38・89)

I 4 区および拡張部分に検出した南北方向の溝である。拡張部で止まり、より南には延びない。幅 $1.0\sim1.8$ mで、深さは $0.10\sim0.35$ mである。埋土は上部が灰白色シルト質粘土、下部が灰白(淡灰)色粘土である。底面には小さな凹凸が著しい。 6 世紀後葉 ~7 世紀前半の土師器・須恵器560が少量出土している(写真30)。

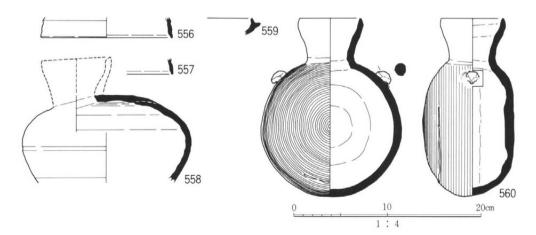
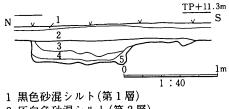


図155 82-23次 S D404~406出土遺物実測図 S D404:556~558、S D405:560、S D406:559



- 2 灰白色砂混シルト(第2層)
- 3 灰白色シルト質粘土
- 4 黄色粘土
- 5 黒灰色粘土

図156 82-23次 S D 406断面実測図 (調査地東壁)

(SD406埋土)

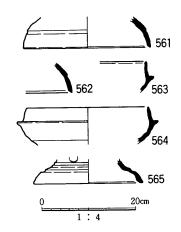


図157 82-23次 S D423出土遺物実測図 S D423 (図152・157, 図版41)

S D 406 (図146・148・155・156, 図版38)

I5区と補足トレンチ3で検出した。両者では幅・深さがかなり異なるが、位置関係と埋土の類似から同じ遺構と判断した。I5区では幅1.3m、深さ0.75m、補足トレンチ3では幅0.6m、深さ0.3mである。共に壁面は垂直に近い。埋土は上部が灰白色シルト質粘土、下部が黄白色粘土ブロック、下底部が黒灰色粘土である。弥生時代の石鏃530と7世紀前半の土師器、須恵器559が少量出土している。

S D410 (図148)

第 I 調査区補足トレンチ 5 の北端で確認した東西方向の溝である。幅0.6~0.8m、深さは0.10~0.15mである。遺物は出土しなかった。このトレンチ部分は1989年度に再調査され、この溝の時期が7世紀前半であることが分かっている(註7)。

Ⅲ11区にあり、幅1.7~1.9m、深さ0.15mの溝である。埋土は上部は灰白色粘土、下部は黒灰色粘土である。小片ながらも6世紀後半の土師器、須恵器561~565が多く出土した。

鋤跡群

径0.05~0.20m、深さ0.05~0.10mの小さなくぼみが多数集まっているところを、その埋土・形状から鋤による耕作痕と推定し、鋤跡群と呼称した。

鋤跡群401(図148)

第 I 調査区拡張部分東半部の第 6 層上面には黒灰色粘土を埋土とする小さなくぼみが多数存在し、凹凸が著しい。くぼみは S K 404・405底面から連続して分布しており、7世紀の耕作痕であろう。 (鈴木)

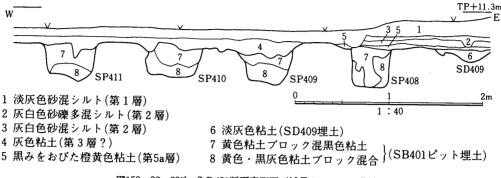


図158 82-23次 S B 401断面実測図 (補足トレンチ 4 北壁)

4) 古墳~平安時代の遺構と遺物

第5 a 層を除去したのち第6 層(地山)の上面で現れる遺構の内、出土遺物が少なく、標記以上に時期を細かく示しえない遺構をここに記す。層位的に10世紀以前の遺構である。第 I・II調査区に多い。

建物・ピット

S B 401 (図148・158)

第 I 調査区南端の補足トレンチ 4 でその一部が出土した。トレンチ内には S P 408~411 の 4 柱穴が柱間 1.1 m 前後で東西に並んで存在する。東西 3 間で、総柱の倉状の建物と考えている。ただし、 S P 409・410はその位置が S P 408・411に比して北にずれており、柱痕跡も後者とは異なり確認できなかった。両者が別の遺構である可能性も残る。

柱穴の全形がわかるものはないが、調査区内での掘形の輪郭は長方形に角張ったSP408からSP411の丸みの強いものまでさまざまで、東西幅も0.4~0.7mと幅がある。ただ深さはどれも0.4m前後で壁面は垂直に近い。掘形の埋土は黄色粘土・黒灰色粘土のブロック混合土で、SP408・411の柱痕跡(径12㎝)の埋土は黄色粘土ブロックを含む黒色粘土である。SP409・410の掘形上部にはこの柱痕跡内の埋土と全く同じ土がみられ、柱の抜取り穴の埋土と考えられる。

遺物はSP409の柱抜取り穴から $6\sim7$ 世紀のものらしい土師器が1片出土している。 SP408はSD409に切られ、SP409はSP412を切っている。これらの切り合い関係にある遺構も遺物は出土せず、時期は平安時代以前としか分からない。ただし、 $SP410\cdot411$ を切るSK301は室町時代の遺構である。

)电梯 <i>型</i> 。口	<i>7</i> ₹	柱痕跡径	 深 さ		
遺構番号	径				
SP413	40以上		15		
SP414	25~30	15	30		
SP415	40~50	20	35		
SP416	23	7~10	18		
SP417	30~35	20	22		
SP418	25~30		31		
SP419	20~25	_	12		
SP420	15~18		8		
SP421	30	_	30		
SP422	16~30		10		
SP423	15~25	-	6		
SP424	35~40	-	7		
SP425	20	_	7		
SP426	60	_	45		
SP427	45	14~20	35		
SP428	40	20	30		
SP429	50	50 19~25			
SP430	19	10~12	24		
SP431	15~20		15		
SP432	35	_	16		
SP433	15~20	_	11		
SP434	20~30	_	9		
SP435	18	_	17		
SP436	23~30	11~13	25		
SP437	25	_			
SP438	30	30 —			
SP439	25	25 —			
SP440	20以上~50	_	21		
SP441	24~33	_	12		
SP442	22~27	15~18	22		
SP443	60方形	20 28			
	-		(¥ / cm)		

(単位 cm)

表 8 82-23次 SP413~443計測表

S P413~443 (図151, 図版40・42)

II 3 ・ 4 区にこの時期のピット S P 413 ~443が存在するが、遺物を出土するもの が少なく、より限定した時期を示しうるの はSA401のSP413~418とSP427の奈良 ~平安時代の柱穴だけである。他は埋土や 層位によって中世以降の遺構とは区別でき るものの、古墳~平安時代としか時期を示 しえない。これらのピットの法量を表8に 示した。埋土は褐色をおびた黄灰色砂混粘 質シルトである(図版42)。遺物はSA401 を除けば、SP422・425・426・428で土師 器、SP429で土師器、須恵器の小片が出 土している。II3・4区の第5a層出土遺 物のほとんどが5世紀後半の土器であり、 これらのピットの多くもこの時期に属する 可能性が高い。

S P 444 • 445 (図152)

III 2 区の遺構である。 S P444は一辺0.5 mで、深さ0.05m、埋土は下部が黒灰色粘質シルト、上部が汚れた橙黄色シルト質粘土である。 S P445は径0.3m、深さ0.17m、埋土は黒灰色粘質シルトである。共に遺物は出土しなかった。

S P 446 • 447 (図152)

III 6 区中央の東壁断面で確認したピットである。排水溝にかかり平面形は不明である。壁面では S P446は幅0.58mで、深さ0.2m、S P447は幅0.53mで、深さ0.13mである。埋土は前者が上部橙黄色粘土、中

部堅く締まった灰白色シルト、下部橙黄色粘土含む灰白色シルト、後者は堅く締まった灰白~黄色粘質シルトである。共に遺物の出土はない。

土壙

S K 408 (図151)

II 3 区にあり、S P413とは切り合い関係を確認できず、新古は不明である。S D414には切られている。調査区内で東西幅0.65m以上、深さ0.3mである。埋土は淡灰色砂混粘質シルトである。

濫

S D 408 (図148)

第 I 調査区補足トレンチ 3 で確認した。幅0.5mで、深さは0.15mである。埋土は上部が灰白色砂混粘質シルト、下部が灰色砂混粘土である。土師器小片が出土した。時期は中世以降に降る可能性がある。

S D 409 (図148)

第 I 調査区補足トレンチ 4 東端部を斜めに横切る東西方向の溝である。 S B 401の S P 408を切っている。幅は0.15m、深さが0.12m、埋土は淡灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

S D415 (図151)

II 3 区の幅 $0.6\sim0.8$ m、深さ0.3mの構である。埋土は黒味をおびた黄灰色砂混粘質シルトで、調査区内に北端部があり南に伸びて行く。SD415および後述の $SD416 \cdot 417$ は条里方位に合わず、 $5\sim7$ 世紀の遺構ではないか。

S D 416 (図151、図版40)

II 3 区の幅0.5~0.6m、深さ0.35mの溝である。埋土は褐色をおびた黄灰色砂混シルト質粘土である。少量の土師器・須恵器が出土しており、5 世紀後半のものを含んでいる。

S D417 (図151, 図版40)

II 3 区の幅0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mの溝で、埋土は褐色をおびた黄灰色砂混シルト質粘土である。S P418に切られている。土師器が少量出土している。

S D418~421 (図151, 図版40)

II 4 区西部の溝で、幅は0.15~0.30m、深さ0.05~0.10mである。土取りのため上部を

削平されている。これらの溝は条里方位に合っており、 $7 \sim 10$ 世紀の遺構であろう。 S D422 (図152)

III 5 区中央の南北方向の構である。幅0.5~0.8mで東肩からの深さは0.05mであるが、西肩は東肩よりも0.1m高く、第5 a 層下面(第6 層の上面)はこの構を境に西から東へ一段下がる。埋土は淡黄灰色粘土で、上部はマンガン・鉄の汚染で淡黒褐色をおびる。遺物は出土しなかった。溝の方向が条里方位と合い、また、第5 a 層下面の段と位置が重なることから7~10世紀の遺構である可能性が強いと考える。 (鈴木)

5) 奈良~平安時代の遺構と遺物

第 I 調査区では奈良時代の遺構・遺物は出土しなかったが、平安時代 9 ~10世紀の遺構が南北両端部に存在し、遺物も少量ながら全域で出土した。北端部 1 区では建物のピット S P 401~407、南端部 6 区では条里里境構である可能性をもつ溝 S D 407がある。

第 Π 調査区では3区に畑作に伴う小溝群S D411~414と柱列S A401が存在した。S A401は建物の一部である可能性が高い。これらは9~10世紀の遺構と考えられるが、ほかに8世紀に遡る遺物を出す遺構もある。

第Ⅲ調査区の第6層(地山)上面では、各所に第5 a 層を埋土とする小穴群が存在し、これは第5 a 層耕作時(9~10世紀)の鋤跡と考えられる。6区北部以北には第5 a 層がほぼ全面に存在し、耕作地であったことが知られる。以南も上位層による削平がなければ、存在したであろう。この調査区では居住に関係する遺構は存在しなかった。

遺構番号	径	柱痕跡径	深さ	
SP401	25	12	18	
SP402	30		32	
SP403	23~35	15	27	
SP404	22以上	_	37	
SP405	23~28	_	49	
SP406	19~22	_	16	
SP407	15	_	17	

(単位cm)

表 9 82-23次 SP401~407計測表

建物・ピット

S P401~407 (図148・159、図版37)

I 1区では近現代の土取りによる破壊をかろうじて免れたわずかな部分に柱穴が集中して検出された。建物の平面形は不明であるが、柱穴の分布から考え、ここに建物が存在したとして誤りないと思われる。柱穴の法量は表9に示した。柱痕跡が確認できるものはS P401 (柱痕跡径12㎝)、S P403 (同15㎝)である。掘形内の埋土は黄

色シルト質粘土・灰白色粘質シルトのブロック混合土で、柱痕跡内には暗褐色砂混粘質シルトと掘形埋土の混合土が入っている。SP403から9世紀後半ごろの土師器566・567、SP401・405・406からは黒色土器A類、SP404からは薄手の黒色土器B類が出土して

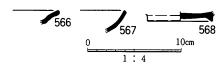


図159 82-23次 奈良~平安時代の建物・ ピット出土遺物実測図 SP403:566・567、SP418:568

いる。これらは長原遺跡の土器による時期区分[大阪市文化財協会1983 I]の $B-I \cdot B$ -II-1 期に相当する遺物と、B-II-2 期の可能性がある遺物を含む。

これらのピットは、その配置からすべてが同時期の一つの建物に属するとは考えられない。出土する遺物からも、9世紀後半から10世紀中ごろにかけて継続して居住され、その間に数回建て替えがあったと考えられる。なお、SP401はSD401を切っている。

S A 401 (図151 · 159)

II 3 区で柱穴(S P413~418)が東西方向に 5 間分並ぶ。柱間寸法はほぼ 2 mである。 それぞれの柱穴の大きさは表 2 に示した。 S P415は 5 世紀後半の土器を出土したが、 S P418は 9 世紀後葉~10世紀前半にかけての土師器568を出土し、 S P418の遺物の時期を S A 401の時期と考えている。 S P418は S D417を切っている。この柱列はおそらく建物の一部であろう。

S P427 (図151, 図版40・42)

II 4 区で検出したもので径0.45mの掘形に径14~20cm、深さ0.35mの柱痕跡が存在した。 柱痕跡内から8世紀ごろの土師器・須恵器が出土した。S P427は同426を切っている。

濭

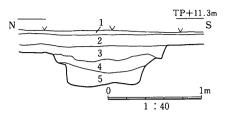
S D 401 (図148, 図版37)

I 1 区で検出した東西方向の溝である。S D 201・S P 401に切られている。幅0.25~0.30mで、深さは0.03~0.05mである。埋土は褐色帯びた淡灰色砂混粘質シルトである。土師器小片が出土した。

S D 402 (図148, 図版37)

I 1 区で検出した東西方向の溝で、北肩は S K103に切られて不明である。幅0.45m以上で深さは0.08mである。埋土は淡灰色砂混粘質シルトである。 I 1 区のピット群と同時期の土師器が少量出土している。

第|||章 調査の結果



- 1 黒色砂混シルト(第1層)
- 2 灰白色砂混シルト(第2層)
- 3 灰白色砂混粘質シルト
- 4 灰色粘土
- 5 灰色砂混粘土

図160 82-23次 S D407断面実測図 (第 I 調査区西壁)

SD407埋土)

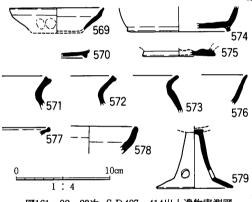


図161 82-23次 S D407・414出土遺物実測図 S D407:569~576、S D414:577~579

S D 407

遺構 (図148・160, 図版38・42)

I6区と補足トレンチ1・2で検出した東西方向の溝である。補足トレンチ2では埋土を掘削していない。補足トレンチ2で途切れ、東へは伸びない。幅1.4m前後で、深さは0.3~0.4mである。断面形は段掘り状を呈し、埋土は最上部が灰白色砂混粘質シルト、上部図が灰色粘土、下部が灰色砂混粘土である。

遺物 (図161)

9世紀後葉~10世紀前葉ごろの土師器569~573、須恵器574・575、製塩土器、緑釉陶器576が出土している。576は軟質の端反りの椀で、灰白色の精良な胎土をもち、淡い黄緑色の釉が施されている。

S D411~414 (図146・151・161, 図版42)

II3区にある南北方向の溝で、ほぼ

2.4mごとに並ぶ。幅は0.35~0.45mで、深さは0.05~0.25mである。埋土は第5 a 層 (黄灰色砂混粘質シルト)で、第5 a 層耕作時の畑作に伴う遺構であろう (註8)。S D 413からは少量の土師器・須恵器片、S D414からは縄文時代の石鏃531 (図146) や5・6 世紀の土師器高杯579と共に9世紀ごろの土師器皿577、鉢578が出土している。遺構の時期は第5 a 層を埋土とすることから9~10世紀であろう。

鋤跡群

鋤跡群402~404(図152, 図版42)

Ⅲ4・Ⅲ5・Ⅲ6区の各北部に集中して存在する。第5a層を埋土とする。出土遺物はほとんどないが、しばしば奈良~平安時代の瓦が出土する。Ⅲ6区南部は第6層上面を第4層が覆っており、この部分で一部図化した東西方向の小溝群は第4層の時期のものである。第1~4層下面ではだいたい常に素掘りの小溝群が存在するが、第5a層下面でその

存在は確認できなかった。

鋤跡群405 • 406 (図152)

III 8~9区とIII11区の鋤跡群は埋土(灰白色シルト質粘土、黄灰色シルト質粘土)が第 2~5 a層のどれに相当するのか判別がつかない。第Ⅲ調査区の他の鋤跡群が第5 a層を 埋土とするのでこの項で記載したが、埋土が第2層である可能性も高い。 (鈴木)

6)鎌倉〜室町時代の遺構と遺物

各調査区を通じて遺構・遺物が少ない。第Ⅲ調査区では第3層下面・第4層下面ともに ほぼ全面に小溝群が存在した。

十塘

S K 301 (図148)

第 I 調査区補足トレンチ 4 の中央に存在し、東西1.8m、南北0.5m以上、深さ0.20~0.25mをはかる。埋土は褐色をおびた灰色砂礫混(粘質)シルトである。土師器・東播系須恵器・瓦質土器などが出土し、15世紀の遺構と考えられる。

S K 302 (図152, 図版41)

III 6 区にある東西3.5m以上、南北2.5m以上、深さ0.2mの土壙である。底面は中央がやペ盛り上がり、全体に小さな凹凸がある。埋土は第4 層黄色粘土を含む灰色砂混シルト質粘土で、須恵器・瓦器の小片が出土している。11~14世紀の遺構である。

溝

S D 301 (図151, 図版39)

II 1・2区を東西に横切るSD202の下底で、遺物は出土せず、時期は明確ではないが、第II調査区の第3層に酷似する地層が存在するため、このSD202下底の堆積に対してSD301の遺構番号を与えた。この溝の上部の形態は不明であるが、幅は2~3m、深さは0.5m前後であったようだ。

S D 302 (図152)

III 1区と2区の境にある南北方向の溝で幅0.6~0.7m、深さ0.3mである。第5 a 層上面で検出した。埋土は上部が灰白色砂混粘土、中部が淡灰色砂混粘土、下部が灰白色細・中砂である。5~6世紀の土師器・須恵器が出土しているが、層位から判断して11~14世

紀の遺構である。

小溝群 (図152)

第Ⅲ調査区ほぼ全域の、第3層・第4層各下面、および両層の細分される各層理面で幅 0.1~0.2m、深さ数㎝の小溝が東西あるいは南北方向に多数平行して走るのを確認した。 6区南部では第4層が直接第6層を覆っていたため、小溝群の一部を図化した。

段

調査地付近は緩急の差はあれ、傾斜した地形にあたる。そのため耕地は現在も階段状を呈している。第III調査区では第5 a 層の時期の階段状の耕地の起伏が明瞭で、その地境の位置は現在まで踏襲されているところが多い(図142)。ただし第5 a 層の時期の段そのものは第4層および第3層に削平され、遺構としては残っておらず、第3層の時期(15・16世紀)の段S X302~304・306がもっとも古いものであった。S X305は厳密には第2層による江戸時代の段であるが、地層の状況からほぼ同じ場所に第3層の時期の段が推定できるので300番台の遺構番号を与えここで記述する。

S X 301 (図151, 図版40)

形状を図化していないが、II 2 区西部から 3 区にかけて江戸時代の段 S X 201に接して 南側にある南から北へ下がる段である。第4・5 層を削り出しており、段に沿って北側を 第3 層が覆っている(図164)。段の高さは0.4mである。第3 層耕作時の地下げによる段 であろう。

- S X 302 (図142・152)
- III 1 区北部にある東北から西南へ下がる、高さ0.3mの段である。
- S X 303 (図142・152)
- Ⅲ1区中央南よりの西から東へ下がる段である。高さは0.15m以上であったと思われる。 同じ位置を走る江戸時代の溝SD205に削られ、その西壁が段となって残っている。
 - S X 304 (図142・152)
- Ⅲ5区中央部の西から東へ下がる高さ0.2mの段である。上部を江戸時代の段に削られている。東に接して平行する溝SD422がある。
 - S X 305 (図142 · 152)
 - III 6 区中央部の西から東へ下がる高さ0.25mの段である。層位的には第2層によって作

られ、上部を第1層に削られた段であるが、地層の状況からほぼ同じ位置、同じ高さの第 3層の時期の段の存在が推定できる。

S X 306 (図142 · 152)

III 7区でSK412の西にある、高さ0.2mの西から東へ下がる傾斜である。上部は第2層で削られている。 (鈴木)

7) 江戸時代の遺構と遺物

各調香区で農耕用の井戸が少数と、第II調査区では条里里境の東西溝などが検出された。

建物・ピット

「8) 明治時代以降の遺構と遺物」で記載した II 4 区の 8 P101~108に、この時期のものが含まれているかもしれない。

井戸

S E 201 (図148)

I4区北端にある。SD101に切られ、SK202・SD403を切る。径1.1~1.3mで、掘形はもたない。危険なため埋土の掘削は深さ1.5mで取りやめた。この深さでは桶組などの井筒の存在は確認できなかった。埋土は汚れた青灰色砂混粘土で、土師器・須恵器・瓦・備前焼・肥前染付磁器が出土した。もっとも新しい遺物は18世紀前葉ごろのものであるが、これらの遺物のみで時期を決するのは危険であり、遺構の時期は明治時代以降である可能性もある。

S E 202 (図151)

II 2 区西端、段 S X 201の北側に存在する。掘形径は上端が 2 m前後で、深さ1.5mでは 1 mとなる。小溝群203に切られている。深さ1.6mまで掘削したが、危険なためそれ以上 の掘削はとりやめた。埋土は黄色粘土を含む、灰白色砂混粘質シルトであり、土師器・須恵器・瓦質土器・瓦・花崗岩片が出土した。

S E 203 (図152)

III 1 区にある。一辺2.3mの隅丸方形の穴を0.8m掘り下げたところ径1 mの素掘りの井筒の輪郭が現れた。内部をさらに0.7m掘り下げたが、この深さまででは桶組などの構造は確認できなかった。遺物の出土はなかった。埋土は淡灰色砂混粘質シルトである。

第川章 調査の結果

土壙

S K 201 (図148)

I3区で検出した。一部をSD101に切られている。南北1.2m、東西0.5mの隅丸長方形で、深さは0.4mである。埋土は灰褐色砂混(粘質)シルトである。土師器・須恵器・瓦・陶器が少量出土した。

S K 202 (図148)

I 4 区北端にあり、S E 201やS D101に切られ、全形は不明である。現状で幅 1 m、深 さは0.5m弱である。残存部から推定すると、一辺 $2 \sim 3$ mの方形ないし長方形で、深さ 0.5mほどの土壙であったようだ。埋土は灰褐色砂混シルトで、遺物は出土しなかった。

S K 203 (図151)

II 1 区西部のS D 202底面に存在した径 1 m前後の土壙である。軟弱土からなる調査地壁面に接していたため埋土(灰色砂礫混シルト)の掘削は深さ0.2mでとりやめた。遺物は出土しなかった。埋土からみて江戸時代としたが、より古い時期の可能性もある。

S K 204 (図151)

S K 205 (図151)

II 3 区東端にある東西方向に長軸をもつやや楕円形の土壙である。小溝群203に切られている。東西1.05m、南北0.90m、深さ0.35mで、少量の土師器が出土している。時期が中世に遡る可能性がある。

S K 206 (図151・162, 図版91)

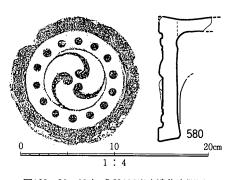


図162 82-23次 S K 206出土遺物実測図

II4区にある。径1.7m、深さ0.4mの円形の土壙の南半分を調査した。埋土は暗灰色砂礫混粘質シルトで、巴文軒丸瓦580が出土した。16世紀に遡る遺構かもしれない。

S K 207 (図151, 図版40)

II 5 区で検出した径 1 m前後、深さ0.1~0.2mの浅い土壙である。埋土は褐灰色砂混シルトで遺物の出土はない。

S K 208 (図152)

III 1 区のSE203に切られた不定形の土壙である。調査範囲内では長軸7 m以上、短軸1.2m以上、深さ1 mである。埋土は上部が灰黄色砂混粘質シルト、下部が灰色砂混粘質シルトである。自然に埋まったとも思えないが、荒っぽく埋め戻した様子もなく、埋土の状況から土取り穴とは考えにくい。遺物は出土しなかった。

S K 209 (図152)

III 9 区南端の落ちである。南に向かい、斜めに深さ0.5m以上下がっていく。埋土は上部が淡灰色砂混シルト、下部が淡灰色砂混粘土である。遺物は出土しなかった。

S K 210 (図152)

Ⅲ10区の幅1.5m以上、深さ0.1mの灰白色粘土を埋土とする落込みである。

溝

S D 201 (図148, 図版37)

I1区で検出した南北方向の溝で、SD401を切っている。幅0.25mで、深さは0.04m、埋土は灰白色砂混シルトである。

S D 202

. 遺構(図151, 図版39)

II1 - 2区に存在する東西方向の溝である。条里の里界線の位置にだいたい重なる。幅 $2 \sim 3 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.5 \sim 0.6 \, \mathrm{m}$ の溝で、長さ $20 \, \mathrm{m}$ にわたり、調査区を横切る。そして $II1 \, \mathrm{I}$ 区を南北方向に通り抜ける現農業用水路下の南北溝に T の字形につながる。この南北溝は用水路を東西に断ち割った知見によると幅 $4.5 \, \mathrm{m}$ 、深さ $1.2 \, \mathrm{m}$ 以上である。規模から考え、当時の周辺地域での基幹となる灌概用水路であったようだ。

S D 202には中世の堆積が II 2 区の溝の南側壁面から下底にかけて残っており、この埋土の部分が S D 301である。またこの溝は第1 b 層で埋め立てられるまで、明治時代以降も機能しており、この埋土の部分が S D 102にあたる。 S D 202の堆積は 4 枚の地層に分かれ、最下層の第 4 層は II 1 区から II 2 区にかけて底面が幅0.4~0.9m、深さ0.1~0.2mで、東西方向の溝状にくぼむ部分に堆積している。灰白色(砂混)粘質シルト~粘土である。厚さは0.1~0.3mである。第 3 層は溝幅全体に堆積する厚さ0.05~0.20mの淡灰色粗・

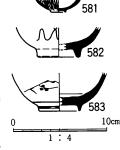


図163 82-23次 S D 202 出土遺物実測図

中砂である。溝はこの時期までほぼ中世のS D301の幅をRっているようである。しかし第2 層はR D102の部分を除き、溝内全体にR0.1R0.4R0の厚さで存在し、同様に第 1 層もR1 B102を除き、溝内全体にR0.1R0.2

遺構埋土掘削時に、15~19世紀の遺物が少量出土したが、第1・2層と第3・4層を区別して遺物を採集しておらず、図163の遺物が、溝が機能した時期の遺物とはならない。

遺物 (図163, 図版91)

図あるいは写真図版に示したものに**肥前白磁紅皿581、肥前染付磁器碗582・583、中国製青花碗584~586、同青磁碗587**がある。肥前網手文染付磁器や中国製青花、唐津焼など17世紀前半から中ごろのものが目立つ。

S D 203 (図151)

II 3 区にある幅0.6m、深さ0.4mの断面形が V 字形の南北溝である。 S D 204と平行して走るが、層位的に S D 204より古い。埋土は灰白色砂混シルトである。遺物は出土しなかった。

S D 204 (図151)

II 3 区にある幅0.6m、深さ0.5mの断面 V 字形の南北溝である。埋土は灰白色粗・中砂混シルトで第2 b 層が垂れ下がるように入っている。土師器・須恵器が出土している。 S D203・204ともに第2 b 層耕作時の用水路であろう。

S D 205 (図152)

Ⅲ1区の南北方向の溝である。幅1.3m、深さ0.4mである。内部には淡灰色(砂混)粘土あるいは粘質シルトと灰白色細〜粗砂の薄層が交互に重なっている。埋土からは5~15世紀の土師器・須恵器・瓦・瓦質土器・白磁が出土しているが、層位から江戸時代の遺構と考えられる。

S D 206 (図152)

III 9 区の東西方向の溝である。幅0.4mで、深さは0.25mである。埋土は灰白色シルト質粘土である。この付近は第1層(現耕土)直下が第6層(地山)であり、この溝も第6層上面で検出した。埋土が第2層に似るのでこの時期としたが、厳密には時期不明とせざるをえない。遺物は出土しなかった。

S D 207 • 208 (図152)

III10区南端にある幅0.25m前後の南北方向の溝2条である。深さは0.03~0.04mで、埋土は灰色砂混粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

S D209~212 (図152,図 版41)

III11区南部の東西方向の溝である。SD209・211は幅0.7~1.0m、深さ0.05~0.10mで、底面には小さな凹凸が著しい。SD209の西端から馬(成獣)の上下顎骨の歯588が左側面を

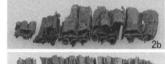




- 2.下顎左列
- (a. 内面 b. 歯冠 c. 外面)
- 3.下顎右列
- (a. 内面 b. 歯冠 c. 外面)









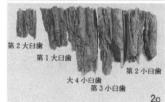




写真31 82-23次 S D 209出土馬歯588

上にして、本来の歯並びを保った状態で出土した。写真31のように歯の残存部は顎の上下、左右によって若干異なるが、切歯・犬歯はなく、第 $2\sim4$ 小臼歯、第 $1\sim3$ 大臼歯が存在した(註9)。出土状況から馬の頭部が切り取られ溝の中に放り込まれたか、馬の死体そのものが溝に廃棄されたのかどちらかであろう。

S D210・212は幅約0.4mの溝で、深さは0.05m前後である。埋土は前者が黄色粘土を含む灰白色粘土、後者が灰白色シルト質粘土である。

S D 213 (図152)

Ⅲ7区南部の南北方向の溝である。幅0.5mで、深さは0.2mである。埋土は灰白色砂混シルト質粘土で、遺構の上を覆う地層(耕作土)が、溝内部にも落ち込んでいる。この地層は、断定はできないが第2層の可能性が強いため、ここに記載した。

小溝群

小溝群201

図化しなかったが、I 4 • 5 区の第 2 層下面で第 2 層を埋土とする幅 $0.1\sim0.2$ m、深さ数cmの並行する溝を多数検出した。現農業用水路に接して南側では東西方向に、それ以南では南北方向に走っていた。畑の畝間の溝と思われる。

小溝群202 (図151)

II 2 区のS D202の北にある第2 a 層を埋土とする小溝群である。幅0.2m前後、深さ数cmの多くの南北方向の小溝がS D202に接して走る東西方向の小溝につながっている。第2 a 層を耕土とする畑の畝間の溝であろう。

小溝群203(図151,図版40)

II 2 区西端から II 3 区にかけて、段 S X 201の北側(低い方)を東西方向に走る小溝群である。第 2 b 層淡灰色砂混シルトを埋土とする。幅 $0.25\sim0.50$ mで、深さは0.15m前後である。第 2 b 層を耕土とする耕作に伴う遺構である。 S K 109に切られ、 S E $202 \cdot$ S K 205を切っている。

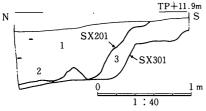
小溝群204

図化しなかったが、第Ⅲ調査区で第2層下面および、第2層の細分される各層理面において小溝群が存在した。幅0.2m前後、深さ数cmである。溝の多くは東西方向であった。

段

S X 201

遺構(図151,図版40)



- 1 灰白色砂混シルト(第2層)
- 2 黄色砂混粘土(第2層)
- 3 淡灰色砂混(粘質)シルト(第3層)

図164 82-23次 S X 201・301断面実測図

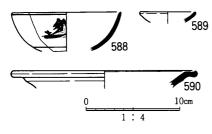


図165 82-23次 S X 201出土遺物実測図

II 2 区から II 3 区にかけての高さ0.5mの段である。第2 b 層を耕土とする時期の段で、第3 層を耕土とした時期に作られた S X 301の位置をほぼ踏襲している。段に沿って北側を第2 b 層が覆っている。小溝群203・S E 202・S K 205はこの下面で検出された。この地点の第2 b 層からは比較的多くの17~19世紀の陶磁器が出土した。ただしこれには明治時代以降の遺構の遺物も混入しており、第2 b 層の時期を決める資料とはなりえない。

遺物 (図165, 図版90・91)

図と写真に示したものに、肥前染付磁器碗589・ 592、飴釉土師器皿590、唐津焼鉢591、中国製青 花碗593、離れ砂を施した平瓦594がある。590は 内面全体と外面の口縁部に施釉している。594の 凸面には縄目、凹面には布目と斜め方向の 糸切り痕がある。17世紀前半から中ごろの 遺物が目立つ。 (鈴木)

8) 明治時代以降の遺構と遺物 建物・ピット

S P101~108 (図151, 図版40)

II4区に集中して検出された。法量は表 10に示したが、径0.2~0.5mで、深さ0.05 ~0.15mと浅く、形状から明確に柱穴とい

遺構番号	径	柱痕跡径	深さ
SP101	22	_	13
SP102	25	13	7
SP103	25~30	10	15
SP104	50	_	20
SP105	44~58	_	6
SP106	35~40	_	12
SP107	20~50	_	15
SP108	20~28	28 —	

(単位 cm)

表10 82-23次 SP101~108計測表

えるのはSP102・103のみである。埋土は灰白色粗・中砂混シルトで、出土遺物はない。 江戸時代の遺構を含んでいるかもしれない。

井戸

S E 101 (図152)

Ⅲ3区にあり、上部に瓦組の井筒をもつ。掘形の径は1.9mで、瓦組の井筒径は0.9~1.0mである。瓦組の井筒は上部1.8mの深さまでで、その下には井桁を間に挟み、角筒状に組まれた木枠がある。瓦組は一周12枚の瓦を9段に組んだものである。瓦の凸面に、くさび形の印刻文がある。

土取り穴

第 I 調査区では 1~3 区に集中して存在した。伝承もあり、瓦・火鉢製造のための粘土 採掘壙としてまちがいないと考える。とくに1・2 区の40 m間はごく一部が畦状に取り残 されているのみで、数回に分け全域が土取りされている。採取されているのは第6層(地 山)上端部0.5~0.6 mの橙黄色シルト質粘土と灰白色シルト質粘土である。深さ0.6~0.8 m前後にある橙(灰)白色粘土混中・粗砂に達すると掘るのをやめていることが多いが、 かなり砂礫を含む土でもかまわず採取している穴もある。第 II 調査区の土取り穴も含め、 穴の壁面・底面に機械力を用いた痕跡はなく、すべて人力による土取りとみられる。

第II調査区では5区の土壙S K113~115が第6 層(地山)を採取した土取り穴である。 地山は上部0.3~0.5mが橙黄色の粘土で、それより下は同色の砂礫である。砂礫の部分も



写真32 82-23次 土取り穴S K101~105 さ0.3~0.4mの土取り穴である。

S K 104 (図148、図版37)

I 1区東壁際の土取り穴である。南北8.7m、東西0.4m以上で、東に広がる。深さは調査区内で0.3~0.5mである。埋土は黄色粘土・灰白色粘土のブロック混合土である。穴の北端はさらに0.4mほど深まり、この内部は黄色粘土混じり黒色砂礫混砂質シルトが埋土となっている。

S K 105 (図148, 図版37)

 $I 1 \sim 2$ 区にある南北12.6m、東西2.0m以上、深さは $0.3 \sim 0.5$ mの土取り穴である。底面には幅3 m前後、深さ $0.1 \sim 0.2$ mの東西方向の溝状の凹みが並ぶ。埋土は黄色粘土・淡灰色砂混シルトのブロック混合土である。S K 105埋土と同じ地層が、S K 104南端部の上に存在し、S K 105はS K 104より新しい。

S K 106 (図148, 図版37)

I2区にあり、南北6m、東西2m以上、深さは北部の溝状の深い部分が1.5m、他が

深くまで掘って、採取している。 4 区の中 央やや東よりで、東から西への段 S X 102 (高さ0.4m) があるが、これも土取りで できた段と思われる。

S K 101 (図148, 図版37)

I 1区にあり、S K102に切られている。 南北2.2m以上、東西2 m以上、深さ0.6~ 0.7mである。土取り後、黄色粘土ブロッ ク混じり灰褐色砂混シルトで埋めている。

SK102 (図148, 図版37)

I 1区にあり 南北2.2m、東西2 m以上、深さ50~60mの穴である。底面は幅が1.4mと0.8m、深さが0.1~0.2mの2条の東西方向の溝状を呈する。埋土は黄色粘土・灰白色粘土のブロック混合土である。

S K 103 (図148, 図版37)

I1区の南北4.8m、東西1.7m以上、深

0.8~1.0mである。埋土は溝状部分が灰白色粘土、それより上が灰黒色砂混シルト・黄色 粘土のブロック混合土である。この埋土はSK105南端部の上に乗っており、SK106がS K105より新しいことが分かる。またSK107を切っている。

S K 107 (図148, 図版37)

I 2 区南端にある。S K101~106と異なり、南肩が北東-南西方向に傾く。この遺構ほど極端ではないが、南方に近接するS K108・S D101も同様に斜めの方向性をもつ。南北 $3\sim 6$ m、東西 2 m以上、深さは $0.8\sim 1.0$ mである。埋土は灰黒色砂混シルト・黄色粘土のブロック混合土である。

S K 108 (図148, 図版37)

I3区にある南北3.5m、東西2.2m以上、深さ0.15~0.30mの浅い土壙である。深さが SK101~107に比べ、極端に浅く、土取り穴ではない可能性も充分ある。しかし、埋土が 他の土取り穴と同じ、黄色粘土・灰黒色砂混シルトのブロック混合土であることから、一連の遺構としてここに記載しておく。

S K 113 (図151)

II 5 区の東西3.2m、南北1.7m以上、深さ0.8~1.0mの土取り穴である。埋土は黄色粘土・灰色粘質シルトプロック混灰褐色砂混シルトである。S K114を切っている。

S K 114 (図151)

II 5 区の東西2.5m、南北1.5m、深さ0.8~1.0mの土取り穴である。埋土は褐灰色砂混シルトである。

S K 115 (図151)

II 5 区から第III調査区にかかる土取り穴で、東西2.8m、南北2.5mをはかる。二段掘りされており、外側 $0.3\sim0.6$ mの部分が深さ0.2m、その内側は深さ0.8mである。埋土は褐灰色砂混シルトである。

土取り穴の遺物 (図143, 図版89・91)

土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・肥前染付磁器・堺擂鉢・瓦・陶製土管・石灰モルタル・コンクリートなどが出土している。図・写真で示したものには、S K101: 須恵器483、鋳型595、S K103: 瓦質土器498、S K107: 土師器490・497、須恵器496がある。鋳型595は1.8~2.1㎝の厚みをもち、内外面共に薄く炭素が吸着している。内面にはロクロ挽きによる条痕と太めの金釘のようなもので荒く施された斜格子状の線刻がある。線刻は炭素吸着後に行われている。胎土にはスサが混じっている。

土壙 (土取り穴以外)

SK109 (図151)

II 2 区西部にあり、S E 202・S K 205を切っている。東西1.8m、南北1.2m、深さ0.35mで、土師器・唐津焼・肥前染付磁器・瓦・レンガ・陶製土管などが出土した。

S K 110 (図151)

II 3 区中央にあり、S X201を切る。径約1.7mで深さ0.9m、断面円錐形の土壙である。 S K111 (図151, 図版40)

II 4 区にある東西2.7m、南北0.6m以上、深さ $0.1\sim0.2m$ の土壙で、埋土は黄色粘土ブロックを含む灰白色粗・中砂混シルトである。

SK112 (図151, 図版40)

II 4 区西部にある一辺1.4m以上、深さ $0.05\sim0.1$ mの土壙である。埋土は灰白色粗・中砂混シルトである。

溝

S D 101 (図148)

I3区南端で検出した、幅3.8m、深さ0.9mの東西方向の溝状の遺構である。両肩の深さ0.4~0.5mのところに幅50㎝ほどの平坦面がある。埋土の状況から、下部に淡黄白~淡青色砂混シルト質粘土、上部に汚れた淡黄色砂混粘土が堆積したのち、掘り直され、その後、間もない時期に黄色と淡灰色の粘土により埋められたようだ。土師器や須恵器485・486(図143)、陶器、瓦などが出土した。

S D 102 (図151)

II $1 \cdot 2$ 区の S D202に重なる条里里境の東西溝であるが、図示していない。 S D202の 南肩から約0.5m内側に S D102の南肩があり、斜めに調査区を横切る。溝を境に南北の高さが異なり、南肩に比して北肩が0.3m前後低い。幅1.0mで、深さは南肩から0.4~0.5mである。 2 区では幅を広げ、2 س近いところもある。埋土は上部0.3~0.4mが黄色粘土を含む淡灰色砂混シルトプロックで、下部0.1m前後が黄白色の砂礫である。溝の南壁の内側には径 7 ~10cm の杭が多数打ち込まれていた。

S D 103 (図151, 図版40)

II 4 区の幅0.2~0.3m、深さ0.05mほどの溝で、埋土は灰白色粗・中砂混シルトである。 S D103~108の付近は近現代の土取りにあっているが、これらの遺構は層位的には土取り との前後が明確でなく、遺物も出土しなかった。時期は埋土から判断した。

S D104 • 105 (図151, 図版40)

II 4 区の幅 $0.6\sim0.8$ mの溝 2 条である。深さはS D104が $0.05\sim0.10$ m、S D105が $0.05\sim0.20$ mである。埋土は灰白色粗・中砂混シルトである。

S D106 • 107 (図151, 図版40)

II 4 区の幅 $0.15\sim0.20$ m、深さ0.05m以下の溝である。埋土は他と同じであるが、方位が $5\sim7$ 世紀と考えられる遺構と共通する。

S D 108 (図151)

II 4 区の幅 $0.4\sim0.6$ m、深さ0.05mの溝である。埋土は灰白色粗・中砂混シルトである。陶器・瓦などが出土した。

瓦組遺構

瓦組遺構101 (図151, 写真33)

II 2 区にあり、瓦質井筒や軒平瓦・平瓦の破片を地面に突き立て東西0.6m、南北0.6m 以上の長方形に組んでいる。高さは0.2m前後である。内部に何らかのものを収納する施設であろう。類例が長原遺跡の第21次調査にあり、それも近世から近代にかけてのものである。

野壺

野壺101 (図152)

III10区にある、径1.6mのタタキ(石灰モルタル?)製で厚みは $5\sim6$ cmのものである。

埋土は掘削しなかったので内部の形状は不明であるが、通常は垂直の壁と円錐形の底面をもつ。

段

S X 101 (図151)

図化していないが、 $II 2 \cdot 3$ 区のS X 20 1の北に接して存在し、S D 202に並行して東西に伸びる。第2 a · 2 b 層を削り出し、

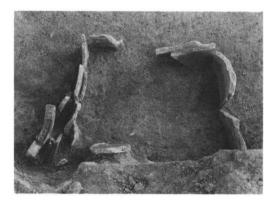


写真33 82-23次 瓦組遺構101

第1a層が覆う。高さは0.3mである。

S X 102 (図151, 図版40)

II 4 区東部にある東から西に下がる高さ0.4mの段である。段の西側では第1 a 層の直下が第6層(地山:黄白色砂礫)であり、耕作のための地下げではなく、第6層最上部の黄色砂混粘土を採取した土取りによる段とみられる。

9) 小結

第Ⅰ~Ⅲ調査区の遺構の時期を表11にまとめた。

旧石器〜弥生時代の遺構は存在しなかったが、石鏃や石核などの石器遺物が7世紀以降の地層や遺構から少量出土した。その出土地点に偏りはみられない。

遺構は5世紀以降のものが確認できた。

5世紀中葉~後半の遺物は第II・III調査区に分布し、とくに第II調査区3~5区、第III 調査区1区に多い。これらの地区に集中して検出された溝・柱穴などの遺構の多くは遺物 を全く出土せず、時期を決めることができない。しかし、これらの地区では包含層中の遺 物のほとんどを5世紀のものが占めることから、これらの遺構の多くを5世紀に属すると し、付近に集落の存在を推定しておきたい。

6世紀後半~7世紀の遺物は少量であるが全域から出土する。遺構は第 I・III調査区の数条の溝 S D404~406・410・423、土壙 S K412のほか、第 I 調査区の浅く不定形で、下面に小さな凹凸が顕著な土壙 S K402~405がある。後者は耕作に伴う遺構であろう。これらは南西約300mの府営住宅建設に伴う調査地で発見された、溝と塀で囲まれ、有力豪族の屋敷と推定されている建物群「南 秀雄1987]とほぼ同時期で並存する。

8世紀の遺物はきわめて少なく、遺構も第II調査区で少数存在するだけである。

9・10世紀の遺物は全域から比較的多く出土するが、摩滅が著しい。瓦も少量混じる。 遺構は第 I 調査区で建物 S P401~407と条里里境構の可能性のある東西溝 S D401、第 II 調査区で畑作に伴うと思われる溝群 S D411~414、建物の一部と思われる柱列 S A 401が出土している。前記の府営住宅建設に伴う調査地でも同時期の建物が検出されており、長原遺跡東南地域 [大阪市文化財協会1983 I]と同様に、この地域でも 9~10世紀の建物分布は条里の各坪ごとに建物が少数存在するような散居村的状況のようである。

中世(11~16世紀)の遺物・遺構はともに少ない。遺構は第II調査区の条里里境の溝S D301、第 I 調査区の土壙S K301などがある。溝S D301は調査区内の知見にもとづく限

						,					,						
		第	I 調	直	区	第	1	調	査	区		第.		調	査	区	
古墳飛鳥	世紀 5 6 7	SK401 - SD405 SK402 SD406	SD40 ~405、		SD403 #401	SK406	S	D41 ~41		SD413 ~443 SK408		.23 .11	412	1		SP4	- 144 147 -
奈良 平 安	9 10 11	SP401 SD401		Sì	SB40 SD40 D407	SA401 S	D411 ~414		SD4		鋤跡 402~		4	SD	422		-
鎌倉	12 13 14	- - -				•					SD3 SK3					小溝	群 _
室町生地	16	SK301		1		SD301 段SX30	1			<u> </u>			X302 ~3	06			1
江戸明治	18	SE201	S	 K201 D201 溝群2		SE2	SK:	205 06	・20 SD2 小溝 段S2	02~204 群202・ X201	203	SE2 SK2 · 20 SD2 小溝	208 09		鋤妫 ・4(SK2 SD2 ~2])6 210 206	05
大正昭和	+	+	Si	D101	01~108	~108	ユル)9~	3K1 112,	SD102 13~115 瓦組10 2↓	即	予壺:	101				

→:遺構の時期が矢印の範囲の中にある。

◆----・: 遺構の時期が矢印の範囲の中の可能性がある。

表11 82-23次 遺構の時期一覧

り、中世前期には遡らない。

近世(17~19世紀)の遺構には第II調査区の条里里境溝SD202のほか、農耕用の井戸や性格不明の土壙・溝が散在している。

近現代(19~20世紀)の遺構の顕著なものは第 I ・ II 調査区の土取り穴 S K 101~108・113~115である。瓜破付近では近年まで瓦・火鉢の生産が行われており、その陶土として土が売られたと考えられる。土取りは人力によってなされている。 (鈴木)

註)

- (1) [大阪市文化財協会1983 II] の図版 2 参照
- (2) [大阪市文化財協会1982] の図91に「中河内川邊産瓦・・・・」とスタンプを押された近現代の瓦が報告されており、この中河内川邊の地は当報告書の82-27・34・46調査地付近にあたる。この時期は川辺地域のほか瓜破地域でも瓦・火鉢が製造されている。伝聞によると当調査地付近の土は瓜破地域に運んだらしい。
- (3) 各時代の絶対年代の下限は古代が1050年、中世が1573年、近世が1867年とした。
- (4) 地山層 (第6層) は長原遺跡南部基本層序の第13層である。
- (5) 炭素の吸着が内面のみのものをA類、内外面のものをB類とする。
- (6) 自衛隊大阪地方連絡部で教示をえた。
- (7) 89-67次調査の溝1に相当する [大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990]。
- (8) 長原遺跡での同時期の類例に [大阪市文化財協会1983 I] の第4層下面検出遺構の溝 a ~ c 群がある。
- (9) 歯の同定は樽野博幸氏(大阪市立自然史博物館)による。

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

第1節 一ケ塚古墳(長原85号墳)の埴輪編年

ここでは一ケ塚古墳(85号墳)の円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪を取り上げ、長原古墳群と古市古墳群などを中心とした編年的考察を試みることとする。本古墳の埴輪については、これまで何度か部分的な紹介をしたことがあるが、過去の記述とくいちがう部分があれば、この報告が優先するものとしておきたい。

円筒埴輪はひじょうに単純な形態をしているにもかかわらず、ハケメだけをみても、一つの古墳において種々のパラエティがあり、案外複雑な様相を呈しているものである。とくに、時期が近接した複数の古墳の埴輪には類似点と相違点・新旧の要素が錯綜するため、一・二の要素だけで比較するのは危険である。したがって、円筒埴輪は、外面調整はもとよりそれを構成する各要素(口縁部・タガ・底部・スカシ・内面調整・焼成など)に一度分解し、そのすべてを検討した上で総合的に前後関係を判断すべきである。さらに、朝顔形埴輪やその他各種の埴輪も各々個別に前後関係を検討し、円筒埴輪編年と組み合わせるのが、埴輪における様式編年の本旨であろう。とはいえ、実際には出土資料に制約もあり、そこまでできる例は限られている。今回は、円筒埴輪では資料数にある程度の量がある口縁部・タガ・スカシ孔・外面調整などの要素を取り出して検討する。朝顔形埴輪・壺形埴輪も同様の方法をとるが、資料不足であることは否定できない。

いま一つ留意すべきことは、比較の対象をどのように選ぶのかということである。大型 古墳の円筒埴輪編年を、中小古墳にそのまま当てはめる傾向も散見されるが、これはやは り区別してあつかう必要がある。また、中小古墳のばあい、各々の古墳群や地域ごとの編 年を基礎としたうえで、他地域の編年と比較し、その併行関係を追究すべきことはいうま でもない。東西長45m以上で、有黒斑の埴輪をもつ一ケ塚古墳の比較対象となるのは、直 径55mの円墳と推定される塚ノ本古墳(長原1号墳) [長原遺跡調査会1978、大阪文化財 センター1978] と、その周豫外縁部で検出された埴輪棺群(註1) などである(註2)。

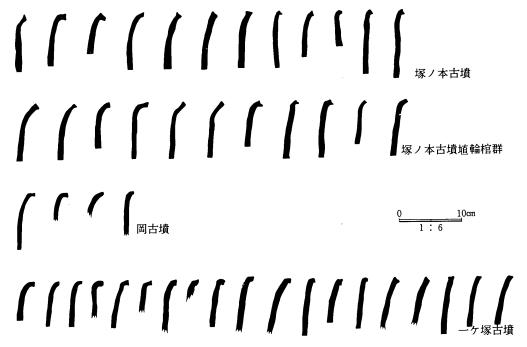


図166 円筒埴輪口縁部集成図

近隣の古市古墳群の埴輪では、最近報告書が刊行された岡古墳(一辺32mの方墳) [藤井寺市教育委員会1989] が対象となる。ただ、壺形埴輪は資料数がとくに限られるため、とりあえず畿内各地の資料で検討せざるをえないことを、あらかじめおことわりしておく。

1. 円筒埴輪

口縁部 図166には塚ノ本古墳・埴輪棺群・岡古墳と本墳の円筒埴輪の口縁部を集成した(註3)。口縁部は古くは外反する形態をとるが、時期が降れば端部を外側に折り曲げたり肥厚させるなどの小さな加工を施す程度となり、やがて直口のものに変化して行く。

その観点からみると、塚ノ本古墳は半分程度が口縁部を外反させたうえ小さな加工を行っており、他は端部を小さく加工するだけのものであるが、そのつくりにはシャープな稜をもつものが多い。また最上段の縦幅が下の段より狭いものも含んでいて、比較的古い傾向が認められる。同様のことはその周囲の埴輪棺群にもいえ、大差はないようである。岡古墳は資料が少ないので何ともいえないが、やはり外反するものが半分、他は端部を外側に折り曲げたものである。ただ、端部を上下に肥厚させ、鋭い稜を引き出したようなつくりは認められない。それに対して一ケ塚古墳のばあい、外反するものは2~3点のみで、他

は端部を小さく外に折り曲げて拡 張させるものが目立つ。さらに直 口のものも2点含まれており、明 らかに新しい傾向を示している。

タガ 図167では口縁部と同じ 資料のタガを比較してみた。一個 体につき 2 段以上のタガが残って いる個体を選び、その特徴を失わ ないように配慮して 2 段分のみ 示した。タガは高く突出し、断面 形が長方形・方形を呈するものか ら、しだいに低くなり、台形のも のへと変遷する。シャープなを もつていねいなつくりから、 いに粗雑化していくわけである。

塚/本古墳と埴輪棺群のタガは、少量ながら断面が長方形のものをくは方形・のもの多くは方形・りのもの多くは方が、それらいる。他の多くは方がりいる。他の多くは方がり、また上のであるが、それらしており、は一大ないののもりであるが、それらのりである。断面形が方形・台形のタガはやや細く繊細なものもりが、タガはやや細く繊細なものもがに上りであるが、タガはやや細く繊細なものもがに上りであるが、タガはやや細く繊細なものもがらからがいる。断面が方形・台がのタガはやや細く繊細なものもがはからがらからがいる。

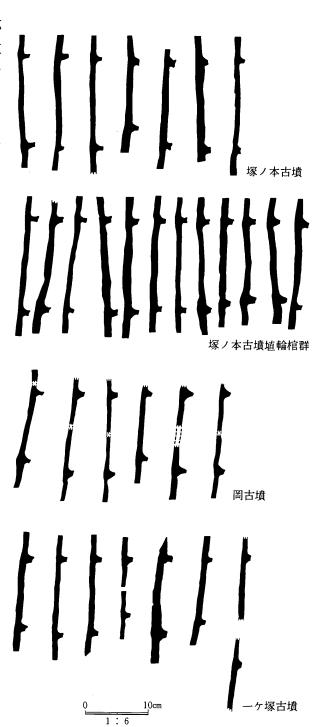


図167 円筒埴輪タガ集成図

		∇	D	□∇	0	□♥;O	□∇:0
塚ノ本	6		2	2	16	10:16	6: 2
埴輪棺群	10	2	3		15	15:15	12: 3
岡					8	0: 8	
一ヶ塚	8	1	5	2	16	16:16	9: 5

表12 円筒埴輪スカシ孔集成表

ち、突出度はやや低くなる傾向が認められる。 そのつくりにはややシャープさを欠き断面形 には丸みを帯び始めるものも散見される。ま たタガの貼付け前には、とくに目立った加工 はなく、なんらかの加工を施したとしても、 せいぜい指でタガの位置を軽くナデつけた程 度かと思われる。したがって、この面からも 一ケ塚古墳の埴輪には新しい要素が多いと考 えられる。

スカシ孔 表12には各々のスカシ孔をその形態ごとに実数で数え、集成してみた。通常、スカシは同一段の対向する位置には同一形態のものが穿孔されるので、実測図上、対向する二孔のうち一孔の形態が判明すれば自動的に2個と数えたが、まれに対向位置で異なるものもあり、そのばあいは個々にカウントした。また方形・三角形・半円形のいずれとも決しがたいものは一括してカウントした。スカシは古くは方形・三角形などの形態が多く、これに半円形・円形が加わり、やがて円形に統一されていく。

塚ノ本古墳には方形・半円形のスカシがあるが、円形スカシの方が多く、非円形と円形のスカシの割合は10:16である。埴輪棺群をみると、各種のスカシがあり、非円形スカシと円形スカシの割合は15:15で、ほぼ半分程度を円形が占めていることがわかる。岡古墳は資料が少ないが、ほぼ円形スカシに限られるようである。それに対して一ケ塚古墳のスカシには各種の形態があり、円形は半分程度とやや少ない。現在の資料に限ってスカシの形態・比率だけをみると、一見、塚ノ本古墳・岡古墳に円形スカシが多く、新しいということになる。

ただ、非円形スカシの中では半円形スカシは新しい要素であり、これが一ケ塚古墳で少なからぬ比率に達していることは無視できない。方形・三角形スカシと半円形スカシの比率をみると、塚ノ本古墳では6:2、埴輪棺群では12:3、一ケ塚古墳では9:5となる。したがって、一ケ塚古墳に古い要素があるとはいえ、他との差は小さいと考えられる。

外面調整 表13は各古墳の外面調整の技法を分類したものである。2次調整のハケメ (註4) などは最下段におよばないことがあり、また最上段のみにていねいな調整を行う こともあるので、それらは除外し、主に中間段の調整に注目した。外面調整は、古い時期 にはタテハケが主流であるが、タテハケ後のヨコハケも多少は存在する。その後、2次調

整のヨコハケが主体を占めるようになるものの、一部にはタテハケのみの埴輪もある。さらに新しくなるとヨコハケが姿を消し、1次調整のタテハケのみとなる。

塚ノ本古墳の外面調整はタテハケののち、 2次調整を含むナデ・ヨコナデを施す例が多

		•	
,	タテハケ	タテハケ→ナデ	タテハケ→ヨコハケ
塚ノ本	2	8	
埴輪棺群		8	
岡	15		
一ヶ塚	4	1	9

表13 円筒埴輪外面調整集成表

く、タテハケ後のヨコハケはない。同じような傾向は埴輪棺群にも認められる。岡古墳では1次調整のタテハケのみで、他の技法はみあたらない。ナデを施す例は一ケ塚古墳にも1例あるが小破片にすぎず、基本的には1次調整のタテハケのみの技法とこれに2次調整のヨコハケを行う技法で構成されており、後者の方が主体である。ヨコハケ技法が大半を占めるという点では、明らかに一ケ塚古墳が新しい。

ただ、塚ノ本古墳のタテハケ後に施されたナデ・ヨコナデは、8点中5点が2次調整で、おそらく他の3点も同じと思われる点で注意を要する。現状ではこのような技法はほかに例がなく、また用いた工具がハケでない(註5)ことを除けば、ヨコハケとよく類似しているからである。従来の伝統的なタテハケ技法の中で、ことさらにヨコ方向の調整を行うに至った契機としてまず考えられるのは、当時、すでにヨコハケ技法が他地域などである程度の普及をみていたのではないかという推測である。しかも、その工具がハケではないという現象は、この埴輪を造った工人(集団)にとって、ヨコハケ技法の導入期における試行錯誤の一つと理解するのも一案であろう。

一方、一ケ塚古墳のヨコハケ技法も特徴的である。報告では断続的なものと連続的なものに分けたが、後者は一回の動作でハケメが器面を一周しており、また前者もハケメを施す一回の動作のピッチが三分の一周におよんだり、短いハケメもひじょうに規則的な動作の反復によっている。ただ、中期古墳の円筒埴輪に典型的な、工具が器面から離れず休止する動作を反復する技法はない。弥生土器の文様に置き換えてみると、連続的なヨコハケは直線文、休止するヨコハケは簾状文と同じ動作といえ、これらの技法は回転台を用いて行われたと考えられる。休止するヨコハケが無いことを重視すれば、この埴輪は長原や古市古墳群の中小古墳においては、その出現より古いということになるが、おそらくその直前段階であろうと考えている。

円筒埴輪の新古 口縁部・タガ・スカシ孔・外面調整などを細かく比較してみた。その結果、スカシ孔以外はいずれの要素をみても、一ケ塚古墳が他の二古墳と埴輪棺群より新

しく位置づけられることを述べた。非円形スカシと円形スカシの比率だけをみると、一ケ 塚古墳に埴輪棺群と同程度の古い傾向はあるが、非円形のうち新しい要素である半円形の スカシも少なくない。よって一ケ塚古墳が他の古墳より新しいとはいえ、さほど大きくく だらない可能性を示していると思われる。

岡古墳のばあい、外面調整はタテハケのみであるが、これは2次調整が省略されたものなので、2次調整を施した他の古墳の埴輪との単純な比較はできない。スカシ孔の形態は塚ノ本古墳と同じ組成を示してはいるが、口縁部のつくりにややシャープさを欠き、またタガも高く突出するにもかかわらず、断面が台形の鈍重な形態のものが多い。この点からみると、岡古墳は塚ノ本古墳よりやや新しいと考えられる。

塚ノ本古墳の埴輪は、種々の要素からみて、岡古墳や一ケ塚古墳より古いとみることができる。ただ、外面の2次調整にヨコハケとの関連が想定されるヨコナデが多用されており、円形スカシが多いことを考慮すれば、岡古墳から大きく隔たって古いとまでは考えにくいであろう。

埴輪棺群は塚ノ本古墳の周濠外縁で検出されたものなので、塚ノ本古墳と同時期か、それよりやや降ると考えられる。これを型式学的にみると、スカシにやや古い傾向はあるものの、両者はほぼ同時期とみてよいと思われる。

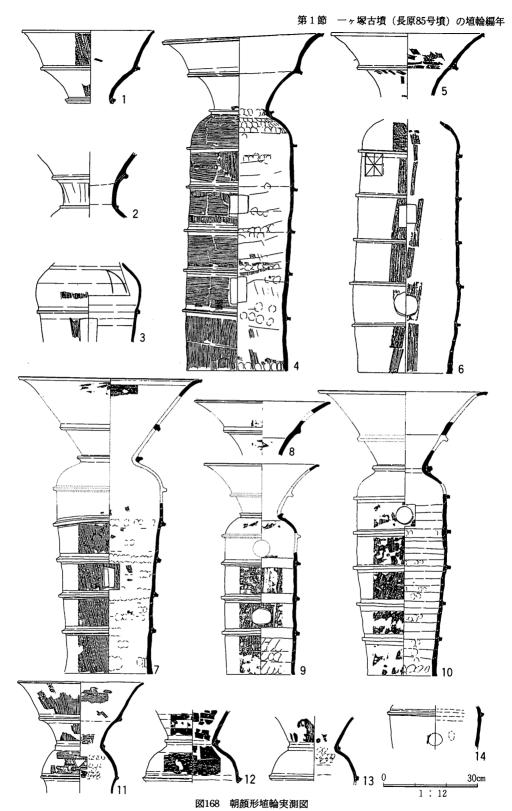
以上の検討から、塚ノ本古墳・埴輪棺群→岡古墳→一ケ塚古墳という編年的序列を与えるのが妥当であろう。そしてその時間差は、個々にはかなり小さいものと思われる。

2. 朝顔形埴輪

円筒埴輪と同様に、塚ノ本古墳・同埴輪棺群・岡古墳を比較の対象とする(図168)。ただ、資料数に制約があるため、充分な検討にはなりえない。

口縁部は塚ノ本古墳には良好な資料が1点しかないが、端部は小さく肥厚させ、シャープに仕上げている。埴輪棺群も同様である。同じ例は岡古墳にもあるが、端部を水平に近く開き断面をコの字形に仕上げただけのものや、端部が丸く終わるものも少なくない。一ケ塚古墳の資料も1点のみであるが、端部は断面コの字形で、しかもシャープさに欠ける。口縁部の上段と下段を画するタガは、一ケ塚古墳の1点と岡古墳の一部に突出度が低いものがあり、他は概ね高く突出している。口縁部の様相をみると、塚ノ本古墳・埴輪棺群→岡古墳→一ケ塚古墳の順に新しい傾向が増加している。

頸部から肩部にかけてのプロポーションは、塚ノ本古墳にやや丸みを帯びたものがある



 $1 \sim 3$:塚ノ本古墳、 $4 \sim 6$:同埴輪棺群、 $7 \sim 10$:岡古墳、 $11 \sim 14$:一ケ塚古墳

が、他には丸く張り出すものはない。外面調整は岡古墳には良い資料がなく、塚ノ本古墳にはタテハケ後、ていねいにヨコナデしたものがあり、また埴輪棺群にはピッチの長いヨコハケが顕著に認められる。一ケ塚古墳にはていねいなナデとヨコハケの2種があり、後者にはピッチの長いヨコハケもある。頸部のタガは一ケ塚古墳に低く断面三角形のものが目立ち、他は高く突出するものが多い。塚ノ本古墳に1点ある断面三角形のタガは小さいがつくりはシャープである。頸部から肩部の様相では、埴輪棺群→一ケ塚古墳の順に新しくなる。塚ノ本古墳と岡古墳はやや資料不足であるが、頸部のタガだけでみると、岡古墳→一ケ塚古墳という前後関係かと思われる。

円筒部は埴輪棺群と岡古墳にのみ資料がある。タガはいずれも高く突出しているが、岡古墳の方が少し低い。スカシ孔は、埴輪棺群は8例中6例が方形、岡古墳は8例中2例が方形で、他は円形である(註6)。なお、塚ノ本古墳には肩部直下に方形スカシが、一ケ塚古墳には肩部に三角形のスカシが穿孔されたものがある。外面調整は、埴輪棺群にはタテハケのみのものと、器壁を三分の一周以上する長いヨコハケのものがある。岡古墳ではタテハケばかりであるが、1点だけ、ピッチの長いヨコハケが施されたものがある。円筒部の比較では、埴輪棺群→岡古墳の順に新しくなる。

資料不足ではあるが、以上から、塚ノ本古墳・埴輪棺群→岡古墳→一ケ塚古墳という前 後関係が想定される。

3. 壺形埴輪

壺形埴輪には全形がうかがえるものが少なく、数例に限られるので、比較・検討の対象を、とりあえず畿内各地にまで拡大せざるをえない。

大和	(巣山)・乙女山・(ナガレ山)・瓦塚1号
河内	美関・北岡2号埴輪棺・高廻り2号(長原170号墳)・高井田横穴・一ヶ塚(長原85号墳)・(野中宮山)・彼方丸山
摂津	小石塚
山城	(鳥居前)・梶塚

表14 畿内の壺形埴輪B類出土例 (カッコ内は口縁部の形態が不明のもの、註8)

壺形埴輪は、二重口縁の壺形土器が焼成前に底部穿孔されることによって、古墳に供献される仮器に転化・成立した(A類)とみられる。ここでは底部を穿孔せず、成形当初の段階から大きく下に開け放ったままで、口縁部が朝顔形埴輪と同様の二重口縁の形態をとるもの(B類)を取り上げることにする(註7)。先述のように、形象化された仮器として成立したものであるから、新しくなるにし

たがって、本来の二重口縁壺形土器の形態からはなれていくと考えられる。この想定のもとに、当該の埴輪を並べてみたのが図169である。

小石塚古墳・美園古墳の壺形埴輪は内面に ヘラケズリが施されており、これは古い特徴 である。とくに小石塚古墳では、すでに口縁 部が朝顔形埴輪と同形態であるとはいえ、頸 部と肩部を画するタガはまだなく、器壁も全 体に薄く仕上げられている。頸部と体部の形 態も、他に比べてもっともよく本来の土器の 特徴をとどめている。外面調整は細かいタテ ハケで、肩部に部分的なヨコハケを施したも のもある。体部下半はタテ方向のヘラミガキ である。美園古墳の埴輪では頸部と肩部の境 にタガがあり、ここから上の口縁部は、基本 的に朝顔形埴輪と変わらないものになってい る。器壁は通常の埴輪と同じ程度の厚みで、 内面のヘラケズリはあまり徹底していない。 外面調整は全体にタテハケを行ったのち、肩 部にヨコハケを加えている。体部下半はすぼ まりながら長く下へ伸び、全体に丈高のプロ ポーションとなっている。

北岡2号埴輪棺の壺形埴輪は、口縁部は美 園古墳と同様であるが、頸部と肩部の境のタ ガが断面三角形となっており、肩部には水平 の鍔が取り付いている。体部下半はすぼまり ながらも直線的に下へ伸びている。スカシ孔 もこのころから出現し、より一層仮器化が進 んでいるようである。外面調整はタテハケ、

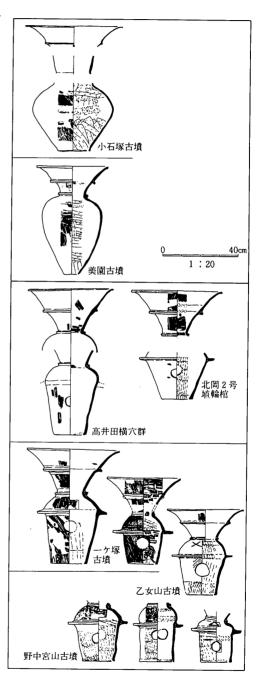


図169 壺形埴輪 B類 (畿内) の編年案

内面調整は口縁部がハケ、体部はナデであり、ヘラケズリは認められない。鍔までの高さが21cm程度しかなく、小型品の部類である。後述の一ケ塚古墳には大型品と小型品の二者があるが、こうしたセット関係は遅くともこのころには成立していると考えられる。

高井田出土例と一ケ塚古墳の大型品は、美園古墳出土品の肩部に水平の鍔を取り付けた 形態である。体部下半は直線的に下へ伸び、わずかしかすぼまらない形態になっており、 美園古墳より新しいと考えられる。肩部の張りと体部のすぼまり方だけをみると、高井田 例に古い傾向が残っているようである。一ケ塚古墳の小型品も、同様に北岡2号埴輪棺よ り新しい。肩部と頸部の境のタガ断面は三角形が大半を占めるようになる。外面調整はタ テハケやヨコハケであり、内面調整はハケ・ナデなどで、ヘラケズリは認められない。

乙女山古墳の壺形埴輪は、頸部と肩部を画するタガの断面が台形である点に古い要素があるが、肩部以下の内面・外面調整にハケメが認められず、ナデであることも見のがせない。一ケ塚古墳と同時期かやや新しいと考えられる。野中宮山古墳の壺形埴輪も、口縁部が不明であるが、タガは断面三角形で、内外面の調整にハケメは部分的にしかなく、ナデが主体に変化していること、また大型品が姿を消している(註9)ことから、一ケ塚古墳より新しいと考えられる。

以上のように、壺形埴輪B類は形態的には、水平の鍔が出現する前後で大きく二分することができ、鍔の出現後は円筒埴輪などの上に乗せられるようになったと考えられる。

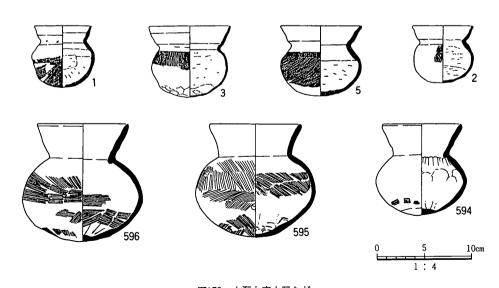


図170 小型丸底土器など 1~3・5:カラネガ岳2号墳、594~596:長原2・3号埴輪棺

(遺物番号は原報告による)

4. 一ケ塚古墳の築造時期

一ケ塚古墳の埴輪は、円筒埴輪・朝顔形埴輪でみると古市古墳群の岡古墳より新しく、 壺形埴輪でみると、古市の野中宮山古墳より少し古いと考えられることを述べた。ここで 他地域の古墳との比較を試みておきたい。

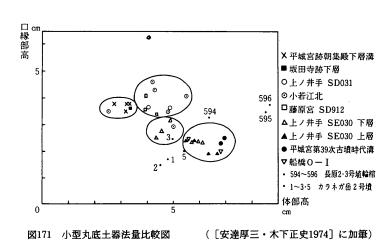
他地域の古墳との併行関係を知りうる資料は土器である。

一ケ塚古墳の周濠から出土した土器は布留式でも比較的新しく、小若江北式より降ると考えているが、破片が1点だけなのでさして根拠があるわけではない。それ以外の資料としては、塚ノ本古墳の周濠外縁で発見された埴輪棺群のうち、一つの掘形内の棺上で検出された2号・3号埴輪棺[長原遺跡調査会1978]に供献された3個体の丸底土器(図170)がある。これを先学[安達厚三・木下正史1974]にならって口縁部と体部の法量比較図に付け加えてみたのが図171である。このうち2個体はやや大型で、小型丸底土器の分類にはあてはまらない。残る1個体は小型丸底土器C類またはD類かと思われる。外面調整はハケのちナデである。口縁部と体部の高さの比率では大和・上ノ井手遺跡SE030下層の小型丸底土器の分布範囲におさまるようである。1個体だけなので何ともいえないが、少なくとも、外面にハケメが目立ち、体部のプロポーションにもいびつなものが増えてくる河内・船橋OI式の壺D1「平安学園考古学クラブ1962]までは降らないであろう。

小型丸底土器が一定の量をもって出土している古墳としては、山城のカラネガ岳2号墳 [岡内三真ほか1981] がある。これも図172に付け加えてみると、口縁部が短くなり、わずかとはいえ、新しい傾向が認められる。この古墳では高杯もまとまって出土しており、報告者はこれらの土器を上ノ井手SE030上層の土器にもっとも近いとしている。

そうみてよければ、

有黒斑の埴輪を伴うカ ラネガ岳2号墳は長り 2号・3号埴輪棺り ことやなっていていていていてがあしたがってがあることがないので構成を 輪で構成と比較のではいできることができることができることができることができることができまることができまることができまる。



のではないだろうか。

以上の検討の結果、一ケ塚古墳の埴輪の時期は以下のように整理される。

- 1. 焼成が有黒斑であることから窖窯の導入以前であり、また須恵器の出現前である。
- 2. 長原古墳群・古市古墳群においては、円筒埴輪・朝顔形埴輪では長原塚ノ本古墳(1号墳)とその周囲の埴輪棺群や古市の岡古墳より新しい。壺形埴輪では、古市の野中宮山古墳より古く、古市の北岡2号埴輪棺より新しい。
- 3. 他地域との比較では、壺形埴輪では摂津の小石塚古墳・中河内の美園古墳より新しく、 大和の乙女山古墳と同時かやや古い時期である。土器から間接的にみると、山城のカ ラネガ岳2号墳に近そうである。
- 4. 一ケ塚古墳の埴輪は古墳時代中期前半、実年代では5世紀前半のものと考えられ、古墳の築造もその時期と考えられる。

なお、埴輪の胎土は、肉眼観察では円筒埴輪で5グループに分かれ、朝顔形・壺形埴輪にはそれらのいずれかの胎土が用いられていた。胎土の違いと製作技法の違いには相関関係がありそうだが、今回は触れず、いずれあらためて再論したい。 (積山洋)

註)

- (1) ここであつかう埴輪棺とは、塚ノ本古墳の周濠外縁で検出されたもののうち、無黒斑の埴輪や須恵器を伴うなど、明らかに新しい様相の埴輪棺をのぞいたものである。具体的には [長原遺跡調査会1978] の 1 号埴輪棺~4 号埴輪棺、 [大阪文化財センター1978] の 2 号棺・3 号棺・5 号棺と朝顔形埴輪のみの7 号棺である。
- (2) ほかに、近年発見された高廻り1号墳(169号墳)・高廻り2号墳(170号墳)など、有黒斑の埴輪をも つ古墳があるが、いまは整理作業の最中なので、これらとの比較・検討は、いずれ別途行われるであろ う。また40号墳については、今回の報告に掲載することができた。
- (3) このような方法は[福永伸哉1990] でも試みられている。
- (4)外面調整はタガ接合以前を1次調整、以後を2次調整と定義されている[川西宏幸1978]。前回の報告 [積山 洋1989]ではヨコハケがタガ接合時のヨコナデに切られていることから、ヨコハケのすべてを 2次調整と理解することを保留し、またタガ接合→2次調整ヨコハケ→タガを再びヨコナデという作業 工程がありうることにも触れた。中期古墳の埴輪を中心としたその後の観察では、このようなばあい、 タガがはずれた剝落面には1次調整のタテハケが観察されることが多く、ヨコハケが認められる例はあ まり多くないことが判明した。したがって、ヨコハケに関する限り、その多くは2次調整であろうが、 個々の事実観察にもとづいて判別すべきことはいうまでもない。

- (5) このナデ・ヨコナデは板ナデなどの技法ではなく、おそらく皮その他を用いたもので、器面はひじょう に平滑に仕上げられている。
- (6) 朝顔形埴輪円筒部のスカシ孔は、円筒埴輪と同じ数え方をした。
- (7) 壺形埴輪には、瓦塚1号墳[橿原考古学研究所1976]の一部や長原40号墳(本書所収)などに、口縁部が二重口縁ではなく、一段に外反したり直口壺の形態をとるものがあるが、ここでは触れない。
- (8)表14でとりあげた例の出典は以下のとおりである。

乙女山古墳 [河合町教育委員会1988]、瓦塚1号墳 [橿原考古学研究所1976]、美園古墳 [大阪文化財センター1985]、北岡2号埴輪棺 [大阪府教育委員会1980 II]、高廻り2号墳 [大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989]、高井田横穴群 [柏原市教育委員会1986・同1987]、野中宮山古墳 [藤井寺市1986]、彼方丸山古墳 [大阪府教育委員会1971]、小石塚古墳 [豊中市教育委員会1980]、鳥居前古墳 [杉原和雄1990]、梶塚古墳「城陽市教育委員会1986]

なお、ナガレ山古墳例は発掘中に現地で一部を実見したのみである。巣山古墳の例も橿原考古学研究 所の採集品中に鍔の破片を確認した程度である。また高井田横穴群の出土例は溝や未完成横穴の埋土か ら出土したもので、近隣に古墳の存在が予想されている。

(9) 一ケ塚古墳の壺形埴輪は、大型品と小型品とで胎土が異なっていることを述べた。大型品の胎土は円筒 埴輪の胎土 d グループと同じであり、また野中宮山古墳の壺形埴輪にも同様の胎土のものがあるが、小型品に変化している。

第2節 一ケ塚古墳(長原85号墳)の形象埴輪

一ケ塚古墳から出土した形象埴輪には、囲形1・家形7以上・盾形2以上・衣蓋形1・ 鞆形1・草摺形1などがある。しかし、これらすべてがもとから本墳に立てられていたも のか、またこれら以外の形式や、すでにみられる形式でも別の個体をもたなかったのかと いう問題はある。ここでは比較的まとまった量が出土した家形や、全国的にも出土例の少 ない囲形を中心に、まとめと若干の考察を加えることにしたい。

1. 家形埴輪

家形埴輪について述べるにあたり、煩雑さを避けるため、次のように各個体を呼称することにする。第III章第1節の図83 \sim 86中、292の切妻造の平地式建物をA、293の切妻造の高床式建物をB、294の切妻屋根をC、295の寄棟造の高床式建物をD、296の棟木をもつ切妻屋根をE、297の軒先をF、301 \sim 307の高床式建物をGとする。298 \sim 300の破片については、BやC、あるいはDの一部の可能性が高いので、ここでは排除しておく。

さて、家形埴輪についての研究は、後藤守一によって先鞭がつけられ [後藤守一1933]、家形の規模や構造などから各種の用途・性格をもった建物群からなることが明らかにされている。最近では小笠原好彦による家形埴輪の配置復元に関する論考があり、その中で次のような分類を行っている [小笠原好彦1985]。まず、中心となる建物を主屋、それに準じる脇屋、そして倉庫、霊屋、後屋に分けている。霊屋は他の建物よりも一まわり小型に製作されたもの、後屋についてはその用途は不明だが、4面に入口や窓を設けた建物をそれとしている (註1)。

本墳出土の家形埴輪にも種々の形式があり、まず、それについて考えてみよう。Aは入口と窓をもつ平地式の建物であるから住居と思われるが、屋根に押縁の表現を欠いており、中心的な建物とはしがたい。脇屋と考えるのが妥当であろう。Bは妻側に入口をもつ高床式建物である。これは高床であること、窓をもたないことから倉庫と考えられる。Cは屋根だけの破片だが、形態や法量がBときわめて類似することから、Bと同じく倉庫の可能性が高い。Dは寄棟造の高床式建物であるが入口や窓の有無については不明である。群馬県赤堀茶臼山古墳や同白石稲荷山古墳の出土品中に、Dと同様に高床式の寄棟造で、その屋根の平面形が正方形に近いものがみられる。それらについては窓をもたないことから高

床式の倉庫と考えられており、Dについてもそのようにみてよかろう。Eは屋根だけの破片であるが、他の家形にはない棟木を付けていた痕跡が認められる。また、押縁も線刻で表現され、破風板も他のものよりも厚く、側面の調整もていねいに行われている。こうした点から、Aよりも格の高い建物であったと考えられ、主屋にあたると思われる。Fは屋根の軒先で、縁に沿って粘土帯を貼付け、その上に線刻を施している。また、軒先の厚さでも他を圧倒しており、これも主屋級の建物であろう。Gは切妻あるいは入母屋造の高床式建物である。この個体は、裾廻台の面取りのしかたをみても、これまでの家形と異なり、精密なつくりであることがわかる。高床式であることから、倉庫とも考えられるが、先に倉庫と考えたB・C・Dとはつくりの精致さという点で差が大きい。Gについては美園遺跡の高床式建物「渡辺昌宏1982」のような高殿の可能性が高いといえよう。

以上の検討から、一ケ塚古墳出土の家形埴輪は主屋 2・脇屋 1・倉庫 3・高殿 1 に分類できる。小笠原の分類ではほかに霊屋・後屋という形式が存在するが、該当するものは見あたらない。また、脇屋についても通常 2 棟あるものであるから、 1 棟を欠いていることになる。主屋と考えられるものが 2 個体あるが、中心となる建物が複数あるとはしがたいから、どちらかは一ケ塚個有のものではないであろう。

主屋とみられるEとFを比べてみると、Fは器壁が厚く、かなりの大型品であることが 推測される。それはA~Gの家形と比べても隔絶した差をもっている。赤堀茶臼山古墳や 白石稲荷山古墳の主屋をみると、他の形式に比べていく分か大きくつくられている。しか し、Fの大きさは、家形埴輪を群として配列したばあい、全体の均衡を破るものである。 したがって、Eのほうを本墳個有の主屋とみるのが適当であろう。

さて、倉庫と考えられるBとCの形態が大変よく似ていることについては先にも述べた。 法量も近似しており、Bの妻側の破風板両端間の長さは31㎝、Cでは32㎝と推定された。 また、色調や胎土もほとんど変わりなく、ハケ調整も7条/㎝の粗いものである。こうし たことからBとCについては同一の工人(集団)によって製作された可能性が考えられて くる。

つぎに脇屋のAと倉庫のDについてである。両者の形式は異なるが、色調・胎土・ハケ調整は共通している。先ほどのB・Cの色調が灰黄色系であったのに対し、こちらは灰白色で、胎土には、B・Cに含まれない雲母を含んでいる。ハケ調整もひじょうに細かい。また、それだけに留まらず、製作手法の点でもいくつか共通するところがある。まず、基部上端にめぐらされる突帯についてだが、どちらも断面台形を呈し、上下に厚みのあるも

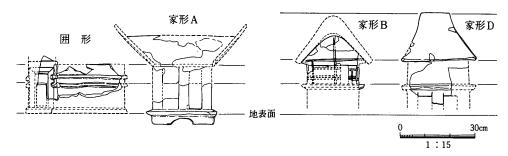


図172 囲形埴輪・家形埴輪の規格性

のとなっている(Bの突帯は板状の薄いものである)。さらに突帯接合ののち、その上面に、縁に沿ってハケ調整を行っている。Aでは入口と窓に方形の切取りがあり、Dにも基部に長方形の切取りが行われているが、どちらも縦方向の線刻が切取り部分をこえて引かれている。この線刻は柱を表現したものと思われるが、共通する表現法をとっているといえる(Bでは柱が複線で表されている)。このような点から、AとDについても同一工人(集団)によってつくられたものの可能性が高いといえよう。

そのほか、同一工人(集団)の作と考えてよさそうなものに、高殿のGと囲形がある。 Gの裾廻台と囲形下端の突帯とは面取りのしかたに共通する手法が感じられる。また、胎 土や調整方法についても似通っている。本墳個有の主屋と考えられたEについては、どの 工房の作とは簡単に決めがたい。しかし、胎土や製作手法からみて、B・C製作者とは異 なることはいえそうである。

以上、家形埴輪のなかに異なる工人(集団)によりつくられた3群以上のグループのあることをみてきた。つぎに、そのグループの枠をこえて認められる相互の関係について述べたい(図172)。

家形BとDはともに高床式の倉庫と考えられるものだが、Bは切妻造、Dは寄棟造であった。また、異なるグループに属することも確認された。しかし、この両者につぎのような関係をみることができる。両者の基部上端の突帯位置を同じ高さにそろえてみると、軒先の高さや全高が一致してくるのである(当然のことながら、ここでは1㎝程度の違いは許容の範囲と考えている)。また、樹立したときの地表面での高さもそろってくると思われる。

家形Aと囲形についてもこれと似た関係がみられる。まず、この両者を樹立したときの 地表面の高さで合わせてみることにしよう。囲形の全高については、入口の形から推定復 元した。また、Aについては、突帯より下の部分は地中に埋められると考え、突帯下端に 地表面を想定した。すると、Aの軒先の高さと囲形の壁の上端面の高さが一致し、Aの窓の上端と囲形の入口の上端も同じ高さにそろうことに気づく。異なる集団が全く独自に製作したとして、こうした統一が図れるかは疑問である。さらに、家形AとBでは妻側の壁の幅がほとんど同じ法量であることも偶然とはいいがたい。

このように、一ケ塚古墳の家形埴輪の製作にあたっては複数の工人(集団)が係わっていたにもかかわらず、全体にある程度の規格性が認められ、群として配列したときの統一が意図されていたのではないかと思われる。また逆に、こうした規格性の存在が、これらの埴輪群がもとから本墳におかれていたものであることを傍証することにもなろう。

一古墳の家形埴輪が、異なる複数の工人(集団)によって製作されていること、そして、 製作者を異にしながらも、それぞれの大きさにある程度の規格性がおよぼされることはど ういう意味をもつのだろうか。小笠原好彦は、家形埴輪をはじめ各形象埴輪の製作に、異 なる二つの集団が係わったことを示し、それを被葬者が掌握していた工人と次代の首長権 の継承者が掌握していた工人にあてている[小笠原1985]。また、大阪府岡古墳を調査し た天野末喜は、同墳の円筒埴輪の製作に三つの工人集団の存在する可能性を考えた[藤井 寺市教育委員会1989]。そのうちのⅢ群とするものについては、個体数の少ない朝顔形埴 輪に限られ、大型で巧みな仕上がりであることなどから、これを中央の埴輪工房から供給 されたものかもしれないと述べている。天野も述べるように、こうした検討にはまだ他の 類例を検証する必要がある。また、一ケ塚古墳のばあいは全面発掘されたものでないから、 今後の調査によって、製作集団を異にする他の家形埴輪がみつかる可能性も残されている。 さらに、規格性の存在を重視するなら、工人(集団)が異なっていても同じ一つの工房内 で埴輪製作を行っていたことも考えられ、工人集団の掌握者にまで議論を発展させること は、まだむずかしい。一古墳の埴輪製作に係わる工人(集団)の組織構造を確かめる方法 から模索せねばこの問題に答えは出せないだろう。長原古墳群はこの一ケ塚古墳がつくら れたのち、一辺10m前後の小方墳が爆発的につくられる時期をむかえる。そうした全国的 にもあまり例をみない展開をみせるこの古墳群の特徴なども考えあわせながら、今後の検 討を進めていく必要があろう。

2. 囲形埴輪

囲形埴輪については、伊藤雅文・林部均によって地名表が作成され、11例の出土状態や 形態が示されている[伊藤雅文・林部均1984]。その後いくつか類例もふえており、以下 に知りえた出土地を紹介する。福岡県拝塚古墳 [福岡市教育委員会1990]・岡山県月の輪古墳 [月の輪古墳刊行会1960]・同金蔵山古墳 [倉敷考古館1959]・大阪府交野車塚古墳 [埋蔵文化財研究会1985]・同太平寺5号墳 [大阪府教育委員会1980 I]・同野中古墳 [北野耕平1976]・同鞍塚古墳西方 [伊藤・林部1984]・京都府内田山A2号墳 [伊賀高弘1989]・奈良県市庭古墳 [奈良国立文化財研究所1981]・同西大寺宝ケ丘遺跡 [奈良県橿原考古学研究所1984]・同下明寺古墳 [奈良県橿原考古学研究所1984]・同大谷今池1号墳 (註2)・同安部山1号墳 [奈良県教育委員会1974]・同ナガレ山古墳 [河合町教育委員会1989]・同五条猫塚古墳 [奈良県教育委員会1962]・三重県石山古墳 (註3)・愛知県経ケ峰1号墳 [岡崎市教育委員会1981]・群馬県赤堀茶臼山古墳 [後藤1933]の以上18例があげられる。これらのうち、交野車塚古墳・下明寺古墳のものについては形態を知ることができなかった。また、安部山1号墳の例は排水溝の蓋として転用されたもので、同墳個有のものではないだろう。

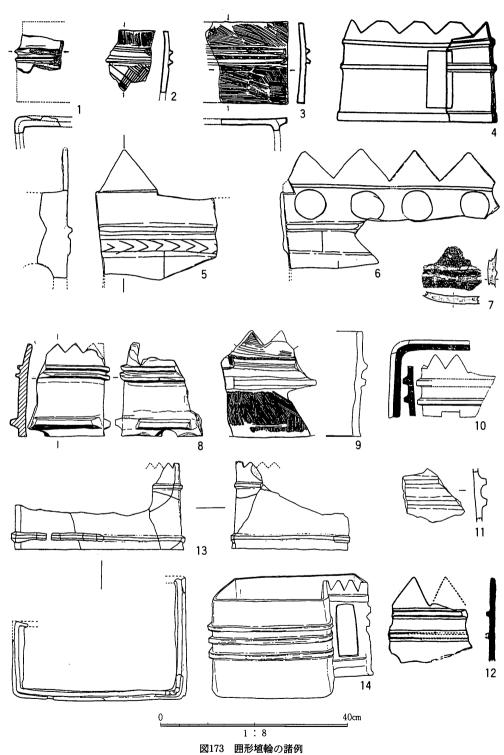
さて、囲形埴輪については、過去に「稲城」をかたどったもの[北野1975]とか、家畜小屋といった説が出されているが、最近では居館の周囲をめぐる塀や柵であるという説が有力である[小笠原1985・橋本博文1985・辰巳和弘1990] (註4)。これまでは、こうした囲形の性格論について論じられることが多かったが、その形態に関する検討は資料数の制約もあってか、あまり行われていない。先にも紹介した伊藤・林部が各例の形態を整理しているが、それ以上に踏み込んでの考察は行っていない。ここでは一ケ塚古墳例を他の例(図173)と比較することによって、その特徴を明らかにし、囲形埴輪の形態差がどういう部分によくあらわれているかを次の3点からみていきたい。

①平面形態

全体の形を推測しうるものは、一ケ塚例・経ケ峰1号例・赤堀茶臼山例の3例にすぎない。一ケ塚例は入口のある面を下に向けたばあい、左下が内側に屈曲している。経ケ峰例については入口位置が不明だが一隅がやはり内側に屈曲している。赤堀茶臼山例は一ケ塚例とは逆に右下が鉤の手状に入り込んでいる。囲形埴輪の平面形については、正方形あるいは長方形の一角を鉤の手形にすることに重要な意義があったのだろうか。しかし、どちら側を屈曲させるかについては、とくに固執せねばならない問題ではなかったと思われる。

②山形突起

一ケ塚例ではこの山形突起を欠いているが、おそらく入口部分の上にだけあったと思われる。他の古墳の例では、一ケ塚例と同様に入口部分の上にだけ山形突起をもつものと、



1~3:月の輪古墳、4:金蔵山古墳、5・6:鞍塚古墳西方、7:太平寺5号墳、8:野中古墳、9:安倍山1号墳、10:五条猫塚古墳、11:市庭古墳、12:内田山A2号墳、13:経ケ峰1号墳、14:赤堀茶臼山古墳

入口部分に限らず全体に突起をもつものがある。確実に前者に属するものといえるものは少なく、赤堀茶臼山例だけに留まる。後者としては経ケ峰1号例・金蔵山例・鞍塚西方例・野中例・五条猫塚例がある。突起はその部分だけを別につくって貼付けたものではなく、壁の部分から切り出している。突起の形態にも違いがあり、赤堀茶臼山例は先端がやや鋭角的であるが、鞍塚西方例や野中例では頂角が直角に近いものとなっている。また、金蔵山例では先端を尖らせずに、平らな頂部にしている。経ケ峰1号例でも先端をあまり尖らせず、やや丸味をもたせたものになっている。山形突起については位置や形態に違いが認められるが、この突起は基本的に欠くことのできない要素であったといえるだろう。

③突带

一ケ塚例では壁面の上端よりのところに円筒埴輪のタガ状の突帯を2条めぐらし、下端に家形埴輪の裾廻台に似た突帯を付けている。この突帯に関しては、それが付けられる位置・条数・形態に、各個体ごとの違いがうかがえる。まず、突帯の付けられる位置としては次の三つに大別できそうである。

1類:壁面中央よりやや上端に近い場所と下端の裾に突帯を付けるもの。

2 類:壁面中央よりも上端に近い場所に付けるのは前者と同じだが、それとともに下端 から少し浮かしたところにもう一つの突帯を付けるもの。

3類:壁面中央部付近にのみ突帯をめぐらし、下端付近に突帯を付けないもの。

一ケ塚例は1類に属することになるが、そのほかには金蔵山例・石山例もこれにあたる。 2 類にあてはまるのは、野中例・経ケ峰例などである。 3 類としては月ノ輪例・安部山1号例・赤堀茶臼山例がある。このうち、2 類とした経ケ峰例は2条の突帯しかもたないが、それだけでなく、2 類に属する他例の突帯が上部のものと下部のものとで形態を異にするのに対し、上下の突帯に形の区別が認められない。区別のあるものを2 a 類、ないものを2 b 類とすると、2 a 類から2 b 類へという変化を考えうるだろう。 1 類に属するものについては、2 a 類よりもさらに上下の突帯の違いが明確に区別されている。そうすると、1 類→2 a 類→2 b 類という型式変化を想定できるかもしれない。しかし、これを証明するには、まず第一に資料数の増加がなにより望まれる。まだ、仮定の域を出ないことを承知であえて話題を進めると、1 類から2 類への変化には、家形埴輪の基部からの影響があるのでは、と考える。野中例には、下方の突帯の下に半円形の切取りがあるが、それは家形の基部によくみられるものである。本来、家形と異なり基部を必要としなかった囲形が、家形と並び置かれるものとして、もともとの意味を失い、家形と同様な基部をもつに至っ

たという解釈はできないだろうか。3類に属する赤堀茶臼山例にある半円形の切取りも、 そうした型式化のあらわれと理解できよう。

囲形埴輪には、そのほかにも注目される点がいくつかある。例えば、壁面に施される線 刻は、囲形の祖型を考える上で見すごせない問題であろう。一ケ塚例の入口上の線刻や月 の輪例の網代状の線刻のほか、鞍塚西方例にある円形あるいは綾杉状の線刻などは祖型の 構造を知る重要な手がかりとなるであろう。

以上、一ケ塚古墳の囲形埴輪を中心に、各出土例を概観し、また推論をかさねてみた。 思いつくままに筆を進めてしまったところもあるが、今後の叩き台になればと思う。

3. その他の形象埴輪

一ケ塚古墳の盾形埴輪には、大きく分けて2種類があった。器財埴輪の編年を行った高橋克壽は盾形埴輪を二つに分類するが[高橋克壽1988]、そのI類にあたるのが図87の312~314、II類にあたるのが308~311である。I類は「忍岡系対称文」をもつもので[斎藤和夫・宇佐晋一1952]、類例が少なく、奈良県佐紀陵山古墳[奈良県橿原考古学研究所1984]・京都府瓦谷遺跡[京都府埋蔵文化財調査研究センター1987]などから出土している。また、高橋によれば、このI類とII類が同一古墳に共存する確実な例は知られていないという。

衣蓋形埴輪については、かなりの大型品であること、立飾りに施された線刻などから、 衣蓋形の中でも古相を示すものであることがわかる。長原古墳群では、一ケ塚古墳とほぼ 同時期と考えられる長原40号墳があるが、同墳でも数個体の衣蓋形が出土しており、一ケ 塚同様の大型品であることが注目される。

鞆形埴輪は西日本では類例がきわめて少ない。管見によると福岡県1例・鳥取県1例・京都府1例・和歌山県2例・三重県1例にすぎない(註5)。それに比べ関東地方での出土例が大変多いことが注意される。一ケ塚例は、鞆形によくみられる表面の線刻を欠くが、同様に線刻の施されない例として群馬県二子山古墳のものがある[東京国立博物館1983]。報告の中でも述べたように、この埴輪がまちがいなく鞆形であるといいきることは難しい。しかし、鞆形であるなら、もっとも古い例の一つと考えられるだろう。 (櫻井久之)

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

註)

- (1) 家形埴輪の形式名称については、例えば倉庫のように形態から用途の推測できるものならその名称で呼ぶことに問題はないと思うが、霊屋や後屋とするものは形態から用途を決めうるものではない。その名称を使うことで、用途や性格を逆に規定することにもなりかねない。霊屋・後屋は形式名として適切でないだろう。
- (2) 橿原考古学研究所 宮原晋一氏の御教示による。
- (3) 石山古墳の囲形埴輪の出土状況については坪井清足氏より御教示をえた。また、実見に際しては京都大学小野山節氏・菱田哲郎氏の御高配を賜った。記して感謝したい。
- (4) 囲形植輪を豪族の居館をめぐる塀や棚を象徴したものであるとする説は、経ケ峰1号墳の囲形埴輪がその内側に家形埴輪を置いた状態でみつかったこと、群馬県三ツ寺 I 遺跡などの豪族居館跡と思われるものの輪郭がところどころに鉤の手状のくびれをもち囲形埴輪に一見類似していることを根拠にしている。しかしそのばあいに、1 古墳から複数の囲形が出土している例(月の輪例・石山例)をどう考えるべきだろうか。囲形がそうした塀や棚を象徴したものであるならば、1 個体あればこと足りるはずである。それぞれ配置する場所が異なっていたのだという解釈も、石山古墳のばあい、3 個体とも造出しからみつかっているから成り立つことはできない。居館全体をめぐるようなものを囲形のモデルとするにはまだ検討の余地があろう。もっと限られた範囲(ある種の聖域)を画する施設の可能性も考えねばならない。また、長野県森将軍塚古墳から出土している「長方形の形象埴輪」と呼ばれるものにも、囲形埴輪と同様に壁面に突帯がめぐらされている。森将軍塚古墳ではこうした埴輪がかなりの個体数出土しているが、こうしたものとの関連も考えてみる必要があろう。
- (5) 福岡県拝塚古墳、鳥取県長瀬高浜遺跡、京都府鴫谷東1号墳、和歌山県背見山古墳、井辺八幡山古墳、 三重県石山古墳(井辺八幡山古墳例は人物埴輪に付けられていたものかもしれない)

第3節 長原古墳群の家形埴輪

はじめに

長原古墳群のこれまでの調査では、30個体以上の家形埴輪が出土している。これらの資料は特徴的な破片で家形埴輪と認知されたものが大半であったが、一ケ塚古墳(85号墳)、84号墳の調査ではほぼ全体のようすをうかがい知ることのできる5個体の資料を得ることができた。これを機会に長原古墳群で今までに出土した家形埴輪をまとめ、若干の検討を加えることにしたい。

家形埴輪についてはさまざまな問題のたて方が可能である。しかしながら、長原古墳群では本来の樹立状況が明らかでない、一古墳中の全個体を知れるものが極めて少ない、完全に復元できる個体が少ない、という資料的制約があることは否めない。

したがって、ここでは家形埴輪の配置・構成論や機能論はおき、これまで長原古墳群で 出土した家形埴輪の個々の特徴に触れ、その抱える問題について若干の考察を行うことに したい(註1)。

対象とする資料は長原古墳群のものに、一部近隣の亀井遺跡の古墳時代河川中から出土した家形埴輪を加える。なお、高廻り1・2号墳など現在整理中のものは除くことにする。

番号	調査次数	屋根の形態	編年	墳形の特徴	規模	伴出埴輪	他の伴出遺物	備考	御文
_	NG1	入1	1	円墳	55	円筒・朝顔	板状木製品		1 . 2
4	C.NG	入2	3	方墳	10 × ?	円筒・人物・益・盾	TK23杯・甕ほか		1
	C.NG	切1	3	方墳	8 ×?	90			1
_	NG1		2	方墳	7 ×?		TK73把手付腕	裾廻り突帯	2
-	NG1		2	方墳		円筒・鶏	TK208变		2
_	NG4		1	方墳		円筒・朝顔・壺・盾・翳・草摺・靱・蓋			3 · 4
	NG81-2		2	方墳 長方形	9.4× 9.5	円筒・朝顔・盾・靱・人物(武人)	TK73杯ほか	屋根	5
	NG82-19	切?	2	方墳	9.5× 9	円筒・朝顔	TK216~208	破風板 混入か	本報告
	NG18		2	方墳?		円筒・朝顔・鳥	TK216要	屋根(押縁)ほか	4
78	NG18			方墳		円筒		屋根~壁	4
	NG18		2	方墳	10 ×?	円筒		屋根(縄代)	4
-	NG82 27	切1・寄1	3	方墳	9.4×?	盾・蓋・草摺			本報告
	NG82 – 27	切4 <・寄1 <	1	帆立貝	45 ×?	円筒・壺・囲い・蓋・草摺・鞆・盾		7個体以上あり	本報告
	NG83-38		3	方墳 造出し	12 ×?	円筒・朝顔・草摺・巫女・馬・鶏	TK47杯·高杯		
-	DD84-1		2	方墳	7.8×?	円筒・	TK73小型壺・杯		
_	NG84-12		2	方墳	9 × 9	蓋・馬	TK23杯・高杯ほか		
	NG84 25	入1	3	方墳 造出し	10.6×14	馬・盾・蓋・人物	TK23杯・甕ほか		6
152	NG86-58-2		2	方墳		円筒・朝顔・蓋	TK73or216器台ほか	破風板	
161	NG86 - 70			方墳	9.5×?				\Box
	NG87 - 35		1	方墳	14.5×14.5	円筒・朝顔・船・盾・靱・短甲・草摺・翳	船端O-II小型丸底壺	現在整理中	7
170	NG87 - 35		1	円墳	21.0	円筒・壺・船・盾・靱・短甲・草摺・胃		現在整理中	7
181	NG88 - 54		3	帆立貝	34	円筒・盾・靱・馬・鶏・人物(武人)	MT15~TK10杯ほか	屋根	8
	NG84-6	切1				蓋・船・人物	TK73or216高杯ほか	土墳出土	
	NG89-63					円筒・朝顔・盾・蓋		包含層出土・裾廻り台	
	亀井NR0901	切1							9
	亀井NR1001	切1							9

(番号は古墳名を、編年は長原古墳群1~4期を示す。なお文献1~9は文末参照)表15 長原古墳群の家形埴輪一覧

1. 家形埴輪概観

長原古墳群において、これまで家形埴輪を出土した古墳は20基をこえる。ここでは、どのような家形埴輪が長原古墳群から出土しているのかを概観することにしよう。

塚ノ本古墳(1号墳)例 塚ノ本古墳では周濠から1個体の家形埴輪が出土している。 当協会の調査分のほか、大阪文化財センターが調査したものを加えると、柱を円柱表現と した高床式の建物が復元できる。開放的な壁造りで、高床部と裾部に屈曲した台をめぐら している。屋根は四注部のコーナーがあり、寄棟造か入母屋造の屋根と考えられるが、の ちに触れるように入母屋造家であった可能性が高い。

個々の破片からはかなり大きな家形埴輪が復元でき、柱が円柱表現であることを除けば、 全体の構造は大阪府美園古墳の高床式建物に類似した開放的な家形埴輪と考えられる。

この家形埴輪は欠失部分が多く、断片的な情報しかえられないが、屋根に載せられたと 思われる鰭状の飾り(以下、鰭飾り)、円柱の表現はこの家形埴輪を特徴づける要素であ る(註2)。このうち比較的資料の多い鰭飾りについてのちに検討を加えることにしよう。 なお、周濠埋土上層から別個体の切妻屋根の妻部分が出土しているが、混入遺物の可能 性が高い。

一ケ塚古墳(85号墳)例(図174-1~5) 切妻形式4個体以上、寄棟形式1個体分が確認できるが、ほかにも別個体があり、少なくとも全体で7個体以上は存在したものと思われる。切妻造家には高床式と平地式のものがある。高床式建物5は閉鎖的な壁廻りから、妻入りの倉庫と考えられる。平地式建物4は平方向に入口のほか、窓と思われる切り抜きがあり、住居であろうか。寄棟造家1は高床式のもので、倉庫を表現したものだろう。84号墳例(図175-1・2) 切妻造家1個体と寄棟造家1個体がある。切妻造家1は転びの弱い大きな破風板をもち、高床式倉庫を模したものである。妻に着脱可能な扉を設けている。本文で紹介したように、屋根と壁の接合に特徴がみられる。寄棟造家2は背の高い屋根部のみで棟上には堅魚木を載せていたものと思われる。

4号墳例(図175-6) ほぼ同形・同規模の入母屋造家が2個体出土している。2個体とも壁廻りをすべて欠いている。屋根の製作方法は通例と異なり、屋根下半部(以下、「下屋根」)の上端を平坦面にし、その上に切妻式の屋根上半部(以下、「上屋根」)を載せている。

14号墳例(図175-5) 小型の切妻造家である。壁廻りの多くを欠失しているが、少なくとも一方の平方向に入口の表現がみられる。壁のコーナーが丸くなっている点、乱雑

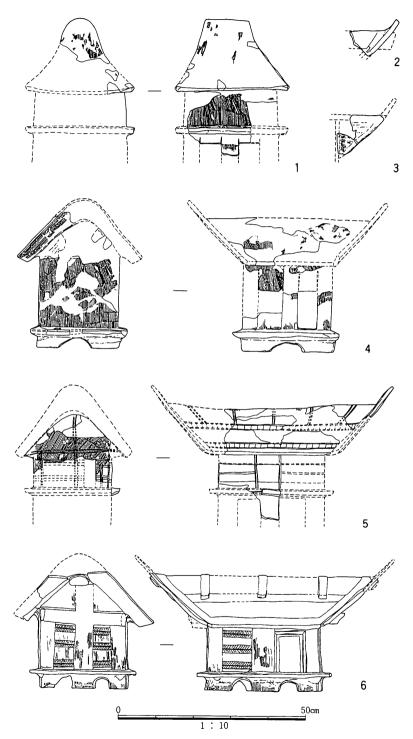


図174 一ケ塚古墳と美園古墳の家形埴輪 1~5:一ケ塚古墳、6:美園古墳

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

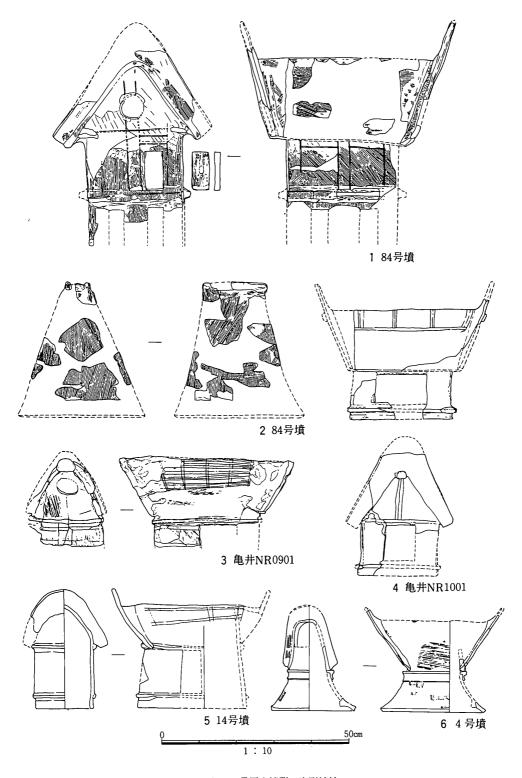


図175 長原古墳群の家形埴輪

な線刻で押縁を表現している点などに簡略化がうかがえる。また、壁が地面に接する位置を示したものである裾廻りの突帯はきわめて突出の低いものである。これはこの突帯が本来、建築物に固有に備わっているものでないために、型式変化を受けやすい器官となっていることによるのであろう。

亀井遺跡NR0901例(図175-3) 弥生~古墳時代の遺物を包含する古墳時代河川から出土した資料である。壁廻りの下半部、破風板のすべてを欠いているが、平側に入口と思われる切り抜きがみられる。屋根には中央に雑な線刻で押縁・網代(?)を表現し、妻の壁には円孔があけられ、屋根には棟木を取り付けている。

亀井遺跡NR1001例(図175-4) NR0901例同様、自然河川中より出土したもので、 切妻形式の開放的な家である。屋根には縦に5本の押縁が線刻で表されている。妻には棟 木を受ける束柱、それを受ける梁材が線刻で表される。低い突帯を裾部にめぐらしている。

2. 三つの検討

な例を掲げたものが図176である。

次に以上の家形埴輪のうち、塚ノ本古墳・一ケ塚古墳・84号墳・4号墳例の特徴に触れ、他地域の資料との比較を通して、その特徴からどのようなことがわかるのかを検討しよう。 鰭飾り 塚ノ本古墳の家形埴輪にのせられた鰭飾りと同様な飾りをつけるものには埴輪 では家形埴輪のほか、蓋形埴輪、靱形埴輪、楕円筒形埴輪がある。また、三重県石山古墳 の鍬形石 [平凡社1959]、奈良県東大寺山古墳の家形環頭 [金関恕1975]、塚ノ本古墳の板 状木製品 [大阪文化財センター1978] (註3) などにも同様の意匠がみられ、古墳時代の 遺物に広く採用された装飾の一つと考えられる (註4)。このうち埴輪を中心に図示可能

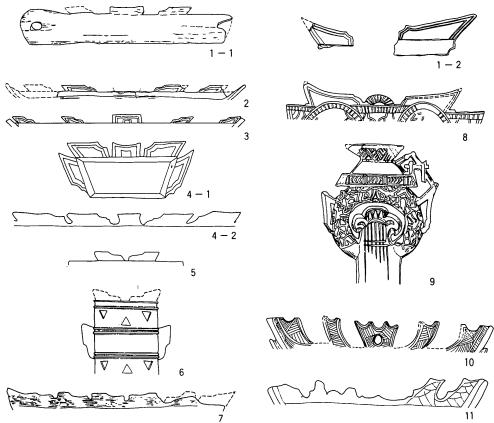
まず、家形埴輪の鰭飾りに限定して検討してみよう。鰭飾りは奈良県寺口和田1号墳例 [橿原考古学研究所1984] のように入口の上部に取り付けられた額状のもの4-1もあるが、基本的には美園古墳例 [渡辺昌宏1982]、丸塚古墳例 [近藤義行1989] にみられるように、大棟、上屋根と下屋根の接合部、隅棟、庇の縁部といった屋根の箇所に用いられる。塚ノ本古墳からは大小の飾りが合計5個出土しており、さきにあげた例から大型のものは表裏に二重の刻線をもつことから大棟に、一面にしか描かれていない小型のものは庇の縁辺、あるいは上屋根と下屋根の接合部に取り付けられたものであろう。

このような飾りをつけた家形埴輪は、岡山県月の輪古墳 [月の輪古墳刊行会1960]、福岡県沖出古墳例 [稲築町教育委員会1989] のように欠失部の多い資料を含めて、12遺跡14

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

例を数える(註5)。このなかには鳥取県長瀬高浜遺跡例10 [鳥取県教育文化財団1982]・島根県平所遺跡例11 [島根県教育委員会1981] などのように著しく立上がった飾りがみられる一方、美園古墳例2、丸塚古墳例3のように配置・形態の共通性の高い一群が存在する。

ここで現有の資料の整理を行うことにしよう。美園古墳・丸塚古墳例の棟上、寺口和田 1号墳例の入口上の飾りに共通する点は鰭を左右対称に独立して配置し、中央に方形板を 設ける点である。また、鰭の縁どりとして二重刻線を用いる点も共通している。鰭の形態 はいったん屈曲して緩やかな鞍部を作り、上辺は底辺に平行している。このような特徴も つ一群をここでは美園型と呼ぶことにしよう。塚ノ本古墳の周濠から出土した板状木製品 1-1 は木製品のためか刻線はないが、鰭の形態・配置はこの美園型と全く共通しており、



1.塚ノ本古墳 2.美園 1 号墳 3.丸塚古墳 4.寺口和田 1 号墳 5.石山古墳 6.松岳山古墳 7.石見遺跡 8.室宮山古墳 9.東大寺山古墳 10.長瀬高浜遺跡 11.平所遺跡 (4・5・11は写真トレース)

図176 おもな鰭飾り (縮尺不同)

家形埴輪以外にもこの構成が用いられていることがわかる。

これに対し、寺口和田1号墳例の庇の縁部につけられた飾り4-2は鰭一単位の形態は 美園型とほぼ同じであるが、刻線がなく、左右に連続的に展開している点が異なっている。 寺口和田1号墳例は棟上の飾りが失われているが、石見遺跡例7 [末永雅雄1935] から庇 縁部と同様な配置であったことが想定できる。また刻線をもたない鰭は松岳山古墳の楕円 筒形埴輪6 [柏原市教育委員会1986] にもみられる。このように刻線を施さず、連続的配 置を特徴とする一群を寺口和田型と呼び、美園型と区別することにしよう。

塚ノ本古墳の家形埴輪の鰭飾り1-2はどのような配置をしていたのかは不明である。 鰭の形態は美園型に類似するが細部において異なっている。いったん屈曲して鞍部を形作 る点では両者に違いはないが、美園型では鞍部が大きく上辺が底辺に平行であるのに対し、 塚ノ本古墳例では鞍部が小さく端部を突出させている。同様な形態の鰭は東大寺山古墳の 家形環頭9、室宮山古墳の靱形埴輪8 [奈良県教育委員会1959] にみられることから、両 者の違いが単なる製作者の個人差に基づくものとは考えがたい。家形埴輪では塚ノ本古墳 以外に例がなく、型式としては不安定ではあるものの、美園型と区別し塚ノ本型と呼ぶこ とにしよう。

数少ない資料での型式設定であるため、今後、訂正・修正があろうが、ここで確認して おきたいことは美園型、寺口和田型、塚ノ本型の時間的な位置づけについてである。

各型式間の関係については、塚ノ本古墳に板状木製品、埴輪という違いはあるが美園型、塚ノ本型があり、寺口和田1号墳では一つの家形埴輪に寺口和田型、美園型の鰭飾りがみられ、三つのタイプはある期間重複して用いられていることがうかがえる。

次にその用いられた時期であるが、美園型とした美園古墳、丸塚古墳例、寺口和田型とした寺口和田1号墳例、塚ノ本型とした塚ノ本古墳例、また、参考資料にあげた石山古墳、松岳山古墳、室宮山古墳、東大寺山古墳は埋葬施設、副葬品、円筒埴輪などの編年からいずれも古墳時代前期後半から中期前半に比定されており(註6)、これらのタイプはほぼこの期間に限定できるようである。

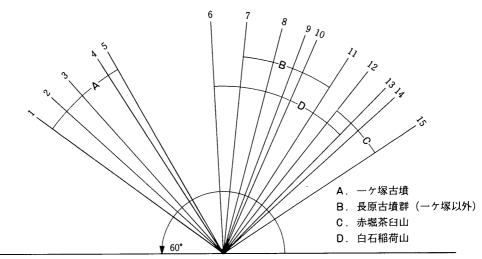
鰭飾りの出自・原型がどのようなものであったかは不明であるが、現有の資料でもっとも古いものは前期後半でも古い時期に位置づけられている東大寺山古墳の家形環頭であろう。可塑性の高い埴輪がその祖型となりえたとは考えがたく、埴輪の飾りにみられる二重刻線が東大寺山古墳の飾りの外縁と内側にある段差を写したものと考えられるならば、埴輪の前に金属器などの遺物が(実在あるいは観念的に)模倣対象物として存在したことを

示しているのかもしれない。また、鰭飾りをのせた末期の家形埴輪は平所遺跡、石見遺跡 例のように、古墳時代後期の資料にみられ、形態は変えながらもその思想的な伝統は保た れたことがうかがえる。残念ながら、現有の資料から塚ノ本古墳の鰭飾りをさきにあげた 期間の中で特定することはできないが、今後資料の増加とともに、各タイプ間の関係がいま少し明らかになれば、古墳編年の一つの指標に加えることができるだろう。

なお、鰭飾りをのせた家形埴輪の性格論については、清水真一氏、辰巳和弘氏の論考がある。両氏とも鰭飾りをのせた家形埴輪が群の中でもっとも大きく作られる点を重視し、特別な性格をもった建物の表現と考える点では共通している。清水氏は「大王家の宮殿を模したもの」としている(註 7)。辰巳氏は鰭飾りをのせた家形埴輪のうち、美園古墳例の詳細な検討を行った結果、この家形埴輪を「新嘗や首長権継承儀礼などの儀礼を行うための建物を表現したもの」としている [辰巳和弘1990]。鰭飾りをのせた家形埴輪はとりわけ重要視され、なんらかの特別な意味を付与された建物の表現であったのであろうが、屋根形態や高床式・平地式といった建築構造的な違いをこえて一様な意義づけが可能であるかは、別に検討しなければならない問題である。

両氏が重視しなかった点で重要と考えるものは、鰭飾りをのせた家形埴輪の14例中12例までが屋根形態に入母屋形式を採用している点であろう。このことは古墳時代の建物群の中で重要視された建物にはとりわけ入母屋形式が採用されたことを示唆するものである。当然のことであるが、家形埴輪群の中で特別な意義をもっている家形埴輪に鰭飾りをのせるのであって、その逆ではない。若干の例外があるものの鰭飾りを有する建物が圧倒的に入母屋形式である事実は、家形埴輪群に留まらず、古墳時代の建築群の中で入母屋造家のステイタスを示している点において重要であると思うのである。

妻の転び 一ケ塚古墳の切妻造家のうち、ほぼ全体のようすがうかがえるのは2個体であるが、他の2個体を加えた4個体に共通する特徴は、妻の転びの角度が40~48°と極めて強いことである(註8)。これは今回掲げた一ケ塚古墳以外の長原古墳群の資料(19~28°)と大きく異なっている。このような転びが強い屋根が偶然のものでなく、少なくとも家形埴輪の製作において一つの範型となっていたことは、一ケ塚古墳例以外にも大阪府美園古墳の切妻倉庫(図174-6、46°)、京都府庵寺山古墳例(46°)[宇治市教育委員会1990]、奈良県伴堂赤丸出土例(42°)[後藤守一1932]など、いくつかの例がみられることから明らかであろう。また、このような家形埴輪が当時の建築物を忠実に反映したものかは遺構、建築部材の上で検証しなければならないが、妻の転びの強い屋根を示す例は家



1. 一ヶ塚2(48°)2. 庵寺山・美園1号(46°)3. 家屋文鏡(44°)4. 一ヶ塚3(41°)5. 一ヶ塚1・4(40°)6. 白石稲荷山東2(31°)7. 白石西2・亀井NR0901(28°)8. 長原14号(25°)9. 白石東3(23°)10. 白石東1・4・亀井NR1001(22°)11. 長原84号(19°)12. 赤堀茶臼山主屋・倉庫(17°)13. 白石西3(15°)14. 室宮山(14°)15. 赤堀脇屋・納屋(11°)

図177 妻の転びの比較(実測角の3倍で対比)

屋文鏡に鋳出された切妻屋根の高床式倉庫(44°)にもみられ、その蓋然性は極めて高い ものと考えられる。

転びの強い一群を明確な数値で区別するのは難しいが、主要な家形埴輪の妻の転びを対 比した図177から転びの強いものと弱いものには隔絶があり、40°前後をもって一つの基準 とすることができるようである。

さて、家形埴輪におけるこのような妻の転びの違いには、どのような意味があるのであろうか? 数少ない資料であるものの転びの強い切妻造家は、前期末から中期前半の資料にまとまってみられるが、中期の代表的な家形埴輪の資料である奈良県室宮山古墳、群馬県赤堀茶臼山古墳、白石稲荷山古墳 [後藤守一・相川龍雄1936]の例が転びの弱い群に属することから時期的な違いとして解釈するのは難しい。また、現有の資料は大阪、京都、奈良、宮崎(註9)にあり、比較的広範囲にわたって分布していると想定できる。このことから、転びの強い屋根をもつ家形埴輪が限られた地域の特別な現象とは考えがたい。

一ケ塚古墳例のばあい、高床式建物は倉庫であり、平地式のものは住居と思われる。このことから、転びの強い建物は高床式・平地式、倉庫・住居にみられることになり、少なくとも一ケ塚古墳例に関する限り、対象物の機能の違いが転びの違いに反映しているということはない。

したがって、詳細については今後の資料の増加を待つところが多いものの、家形埴輪に

みられる転びの違いは古墳時代の建物を忠実に反映したものである可能性が極めて高い。 妻の転びの強い一群は、例えば棟持柱をもつ建物のように建築構造的な違いに基づくので あろうか。

新しい製作方法 84号墳の切妻造家(図65・176-1、図版61)は、本文の中でも触れたように、屋根は壁端の隅で支えられているのに対して、一ケ塚古墳・14号墳の切妻造家は壁端の小口全体で屋根を支え、後に庇部分を付加する構造となっている。このような壁と屋根の接合の仕方を区別するために、今仮りに前者を壁隅接合、後者を壁上接合と呼ぼう。壁隅接合型では、屋根が壁に載せられる際に、すでに形をなしていることが前提であるのに対し、壁上接合型では基本的には壁の上で屋根の製作が行われる点が大きな違いである。切妻造家の壁隅接合は現在類例を調査中であるが、寄棟造家では類似した接合法を用いるものに奈良県勢野茶臼山古墳例[奈良県教育委員会1966]、纏向遺跡例[清水真一・青木久子1990]などの資料がある。

一方、4号墳(図175-6)の二つの入母屋造家は上屋根と下屋根の関係に特徴がみられる。すなわち、一般的な家形埴輪が切妻形の上屋根を四注部の下屋根に接合しているのに対し、4号墳例は四注部の上端に平坦面をつくり、その上に載せている。ここでは、このような上屋根のあり方を上屋根の設置型と呼び、接合型のものと区別することにしよう(註10)。設置型の入母屋造家には長原4号墳例のほかに、大阪府今城塚古墳例[高槻市教育委員会1973]、青山4号墳例[泉北考古資料館1982]、東弓削遺跡例[同]、奈良県石見遺跡例、和歌山県大谷山22号墳例[和歌山市教育委員会1967]などがある。

さて、長原古墳群から出土した切妻造家、入母屋造家から壁隅接合型、上屋根設置型を設定し、類例が他の地域にもみられることを述べた。この二つのタイプに共通する点は従来の家形埴輪が壁から屋根への一連の工程で製作が進行したと考えられるのに対し、両者を分割して製作し完成させることを指向していることである。

このような製作方法を用いた家形埴輪は切妻造家では長原84号墳例、入母屋造家では今城塚古墳例、寄棟造家では勢野茶臼山例に典型的にみられるように大型の屋根、細長い壁廻りを特徴としている。したがって、製作技術上の変化は新しい家形埴輪にみられる形態上の変化(屋根の大型化、壁部の長・細身化)と関連づけることが可能であろう。長原84号墳例、4号墳例からはいずれもTK23型式ごろの須恵器が伴出しており、これらの資料から長原地域では遅くともこの時期までに家形埴輪の新しい製作方法が現れていたことがうかがえるのである。

3. まとめ

長原古墳群で出土した家形埴輪を概観し、それぞれの家形埴輪にみられる特徴的な要素、 鰭飾り・妻の転び・製作方法の3点について検討を加えた。第一点は古墳編年の一指標に 加えうることと入母屋造家の家形埴輪群中の位置づけについて、第二点は古墳時代の建築 に妻の転びの強い一群を設定しうること、そして、第三点は壁・屋根を分割成形する指向 が家形埴輪の新しい製作方法として把握できることを示した。

これらの特徴はいずれも長原古墳群の限られた地域に留まらず、広い地域にわたって展開した埴輪製作の技術基盤に則ったものである。なかでも、中期末にみられる形象埴輪の形態・製作の変化については家形埴輪だけでなく、他の形象埴輪研究においても指摘されているところであり(註11)、今後、埴輪全体の様式的な変化として検討を深めなければならない課題であろう。 (岡村勝行)

註)

- (1) 各地域の家形埴輪を対象とし、その時期的な問題を中心に扱った考察を「家形埴輪の編年」と題して近く報告する予定である。研究史、および今回扱った資料の不備な点はその場で補うことにしたい。
- (2) 塚ノ本古墳から出土した鰭状飾りを家形埴輪に付属するものと想定する見解は [桜井久之1987] にすでに示されている。
- (3) 現長126.5cm、最大幅26.5cm、厚さ1.5cmをはかる板状の木製品で、その一側縁に飾りを造出している。 一端を欠いているが端近くにあけられた円孔は、左右対称をなしていたものと思われる。この木製品が どのような用途をもっていたものか明らかではないが、支えをもって墳丘に飾られたものか、あるいは 奈良県寺口和田1号墳の家形埴輪の入口の上に付けられた飾りのように、何らかの入口の上に掛けられ たものであろう。

なお、資料の実見にあたっては (財) 大阪文化財センターの石神幸子氏にお世話になりました。記して感謝致します。

- (4) 同様な見解は広くみられる。例えば「辰巳和弘1990 95頁]。
- (5) 鰭飾りをのせる家形埴輪、およびその屋根の形態は次のとおりである。

大阪府塚ノ本古墳(入母屋)、美園遺跡(入母屋)、奈良県室宮山古墳(入母屋)、寺口和田1号墳 (入母屋)、石見遺跡(入母屋2個体)、京都府丸塚古墳(入母屋)、滋賀県狐塚5号墳(入母屋)、岡山 県月の輪古墳(入母屋・切妻)、伝岡山県(切妻、鰭飾りか?)、島根県平所窯跡(入母屋)、鳥取県長 瀬高浜遺跡(入母屋?)、福岡県沖出古墳(入母屋)

- (6) これらの古墳の編年観は [都出比呂志1979] [和田晴吾1987] によっている。
- (7) 清水氏の見解はやや複雑である[清水真-1988]。氏は「火炎形屋根飾り」の意味として次の三つの見解をあげている。1.この飾りが弥生時代中期の土器に描かれた家屋にみられる屋根飾りに遡り、「古墳時代に大王家の宮殿建物の象徴」となったとするもの。2.「屋根上に千木以外の装飾を施す思想は、

日本以外のものの可能性があろう」とし、「中国の古代家屋の屋根」の装飾との関連を考えるもの。3. 「この屋根飾りはあくまでも、大王家の中心家屋を巨大化・荘厳化もしくは神秘化するための手段として、架空のものを屋根に乗せたと」し、実際には堅魚木しか乗せていなかったとするもの。

三つの見解とも「大王家の建物」とする点では共通しているが、1・2は実際の建築物に「火炎形」「飛雲形」の屋根飾りがあがっていたとする。しかし、これは同様な飾りが家形埴輪以外にも多く用いられている事実を看過したものである。3については屋根飾りが家形埴輪の装飾に属するとする点は賛成であるが、「大王家の中心家屋」を対象としたものとするには詳細な論証がなお必要であると考える。

- (8) 妻の転びは破風板の勾配が鉛直方向とつくる角度を計測している。したがって、この値が大きいものほど妻の転び(勾配)が強いことになる。また、破風板が反っているものは、その平均値を示している。なお、図177では転びの違いを明瞭にするために実測角を3倍にして提示している。
- (9) 宮崎県の資料は西都原古墳出土の「子持ち家」と通称されている家形埴輪のうちの切妻造家である。実際に角度をはかったわけではないが、実見したところでは妻の転びが強い群に属するものと思われる。
- (10) 屋根上部が分割可能な入母屋造家については、関東地方に多くみられ、従来、「天地根元宮造家」と呼ばれた家形埴輪が何を模したかという問題と深く関わっている。これまでいくつかの見解があり定説に到らなかったが、最近、この家形埴輪について重要な見解が発表された。大橋泰夫氏はこれまでの出土資料の再検討を行い、入母屋造家の屋根上部を表現したものであると結論した。そして、このように、「屋根上半部が分割製作され、組合式になっている」ものを「組合式入母屋造家形埴輪」と名付け、類例のみられる畿内地方からの影響を支持している[大橋泰夫1989]。ここで設置型としたものは氏の設定した「組合式入母屋造家形埴輪」に含まれている。この用語の違いは関東地方の屋根上部分割可能な入母屋造家がすべて屋根下部へ塡め込みと考えられるのに対し、畿内地方のものはその方法を採らず、ただ載せている点を重視しているためである。時間的には、畿内の設置型から関東の塡め込み型への展開を想定することが可能であるが、その移行内容の連続性については今後の課題である。
- (11) 古墳時代中期末から後期にかけて形象埴輪全般に規模縮小・粗雑化の傾向やいわゆる石見形盾形埴輪などの新しいタイプの形象埴輪の出現がみられることは従来より指摘されるところであった。このような変化の具体的な内容については最近いくつかの形象埴輪の研究の中で詳しく論じられている。高橋克壽氏は靱形・盾形・胄甲形・蓋形埴輪の形式分類を行い、これらの器財埴輪を中心とした編年案を提示し、古墳祭祀の変容を論じている[高橋克壽1988]。また、松木武彦氏は衣蓋形埴輪の分類を行い、その変遷に三つの画期を設定し、その画期の背景を論じている[松木武彦1990]。

このうち、ここで指摘した家形埴輪の製作方法の変化は、時期的には高橋氏のいう器財埴輪の簡略化・器形の縮小が一様に指摘される「第四期」(5世紀後半)松木氏のいう蓋形埴輪が諸型式が分立し始め、小型化と簡略化を示すとされる「第二の画期」(5世紀中葉)と連関する可能性を考えている。ただし、家形埴輪の分割成形の指向がほかの形象埴輪の形態・製作方法の変化と連動しているのかについては、にわかに判断できず、今後、一古墳に樹立された形象埴輪群がどのようなタイプの組合せからなっているかの分析を行うことにしたい。

表15 長原古墳群の家形埴輪一覧の文献覧出典

1. [大阪文化財センター1978]、2. [長原遺跡調査会1978]、3. [桜井久之1987]、4. [埋蔵文化財研究会1985]、5. [大阪市文化財協会1989]、6. [大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985]、7. [高橋工1988]、8. [木原克司1989]、9. [大阪文化財センター1986]

第4節 黒斑をもつ円筒埴輪の一例 -長原40号墳出土の資料-

1. はじめに

長原遺跡において、地下に埋没した古墳が存在することが明らかになってから、10余年が過ぎた。その間、発掘調査の進展とともに古墳の発見が相次ぎ、その数は1989年度までで180余基となった。この数は、未調査の土地の広さを考慮すればまだまだ増加し、おそらく500基を超えるものと予想できる。

長原の各古墳に共通する特徴として、次の諸点を挙げることができる。

- ①現地表上に墳丘を認めることができない、いわゆる埋没古墳である。
- ②墳丘の削平が著しく、主体部・副葬品が検出された例はわずかである。
- ③一辺が数~10数mの方墳がほとんど(95%以上)で、円墳・帆立貝形の前方後円墳が若干認められる。
- ④古墳に伴うと考えられる、埴輪・須恵器などの土器が豊富に検出される。

こうした古墳群の特徴に加え、調査が古墳のみを対象としたものでなく、つねに発掘区の形状や面積の制約を受け、一古墳を完掘できることはまれである。古墳の時期区分や埴輪編年を考える上で定石である、副葬品の検討をはじめとする総合的な判断ができないことが制約となっている。

2. 長原古墳群の時期区分と埴輪編年

さきに述べた資料的な制約があるものの、ここ10余年の間に古墳群の時期区分・埴輪の編年作業が行われてきた。そのうちのおもな見解を整理しておこう。

a) 長原古墳群の時期区分

古墳群の時期区分には、 [藤沢1978] ・ [京嶋1982] ・ [田中1985] などいくつかの案が示されている。

藤沢は、塚ノ本古墳とその周辺の約30基を対象に埴輪と須恵器を基準とし、世代を念頭 にいれた3時期に区分した。

京嶋は埴輪と須恵器さらに両者の共伴関係に注目し、藤沢と同じく3時期に区分した。 それによれば、第1期は有黒斑の埴輪、第2期は無黒斑で2次調整にヨコハケメを有する 埴輪、第3期は無黒斑で2次調整を欠く埴輪に特徴づけられるという。また、第2期の古墳にはT K73 \sim T K208型式、第3 期にはT K23 \sim T K47型式の須恵器が伴うことを指摘した。

田中も、埴輪と須恵器を基準に古墳群を大きく3時期に区分した。その中でヨコハケメの埴輪を有するII期を、有黒斑のII期古相と、無黒斑のII期新相に細分した。後述の長原40号墳は、I期とII期の過渡的段階に位置づけられるという。

このように、それぞれの意見は細部で微妙に異なるものの、時期区分の大枠は共通すると考えてよい。全体を3時期に区分することと、区分の基準が円筒埴輪と須恵器の編年にあることに変わりはないようである。それでは、時期区分の一指標である埴輪編年はどうであろうか。

b) 埴輪編年

長原遺跡出土の円筒埴輪に関する研究史を簡単にみておこう。

[猪熊1978]では、黒斑の有無を手がかりにA・B2類に大別する。B類には、大型のBI類と小型のBI類が存在するとし、さらにBI類は3細別されている。大型のBI類の特徴は、径が45㎝内外で外面の調整は「2次調整として断続するヨコハケ」(B種ヨコハケ…引用者)であるという。BI類は、a:外面の2次調整に「一部断続的なヨコハケ」が認められる、b:外面は「1次調整のタテハケのみ」、c:「最下段のタガ調整が異なる」「断続ナデ技法」をもつものの3者である。須恵器との対応関係は、BI類にTK216、BIaにはTK208・TK23、BIbにはTK47型式が伴う例が多いという。

[鈴木1982]では、黒斑の有無と外面のハケメの違いをもとに、1類~4類に区分している。1類が有黒斑、2類が有黒斑と無黒斑の両方、3・4類が無黒斑である。ハケメについては、1・4類が「タテハケ」、2・3類が「タテハケ+ヨコハケ」による調整であるという。これら以外の諸要素についても一覧表のかたちで詳細な比較が行われているが、黒斑の有無を分類基準とした上で両者の共存時期を認めたことが特徴である。

[田中1982] でも、黒斑の有無によって I・II類に大別することに変わりはない。 II類は、法量や調整技法の違いからさらに a ~ c に細分できるという。先の猪熊案との対応関係を示せば、B I 類 (猪熊) と II a 類 (田中)、B II a 類と II b 類、B II b 類と II c 類がほぼ同じものをさすようである。ただし、猪熊のいう B II c 類は報告されていない。田中はこの分類案と川西氏による編年 [川西1977] との関係についても述べ、II a・II b 類がⅣ期 (川西編年) に、II c 類が Ⅴ期に相当するとした。また、II c 類には T K 23 ~ T K 47

型式の須恵器が伴うことを明らかにした。

[積山1989]では、おもに小型の円筒埴輪を中心に編年作業が行われた。とくに問題となったことは、外面の調整がタテハケメのみからなる小型品が、川西編年の▼期に限らず有黒斑の段階から無黒斑の段階までを通して存在することである。この点に注目して外面タテハケメを特徴とする埴輪を検討した結果、長原85・45・57・27号墳出土例の順序で変遷したという。

こうした古墳群の時期区分・埴輪編年から、およそ次のようなことが明らかになったと考えられる。埴輪の編年作業を行う上で黒斑の果たす役割、つまり焼成方法の違いが重要な指標になっていること。有黒斑の埴輪の分類に比べ、無黒斑の埴輪の細分が進んでいること。須恵器との共伴関係がおよそ固まったこと。小型品では、2次調整のヨコハケメが省略されるばあいが、川西編年でいうV期以外にもみられることなどである。古墳群の時期区分も無黒斑埴輪や須恵器の登場以後は2ないし3期に細分されているが、それ以前については一括されている。これは資料数の偏りにもよるが、やはり埴輪しかよりどころのない部分とそれ以外の検証する手だて(このばあいは須恵器)をもつ時期との違いを反映しているようである。

ところで、有黒斑の埴輪として一括されがちなものの中にも相違点が存在することは見すごせない。さきに積山が指摘し、今回その詳細を報告する85号墳(一ケ塚古墳)出土埴輪や塚ノ本古墳の周辺でみつかっている埴輪棺に用いられた埴輪などが該当する。その詳細はここではおくとして、以下では有黒斑で連続するヨコハケメをもつ既調査の出土品を紹介し参考としたい。

3. 連続するヨコハケメをもつ埴輪

a) 長原40号墳出土資料(図178・179)

ここに示した資料は、1975年平野区長吉長原東1丁目で行った調査で出土したものである。調査の詳しい内容は別の機会に譲るとして、埴輪の紹介に進みたい。

1・2は直接の接点がないが、胎土・色調・調整方法などからおそらく同一個体と考えられる。2は下から数えて二段目(以下、段数の数え方は同じ)に、ほぼタガ間を埋め尽くすようにヨコハケメが施されている。ハケメどうしの切合いがみられるが、長いものは全周の約1/3の長さで連続する。ヨコハケメの下には先行するタテハケメが観察できる。三段目の相対する位置に、円形のスカシがあけられている。1の外面の調整はタテハケメ

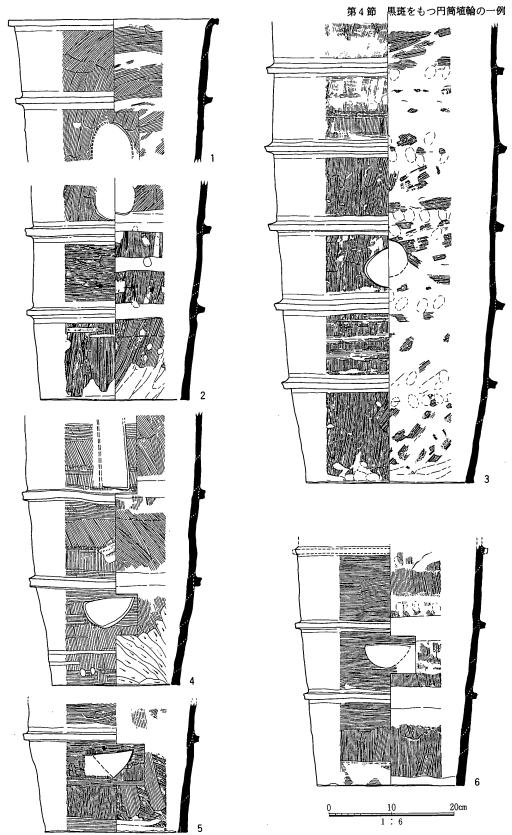
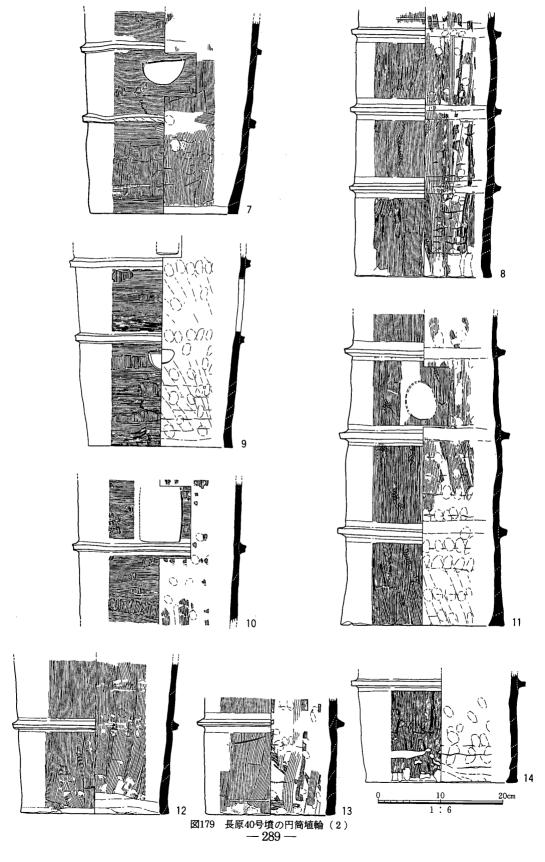


図178 長原40号墳の円筒埴輪(1) --- 288 ---

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討



で、口縁端部は水平方向にのびる。両者のタガは突出度が強く、しかも上縁でやや張出す。 4は下から三段分の破片で、段数や口縁部の形状は不明である。各段にはタテハケメのの ちョコハケメが施されている。二段目のヨコハケメのあるものは、少なくとも全周の 1/3以上がひと続きに引かれている。スカシは一段目と三段目にそれぞれ半円形、縦長 長方形を呈するものが穿たれている。タガの幅は1・2に比べて広く、上縁の突出も少な い。一段目の内面にヘラケズリの痕がみられるが、本個体のみの特徴である。

6 は全周の約1/2が残る。ヨコハケメの切合いが1、2 個所でみられるが、二段目の上半のヨコハケメは破片の中で切合いがなく連続する。連続する距離は全周の約1/3 強、20数cmにも達する。スカシは二段目に半円形を呈するものが1 個所で確認できる。タガは断面が台形を呈し、やや幅が広い。

7は3段分の破片である。各段にはヨコハケメが施されているが、部分的に先行するタテハケメが観察できる。一段目のヨコハケメは、破片が全周の約1/2であるのに対し、切合い関係は1個所しか認められない。二段目の下半では切合い関係が観察できるが、上半ではスカシによって器壁の一部が切取られているものの、ハケメどうしの切合いはない。ハケメ原体の幅は5cm以上の広いものである。スカシは二段目に半円形のものが1個所で確認できる。タガの断面は台形を呈し、突出度は弱い。

9は三段目のごくわずかまでが残っている。一・二段目ともにタテハケメののちに長く連続するヨコハケメを施している。一段目ではハケメの切合いが全周するうちに2個所で認められる。二段目では、相対する位置にある縦長長方形のスカシによって器壁が切取られているが、それら以外の部分でのハケメの切合い関係は認められずに連続する。一段目の相対する位置にも半円形を呈するスカシが2個穿たれている。タガは幅が狭く、上・下縁がやや突出する形状を呈する。

10は上・下ともに欠損しているため、何段目に当たる破片か確定できない。外面にはヨコハケメが施され、器壁のくぼんだ部分には先行するタテハケメが観察できる。ヨコハケメは長く連続し、顕著な切合い関係はみられない。スカシはやや縦長の長方形である。タガの断面は台形を呈し、突出度はさほど強くない。

3 は他に比べて段数も多く、直径も大きい。残存する部分は6段で、三段目の相対する 位置に円形のスカシが穿たれている。外面は一部、ヨコハケメが観察できるが、他の多く の部分ではタテハケメやその上に施されたナデが認められる。タガは他に比べてやや突出 度が強く、上縁が張出す部分がある。 以上がヨコハケメを施した例である。これらとともにタテハケメのみで構成される一群 がある。

8 は直径20㎝強をはかるやや細身の埴輪である。外面調整はタガの張付けに先行するタテハケメのみである。残存する部分ではスカシはみあたらない。器壁は1㎝強とやや厚手である。

11も先の例と同様にやや細身であるが、器壁は厚い。三段目の相対する位置に円形のスカシが穿たれている。外面の調整は8と同じで、タガの貼付けに先行するタテハケメが全面に残っている。底面が平坦で、そこにハケメでみられるような木目が観察できる。

12は二段分の破片で、全周の約半分が残っている。外面の一部に器壁の残りのやや悪い個所があるが、ほぼ全面に1次調整のタテハケメが施されている。タガの幅はやや狭く、突出度もさほど強くない。器壁は1 cm以上と厚手に属する。残存部分ではスカシは認められない。

以上が長原40号墳出土埴輪のうちのおもなものである。各個体の説明をする中では記述しなかったが、すべての個体について黒斑が認められる。これらは先にも記したように大きく二つのグループに分けることができる。その一つは1・2・4~7・9・10までの各個体で、比較的長い距離にわたって連続するヨコハケメがみられることが特徴である。段数は完形品がないため確定できないが、1・2を参考にすれば、おそらく4段であったと推定できる。器壁は1㎝以下のものが多く、端正な作りであるといえる。スカシの形状は半円形・円形・縦長長方形などからなり、穿孔位置も一~三段目にわたる。タガの形は同一個体でも部分によって異なるが、幅が狭く突出度の強いものと、幅がやや広く突出度の相対的に弱いものの二者がある。全体の形状の特徴として、直径が下ほど小さく上にいくにしたがって大きくなり、上方にやや開く形態をとる。もう一つのグループには、8・11~13の各個体が該当する。外面の調整はタガの貼付けに先行するタテハケメのみである。完形品がないため段数は確定できないが、4段以上である。先のグループに比べ直径がやや小さく、器壁は厚い。また、円筒部分の直径が一段目から四段目までほぼ同じか、上がやや小さいことも特徴である。

b) 関連の資料

ここに示したような特徴をもつ埴輪の類例を調べておこう。

まず、今回の報告の中にある、長原85号墳(一ケ塚古墳)の資料が該当する。詳細は本文中に記載された(図75~78)とおりで、いくつかの個体に長く連続するヨコハケメが観

察できる。口縁部の形態も、40号墳のものと似た端部が水平方向にのびる例が認められる。また、スカシの形態やタガの断面の形状などにも共通点が多くみられる。ほかに長原遺跡出土の埴輪の中に類例を求めると、塚ノ本古墳の周辺から出土した朝顔形埴輪が挙げられる。4号埴輪棺[大阪市文化財協会1982、図版141]は、円筒埴輪2個体と朝顔形埴輪1個体を用いたものであるが、そのうちの朝顔形埴輪に連続するヨコハケメが施されている。円筒埴輪2個体はともに1次調整のタテハケメののちに、それをヨコナデを用いて消している。

長原遺跡以外でもいくつかの古墳で、こうした比較的長く連続するヨコハケメがみつかっている。古市古墳群の中では、岡古墳の朝顔形埴輪 [天野1989] にみられるという。奈良県瓦塚1号墳出土の円筒埴輪 [関川1976] にも、こうしたヨコハケメが施されているようである。京都府カラネガ岳2号墳 [岡内・和田・宇野1981] では、川西氏のいう「A種ヨコハケ」や「B種ヨコハケ」とともに、「C種ヨコハケ」にあたる、工具が器壁上で静止せずに一周するヨコハケメが報告されている。

4. まとめ

長原85号墳出土の埴輪との関連で40号墳の円筒埴輪について、その概要と若干の類例について述べてきた。その結果、比較的長い距離にわたり連続し、その間に工具の静止した 痕跡がみられないヨコハケメをもつ埴輪が、長原古墳群の内・外を問わず存在することが 明らかとなった。こうした特徴をもつ埴輪の位置づけについて考えてみたい。

まず、報告・紹介した例はすべて有黒斑の埴輪であることから、これを川西氏による時期区分 [川西1977・1988] のIV期以降には位置づけがたい。また、外面の2次調整にヨコハケメが施されていることから、I 期にも該当しない。ヨコハケメを施すことはII・III期の特徴であるが、III期を代表するヨコハケメは「B種ヨコハケ」である。また、「A種ヨコハケ」に関する氏の記述 [川西1977・1988] の中に「器壁から2回以上離れる」、「もし細分するなら、施し方が断続的なほど古く、連続的なほど新しい傾向といえる。」との説明があることから、II期に当てはまると考えられる。そうしたばあい、長原遺跡出土のII期の埴輪には塚ノ本古墳出土品があり、それとの関係が問題となる。塚ノ本古墳に伴うと考えられるものは、外面に1次調整のタテハケメを施したのちそれをナデによって消すことが特徴である。また、両者は大きさの上でも異なり、直径・器高ともに塚ノ本古墳出土品が40号墳出土品を上回る。両者はやはり別型式と考えたほうがよさそうである。

別型式とすれば、それが時間的先後関係を示すものか、それとも同時期の集団差を表現するものかが次の検討事項となる。福永氏による乙訓地方の円筒埴輪の研究成果[福永1990]を援用すれば、塚ノ本古墳から出土した円筒埴輪の口縁部により古い要素が認められることになる。また、連続するヨコハケメを施した埴輪棺が存在することは、それが塚ノ本古墳の造営に先行するとは考えにくいことから、後出的要素とも考えられる。しかし、こうした根拠はなお40号墳出土の円筒埴輪を塚ノ本古墳出土品に比べ新しいといいきるには不十分であろう。冒頭にも記したとおり、副葬品、あるいは他の遺物による検証が必要と考える。

長原古墳群の時期区分の基となった円筒埴輪のうち、有黒斑の新たな一群の存在を指摘してきた。それらはことによると、長原遺跡で従来から知られてきた有黒斑の埴輪の中ではより新しいものかもしれない。しかし、古墳群における新たな一時期を設けてその指標とするには、いま少し検討が必要と考える。

なお、40号墳出土埴輪の報告にあたり、菅栄太郎氏の協力を得た。文末ながら感謝の意 を表したい。 (高井健司)

第5節 水田遺構と古代の長原

1. これまでの研究

長原遺跡の飛鳥時代から奈良時代の遺構としてまずあげなければならないのが水田遺構である。調査があまり進んでいない遺跡の東部や北部、耕作土が削平されていると思われる西部の台地上や東南部の一部を除けば、遺跡の大部分で検出される遺構である。だが、トレンチ調査や小規模の発掘が多いため、広い範囲にわたって検出されることが少なく、そのために、水田が広大に展開する具体的な景観をイメージすることは難しい。

長原遺跡の古代水田遺構を検討するばあい、この地域が瓜破台地東斜面上に位置することから、水田化を可能にするための灌漑用水路がどのように設置されていたかという問題はさけてとおれない点である。これに関して、『長原遺跡発掘調査報告』II [大阪市文化財協会1982] では古島敏雄氏や丸山竜平氏が東除川流路にかかわる人工的な開削個所が存在するとした推定[古島敏雄1967] [丸山竜平1975] を踏まえ、長原遺跡に流れていた東除川が台地高所に位置し、これにかかわる水成層の堆積が6世紀後半以後に顕著であることから、近世東除川の前身流路は6世紀後半に台地上移設された人工的な灌漑用主水路であるとして発展させた。また、広瀬和雄氏は古代の開発を論じる中で、長原遺跡に触れ、この地域における大規模な人工水路の台地上への付替え事業は、最近の水田址の調査所見にもとずけば7世紀初頭の所産であるとしたうえで、古市大溝の開削とともに「国家的開発」の第一歩として評価した [広瀬和雄1983]。こうした東除川に対する評価はそのまま長原遺跡の古代水田遺構の歴史的評価の一つとして今日まで継承されてきている。

一方、水田遺構そのものの検討は [長原遺跡調査会1978] [大阪市文化財協会1982・1983 I] で細部の報告や検討が重ねられ、また、層位的な検討も進んだ。古代「畦畔状遺構」は [長原遺跡調査会1978] ではじめて報告され、 [大阪市文化財協会1982] では、上層の新水田址と下層の古水田址に分類された。その後、 [大阪市文化財協会1983 I] では長原第6 A層・第6 B層・第7 A層の各上面で検出される3時期の水田が認識され、現在に至っている。これらは耕作土および水田を覆う堆積層や耕作土下の遺構からの出土遺物によって7世紀前半から8世紀末までの時期のものと考えられる。一方、1983年に大阪市が長原遺跡として含めている城山遺跡の調査が大阪文化財センターによって実施され、広範囲にわたって古代・中世の水田遺構が検出された [大阪文化財センター1986 III]。そこ

番号	遺構名	次数	分類	検出長	幅	深さ	方向	出土遺物	特記事項
001	SD50	NG01	Α	24	10	2	南北~東西	飛鳥 I ~ IISD51のものか	SD51を切る
002	SD51	NG01	В	16		2.5	東西	飛鳥I~II	木枕20本
003	SD302	NG01	Α	170	4.5	0.9	南北	8~9世紀土師,須恵	東岸に護岸施設
004	SD105	センターNG	A				南北	1	
005	SD120	センターNG	A						
006	SD010	センターNG	A						
007	SD011	センターNG	A						
008	SD112 SD319	センターNG	A				WHATE A SERVE		両側に堤
009		NG08	A		7	0.5	南北~北東	本 自	東京 州
010	流路01B	NG08 NG08	A	4		0.5 2.7	·	奈良	東層に堤
011 012	流路02B 流路02C	NG08	A B	14 14	12	2.1			02Bの下
012	流路02C	NG08	A	12	8.5	1.6		奈良~平安土師器	0250)
014	流路03B	NG08	Ä	13	2	0.5		奈良~平安土師器	
015	流路	NG12	В	10	"	0.0		飛鳥I	枕群あり
016	SD01	NG18	B	52	0.6	0.7	南北(北でやや	77.7.	
0.0	5201		~				西)		
017	SD02	NG18	В	57	1	0.8	南北(北でやや		
1							西)		
018	SD03	NG18	В	28	3	1.1	南北		
019	SD04	NG18	В	24	0.7	1	南東~北西	1	SD03と合流
020	SD05	NG18	В	27	0.65	0.7	南東~北		SD06と合流か?
021	SD06	NG18	A	3			南北		西肩のみ検出
022	SD481	NG19	В	12	0.8	0.8	南北	7世紀初頭	
023	SD601	NG80 - 003	A	11.5	3.5		南西~北東	I	
024	SD06	NG81 - 002	В	1	0.7	0.35	南北		
025	SD07	NG81 - 002	В	1.5	0.5	0.5	南北	I	18次SD03と同じか
026	海	NG83 - 025	B	16	ا	1 2	南北	8~10世紀	10K2D03CMCW
027	東除河道	NG83 - 038	A · B	16	8	0.3	南北 南北	O STORE NO.	上に6層の畦畔
028	SD601 SD601	NG83-041 NG83-046	B B	11	0.6	0.35	南北	I	T
030	SD01	NG83 - 052	В	11	3	0.00	東西	ŀ	1
031	SD03	NG83 - 052	В		2		南東〜北西	1	
032	SD02	NG83 - 052	Ā		2.5		南東~北西		
033	SD04	NG83-052	A		2.5		南東~北西		
034	SD592	NG83-059	В	5	0.5	0.3	西~北東		82-19
035	SD594	NG83-059	В	5.2		0.8	東西		
036	SD01	NG84-048	В	2	0.6	0.25	南北	飛鳥I	
037	SD02	NG84 - 048	В		1.1	0.35	南北		1
038	SD03	NG84 - 048	В		0.7	0.25	南北		
039	SD04	NG84 - 048	В				南北		
040	SD701	NG84 - 073	В		0.8	0.2	南北(北で西)		
041	SD702	NG84 - 073	В		1	0.4	南北(北で西)		532 AM MT
042	SD703 SD704	NG84 - 073	В		0.8	0.35	南北(北で西)		両側で堤
043	SD704 SD502	NG84-073 センターJY-2	B AorB	18	2.5 11	0.7	南北(北で西) 東西	平城 IV ~ V	馬骨出土
044	SD701	NG85-018	B	10	*	0.7	* E	T-700 14 - 4	W H LL
046	SD702	NG85-018	В		ŀ				32⊥⊠SD313, CNGSD023
047	55.02	NG85 - 023	B	10	1.2		南東~北西	1	322200010, 011000000
048	1	NG85-023	Ā	10	1.2		南東~北西	1	両側に畦
049	海	NG85-035	В			0.6	南北		85-18次SD701と同じ
. 050	SD701	NG85 046	В	8	0.8	0.15	南北(北で東)		83-41次SD601と同じ
051	SD702	NG85-046	В	9	0.6	0.3	南北		1
052	SD701	NG85-070	A	5.5	1.3	0.8	南西~北東		西肩に堤
053	SD702	NG85 070	Α	5.5		l	南西~北東		
054	SD601	NG86 - 023	A		4	1			流路03A, 流路C
055	水路	NG86 - 028	A	19	2.5	0.7	南北		東肩に提
056	SD705	NG86-054-1	В	l	1	1	1	CA BROKEN	
057	SD601	NG86-054-2	-		1			6A層畦畔直下	
058	SD602	NG86-054-2	B	2	11		南西~北東		流路01A・B, 南に大畦
059 060	流路 流路	NG86-058-1 NG86-058-2	A	3	8.5		南西~北東		両側に大畦
060	SD601	NG86-090	Â	"	0.6	0.35	南東~北西		SD701の上に掘り直す。両
1 001	55.001		, ^	1	"."	1		1	伽に堤
062	SD701	NG86-090	В	!	1.3	0.6			両側に提
063	SD702	NG86-090	В	ŀ	0.8	0.45	南東~北西	8世紀前半の須恵器	
064	SD701	NG86-105	В	1	0.7	0.4	南東~北西		両側に提
065	SD702	NG86 - 105	В	ł	0.7	0.35	南北		1
066	SD601	NG87-016	A	2	6.3				南に堤、流路02A・B
067	SD701	NG87 - 027	В	l	0.8				1
068	SD702	NG87 027	В	l	1.5				1
069	SD703	NG87 - 027	B	1 _	0.4	١,,			1
070	SD01	NG87-028-1	AorB	2	8.5	1.2	南西~北東	「上絵」墨書土器	遊覧01A・B 南に十叶
071	自然流路	NG87 - 039 NG87 - 040	A A	2	10	1	南西〜北東 南西〜北東	1	流路01A・B, 南に大畦 南に場 流路02A・B
072 073	流路 SD701	NG87 - 040 NG87 - 050	A B	2	16 3	0.75	南四〜北東 南北	奈良?	南に堤、流路02A・B
073	SD701	NG87-050 NG87-051	B	1	1.2	0.75	m-16	*** ·	中央に畦状高まり
074	SD04	NG87 - 060	В	1	2	0.5	南北	奈良~平安の土師器皿、坪	
1 ""	1 5551			1	-			境?	
076	SD02	NG87-060	В	1	0.9	0.3	南北	奈良~平安の土師器皿, 坪	
1			_				1	境?	1
077	SD601	NG87-076	В	1	6.5	0.5	南東~北西	奈良の甕	
078	SD02	NG87-081	В	1	1	0.5			
079	SD09	NG87-081	В	1	1	0.55	l	7世紀土師器	
080	SD01	NG87 - 090	В	8	2	0.9	南北		NOOR COCDOS ! TO !!
081	SD01	NG88-001	B	8	3	0.6	南北	飛鳥I~II	NG87-60SD01と同じ NG85-001と同じ
082	SD03	NG88-016	B	20	0.6	1.8	東西南北		NG85-001と同じ 両側に堤
083 084	水路 SD01	NG88-020 NG88-036	B B	20	0.6	0.15	南北	1	I M I C AR
064	IOUI	11000 000	ط ا		0.00	1 0.10	1 1946	1	1

表16 古代の溝・流路一覧

では第 $1\sim7$ 水田が確認され、古代に属する第2水田において、東西方向の大畦畔が南北 110mの間隔で設定されていることが注目された。また、その大畦畔の中からは「富官家」の墨書がある7世紀後半に属する土師器杯が出土し、このことからミヤケがこの付近にあり、南北約1町に相当する大区画が設定された水田がそこで管理されていたとの理解を示したのである。

2. 灌漑施設の実態

さて、こうした水田開発の計画性を論じるばあい、城山遺跡の調査例のように古代から中世にいたる7面もの水田が層位的に確認されていることから、対象とする水田が同一の層準であるか否か(同時期のものか)の検討は避けて通れない作業である。第II章第1節図11で示したように、城山遺跡の第2水田は長原第6B層に相当するもので、報告書でも同様に考えられている。したがってこれらの大畦畔設置における計画的地割の存在を大阪市の調査資料によって検証するためには、まず長原第6B層に限定して分析する必要があろう。

[大阪文化財センター1986Ⅲ]では、これまで検出された灌漑水路や流路について検討され、次のような見解が示されている。

- 1:幹線的な水源としての流路は近世東除川の位置にある流路と東部の谷地形を流れる流 路群であり、いずれも水源を共有する「東除川系」で古代における規模は同じ程度で ある。
- 2: 流路はたびたび掘り直されているが、大規模な堤防など護岸施設がないことから、引水のための土木技術と労働力を編成する組織力においては目をみはるものがあるが、 治水技術においては未熟であった。
- 3:遺跡北部の流路には水源を大乗川にもとめうるものがあり、長原遺跡の古代水田の灌 漑が「東除川系」のみでなされていたのではない。

以上のような見解は水田開発の実態を既存の資料に基づき具体的に提示しようとしたもので、今後の研究の方向性を示唆するものといえよう。そこでこうした視点に留意しつつ、遺跡内で検出されている用水路と思われる流路・溝などを整理し、古代水田における灌漑網の変遷を明らかにしておきたい。

この地区で検出される流路・溝のうち層位的に第6A層上面で検出され、第5層で埋没するもの(A類)、第6B層上・下面ないし第6A層下面で検出され第6層(水成層)で

埋没しているもの(B類)をとりあげ、検討していきたい(註1)。

・第 6 層で埋没する水路 (図 180)

B類に属する溝の水源はSD12・23・70などの東南地区に位置する西南から北東に流れる流路(I群)、南地区西部に位置する近世東除川付近の南から北方向に流れるSD21・27の流路(II群)、遺跡北部で検出された東南から北西方向に流れるSD02の流路(III群)がそれと考えられる。

流路 I では第7A層ないし第

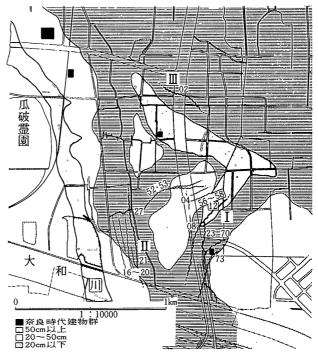


図180 第6層の分布と流路 I・II・III

6 B層上面の水田経営時に存在したのは S D12・23・70で、幅10m前後のものである。 S D12と70とに挟まれた範囲には古墳時代以前の開析谷が南西から北東方向に存在し、古代においてもやや低い地形をなしている。 S D70の東方にも第6層相当層が薄く遺存しており、水田が営まれていた可能性があるが、現在のところ確認されていない。また、 S D12の西側は段状に高くなっているため、流路 I で灌漑できるのは S D12と70に挟まれた範囲を中心とする地区であったと思われる(A 地区)。

A地区の東南の地区は第8層から第11層の堆積が厚い。弥生時代以前の流路が主にこの地区以東にあって、これらの土砂を供給したためである。弥生時代以前の堆積によってこの地区の微地形は平坦にかつ高く変化し、西方の台地上との比高差が小さくなり、南西から北東へ緩やかに傾斜するなだらかな地形を生み出した。このような地形の変化は古代において流路Iの位置を決定せしめた一因と考えることができよう。

流路IIについては、近世東除川の前身ともいうべき奈良時代と推定される流路が2個所で検出されているのみだが、複数の流路からなる可能性もある。西肩部の一部が検出されたSD21は北部のSD27の真南に位置し、近世東除川の推定位置から50m西にずれている。

したがって、SD21は近世東除川の前身流路群を構成するもう一つの流路とみることも可能である。この流路の西にはSD16~20がありいずれも南から北にやや西に振った方向に流れている。いずれも第6AII層で埋没したと思われ、第6A層水田経営時には存在していない。これらの溝の西側にある一ケ塚古墳のさらに西側には南東から北西にのびる開析谷が存在し、古代においてもなお谷状を呈していた。この谷の中は谷底部においては手がかりがないが、傾斜面では一部、第6Aあるいは6B層相当の水田が検出されており、台地上と同様に水田化されていた可能性がある。この谷と流路IIとに挟まれた地区を流路IIによる灌漑地区とみることは可能であろう(C地区)。

流路 II の東側は南西から北東にゆるやかに高度を下げる地形をなし、小古墳が群集する地区である。ここでは幹線的な水路となる溝状遺構は認められず、小規模な溝が多数認められる。これらは粘土層で埋没するものが多く、水田との関係において給排水路として認定することの判断をくだしにくいが、流路 II と流路 I とに挟まれた地区は流路 II を水源として灌漑されていたと推定できる(B地区)。B地区の北にはS D52・53(本書第III 章第3節のS D02・03・14)が東西方向にあり、この溝がB地区の北を画していると考えられる。この溝はB地区の排水路であるとともにA・B地区以北の地区への用水供給源であったろう。

B地区北側の地区はこの段階の明瞭な水路を確認できていない。SD52・53がその一つとして候補に上げられるが、のちにこの地区北半部の第6B層水田が厚い第6AII層で埋没していることを考えると、流路IIを水源とする他の水路が存在していた可能性が強い(D地区)。D地区の北部には流路IIIをなすSD02があり、この地区の北を画していたと思われる。SD02はD地区東からこの地区の北を画するように西に屈曲して北西流する溝で、やや方向を違えて流れるA類のSD01に切られている。

・第5層で埋没する水路(図181)

第5層によって埋没した構A類をみると、流路 I ではそれまでの構が改修されそのまま利用されていると思われるが、それを示す痕跡は不明確なばあいが多い。この段階で新設された S D10はこれまでの流路とは異なり、旧流路の谷状の窪みを利用せず、地形に即した任意の位置に設けられている。 A 地区では第6層の堆積によって微地形の変化があったと思われ、 S D10はこうした微地形の変化に対応して、設置されたものと考えられる。 A 地区北部の小水路の多くはすでに埋没しているが、 S D11から北にのびる S D08はこの段階でも機能し、水田への水の取入口も確認されている。

B地区ではSD21・27の東側にこれらと平行して存在するSD55が、北で東にゆるやかに屈曲し、SD52・53付近の水路(本書82-19次I区)に連続していたと思われる。この水路は掘削深度が小さく、両肩部に堤状の盛土をして構築されたもので、後世の削平を被って痕跡を残さない部分も多いと予想される。

D地区の東には水源の明らかでないSD03があり、一部に杭による護岸施設が認められる。南で西に屈曲すると想定されているが「大阪文化財センター

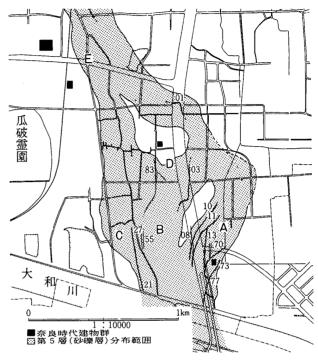


図181 第5層の分布と流路

(A~Eは本文中の地区)

1986III]、その西への延長部分は未検出であり断定できない。これはD地区東部およびその東側の地区の灌漑に関与したものと考えられる。D地区は中央部に第6層の厚い堆積があり高まりとなっている。第6B層の水田は50㎝以上の厚さの砂層で埋没し、その高まりの上には平城宮 I ~IVに属する井戸や掘立柱建物が検出されている(図182)。この地区の北を画するSD02を切るSD01は02の埋没後に人為的に掘削された可能性がある。SD01からは飛鳥IIに属する遺物が出土しているが、それらはSD02と切合う部分に集中していたり、埋土最下層のSD02の埋土近くで出土していることから、本来SD02の埋土中の遺物と思われる。また、SD01の文化財センター調査部分ではこの北肩部に堤状の盛土が築かれ、そこから畦畔がのびている[大阪文化財センター1986 II]。この水田はその南側の調査地との層位関係によれば、第6A層上面水田に対比され、これを覆う砂層は第5層に相当すると考えられる。したがって、SD01は第5層で埋まるA類の流路であるといえる。また、SD01は東で南に屈曲しており、D地区東を北流するSD03の北延長部分にあたる可能性がある。

C地区ではかつて存在した水路がすべて埋没し、第6A層の水田が形成されている。そ

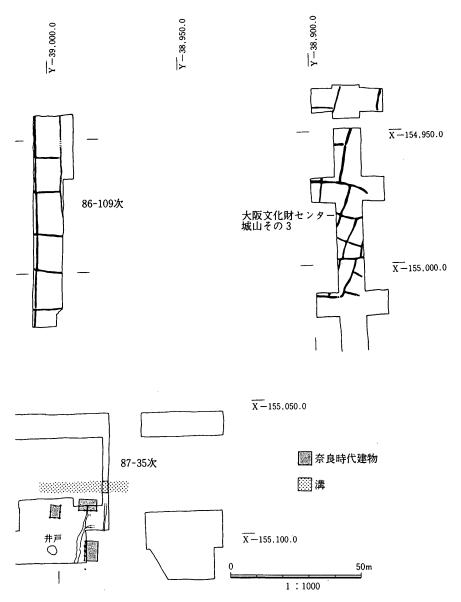


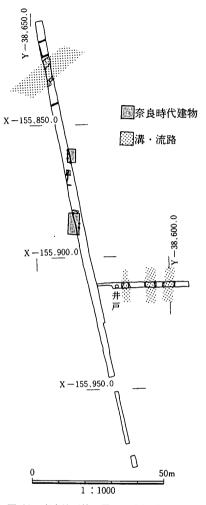
図182 中央地区第6AII層上の建物群と水田

れらにかわる水路は検出されておらず、SD21から直接引水したと思われる。このほかE地点でも第6A層水田が検出されているが、この付近での調査例が少なく現状では灌漑水路の存否は明かでない。しかし、南・西側には流路や溝は認められず、東側にそれを想定できるため、E地点に土砂を堆積させたのは流路IIであろう。

3. 灌漑水路の特徴

以上の作業で明らかになったように、この地域の灌 漑においてその水源としてあげられるのは、古代を通 じて流路 I・II・IIIに限定できる。これらの流路が人 工的な土木工事によって切り開かれたものであるか、 沖積層下部層および上部層が形成する微地形に沿って 発生した自然流路かの判断は難しい。流路Ⅰは縄文時 代には存在していた古い谷地形にそって流れている。 また、台地の高所を流れる流路IIは、城山遺跡その3 調査区「大阪文化財センター1986Ⅲ] や87-35次調査 地で南西から北東にのびる弥生時代以前の流路が確認 されており、当該期にこれらの小流路を派生しうる流 路が流路 II の付近に、一時的であったにせよ存在して いたことが推測される。流路IIIでもその北部において 同方向に流れていた古墳時代流路が検出されている。 このように、冒頭でふれた長原遺跡における古代の水 田開発に対する評価は、大土木工事によって台地上に 移設されたと推定されている東除川(流路II)のみを 重視したものといえ、前述の作業でえられた灌漑シス テムの状況に即していない。また、流路IIが人工水路 としての確証がえられていない現状では、微地形の変 化に対応した自然流路の変遷過程において理解しうる 図183 東南地区第6層上の建物群と水田

ことを指摘しておきたい(註2)。



これら古代の流路は第7A層から第6A層上面の水田まで改修されつつ存続し、第5層 によって最終的に埋没したようだ。流路 I においては第6層の堆積によって変化した微地 形に応じた新規の水路が追加され、そこから取水する水路も廃絶・改修が認められるもの の、流路 I · II · III からの給排水という基本的な灌漑システムは変わっていない。しかし、 流路から派生する幹線水路においては、当初、必要に応じて無秩序に開削されていた水路 が比較的計画性をもった配置に変化していることがうかがわれる。たとえば、B地区から D地区にかけてその西と東を流れる溝はほぼ南北方向を示し、計画的な地割に基づく配置 とみることも可能である。また、第6B層の水田が完全に埋没したC・D地区では、新たに南北方向を基調とした畦畔設定がなされている。さらに、D地区の第6AII層上面で検出された建物群の北を画すると思われる溝が第6B層上面水田の大畦畔と同じ位置にあり、屋敷地の設定が既存の水田地割に規制されている事例もある。こうしたことからD地区に限っていえば、第6B層上面水田の段階には流路や微地形に規制されながらも東西南北を基本とする地割の設定が試みられ、第6A層上面水田の段階には1町を基調とした地割がより徹底された可能性を指摘しうる。

4. 古代水田の時期

長原遺跡の古代水田の時期はかつて「古水田」の耕土中から出土する土器がTK209型式であることから6世紀後半であり、この地域における水田開発の開始もこの時期と考えられていた。「古水田」は、現在の知見に基づけば第7A層を耕起して形成された第6B層水田に相当するものが多く、第7A・B層中の遺物も混在していると予想される。城山遺跡の調査では大阪市の調査(82-4次)で第6B層下面で検出された井戸状遺構から飛鳥Iの土器が出土していることから、「古水田」の時期はこれより新しいとした[大阪文化財センター1986Ⅲ]。この点に関しては、現状においてもとくに否定すべき資料はえられていない。

第6 B層水田の時期を知る手がかりとして以下の資料をあげておきたい。

- 1:遺跡中央部 (D地区) の85-23次調査で、第6A層下面で検出された土壙状遺構から 飛鳥Ⅳの土師器杯Cが出土している。
- 2:遺跡南部 (B地区) の84-48次調査の第6B層上面で飛鳥IIの土師器杯Cが出土している。
- 4:同調査区で第6B層水田を覆う水成層第6AII層に相当すると思われる微砂ないしシルト層から飛鳥Ⅳから平城宮Iの土器が出土している。
- 5:「城山」その3地区の西側(D地区)で実施された87-35次調査では第6 A II層をベースにして平城宮 I からⅣにかけての掘立柱建物や溝・井戸が検出され、第6 A II層の下限を示している。

以上の資料から、第6B層水田は飛鳥Ⅱから飛鳥Ⅳごろまで営まれ、飛鳥Ⅳから平城宮

Iの間に洪水に見舞われたと考えられる。

一方、第6A層水田は第5層で埋没する水田であるが、第5層からは多くの調査地点で 平城宮 V・VI以前の土器を出土している。このことから平城宮 I から V の間営まれたと考 えられ、平城宮 V ~ VIの間に洪水にあったと思われる。

この地域の洪水による被災状況は、第6B層および第6A層水田において顕著である。とくに後者の被害は大きく、遺跡の大部分に第5層の砂礫の堆積が認められる。こうした状況は河内平野の他遺跡でもみられる。例えば、長原遺跡北部の平野川付近における亀井遺跡の調査では、奈良時代における平野川の河道NR6001が検出され、これを埋積する第V層から平城宮III~IVの土器が、第V層を掘り込むSE7001から平城宮V・VIの土器を出土している[大阪文化財センター1983]。また、これと同じ河道NR6201からも平城宮IIIを中心とする土器が出土している[大阪文化財センター1986V]。さらにこの河道の南側では水田を覆う砂礫層から8世紀代の土器が出土している[大阪文化財センター1986V]。亀井遺跡北方の久宝寺遺跡でも平野川の枝流と思われる河川Iが検出されており、上下2層に分離できる堆積土のうち砂層を主体とする第11-b層から8世紀を中心とする時期の土器が出土している[大阪文化財センター1986VI・1987]。長瀬川の流路付近にあたる佐堂遺跡においても、飛鳥時代から奈良時代初頭の河道の埋没後、その南側に位置をかえて平安時代の川に切られる河道があり、奈良時代において埋没したと考えられている[大阪文化財センター1984I](註3)。

このように平野川および長瀬川流域でも、長原第6A層上面の水田が営まれていた時期の河川およびその周辺部において、平城宮 IV~VIのころに生起した洪水に起因する厚い砂礫の堆積が確認できる。このことはこの時期の洪水が河内平野全域において痕跡を認識しうる大規模な災害であったことを物語っているといえよう。河内平野を襲った洪水は『日本書紀』『続日本紀』などの正史に記録されており、とくに8・9世紀代の記事が多い。この中で、785(延暦4)年9月の洪水記事は他の記事が堤の決壊を伝えるのみであるのに対して、被害の有様を具体的に記し、河内平野全域に多大な被害があったことを示している。さらに、同年の10月には河内国の堤防30個所が決壊する大洪水にみまわれ、その修復に延べ30万7千余人という膨大な労働力が投じられている。8世紀代の洪水記事のなかでは、この年の洪水が最大規模であったと考えられ、東除川流域における第5層や平野川・長瀬川流域で認められる奈良時代末期の洪水堆積層の多くは785(延暦4)年の洪水によるものである可能性が高い(註4)。しかし、こうした砂礫層の堆積年代を特定すること

691	持統5	6月	(4月より) 京師及び郡國四十に、雨水ふれり。 (日本書紀)
710	和銅3	5月20日	河内国など5ヶ国、雨が続き笛を損ずる。 (続日本紀)
750	天平勝宝2	5 月24日	京中驟雨ふって水寮汎濫す。また伎人・茨田等の堤、往々にし て決壊す。(続日本紀)
762	天平宝字	4 月 6 月21日	狭山池破堤。 河内国長瀬堤決壊し、延べ2万2千2百余人の労力で修築する。 (続日本紀)
772	宝亀3	8月1日	大風雨により茨田堤6ヶ所、大和川渋川堤11ヶ所、志紀郡5ヶ 所など決壊する。(続日本紀)
784	延暦 3	閏9月10日	河内国茨田堤15ヶ所決壊。6万4千人余に粮を給してこれを築かしむ。(続日本紀)
785	延暦 4	9月10日 10月27日	河内国言す。洪水汎濫し、百姓漂蕩す。或は船に乗り、或は堤上に寓す。粮食絶乏して、艱苦まことに深しと。是に於て、使を遺わして監巡せしめ、兼て賑給を加わう。(続日本紀)河内国の堤防30ヶ所で決壊。単功30万7千余人の労働力を投じて修築する。(続日本紀)
799	延暦18	4月9日	山城・河内・摂津などの国で洪水のため苗が腐損したので正税 があたえられる。 (続日本後紀)
806	大同1	8月	洪流汎濫し、天下諸国、多く其害を被る。 (日本後紀)
815	弘仁6	6月16日	河内国で水害おこる。困窮戸が賑救される。(日本後紀)
820	弘仁9	2月12日	河内国で水害おこる。困窮の戸が賑救うける。(日本紀略)
821	弘仁12	10月24日	河内国の天候不順で災害を受けた諸郡に3年間祖税が免除され る。(類聚国史)
832	天長9	8月20日	大雨、大風のため河内・摂津両国で洪水おこり堤防決壊する。 (日本紀略)
848	嘉祥 1	8月5日	3日以来の大雨のため洪水となり、河内の橋、人畜に被害でる。 (続日本後紀)
870	貞観12	5月26日	河内国、霖雨がつづく。飢饉のため同国の富豪の貯稲を借りて 百姓に班給する。(三代実録)

表17 8・9世紀の河内平野における洪水記事

は必ずしも容易なことではなく、堆積状況や出土遺物の精密な分析を将来に期待して、そ の可能性を指摘するにとどめたい。

5. 水田の経営主体

以上に述べた水田の経営主体はこの地域で発見されたいくつかの建物群であったろう。 瓜破遺跡東南部 [南秀雄1987] や長原遺跡西南部 [大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 1990] で飛鳥時代の建物群が検出されている。これらはC地区西にある谷を隔てた西側の 台地上に立地し、洪水の影響を被ることのない地区に形成されている。とくに瓜破遺跡の 建物群には廂をもつ建物が含まれ、倉庫建物も多い。さらに建物群は柵で囲まれ、その外 側には溝がめぐらされている。ここに住んだ集団は長原遺跡における水田開発と経営の中心となった集団であると考えられる。しかし、ここでの居住は7世紀後半までであり、長原遺跡の水田においては第6B層上面水田の時期までである。第6A層上面水田は8世紀初頭以後と考えられるが、この時期の建物群は長原遺跡のなかに2個所確認されている(図182・183)。それらは奈良時代後半まで存続していたと考えられているが、建物群の規模は小さく、水田に面した位置に形成されている。一方、瓜破遺跡の北に位置し、長原遺跡に東接する喜連東遺跡では7世紀末から8世紀後半にかけての19棟からなる建物群があり、その付近にこの時期の中心的建物群が存在していた可能性が高い[京嶋覚ほか1990]。瓜破台地上には8世紀の遺構・遺物が分布しており、寺院の建立(註5)を想定させる8世紀後半を中心とした軒瓦も出土していることから、8世紀代における集落は瓜破台地上を中心にこれまで以上の発展をとげたと思われる。

このように集落遺構の分布状況と変遷をたどれば、瓜破台地上では7世紀後半から末に居住地の移動という大きな変化を認めることができ、その後、寺院建立に至るほどの発展を想定することができよう。また、8世紀にはいると、水田地帯に面する位置に小規模な建物群が進出するという新しい集落景観が生まれている。長原遺跡周辺の8世紀前半から中葉に形成される集落には平野川北岸の亀井遺跡、平野川と長瀬川に挟まれた地域にある久宝寺遺跡にあり、いずれも9世紀初頭前後に一旦廃絶している[大阪文化財センター1986 V・1987 I・1987 II]。さらに、大和川の南側に目を転じてみると、松原市大堀遺跡では近世の東除川と瓜破遺跡・長原遺跡を分離している開析谷に挟まれた位置で奈良時代前半から平安時代初頭の掘立柱建物群が検出されている[大阪文化財センター1984 II]。ここは長原遺跡における流路 I と流路 II が分岐すると推測される地点にあたり、軒瓦などの出土から寺院の存在が予想されている。このような周辺遺跡における状況は長原・瓜破遺跡における前記の変化と一連の動きとみることができるだろう。

6. まとめ

以上のように第6B・6A層水田は、部分的とはいえ灌漑水路の計画的配置や水田畦畔の1町を単位とした地割が想定しえ、これを何らかの土地制度に準拠したものとして評価できるだろう。しかしながら、7・8世紀を通じて、初期の灌漑水系による制約を克服した抜本的な区画整理事業はなされておらず、むしろ洪水による微地形の変化に対応した改修に終始している感がある。したがって、水田の開発初期から第5層によって埋没するま

での期間の中に、水田遺構の分析を通じて画期的な変化を見いだすことは困難ではなかろうか。

一方、長原遺跡とその周辺の集落遺構を概観すると、7世紀末から8世紀初頭に一つの 画期を想定することができるようだ。この変化は長原遺跡においては第6B層水田が被っ た洪水と機を一にしたもので、水田および灌漑水路の改修事業にも関連する事柄であると 思われる。そこで、水田区画の変化とは別に8世紀初頭前後にみられた居住域の移動や小 建物群の水田に面する地区への進出などの経営主体における変化を、古代における水田経 営の後半期の開始とみて、より重視すべきであると思う。そして古代の水田を最終的に壊 減させた第5層は、この地域の水田開発を実現せしめた古代流路群の多くを埋めつくし、 古代末期あるいは中世初期における新しい灌漑水系の開発を促したのである。(京嶋覚)

註)

- (1) B類には第6BII層で埋まるものと第6AII層で埋まるものがあるが、第6B・7A層の遺存状況の悪いところが多く、両者の区分が困難なことが多い。ここでは、両者を含めてB類としたい。
- (2) 弥生時代の水成層である第8層の堆積以後、古墳時代を通じて同様な水成層が認められていない。したがって、既述のように、7世紀初頭ころに台地の高所に水田開発を目的とした人工的な水路を開削したために、第5・6層の洪水による堆積が生じたとすることもできよう。しかし、ここで述べたように水路が古い谷地形や流路痕跡に規制されていることから、たぶんに自然地形を利用したものであったのではなかろうか。
- (3) 文化財センターによる河内平野の調査データは膨大なもので、河川の変遷や平野の形成過程の研究はそれらのデータの整理と分析を通じて、将来多くの事実を明らかにできるものと期待したい。ここでは長原遺跡における第5層に相当する洪水堆積層がみられることを指摘しておきたい。
- (4) [大阪市1988] 第1章第4節において、服部昌之氏は「延暦4年9月と10月の河内国大水害における被災地区や堤防名が、これまでの事例と異なって具体的に示されていないのは、それが河内平野の低地全体にまたがっていたことを示唆する」と述べている。
- (5) 瓦が出土することから瓜破廃寺・成本廃寺と呼ばれる寺院が存在すると推定されている [大阪市1988、 第6章第6節]。

参考文献

- ・安達厚三・木下正史1974、「飛鳥地域出土の古式土師器」:『考古学雑誌』第60巻第2号
- ・天野末喜1989、「第二節 円筒埴輪」:『岡古墳』藤井寺市教育委員会
- ・伊賀高弘1989、「上人ケ平遺跡の埴輪について」:『山城の埴輪』第51回研修会資料 (財) 京都府埋蔵文化 財調査研究センター・京都府教育委員会
- ・伊藤雅文・林部均1984、「大阪府藤井寺市鞍塚西方出土の形象埴輪」: 『関西大学考古学研究紀要』 4
- ・猪熊朝美1978、「円筒埴輪について」:『長原』大阪文化財センター
- ・稲築町教育委員会1989、『沖出古墳』
- ・宇治市教育委員会1990、『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第15集
- ・大阪市1988、『新修大阪市史』第1巻
- ・大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985、『長原遺跡発掘調査 (NG84-25) 現地説明会資料』

1988、『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

1989、『よみがえる古代船と5世紀の大阪 - 大阪市制100周年・大阪 市文化財協会設立10周年記念-』

1989、『長原遺跡発掘調査 (NG89-67) 現地説明会資料』

・大阪市文化財協会1980、『長吉小学校分校校舎建設に伴う長吉川辺遺跡発掘調査(NG第18次)略報』

1982、『長原遺跡発掘調査報告』 II

1983 I 、『長原遺跡発掘調査報告』III

1983 II、『瓜破遺跡』

1984、『発掘された大阪 -大阪市文化財協会設立5周年記念-』

1986、『葦火』創刊号

1989、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 I

- ・大阪大学文学部考古学研究室1990、『鳥居前古墳 総括編』
- ・大阪府教育委員会1971、『南河内石川流域における古墳の調査』

1980 I、『太平寺古墳群』大阪府埋蔵文化財調査報告第33輯

1980 II、『林遺跡発掘調査概要』 II

・大阪文化財センター1978、『長原』

1980、『亀井・城山』

1983、『亀井』

1984 I、『佐堂』 (その2-I)

1984 II、『大堀城跡』

1985、『美園』

1986 I、『城山』 (その1)

1986 II、『城山』 (その2)

1986Ⅲ、『城山』 (その3)

1986Ⅳ、『亀井』(その2)

1986 V、『亀井北』 (その3)

1986 VI、『久宝寺南』 (その3)

1987 [、『久宝寺南』 (その1)

1987 II、『久宝寺南』 (その2)

- ・大野薫1989、「島畑の考古学的調査」:『郵政考古紀要』15
- ・大橋泰夫1989「天地根元浩家形埴輪が表現したもの」:『しもつけのはにわ人たち』 壬生町歴史民俗資料館
- ・岡内三真・和田晴吾・字野隆夫1981、「京都府長岡京市カラネガ岳一・二号古墳の発掘調査」: 『史林』第64 巻 3 号
- ・小笠原好き1985、「家形埴輪の配置と古墳時代豪族の居館」: 『考古学研究』第31巻第4号
- ・岡崎市教育委員会1981、『経ヶ峰1号墳』
- ・小野正敏1982、「15、16世紀の碗、皿の分類と年代」:『貿易陶磁研究』2
- •岡山県文化財保護協会1984、『百間川原尾島遺跡』2
- ・橿原考古学研究所1976、『斑鳩町瓦塚1号墳発掘調査概報』

1984、『大和の埴輪』

• 柏原市教育委員会1986、『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1985年度

1986、『高井田横穴群』 I

1987、『高井田横穴群』II

・河合町教育委員会1988、『史跡乙女山古墳』

1989、『史跡ナガレ山古墳現地説明会資料』

- ・川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」:『考古学雑誌』第64巻第2号(川西宏幸1988に再録)
- ・川西宏幸1988、『古墳時代政治史序説』
- 北野耕平1975、「稲城考」: 『日本史論集』

1976、『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告 第2冊 .

- ・金関恕1975、「卑弥呼と東大寺山古墳」:『古代史発掘』6
- ・木原克司1989、「長原南口古墳の調査」:『葦火』23号
- ・京嶋覚1982、「長原古墳群-まとめにかえて-」: 『長原遺跡発掘調査報告』II 大阪市文化財協会 1986、「河内長原古墳群とその造営集団」: 『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』
- ・京嶋覚・西畑佳恵・上野裕子1990、「喜連東遺跡の奈良時代建物群」:『葦火』24号
- ・京都府埋蔵文化財調査研究センター1987、『京都府遺跡調査概報』第26冊
- 倉敷考古館1959、『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告 第1冊
- ・後藤守一1933、「上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」:『帝室博物館報告』第6 帝室博物館 1939、「上古時代鉄鏃の年代研究」:『人類学雑誌』第54巻第4号
- ・後藤守一・相川龍雄1936、『多野郡平井村白石稲荷山古墳』: 『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3 輯
- ・近藤義行1989、「丸塚古墳出土の家形埴輪」:『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第19集 城陽市教育委員会
- ・斎藤和夫・字佐晋-1952、「直弧文の研究」(2):『古代学研究』7号
- ・桜井久之1987、「埴輪と中小規模古墳」:『季刊 考古学』20号
- ・清水真-1988、「もう一つの屋根飾り-家形埴輪から復原される大王宮殿-」: 『同志社大学考古学シリーズ IV 考古学と技術』
- ・島根県教育委員会1981、『重要文化財平所埴輪窯跡出土品復原修理報告書』
- ・ 清水真一・ 青木久子1990、「桜井市纏向遺跡・四注造り家形埴輪の復原」: 『青陵』第72号
- ・城陽市教育委員会1986、『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集

- 末永雅雄1935、「磯城郡三宅村石見遺跡出土埴輪」: 『奈良県史跡名勝天然記念物報告』第13冊、奈良県教育 委員会
- ・杉原和雄1990、「京都府教育委員会による調査」:『鳥居前古墳 総括編』大阪大学文学部考古学研究室
- ・鈴木秀典1978、「Ⅳ-5-iii まとめ」:『長原遺跡発掘調査報告』長原遺跡調査会(大阪市文化財協会1982 改訂版)
- ・積山洋1989、「円筒埴輪の検討」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 I 大阪市文化財協会
- ・泉北考古資料館1982、『大阪府の埴輪』
- ・高井健司1986、「長原七ノ坪古墳とその馬具」: 『葦火』創刊号
- ・高井健司1987、「長原古墳群で埋葬施設を確認」『葦火』8号
- ・高槻市教育委員会1973、『高槻市史』第6巻 考古編
- ・髙橋工1988、「大阪府長原古墳群高廻り1・2号墳の調査と出土遺物の概要」: 『日本考古学年報』40
- ・髙橋克壽1988、「器財埴輪の編年と古墳祭祀」:『史林』第71巻第2号
- ・辰巳和弘1990、「飾られた髙床式家形埴輪」:『髙殿の古代学-豪族の居館と王権祭儀-』
- ・田中清美1982、「第 ii 項 埴輪」:『長原遺跡発掘調査報告』II 大阪市文化財協会 1985、「長原古墳群」:『古市古墳群とその周辺』古市古墳群研究会
- ・田辺昭三1981、『須恵器大成』
- 趙哲済1983、「遺構検出面の便宜的な呼称」: 『長原遺跡発掘調査報告』III 大阪市文化財協会
- ・月の輪古墳刊行会1960、『月の輪古墳』
- ・都出比呂志1979、「前方後円墳出現期の社会」: 『考古学研究』第26巻第3号
- ・東京国立博物館1983、『東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇(関東II)』
- · 鳥取県教育文化財団1982、『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 Ⅳ (埴輪編)』
- ・豊中市教育委員会1980、『史跡大石塚・小石塚古墳』
- ・長原遺跡調査会1978、『長原遺跡発掘調査報告』(大阪市文化財協会1982改訂)
- ・長山雅一1988、「8 長原・加美古墳群」:『新修大阪市史』第1巻 大阪市
- ・奈良県教育委員会1959、『室大墓』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第18冊

1962、『五条猫塚古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第20冊

1966、「勢野茶臼山古墳」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第23冊

1974、『馬見丘陵における古墳の調査』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第29冊

· 奈良国立文化財研究所1976、『平城宮跡発掘調査報告』Ⅶ

1978、『飛鳥藤原宮跡発掘調査報告』 II

1981、『平城宮北辺発掘調査報告書』

- ・橋本博文1985、「古墳時代首長層居宅の構造とその性格」: 『古代探叢』 II
- ・広瀬和雄1983、「古代の開発」: 『考古学研究』第30巻第2号
- ·福岡市教育委員会1990、『入部』 I 福岡市埋蔵文化財調査報告 236集
- ・福永伸哉1990、「1. 円筒埴輪」:『鳥居前古墳』大阪大学文学部考古学研究室
- ・藤井寺市1986、『藤井寺市史』第3巻
- ・藤井寺市教育委員会1989、『岡古墳』藤井寺市文化財報告第5集
- ・藤沢真依1978、「(一) 古墳」:『長原』大阪文化財センター
- ・古島敏雄1967、『土地に刻まれた歴史』

- ・平安学園考古学クラブ1962、『船橋』 II
- ・平凡社1959、『世界考古学体系 3 日本III』
- ・埋蔵文化財研究会1985、『形象埴輪の出土状況』第17回埋蔵文化財研究会資料
- ・松木武彦1990、「蓋型埴輪の変遷と画期-畿内を中心に-」:『鳥居前古墳』大阪大学文学部考古学研究室
- ・丸山竜平1975、「河内の開発における二つの画期」: 『日本史論叢』第5輯
- ・南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」:『葦火』8号
- •和歌山市教育委員会1967、『岩橋千塚』
- ・渡辺昌宏1982、「大阪府美園遺跡1号墳出土の埴輪」:『考古学雑誌』第67巻第4号
- ・和田晴吾1987、「古墳時代の時期区分をめぐって」: 『考古学研究』第34巻第2号

あとがき

長吉瓜破地区の区画整理に伴う発掘調査報告の第二冊目を上梓するに至った。とりあえず、率直に歓びたい。特定の原因者負担による調査報告書を年一冊ずつ刊行するということは、多忙な当協会の業務にあっては、なかなか容易ならざることであったが、昨年度、第一冊目を刊行した以上、報告書作製事業の継続は至上命令ともいうべきものであった。ここに何とかその責を果たすことができたわけである。

区画整理事業初年度の1981年度は81-2次調査のみであったため、第一冊目の報告内容は遺跡内の特定地域に限定されたが、1982年度からは調査件数が激増し、毎年数件の調査を並行して実施することとなった。そのため、今回から前書とは体裁を変更し、複数の調査結果を報告することになった。読者にとっては読みづらい面もあろうかと思われるが、了解されたい。

本書では新しい試みとして、コンピュータを駆使して巻末に索引をつけた。それによって先に述べた読みづらさが少しでも解消されることを願っている。

また、複数の調査を実施したことは、長原、瓜破遺跡の理解にとって、新たな収穫を得るにいたった。今回の報告も前書同様、古墳が中心ではあるが、それ以外にも縄文時代や飛鳥・奈良時代、中世、近世にいたる知見が増加しつつある。そうした知見のなかから、古代の水田に関する考察を収録できたことは、今後、遺跡像の総合的な理解を展望していく際に重要であると思われる。

とはいえ、やはりまだ、本書の内容には不満が残る。その点は次年度以降の報告であら ためて行きたい。 (永島暉臣愼)

索引

索引は、当協会の調査次数・古墳・遺構を一括したものと、用語・他の遺跡を収録したもののふたつに分割した。

<調査・古墳・遺構>

一調 査一

18次(調査) 136.157

21次 (調査) 247

31・32工区 1

32工区 164

45・46工区 183.203

45工区 2

46工区 2

82-19次(調査) 8.19.23.25.26.31.32.45.48.

57.62.67.70.76.77.78.81.82.

136.141.164.299

82-23次(調査) 15.24.204.302

82-27次 (調査) 8.9.10.13.23.25.26.31.36.45.

83.84.90.106.146.158.164.250

82-28次(調査) 13.23.166.181.182

82-31次(調査) 15.19.24.183.202

82-34次(調査) 8.13.16.23.25.26.31.45.135.

136.157.162.250.

82-46次(調査) 8.10.23.25.131.250

83-32次 (調査) 181.182

84-24次(調査) 24

84-25次 (調査) 181.182

84-48次 (調査) 81.302

85-21次(調査) 181

85-70次(調査) 141

86-105次(調査) 10.84

87-70次(調査) 141

-古墳•埴輪棺-

1号墳 251.262.274

4号墳 51.274.277.282

14号墳 274.284

27号墳 287

31号墳 51

40号墳 262.285.286.287.291.292.293

45号墳 164.287

57号墳 67.287

60号墳 8.9.45.139

61号墳 9.32.45.48.136.139.140.164

62号墳 9.45.57.136.139

63号墳 9.32.45.62.136.139.165

64号墳 9.45.67.79.144

65号墳 9.45.70.78.79.136.139

66号墳 9.45.76

67号墳 9.45.76.77.79

68号墳 9.45.77.78.139.164

69号墳 9.45.76.81

70号墳 9.45.82

80号墳 10.45.83

81号墳 10.45.83

82号墳 10.45.84

83号墳 10.25.45.84.90.162

84号墳 10.45.90.152.156.164.273.274.277.282.

85号墳 10.26.45.93.106.146.164.251.264.273.

274.287.291.292

86号墳 10.13.45.131.133

87号墳 165

94号墳 162.165

105号墳 162.165

130号墳 165

166号墳 7.162.165

167号墳 165

168号墳 162.165

169号墳 262.273

170号墳 262.263.273

179号墳 162.165

180号墳 165

ーケ塚(=85号墳) 3.10.26.45.93.106.109.146.

154.155.164.251.252.253.

254.255.256.258.260.261.

262.263.264.265.267.268.

270.271.273.274.277.280.

281.287.291.298

七ノ坪(=130号墳) 5.165

高廻り1 (=169) 号墳 262.273

髙廻り2 (=170) 号墳 262.263.273

S D 208 241 塚ノ本(=1号墳) 3.24.251.252.253.254.255. 256.258.261.262.274.277. S D 209 241 279.280.283.284.285.287. S D210 241 S D211 241 292.293 埴輪棺(塚ノ本) 262.287 S D212 241 1号埴輪棺(塚ノ本古墳) 262 S D213 241 2 号埴輪棺(塚ノ本古墳) 162.261.262 S D301 210.235.239.240.248 S D302 235 3 号埴輪棺(塚ノ本古墳) 162.261.262 S D401 233.239.248 4号埴輪棺(塚ノ本古墳) 262.292 S D402 233 2号棺 262 S D403 227.237 3号棺 262 S D404 227,248 7号棺 262 S D 405 227.248 ーその他の遺構ー S D406 215.228.248 S D407 232.234 • 18次調査 S D408 231 S D01 157 S D409 229.231 S D02 158 S D410 228.248 S D411 232.234.248 ・82-19次調査 S D412 232,234,248 S D02 26.141 S D413 232.234.248 S D03 26.141 S D414 231 S D14 26.141 S D414 215.231.232.234.248 S D15 141 S D415 231 S D416 231 ・82-23次調査 S A 401 230.232.233.248 S D417 231.233 S D418 231 S B 401 229.231 S D419 231 S D101 227.237.238.245.246 S D420 231 S D102 210.239.240.246 S D421 231 S D 103 246 S D422 232.236 S D104 246.247 S D423 213.220.228.248 S D105 246.247 S E 101 243 S D106 246.247 S D107 246.247 S E 201 227, 237, 238 S E 202 237 S D108 246.247 S E 203 237.239 S D201 233.239 S K 101 209.244.245.250 S D202 210.211.219.235.238.239.240.242.246. S K 102 209.244.245.250 247,250 S K103 209.233.244.245.250 S D 203 240 S K 104 209, 244, 245, 250 S D 204 240 S K105 209.244.245.250 S D 205 236, 240 S K106 209.244.245.250 S D 206 240 S D 207 241 S K107 209.245.250

S K 108	209.245.250	S P 404	232.233.248
S K 109	242.246	S-P405	232.248
S K110	246	S P 406	232.248
S K111	246	S P 407	232.248
S K112	246	S P 408	229.231
S K113	210.243.245.250	S P 409	229
S K114	210.243.245.250	S P410	229
S K115	210.243.245.250	S P411	229
S K 201	238	S P412	229
S K 202	227.237.238	S P413	230.231.233
S K 203	238	S P414	230.233
S K 204	238	S P415	230.233
S K 205	238.242.246	S P416	230.233
S K206	238	S P417	230.233
S K207	238	S P418	230.231.233
S K 208	238	S P419	230
S K 209	238	S P420	230
S K210	238	S P421	230
S K301	229.235.248	S P422	230
S K302	235	S P423	230
S K401	220	S P424	230
S K402	220.248	S P425	230
S K 403	220.248	S P426	230.233
S K 404	220.228.248	S P427	230.233
S K 405	220.228.248	S P428	230
S K 406	220	S P 429	230
S K407	220	S P430	230
S K408	231	S P431	230
S K 409	226	S P432	230
S K410	226	S P433	230
S K411	226	S P434	230
S K412	226.237.248	S P435	230
S P 101	237.243	S P436	230
S P 102	237.243	S P437	230
S P103	237.243	S P438	230
S P104	237.243	S P 439	230
S P 105	237.243	S P440	230
S P106	237.243	S P441	230
S P 107	237.243	S P 442	230
S P108	237.243	S P 443	230
S P401	232.233.248	S P444	230
S P402	232.248	S P 445	230
S P403	232.233.248	S P 446	230

S K04 161 S P447 230 S R01 151.152 S X 101 247 S R02 151.152 S X 102 210.248 S R.03 151 S X 201 210.211.236.237.242.246.247 S R04 146 S X 301 210.236.242 S R05 152.153 S X 302 236 S R06 152.153 S X 303 236 S R07 152 S X 304 236 S R 08 146 S X 305 236 S R 10 151 S X 306 236.237 S R11 151.164.165 瓦組遺構101 247 S R13 151 鋤跡群401 228 S R 16 151 鋤跡群402 234 S R17 151 鋤跡群403 234 S R 22 161 鋤跡群404 234 鋤跡群405 235 S X 01 156 S X 02 156 鋤跡群406 235 S X 03 156.157 小溝群201 241 小溝群202 242 S X 04 156.157 S X 05 162 小溝群203 237.238.242 S X 06 162 小溝群204 242 野壺101 247 ・82-28次調査 SB201 181 ・82-27次調査 S D01 172.176.177.181 SB01 146 S D02 175.176.177.178.181.182 S D01 146.151.152 S D03 176.181.182 S D02 146.152.153 S D04 176.181.182 S D03 155 S D05 181 S D04 146.155.157 S D06 181 S D05 155.156 S K01 177.181.182 S D06 156 S K 02 178 S D07 31.158.161.162.164 S R01 178 S D08 158.161 S R02 181 S D09 161 S R03 181 S D10 161 SZ01 181 S D11 161 SZ02 181 S D12 161 S D13 161 ・82-31次調査 S D14 161 S D01 15.195.202 S E 01 162 S D02 298 S K01 161 S D03 298 S K02 161 S K03 161 S D14 298

S K02 201

S K04 198

S P01 195.202

S P02 198

・82-34次調査

S D01 157

S D02 157

S D03 157

・82-46次調査

S D01 131

S D02 131

・85-70次調査

S D701 141

S D702 141

・87-70次調査

S D01 141

<用語・他の遺跡名>

一用 語一

TK23型式 62.91.283.286

T K 43型式 140

TK47型式 46.70.133.286

TK73型式 72.90.286

TK208型式 50.60.286

TK209型式 140.302

TK216型式 50.60.78.286

あ 朝顔形埴輪 51.55.67.70.73.76.80.93.114.

115.133.153.154.193.251.256.

258.259.261.262.263.267.292

安山岩 32

い 家形環頭 277.279

家形埴輪 55.93.96.99.116.120.126.130.264. 265.266.267.270.272.273.274.277.

279.280.281.282.283.284.284

生駒西麓産 192

う馬 241

馬形埴輪 13.131.135

瓜破台地 20.23.24.204.294.305

え 円筒埴輪 32.37.45.46.50.51.55.62.67.70.

72.73.76.77.78.79.81.82.91.93.

106.109.115.116.130.133.153.154.

164.188.193.251.252.255.256.260.

261.262.263.267.270.279.285.286.

287.292.293

か 開析谷 23.24.297.298.305

瓦器皿 35.39.169

瓦器椀 35.36.39.169.193.194

囲形埴輪 116.264.266.267.268.270.271.272

火山ガラス 25

火山灰 25

瓦質羽釜 172.194

堅魚木 96.99.274.284

滑石 172.175

甲胄形埴輪 102.284

唐津 240.242.246

き 器財形埴輪 271.284

衣蓋形埴輪 32.80.102.128.264.271.277.284

京焼 201

く 草摺形埴輪 102.128.264

楔形石器 183.188.203.215

け 形象埴輪 55.57.80.93.106.116.130.131.133.

264.267.271.272.283.284.284

こ 黒色土器 A類 35.171.192.193.198.210.233.

250

黒色土器B類 35.192.193.233.250

黒色土器椀 35.192.193.196.198

さ サヌカイト 171.172.209.215.219

し 忍岡系対称文 126.128.271

主体部 7.45.48.88.162.164.165.285

主要剝離面 185.187.188

条里 3.204.210.231.232.237.239.246.248.

250

初期須恵器 90.164

続日本紀 303

人物埴輪 272

す 水成層 19.20.26.31.36.106.136.141.151.

152.156.158.162.166.168.202.294.

296.302.306

須恵器甕 36.176.225

須恵器器台 175

須恵器高杯 189.225

須恵器杯 35.36.175.176.178.188.189.196.

197.225

須恵器 60.90.91.168.175.225

須恵器蓋 36.39.152.171.178

鋤跡群 213,228,234,235

裾廻台 126.265.266.270

せ 製塩土器 196.234

石鏃 15.32.172.183.185.187.188.203.204.

215.228.234.248

石核 32.204.209.215.248

石器製作址 3.182.188.203

瀬戸内技法 32

前方後円墳 3.109.285

そ 双孔円板 172.175

た 大畦畔 141.151.164.296.302

楕円筒形埴輪 277.279

高杯蓋 48.212

立飾り 128.271

竪穴住居 3

盾形埴輪 99.102.106.126.128.264.271.284

短甲形埴輪 48.164

単弁蓮華文 171

丹北郡 204

ち 中国製青花 211.240

中国製青磁 211

沖積層下部層 13.23.25.166.183.201.301

沖積層上部層 20.25.166.301

直弧文 126

つ 杯蓋 46.67.91.131.152.188.189

杯身 36.46.67.88.90.91.131.140.168.175.

176.178.188.189.196.197.225

造り出し 109.164

翼状剝片 32.209.215.219

壺形埴輪 115.251.252.258.259.260.261.262.

263

坪境 168.181

て 鉄鎌 48.164

鉄剣 88.162

鉄鏃 48.164

と 陶磁器 39.204.209.242

東播系須恵器 195.235

土器棺墓 24

土器埋納ピット 15

把手付椀 49.60.68.72.88

鞆形埴輪 128.271.264

鳥形埴輪 145

な ナイフ形石器 171.182

に 日本書紀 303

の 軒平瓦 32.247

軒丸瓦 171.211.238

野焼き 114

は 白磁碗 35.171

土師器甕 32.35.36.37.39.172.188.225

土師器小型壺 35.36

土師器皿 35.39.171.192.193.194.198.234.

242

土師器杯 36.37.188.191.193.195.196.198.

202.296.302

土師器鉢 39.140.192

埴輪棺(群) 251.252.253.254.255.256.258.

259.261.262.287.293

埴輪列 51.156

破風板 96.116.120.124.126.265.274.277.284

ひ 飛雲文 32.182

東除川 20.23.162.166.294.296.297.298.301.

303.305

肥前 204.209.237.240.242.245.246

備前焼 211.213.237

鋲 48.135.164

鰭飾り 274.277.279.280.283.284

ふ 葺石 109

複弁蓮華文 211

へ へラ記号 51.93.114.116.164.225

ほ 方形周溝墓 23

墓壙 88.162

帆立貝形古墳 7.109.164.285

掘立柱建物 146.181.182.299.302.305

み 水口 139.165

む 無黒斑 133.285.286.287

棟持柱 120.282

も 木棺 88.162.165

や 屋敷 3.23.24.248.302

ゆ 有蓋高杯 49

有茎尖頭器 3.182

有黒斑 3.164.251.262.285.286.287.292.293

靱形埴輪 102.126.128.277.279.284 輸入白磁 183

- ら ラミナ 31
- り 里境 204.210.211.232.237.246.248.250 緑釉陶器 36.234 輪花 178
 - -遺跡・古墳名-
- あ 青山4 (号墳) 282 赤堀茶臼山(古墳) 264.265.268.270.271. 281

安部山1 (号墳) 268.270 庵寺山(古墳) 280

い 石山(古墳) 268.270.272.277.279 市庭(古墳) 268 今城塚(古墳) 282.283 石見(遺跡) 279.280.281.283 井辺八幡山(古墳) 272

- う 内田山A2 (号墳) 268 瓜破廃寺 306
- お 大谷今池1 (号墳) 268 大谷山22 (号墳) 282 大堀(遺跡) 305

岡(古墳) 252.253.254.255.256.258.261.

262.267.292

 拝塚(古墳)
 268.272

 沖出(古墳)
 278.283

 彼方丸山(古墳)
 263

 乙女山(古墳)
 260.262.263

か 梶塚(古墳) 263 交野車塚(古墳) 268 金蔵山(古墳) 268.270 上ノ井手(遺跡) 261 亀井(遺跡) 165.273.277.303.305

亀井(古墳) 165

カラネガ岳2 (号墳) 261.262.292

瓦谷(遺跡) 271 瓦塚 1 (号墳) 263.292

き 北岡2 (号埴輪棺) 259.260.262.263

狐塚 5 (号墳) 283

久宝寺(遺跡) 303.305

経ケ峰1 (号墳) 268.270.272

喜連東(遺跡) 13.305

- く 鞍塚(古墳西方) 268,270,271
- こ 小石塚(古墳) 259.262.263

五条猫塚(古墳) 268.270

さ 西大寺宝ケ丘(遺跡) 268 西都原(古墳群) 284 佐紀陵山(古墳) 128.271 佐堂(遺跡) 303

し 鴫谷東1 (号墳) 272

下明寺(古墳) 268

白石稲荷山(古墳) 264.265.281

城山(遺跡) 2.7.20.145.294.296.301.302

城山4 (号墳) 162.165.

城山5 (号墳) 165

城山6 (号墳) 162.165

- す 巣山(古墳) 263
- せ 背見山(古墳) 272

勢野茶臼山(古墳) 282.283

- た 太平寺 5 (号墳) 268
- つ 月の輪(古墳) 270.283
- て 寺口和田1 (号墳) 277.278.279.283
- と 東大寺山(古墳) 277.279.280 豊臣氏大坂城 39.161

鳥居前(古墳) 263

- な 長瀬高浜 (遺跡) 272.278.283 ナガレ山 (古墳) 263.268 成本廃寺 182.306
- の 野中(古墳) 268.270

野中宮山(古墳) 260.261.262.263

- は 伴堂赤丸(遺跡) 280
- ひ 東弓削(遺跡) 282

百間川(遺跡) 165

平所(遺跡) 278.280.283

ふ 二子山(古墳) 271

古市(古墳群) 251.252.255.261.262.263

ま 纒向(遺跡) 282

松岳山(古墳) 279

丸塚(古墳) 277.278.279.283

み 美園(古墳) 259.260.262.263.274.277.278.

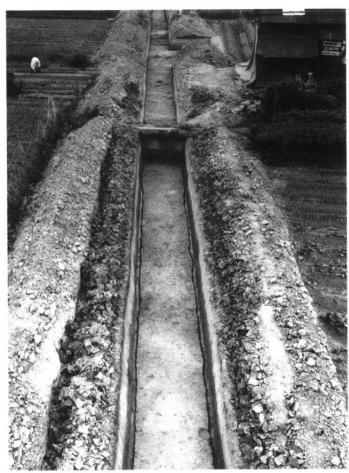
279.280.283

三ツ寺 I (遺跡) 271

- む 室宮山(古墳) 279.281.283
- も 森将軍塚(古墳) 272

図 版

図版一 遺跡航空写真(一九四一年頃撮影)

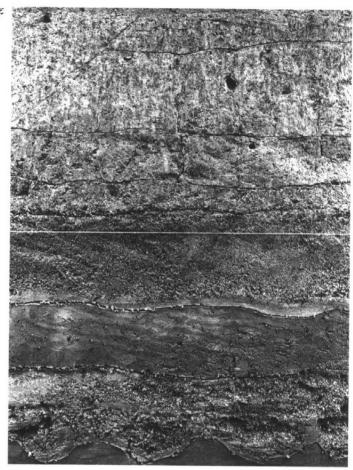


I 区全景 (南から)



II区全景(南から)

I区の層序





60号墳全景 (西から)



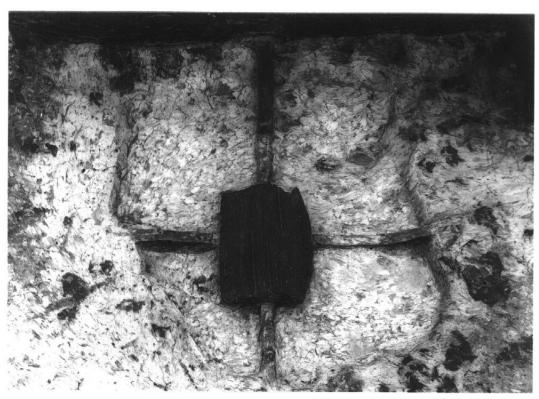
61号墳全景 (東から)



61号墳墳丘上面の遺物出土状況(南から)



62号墳全景 (東から)



62号墳南周溝木製品出土状況



63号墳全景 (東から)



63号墳墳丘上面遺物出土状況(北から)



64号墳全景 (東から)



64号墳と円形周溝遺構(北から)



65号墳全景 (東から)



65号墳全景 (南から)



65号墳墳丘南辺部の遺物出土状況 (東から)



66号墳全景 (東から)